

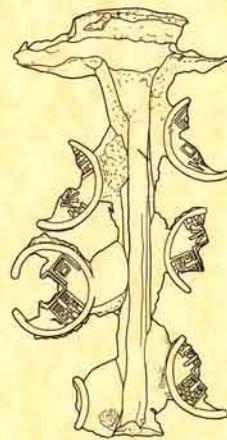
大阪市天王寺区

細工谷遺跡発掘調査報告

I

都市計画道路難波片江線建設工事

に伴う発掘調査報告書



1999.3

財団法人 大阪市文化財協会

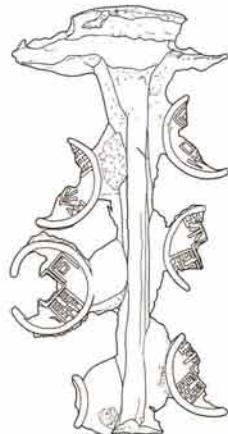
大阪市天王寺区

細工谷遺跡発掘調査報告

I

都市計画道路難波片江線建設工事

に伴う発掘調査報告書



1999.3

財団法人 大阪市文化財協会



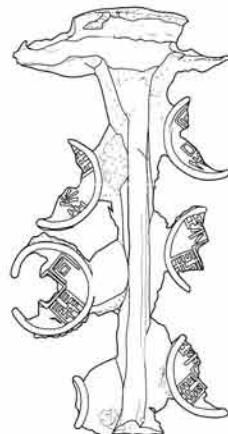
和同開珎の枝錢

大阪市天王寺区

細工谷遺跡発掘調査報告

I

都市計画道路難波片江線建設工事
に伴う発掘調査報告書



1999.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

上町台地の北端に難波宮が営まれた頃、さまざまな人々が大陸から海を渡り、この難波の地に留まった。進んだ技術・文化を携えた人々との交流は新しいエネルギーを生み出し、都市大阪が発展する大きな原動力となったであろう。

今回、大阪市の中間に位置する細工谷遺跡の調査で、未知の古代寺院「百済尼寺」の存在が明らかになった。その名の示すとおり、朝鮮から渡來した百済王族が建立した寺院である。多くの人々がわが国を訪れ、活動した姿を彷彿させ、まさしく、国際都市大阪にふさわしい発見といえるであろう。さらに、全国で初めて見つかった和同開珎の枝銭は古代銭貨の生産と流通を研究するうえで第一級の資料である。貨幣経済の出発点とされる和同開珎の枝銭が、造幣局を抱える大阪で出土したことは、偶然の一致とはいえ、歴史の因果を感じさせる。

細工谷遺跡の発見によって、これまでよくわからなかった難波京の内部のようすが見えてきた。調査はまだ緒についたばかりだが、今後の進展によって難波京のより具体的な姿が明らかになって行くことであろう。

発掘調査および、資料の整理や報告書の作成には大阪市建設局をはじめとする多数の方々のご協力をいただき、諸先生方からは懇切なご指導を仰ぐことができた。心から感謝し、お礼申し上げる。この調査成果が各方面の研究の発展に貢献し、貴重な歴史遺産が市民に愛され、新世紀へと継承されることを願ってやまない。

1999年3月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 佐治 敬三

例　　言

一、本書は財団法人大阪市文化財協会が大阪市建設局の委託を受け、1996年10月から1997年9月に実施した天王寺区細工谷1丁目における難波片江線の建設工事に伴う発掘調査(SD96-1・97-1次)の報告書である。

一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市建設局が負担した。

一、現場作業は調査部長永島暉臣の指揮のもと、SD96-1次調査に調査課調査員岡村勝行・古市晃・佐藤隆、97-1次調査に岡村が当たった。金属製品・金属加工関連遺物・木製品の保存処理と整理は調査課調査員伊藤幸司・同課嘱託調査員鳥居信子、動物遺体の分析・整理は同課調査員久保和士が行った。報告書作成は報告書作成室長八木久栄を責任者とし、八木、企画課連絡副主幹森毅、岡村・古市・伊藤・久保・調査課調査員高橋工、協会補助員小野友記子が分担・執筆し、岡村が編集した。執筆者名は担当個所の最後に示し、文責を明らかにした。また、村上隆氏(奈良国立文化財研究所)には、銭貨の蛍光X線分析をお願いし、玉稿をいただいた。光谷拓実氏(同)には大型木製品の樹種同定および井戸側材の年輪年代測定を、佐藤昌憲氏(同)には顕微赤外分析をお願いし、分析結果を寄せていただいた。なお、巻末の英文目次・要旨の作成はRobert Condon氏が当り、岡村が協力した。

一、遺物のうち、銭貨・金属製品の蛍光X線分析・X線透過写真撮影について肥塚隆保氏(奈良国立文化財研究所)、木簡の写真撮影について佃幹雄氏(同)にお世話をになった。また、木簡の釈読にあたっては、東野治之氏(大阪大学)、栄原永遠男氏(大阪市立大学)、奈良国立文化財研究所史料調査室の方々、銭貨について松村恵司氏(奈良国立文化財研究所)、瓦について花谷浩氏(同)、古代の土器について玉田芳英氏(同)にご教示をいただき、カエル類の同定は野薙家宏氏にお願いした。このほかにも発掘調査・遺物整理・報告書作成に当って、細工谷遺跡検討会にご出席いただいた先生方をはじめ、以下の方々からご指導・ご教示を得た(順不同)。心からお礼を申し上げたい。

藤沢一夫氏(四天王寺国際仏教大学名誉教授)、直木孝次郎氏(大阪市立大学名誉教授・甲子園短期大学)、岩本次郎氏(甲子園短期大学)、上原真人氏(京都大学)、西口寿生氏(奈良国立文化財研究所)、酒井清治氏(駒沢大学)、網伸也氏(京都市埋蔵文化財研究所)、高橋照彦氏(奈良国立博物館)、安村俊史氏(柏原市教育委員会)

一、基準点測量・写真測量は朝日航洋株式会社、大型木製品の保存処理を元興寺文化財研究所に委託した。花粉・寄生虫卵分析、種実・樹種同定は株式会社古環境研究所に委託し、分析結果を本書に収録した。なお、本書に使用した遺構写真はおもに調査担当者が撮影し、一部を徳永匱治氏、遺物写真の撮影を楠本真紀子氏に委託した。

一、発掘調査で得られた出土遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。

一、現場調査・資料の整理・報告書の作成には、おもに以下の調査補助員が参加した。

安東良介・一川良孝・岩崎宏・岩間俊之・小椋裕理・木村勇・久保洋子・幸前音伸・篠原啓方・末金幸子・関志づ代・竹尾恵子・福瀬哲生・本郷明美・前田幸宏・森田好美・湯浅敬子・吉川公人・Robert Condon

凡　　例

1. 遺構名の表記は、柵・塀・柱列(SA)、溝(SD)、井戸(SE)、土壙(SK)、柱穴(SP)、そのほかの遺構(SX)の分類記号の後に、本報告書独自の通し番号を201から順に付し、名称とした。200番台は江戸時代の遺構、300番台は鎌倉・室町時代の遺構、400番台は平安時代の遺構、500番台は奈良時代の遺構、600番台は飛鳥時代の遺構、700番台は古墳時代の遺構であることを示す。また、時期不明である溝をSD1001とした。
遺物については、土器・土製品・石器・石製品に1～400、瓦塼類に401～500、銭貨に501～600、銭貨を除く金属製品・金属加工関連遺物に601～700、木製品に701～800、花粉・種実・寄生虫卵分析用試料に801～900の番号を付した。
2. 調査の基準点は国土平面直角座標値(第VI系)を用い、方位は座標北を表す。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中ではTPと略称した。
3. 本書で頻繁に用いた器形名・土器編年および年代観は次の文献に拠っている。本文中では煩雑を避けるため、これらの引用・参考文献をその都度提示することは割愛した。弥生土器：[佐原真1968]、古墳時代の土師器：[原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真1962]、古墳時代・飛鳥時代初頭の須恵器：[田辺昭三1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976a]・[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器：[古代の土器研究会1993]。また、銭貨の分類は[古田修久1998]を参考とし、型式名を[奈良国立文化財研究所1974]に従った。木製品の名称・型式分類は[奈良国立文化財研究所1985]に拠る。木簡の記載書式・型式名は木簡学会の方法に準拠した。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 調査にいたる経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過	3
1)第1次調査	3
2)第2次調査	4
第3節 調査成果の公表	5
第Ⅱ章 立地と歴史的環境	7
第1節 調査地の立地	7
第2節 歴史的環境	8
第Ⅲ章 調査の結果	15
第1節 層序と遺構の概要	15
1)層序	15
2)遺構の概要	20
第2節 古墳時代の遺構と遺物	21
1)SD701	21
2)SX702	22
3)そのほかの遺構と遺物	22
4)第7層出土の遺物	22
5)第6層出土の遺物	25
6)古墳時代の石製品	28
7)小結	28
第3節 飛鳥時代の遺構と遺物	29
1)SD601・602・603	29
2)SD604	33
3)SK605	35
4)SE606	36
5)北東部柱穴群	38
6)そのほかの遺構	39
7)小結	40
第4節 奈良時代の遺構と遺物	41
1)SD501・502	41
2)SK504	67
3)SE505	69
4)SE507・SK506	70
5)SX508	78
6)そのほかの遺構と遺物	79
7)小結	80
第5節 包含層出土の古代の遺物	81
1)土器・土製品	81
2)銭貨・金属製品	82
3)小結	84

第6節 平安時代以降の遺構と遺物	85
1)平安時代の遺構と遺物	85
3)小結	86
第7節 墨書き土器・刻書き土器	87
第8節 瓦壇類	97
1)軒丸瓦	97
3)丸瓦・平瓦	102
5)壇	108
2)軒平瓦	98
4)道具瓦	106
6)小結	108
第9節 製塙土器	111
第10節 動物遺体	113
1)資料の採集方法と同定結果	113
3)動物遺体の記載	114
5)カエル遺体から推測される古環境	118
2)各動物種の出土状態	113
4)動物利用の様相	117
第IV章 分析と検討	121
第1節 細工谷遺跡の古環境復元	121
1)はじめに	121
3)花粉分析	122
5)寄生虫卵分析	128
7)まとめ	132
2)試料・層序・遺構について	121
4)種実同定	127
6)考察	129
第2節 井戸側材の年輪年代	134
1)試料と方法	134
2)結果	134
第3節 細工谷遺跡出土銭貨に対する科学的調査	135
1)はじめに	135
3)調査方法	136
5)まとめ	140
2)調査に供した資料	135
4)考察	136
第4節 百済王氏と「百済尼寺」	141
1)はじめに	141
2)「百済尼寺」について	141
3)銭貨鋳造の可能性について	143
4)百済王氏と王権	144
5)小結	146
第V章 まとめ	147
第1節 遺跡の変遷	147
第2節 調査の成果と課題	149
1)「百済尼寺」について	149
2)和同開珎の枝銭をめぐる諸問題	150
引用・参考文献	152
あとがき・索引	

英文目次・要旨

原色図版目次

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1 調査地全景 | 3 金属製品・金属加工関連遺物 |
| 2 井戸鎮めに用いられた土器 | |

図版目次

- | | |
|---|--|
| 1 A区全景 | 中: SK504遺物出土状況(南東から)
下: SX508検出状況(南東から) |
| 2 古墳時代以前の遺構 | |
| 上: SD1001・701(南から)
中: SD701埋土断面(南から)
下: SD701(北から) | 11 奈良時代の遺構(6)
上: SE505検出状況(西から)
中: 同上(西から)
下: 同上細部(東から) |
| 3 古墳時代の遺構 | |
| 上: 第7層上面検出の甕(南から)
中: SX702(南から)
下: 同上(南から) | 12 奈良時代の遺構(7)
上: SE507検出状況(北から)
下: SE507井戸側(北から) |
| 4 飛鳥時代の遺構(1) | |
| 上: SD601・602・603(北から)
中: SD601遺物出土状況(南西から)
下: SK605埋土断面(南西から) | 13 奈良時代の遺構(8)
上: SE507井戸側(北西から)
下: SE507内部(北から) |
| 5 飛鳥時代の遺構(2) | |
| 上: A区北東部柱穴群(東から)
下: SP609(西から)、SP635(南から)、SP636(南から)、SP640(北から) | 14 平安時代の遺構
上: 第4b層下面検出状況(南東から)
中: 第5層遺物出土状況(南東から)
下: A区北西部土壙群(南から) |
| 6 奈良時代の遺構(1) | |
| 上: SD501ほか(南から)
下: 同上(北から) | 15 中世の遺構
上: 第3層基底面検出状況(南東から)
中: 耕作溝SD307~310(南西から)
下: SK305検出状況(南東から) |
| 7 奈良時代の遺構(2) | |
| 上: SD501枝鉢出土状況(南から)
中: SD501金鉗出土状況(東から)
下: SD501木筒出土状況(南から) | 16 B区の遺構(1)
上: 全景(東から)
中: 西部(東から)
下: 近代溜池(南東から) |
| 8 奈良時代の遺構(3) | |
| 上: SD501木製遺物出土状況(北東から)
中: SD501木製品出土状況(西から)
下: 同上(南から) | 17 B区の遺構(2)
上: SE606裏込め(南東から)
中: SE606掘形(南東から)
下: SE606埋土(南東から) |
| 9 奈良時代の遺構(4) | |
| 上: A区南壁断面(北西から)
中: SD501埋土断面(南から)
下: SD502埋土断面(東から) | 18 C区の遺構(1)
上: 全景(西から)
中: 同上(北から)
下: 西壁断面(北東から) |
| 10 奈良時代の遺構(5) | |
| 上: SK504検出状況(南東から) | 19 C区の遺構(2)
上: 近代土取り穴断面(南東から) |

中: SD510(北東から)	40 墨書き土器(2)
下: SD510埋土断面(南西から)	41 墨書き土器(3)
20 古墳時代の土器(1)	42 軒丸瓦
21 古墳時代の土器(2)	43 軒丸瓦・軒平瓦
22 弥生・古墳時代の遺物	44 丸瓦・平瓦
23 飛鳥時代遺構出土の土器	45 鴟尾・鬼瓦・製作技法
24 飛鳥時代の土器	46 木簡(1)
25 飛鳥時代の土器・土製品	47 木簡(2)
26 奈良時代の土器(1)	48 飛鳥・奈良時代の木製品(1)
27 奈良時代の土器(2)	49 飛鳥・奈良時代の木製品(2)
28 奈良時代の土器(3)	50 飛鳥・奈良時代の木製品(3)
29 奈良時代の土器(4)	51 和同開珎の枝錢
30 奈良時代の土器(5)	52 和同開珎
31 奈良時代の土器(6)	53 錢貨各種
32 奈良時代の土器(7)	54 帯金具
33 奈良時代末葉～平安時代初頭の土器(1)	55 金属製品ほか
34 奈良時代末葉～平安時代初頭の土器(2)	56 鉄製品
35 奈良時代末葉～平安時代初頭の土器(3)	57 金属加工関連遺物
36 奈良時代末葉～平安時代初頭の土器(4)	58 動物遺体
37 奈良・平安時代の陶硯・施釉陶器	59 花粉・寄生虫卵
38 飛鳥～平安時代の遺物	60 種実
39 墨書き土器(1)	

挿図目次

図1 細工谷遺跡の位置	1	図18 第6層出土土器	27
図2 調査区と試掘の位置	2	図19 古墳時代の石製品	28
図3 新聞報道	5	図20 飛鳥時代の遺構の変遷	29
図4 調査地の立地	7	図21 SD601・602・603出土遺物	31
図5 周辺の古代遺跡	9	図22 SD603出土遺物	32
図6 調査地周辺の古地名	10	図23 SD604出土遺物	34
図7 調査地の横断面	15	図24 SK605実測図	35
図8 A区南壁断面図	17	図25 SK605出土土器・土製品	35
図9 A区北壁・谷横断面図	18	図26 SE606実測図	36
図10 A区の主要な古代遺構平面図	19	図27 SE606出土土器	37
図11 弥生時代の石鎌	20	図28 SE606出土木製品	37
図12 古墳時代以前の遺構実測図	21	図29 SE606出土木簡	38
図13 SX702実測図	22	図30 A区北東部柱穴群	39
図14 SX702出土土器(1)	23	図31 柱穴出土土器	39
図15 SX702出土土器(2)	24	図32 A区奈良時代遺構平面図	42
図16 SK704ほか出土土器	25	図33 飛鳥・奈良時代溝断面図	43
図17 第7層出土土器	26	図34 SD501出土遺物の分布	44

図35 SD501出土土器(1)	46	図65 第4b層上面検出遺構平面図	85
図36 SD501出土土器(2)	48	図66 SK401実測図	86
図37 SD501出土枝銭	50	図67 第3層基底面検出遺構平面図	86
図38 枝銭拓影	51	図68 墨書き土器の内訳	87
図39 SD501出土銭貨拓影	52	図69 飛鳥時代末葉の遺構出土の墨書き土器	89
図40 SD501・502出土銭貨拓影	53	図70 SD501出土墨書き土器	90
図41 SD501出土帶金具	56	図71 SD501・502出土墨書き土器	91
図42 SD501出土銅製品ほか	58	図72 SE507出土墨書き土器(1)	92
図43 SD501出土鉄製品	60	図73 SE507出土墨書き・刻書き土器	93
図44 SD501出土木簡(1)	61	図74 SE507出土墨書き土器(2)	94
図45 SD501出土木簡(2)	62	図75 奈良時代の遺構・第5層出土の墨書き土器	95
図46 SD501出土木製品(1)	63	図76 軒丸瓦	100
図47 SD501出土木製品(2)	65	図77 軒平瓦	101
図48 SD501・502出土木製品	66	図78 丸瓦・平瓦	104
図49 SK504実測図	67	図79 平瓦・駿斗瓦	105
図50 SK504出土土器	68	図80 鳩尾・鬼瓦	107
図51 SE505実測図	69	図81 塚	108
図52 SE505出土土器	69	図82 瓦の組合せ案	109
図53 SE507・SK506実測図	71	図83 製塙土器	112
図54 SE507井戸側B	72	図84 花粉分析の結果(1)	124
図55 SE507出土土器(1)	74	図85 花粉分析の結果(2)	125
図56 SE507出土土器(2)	75	図86 種実同定の結果(1)	126
図57 SE507・SK506出土木製品	76	図87 種実同定の結果(2)	127
図58 SE507出土鉄鏃・銭貨	77	図88 寄生虫卵分析結果	128
図59 SX508実測図	78	図89 年輪変動表	134
図60 SX508出土土器	78	図90 枝銭の分析個所	139
図61 SX508ほか出土土器	79	図91 遺構・遺物数から推定される細工谷遺跡の消長	148
図62 第4b層下面平面図	81		
図63 包含層出土遺物(1)	82		
図64 包含層出土遺物(2)	83		

表 目 次

表1 展示公開一覧	5	表7 軒瓦の計測表	99
表2 細工谷遺跡関連年表	8	表8 製塙土器出土数一覧表	111
表3 SD501出土金属製品ほか	49	表9 カエル遺体一覧表	115
表4 銭貨一覧表	54	表10 出土銭貨の特徴	135
表5 SD501出土帶金具法量表	55	表11 銭貨の非破壊的手法による蛍光X線分析結果	138
表6 墨書き・刻書き土器一覧表	88		

写 真 目 次

写真 1 発掘風景	3	写真 6 SK608検出状況	40
写真 2 現地説明会	3	写真 7 SD501遺物出土状況	43
写真 3 A区拡張区(左:南拡張区、右:北拡張区)		写真 8 SK506木製品出土状況	70
	4	写真 9 SK401検出状況	86
写真 4 A区南壁層序	16	写真10 和同開称の偏析	137
写真 5 SK704検出状況	25		

第Ⅰ章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

大阪市の中央を東西に走る泉尾今里線(千日前線)は、基幹道路として交通量が多く、たびたび交通渋滞を繰返している。大阪市建設局はこの状況を開拓するため、泉尾今里線の一筋南にあたる難波片江線の延伸工事を平成8年度から着手することになった。

ところが、道路建設予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である「難波京朱雀大路跡」が含まれていることから、大阪市建設局は文化庁長官宛「文化財保護法第57条の3」による発掘調査の通知を行う一方、大阪市教育委員会文化財保護課と事前協議を開始した。文化財保護課は、計画地が東西180mと広域に及ぶことから、周知の埋蔵文化財包蔵地からはずれる部分についても試掘調査が必要であるとの見解を示すとともに、6月12日に平成8年度計画予定地内のNo1・2地点において試掘調査を実施した(図2)。

その結果、No1地点では遺構面がすでに削平されている状況であったが、No2地点では現地表下0.9m以深に奈良時代から平安時代の遺物包含層が確認された。文化財保護課は、建設局に対しNo2地点周辺のより詳細なデータを得るために再試掘が必要であるとの判断を伝え、6月19日にNo3～6地点、7月1日にNo7・8地点の試掘を実施した。その結果、A区が深い谷地形に当たり、そこに厚い遺物包含層が存在することが明確となった。文化財保護課は、発見された遺跡が難波京朱雀大路跡とは別個の存在であると判断し、「文化財保護法57条の6」による遺跡発見の通知と本格的な発掘調査が必要であるとの見解を建設局に提示した。これを受けて、建設局は平成8年9月20日付で文化庁長官宛「遺跡発見の通知」を行う一方、調査の実施方法などについて文化財保護課と協議を重ね、財団法人大阪市文化財協会と発掘調査の委託契約を締結することになった。新規に発見された遺跡は地名をとて細工谷遺跡と命名された。

文化財保護課および建設局、大阪市文化財協会は調査方法・期間などについて協議した結果、平成8年度に包含層が明確に残るA区について発掘調査を実施し、報告書作成については発掘調査終了後、再度協議を行うこととし、平成8年10月18日から発掘調査を開始した。

調査が進展すると、後述する和同開珎の枝鏡や、「百

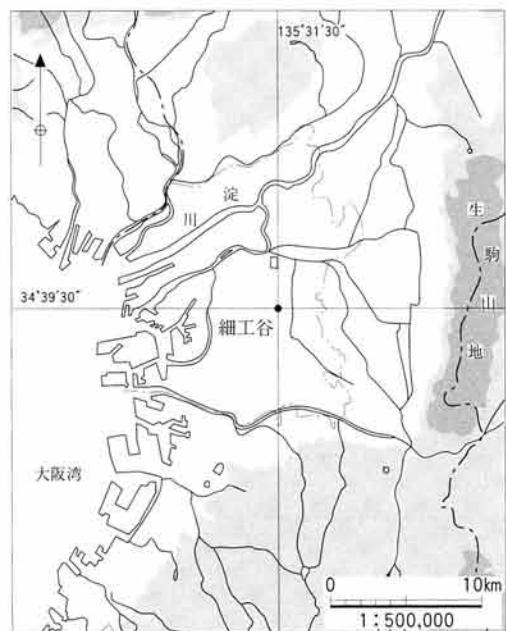


図1 細工谷遺跡の位置

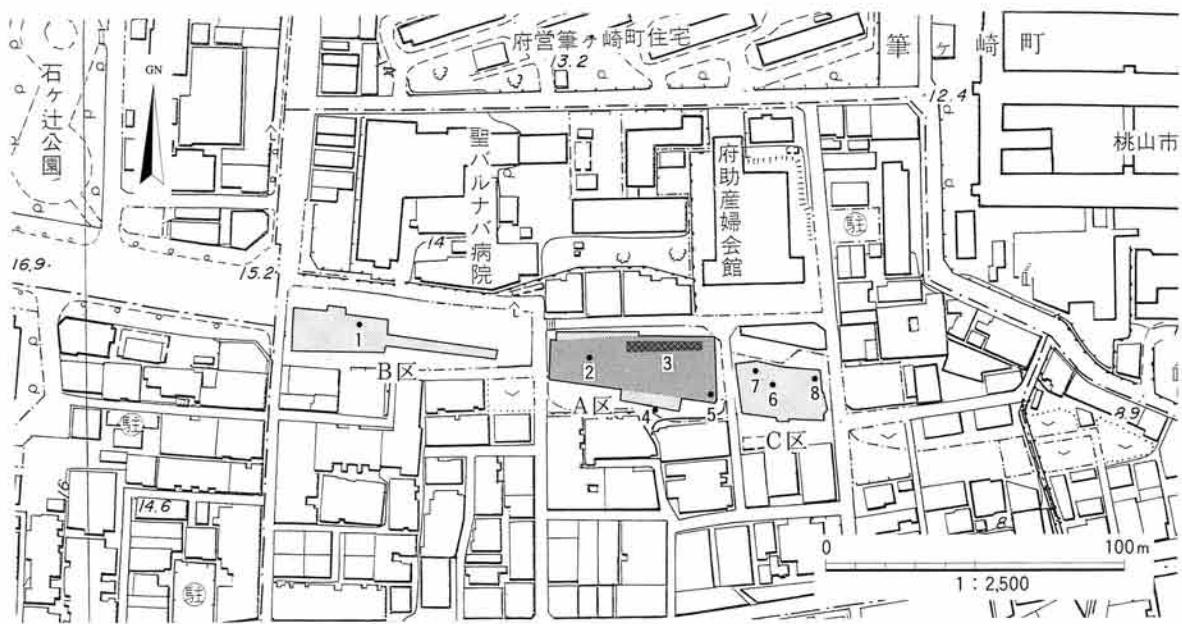


図2 調査区と試掘の位置

「済尼」・「尼寺」の墨書き器など貴重な発見が相次ぎ、調査地周辺に未発見の寺院址の存在が予想されるようになった。この成果を受けて、文化財保護課は建設局に対し、当初調査予定外であったB区・C区においても遺構の有無の確認を面的に行う必要がある旨を伝え、平成9年3月19日・25日・27日の3日間で試掘調査を行った。その結果、B地区西端で飛鳥時代末の井戸が発見され、本格的な調査が必要であると判断された。協議の結果、平成9年度調査としてB・C地区と平成8年度調査地の未調査部分の発掘調査を行い、平成10年度に平成8・9年度調査の調査報告書を作成することとなった。

(森)

第2節 調査の経過

調査は1996年10月から1997年9月まで、2次(計10ヶ月間)にわたって実施し、合計面積は2,097m²に及ぶ。調査地は推定朱雀大路跡から東へ180mの間に、南北の生活道路によって3つの調査区に分割されている。調査順に中央の第1次調査区をA区、第2次調査区をB・C区と呼ぶ(図2・7)。

1) 第1次調査

10月初旬よりネットフェンスの設置、資材搬入などの調査準備に取り掛かり、同月18日より重機掘削を開始した。A区は東西54m、南北21mであり、調査面積は916m²である。厚い現代の客土、以前建っていた住宅・工場の基礎や調査区南東の池のヘドロを除去した後、11月から5m四方の区画を調査区全体に割付け、中近世の遺構の調査に入った。北壁・南壁沿いに設けたトレーナーの地層観察から、調査区中央東寄りで北西から南東方向にかけて谷筋が走っていることが予想された。谷を横断する地層観察用の畔を設けて、順次、下位の地層へと調査を進めた。中近世の地層からは古代の遺物を含む若干の遺物が発見されるのみであり、おもに耕作地として土地利用されたようすがうかがえた。

だが、奈良～平安時代初期に形成された遺物包含層にいたって、状況は一変した。土器・瓦などが多数発見されるようになり、その下からは土壙・溝・井戸などの遺構が現われた。このうち、北から南へ調査区を横切る奈良時代の溝からは、掘削初日から数枚の和同開珎が、帶金具などの銅製品とともに出土した。1月30日に和同開珎の枝銭がこの溝の底近くから発見された。その後、和同開珎や銅製品・金属製品・木簡などの遺物が溝全域から続々と姿を現わし、この調査に全力を傾けることとなった。溝が谷筋と合流する地点ではほかの溝と複雑に切合、遺物の取上げに苦慮した。2月21日、写真測量を行った。同月24日にプレス発表、26日に報道機関への現地公開を行った。翌日の朝刊全紙の一面に和同開珎の枝銭の写真が飾られた(図3)。3月1日の現地説明会には、雨模様にもかかわらず、1,400人が現地を訪れた(写真2)。

調査終盤を迎えた3月下旬に、調査区南側の井戸から、「百済尼」・「百尼」・「尼寺」などと書かれた墨書土器が発見され、未知の寺院「百済尼寺」の存在が明らかとなった。井戸側の取上げ、古環境復元



写真1 発掘風景



写真2 現地説明会

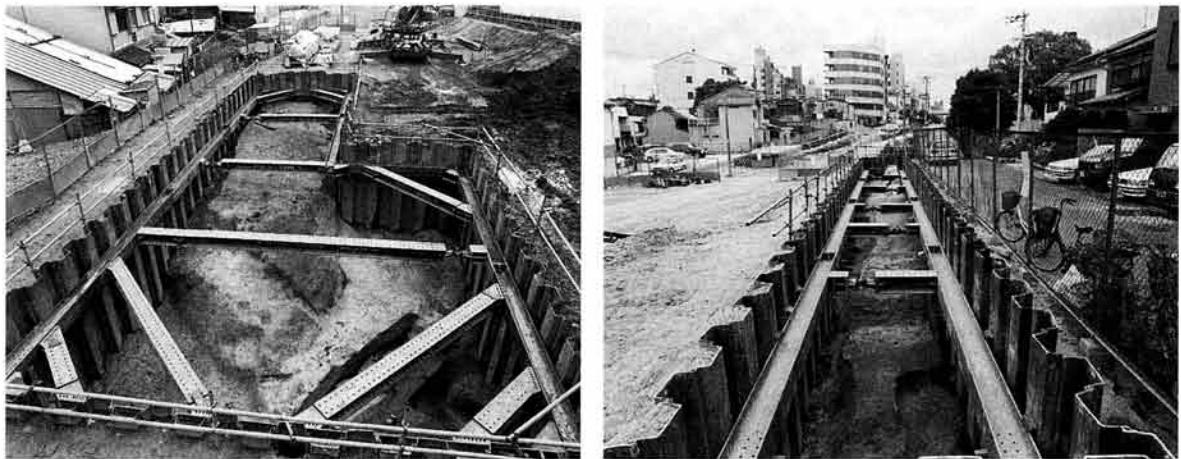


写真3 A区拡張区(左:南拡張区、右:北拡張区、ともに東から)

のための試料採取、谷筋形成期の堆積物の調査を行って、3月31日に第1次調査を完了した。埋戻しに当っては谷筋に近い飛鳥・奈良時代の遺構に真砂を入れて保護する措置をとった。調査終了後の7月29日に、「百済尼寺」についてのプレス発表を行った。

2) 第2次調査

第2次のSD97-1次調査地はA区の北と南に設けた2つの拡張区と、西のB区・東のC区の2つの調査区からなり、合計面積は1,181m²である。拡張区(200m²)は枝銭など多数の銅製品が出土した溝の延長を調査する目的で設定した。1997年5月1日から、鋼矢板の打設・資材搬入などの調査準備に取り掛かり、同月16日に南北の拡張区から重機掘削を開始した。前回と同様に奈良時代の溝からは和同開珎を含む多数の金属製品が出土した。南拡張区では金属製品のほかに屋根材など大型の木製品が資料に加わった。6月下旬に拡張区の調査を終え、B区の調査へ移った。B区は試掘調査の成果を受けて攪乱を避けるようにして、長さ71m、幅3~13mの調査区に設定した。調査面積は526m²である。近現代の開発によって調査区全体が削平されており、古代の遺構は西寄りで検出された飛鳥時代末の井戸のみであった。7月3日、井戸の掘形裏込め土から尼の父の名称を記した木簡が発見された。B区の西端では朱雀大路跡の発見が期待されたが、近代の溜池によって全面的に削平されており、その存在を明らかにすることができなかった(図版16)。7月下旬に埋戻し、C区の調査に移った。C区は東西27m、南北17m、面積は455m²である。C区でも土取りと思われる近代の土壌群、現代の池や攪乱によって、古代の生活面は大きく削平されており、古代の遺構の遺存状態は悪かった(図版18)。9月24日に調査が終了し、翌日より埋戻し作業を始め、同月30日、全作業が完了した。

なお、遺跡の調査成果を検討し、今後の資料整理の指導・助言を得るために、遺跡の検討会を7月9日に大阪市中央青年センターの会議室で開催した。当日は藤沢一夫氏・直木孝次郎氏・岩本次郎氏・上原真人氏・栄原永遠男氏・松村恵司氏・花谷浩氏にご出席いただいた。出席者からは調査地周辺の歴史・出土品の特徴・他地域の比較資料など有益な教示をいただき、今回の報告書の作成に裨益するところが多かった。

(岡村)

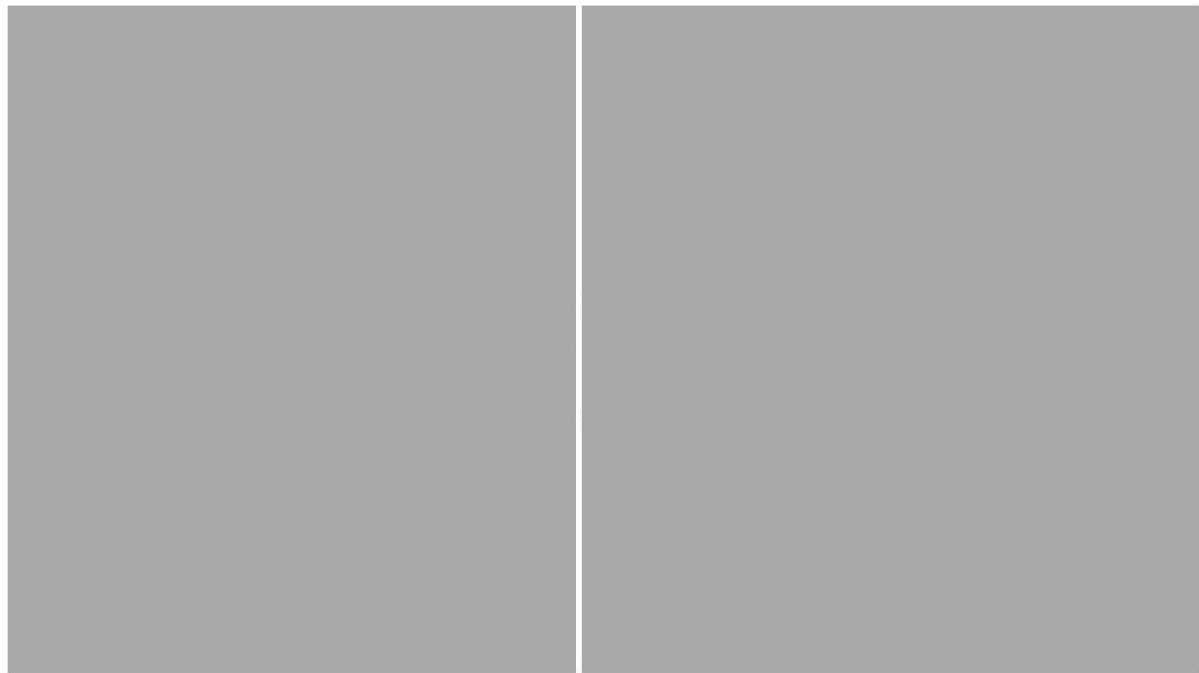


図3 新聞報道(左:読売新聞、右:朝日新聞、ともに1997年2月27日朝刊)

第3節 調査成果の公表

枝銭発見の発表後、細工谷遺跡の名は多くの人に知られるところとなった。現地説明会には近隣の住民だけでなく、遠方からも見学者が多く訪れ、その関心の高さがうかがえた。歴史の教科書に必ず登場する和同開珎は日本最古の貨幣としてあらゆる年齢層に周知されており、その製作過程を如実に物語る枝銭は格好の歴史資料・学習教材として、展示公開の要望・図書の掲載依頼が多数寄せられた。こうした各方面からの要望に応えるべく、大阪市文化財協会では情報紙『葦火』をはじめ、各種の出版物に発掘調査成果の公表に努めた。また、大阪市教育委員会と協力し、カラーリーフレットを作成し、難波宮フェスティバルや速報展などで無償配布した。調査成果の報告は研究会や市民を対象とした講演会を合わせて、1999年2月15日現在まで計11回を数える。細工谷遺跡の出土品は地元大阪の数々の展示会で公開されたが、文化庁ほか主催「発掘された日本列島展'98」によって、全国各地の人々の目に触れるところとなった。

(岡村)

表1 展示公開一覧

名 称	場 所	日 時
文化財講演会	長原調査事務所	1997年5月17日
難波宮フェスティバル'97	難波宮跡	1997年10月18日
発掘された大阪'97	大阪市立中央会館	1997年11月1日
細工谷遺跡調査速報展	天王寺区役所	1997年11月7日～28日
大阪発掘速報展'98	近つ飛鳥博物館	1998年1月27日～3月22日
発掘された日本列島展'98	東京国立博物館ほか	1998年6月16日～99年1月31日
第82回展観 貨幣	黒川古文化研究所	1998年10月24日～11月8日

第Ⅱ章 立地と歴史的環境

第1節 調査地の立地

調査地は大阪市の中央を貫く上町台地の東斜面に位置する。上町台地は大阪平野を大阪湾岸低地と河内低地に二分し、現在の大坂城付近が標高25mともっとも高い。南に向って徐々に低くなり、調査地の近くでは台地の脊梁線は谷町筋付近を通り、標高20m前後となる。その周辺は東西幅1kmほどの安定した平坦面を形成するが、西側は急な崖面となり、難波砂堆をへて、海岸低地に移行する。一方、東側はなだらかに傾斜し、推定朱雀大路跡付近から徐々に勾配を強め、河内低地の入口にいたる。

上町台地の東斜面には大小の谷が入込み、起伏に富んだ地形を形づくっている。調査地の南方には、細工谷の地名の由来となった開析谷が南西方向に台地の奥深くまで抉りこんでいる。この谷は最終間氷期に上町台地に堆積した上町累層が陸化し、次の最終氷期に海水準が下がったために侵食を受けた結果、形成されたものである[前田昇1988]。調査地はこの谷の開口部に向けて、南東に傾斜する標高11~15mの台地面に立地しており、かつてこの地からは東方の生駒山地にいたるまで河内平野の眺望が開けていたに違いない。

また、調査地近辺の微地形に注目すると、内務省建設局と大阪府によって明治19年に作成された大阪実測図には、調査地の南には南東に開く小さな谷地形が描かれている(図4)。調査で発見された谷筋はこの谷に連なるものと考えられる。

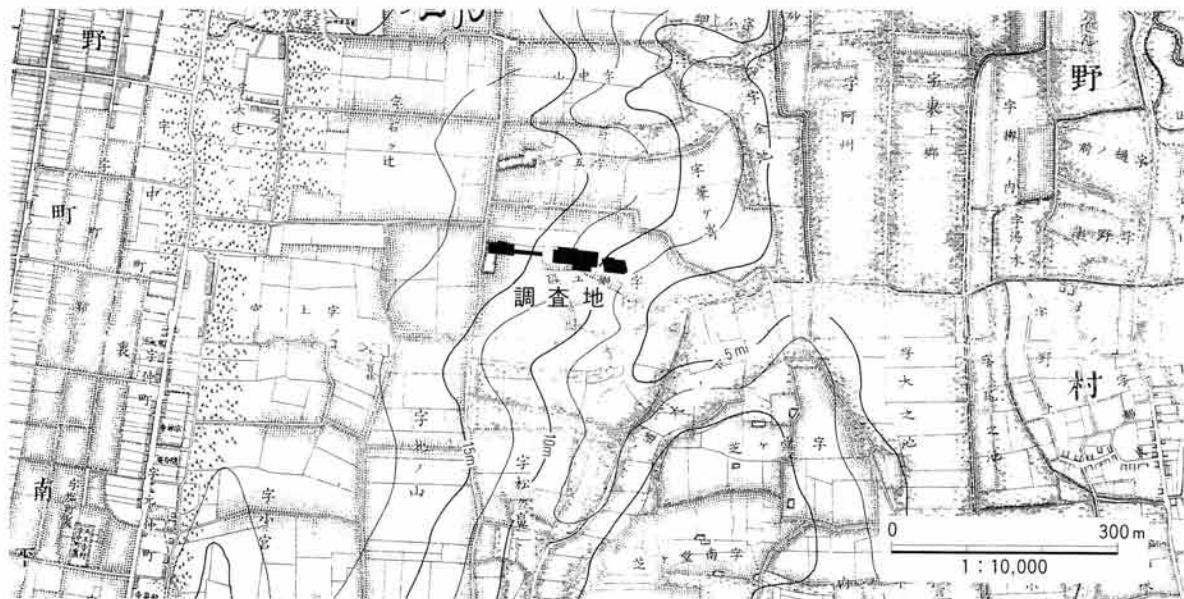


図4 調査地の立地

原図に5千分の1『大阪実測図』(明治19年作成)、
等高線は2万分の1『仮製地形図』の大坂(明治18年測量)、天王寺(明治19年測量)を使用

第2節 歴史的環境

細工谷遺跡が立地する上町台地は、その北端に難波宮が造営されたことに象徴されるように、古代より歴史の表舞台として重要な役割を果たしてきた。細工谷周辺には四天王寺、難波百濟寺に比定される堂ヶ芝廃寺、推定摂津国分寺の諸寺院が建立され、難波宮とともに、古代における政治・外交・文化上の一中心地を形成した。今回の調査では弥生時代中期から中世にいたる遺物が発見されているが、具体的な様相がわかるのは古墳時代中期以後であり、特に飛鳥・奈良時代には活発な人間活動の跡がみられる。以下では、古墳～奈良時代に焦点をあてて、遺跡周辺の歴史について述べることにしたい。

古墳時代 上町台地には古墳時代前期末～中期初頭の御勝山古墳、中期の帝塚山古墳などの前方後円墳が残されているが、かつて、このほかにも数多くの古墳が存在したことは四天王寺東門付近で出

表2 細工谷遺跡関連年表 (「書紀」・「続紀」による)

西暦	和暦	事項
5世紀	応神	難波に行幸(大隅宮)
5世紀	仁徳	難波に都す(高津宮)
6世紀	欽明	難波に行幸(祝津宮)
538		百濟、泗比(扶余、夫余)に遷都 仏教伝わる
593	推古元	四天王寺を難波荒陵に造る
602	推古10	百濟僧觀勒、曆・天文・地理書をもたらす
613	推古21	難波より京に至る大道を置く
629～641	舒明天	この頃百濟王子豊璋・禪広(善光)来朝
645	大化元	難波に遷都
650	白雉元	難波長柄豊崎宮造営
652	白雉3	難波長柄豊崎宮完成
660	齊明天	新羅・唐連合軍、百濟を滅ぼす
663	天智2	白村江の戦い
664	天智3	百濟の義慈王の子善光王らが難波に居住せしめられる
672	天武2	飛鳥淨御原宮遷都
679	天武8	難波に羅城を築く
683	天武12	複都制の詔、難波を副都とする
686	朱鳥元	難波の大藏(省)より出火、宮室全焼す
691	持統5、正月	百濟王禪広・良虜・南典・遠宝、優詔により物を賜う 親王以下すべての有位官人に難波大藏の鍵を賜う
692	持統6	藤原京遷都
694	持統8	はじめて鈔銭司を置く
699	文武3	この年はじめて銀・銅銭をつくる
708	和銅元	平城京遷都
710	和銅3	神龜3
726	神龜3	藤原宇合を知造難波宮事とす
732	天平4	宇合らに物を賜う(工事一段落か)
734	天平6	難波宮の宅地を班給す
740	天平12、2月	聖武、難波宮に行幸し、百濟王等風俗楽を奏す
744	天平16	難波宮を京都と定む
744	天平16、2月	元正、安曇江に行幸し、百濟王等百濟楽を奏す
745	天平17	平城京に都を復す
749	天平勝宝元、4月	陸奥守百濟王敬福、陸奥国小田郡より出た黄金を献上する
750	天平勝宝2	この頃、百濟王氏、河内国交野郡に移住
750	天平勝宝2、5月	百濟王敬福、河内守に任す
760	天平宝字4	万年通宝をつくる
765	天平神護元	神功開宝をつくる
766	天平神護2、6月	百濟王敬福薨す
783	延暦2、10月	桓武天皇交野に行幸し、供奉する百濟王氏等に叙位
784	延暦3	長岡京に遷都
788	延暦7	和氣清麻呂により上町台地の東西開削工事が行われる
793	延暦12	難波宮を廢し、摂津職を摂津国とする
794	延暦13	平安京に遷都
796	延暦15	隆平永宝をつくる

土した埴輪円筒棺、上之宮神社跡地付近から発見された5世紀後半頃の家や鳥の埴輪[中村博司1975]などの関連遺物や、地誌・名所図絵・地籍図による消滅古墳の復元作業から推測される[上田宏範1988]。調査地からは中・後期の土器や埴輪のほかに、中期の水溜め遺構が発見されており、その実態はまだ明らかではないものの、この地域では古墳だけでなく、集落が形成されていたことがうかがえる。今回実施した花粉分析では、中期中葉以前から中期中葉にかけて樹木花粉から草本花粉への転換がみられ、森林が急激に減少するという結果が得られている。このことは細工谷周辺で遺構・遺物の出現する時期に、広く森林開拓が行われたことを示している。

この頃、上町台地の北端部の旧中央体育館地域では大型の掘立柱建物群が建設された。16棟以上の建物が東西2列に整然と正方位に並び、その設計や施工には高度な技術が駆使されてい

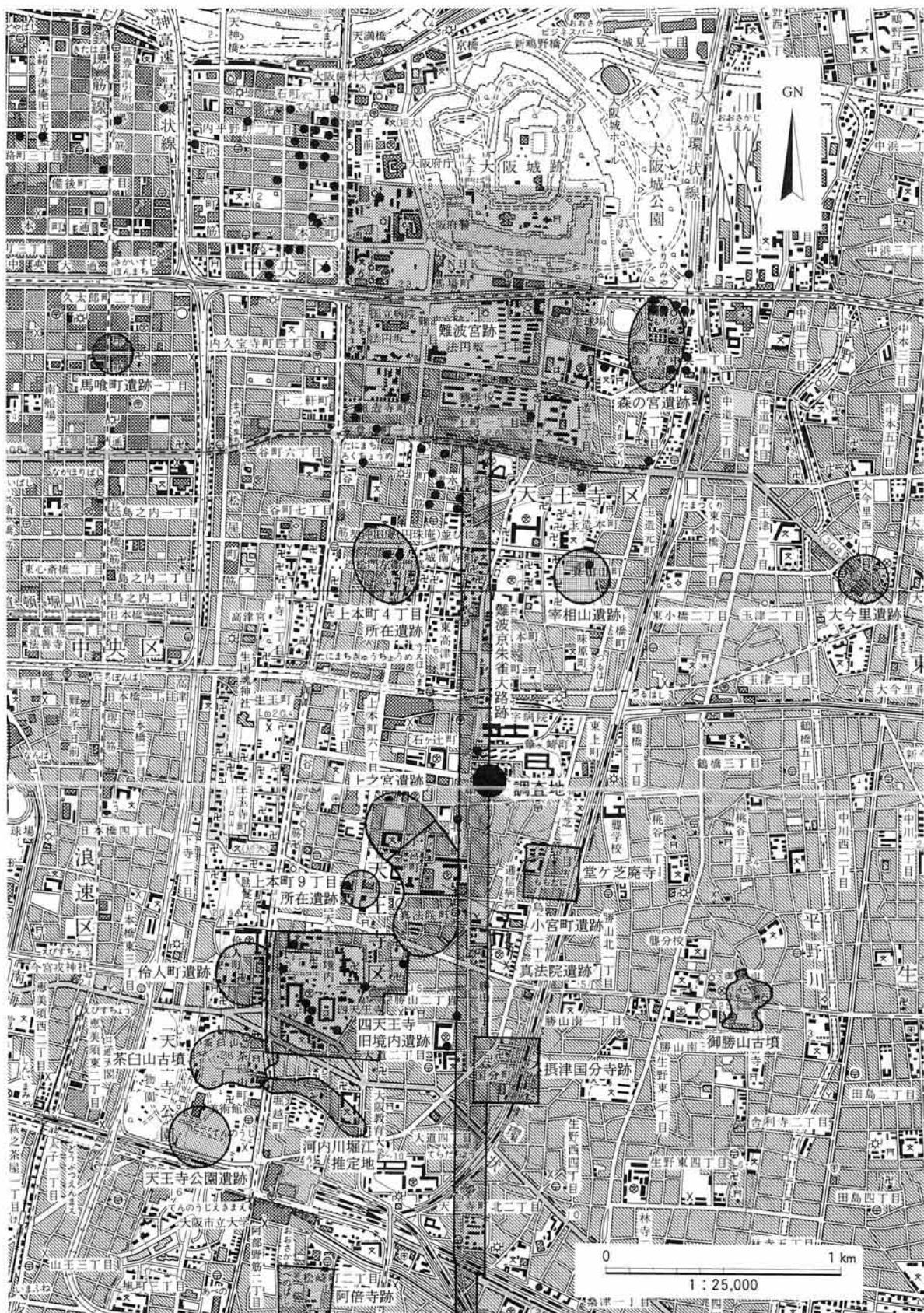


図5 周辺の古代遺跡

●印は飛鳥～平安時代の遺構・遺物が発見された調査地点、[積山洋1998]による。

原図は国土地理院2万5千分の1「大阪東北・東南部」を使用、遺跡範囲は大阪市文化財地図(平成7年度版)から抽出

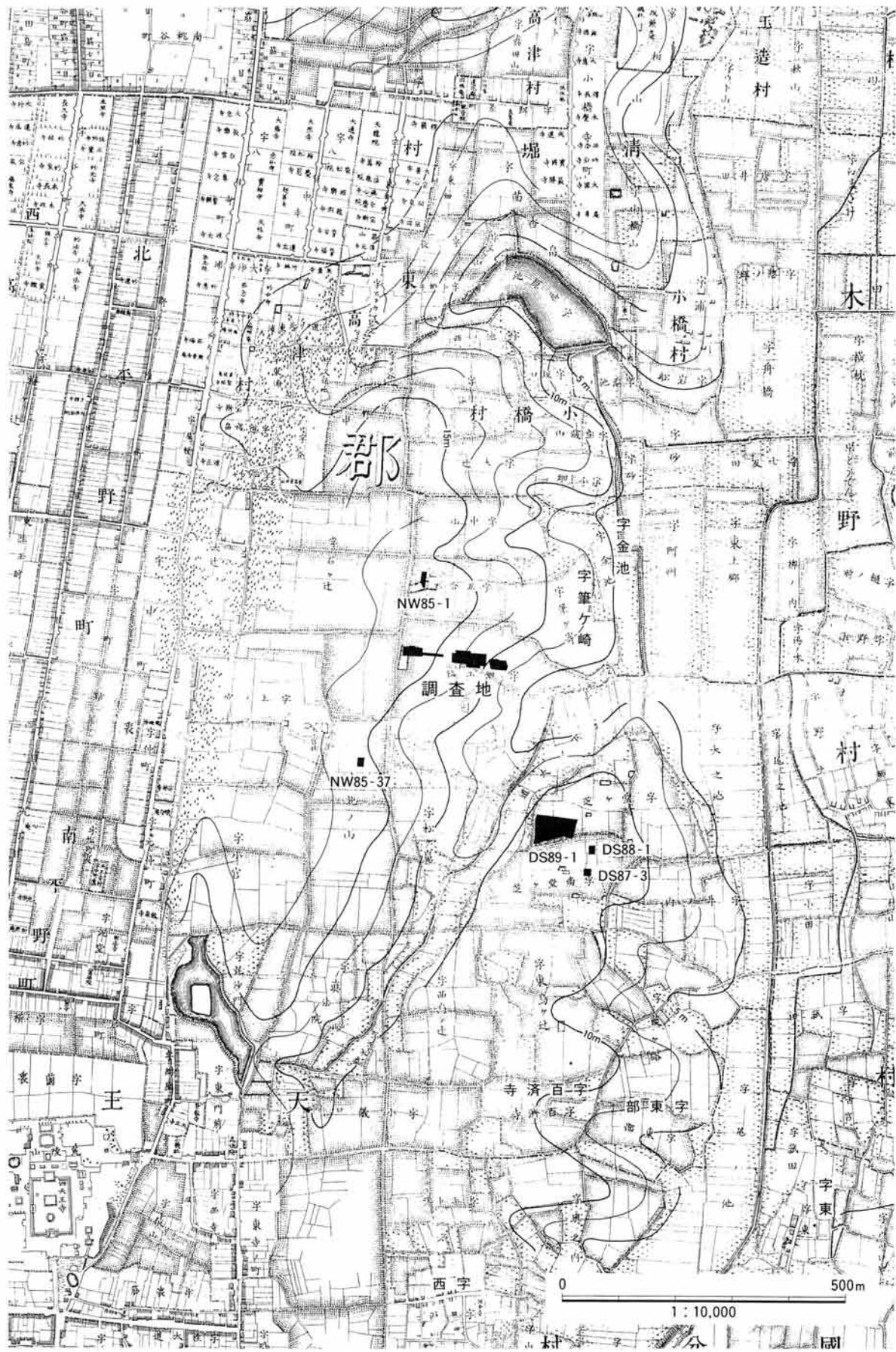


図6 調査地周辺の古地名(作図方法は図4と同じ)

る。難波の堀江を北に望むこの地は、瀬戸内と大和川・淀川を結ぶ水上交通の拠点として重要な位置を占め、倉庫群の造営・運営には大和政権が直接関与していたものと考えられる[大阪市文化財協会1992]。

古墳時代後期以降、大陸・朝鮮半島との交渉が盛んになるにしたがって、大和政権の外港としての「難波津」を中心に、外交のための官衙とされる「大郡」や外交使節を応接する「難波館」と総称される客館が設けられた。旧中央体育館地域周辺では6世紀～7世紀前半頃の集落跡が確認されており、ここでは6世紀末～7世紀初めに集落の発展の画期が推定されている。先に述べた文献に現われる諸施設を中心とした上町台地北部地域の発展はこの画期以降と推測されている[南秀雄1992]。

難波京 飛鳥・奈良時代には上町台地北端の法円坂一帯に難波宮が造営され、これに関連して、幹線交通路・港津の整備、さらに進んで条里制の施行、地方行政区画の設定などの計画的な地域整備が進んだものと考えられる。調査地のすぐ西には朱雀大路の痕跡と推定される古道が南北に通っている。この道を1.6km北上すれば、1993年に発見された難波宮の玄関である「朱雀門」にいたる。朱雀大路そのものはまだ発掘調査では確認されていないが、その南の延長線上には大規模な道路遺構が大和川・今池遺跡の調査で見つかっている。「難波大道」と呼ばれるこの道路遺構は、幅1.2m前後の側溝を伴う幅員18mの規模をもち、側溝から出土した土器によって、前期難波宮と前後する時期に建設されたと考えられている[大和川・今池遺跡調査会1981]。

この古道を主軸線として難波京のプランは構成されていたものと思われるが、その施工時期・京域については、不明な点が多い。これまで難波京の復元については、先の古道と四天王寺東側に残る藤原京と同じ方格地割を基軸にして、地形や汀線、古墳の存在などの情報を検討し、進められてきたが、考古学的な裏付けがなお乏しく、図上復元の域を出ていないのが現状である。しかしながら、『日本書紀』天武8(679)年11月条の「難波に羅城を築く」という記事や、天武12(683)年12月条の複都制の詔にみえる家地の班給記事などから、遅くとも天武朝の段階にはすでに京として整備されつつあったものと考えられる。

一方、上町台地北半部で実施された発掘調査では、古代の遺構・遺物の分布のようすが徐々に明らかになってきており、難波京の実態を考える上で重要な知見が得られている。

飛鳥～平安時代の遺構・遺物が集中する地域には、北から以下の5地域がある(図5)。

- 1：難波宮域の北西方向にあたる大川(難波堀江)の南岸、現在の天満橋から北浜にかけての一帯
- 2：難波宮東方の森の宮遺跡
- 3：難波宮の南側の清水谷周辺
- 4：四天王寺周辺
- 5：推定朱雀大路跡周辺

1では先述したように5世紀後半以降開発が進められており、6世紀後半～7世紀初めの難波宮下層、前期難波宮の時期の遺構のほか、奈良時代の井戸や建物跡などの遺構が集中して発見されている[伊藤純1991]。方格地割の存在も推定されており、この地域は従来の推定京域の北側にあたることから、京域が北に拡大する可能性が生じてきた[積山洋1998]。

2では建物は見つかっていないが、沖積地に掘られた溝から7世紀後半の土器とともに舟形木製品・斎串などの遺物が出土しており、水辺の祭祀に係わるものとみられる[大阪市文化財協会1996a]。

3では方位の一定しない7世紀前半の建物群が廃絶した後に、正方位に並ぶ7世紀中頃の建物群が現われ、前期難波宮の造営と関連するものとみられる[大阪市文化財協会1991]。

4では現四天王寺の西側で奈良時代の掘立柱建物・柵が多数確認されている[大阪市文化財協会1996b]。また、上町台地の脊梁部を通る上汐町筋は四天王寺創建以前から存在していた古道と考えられるが、この近辺では「米家」と記された奈良時代中頃の墨書き土器が井戸から見つかっている。四天王寺の北約3町にあったと文献に記される「難波市」との関係が注目されている[植木久1986]。

5では難波宮に近い地域以外の調査例は少なく、詳細は不明であるが、今回の調査地の北100mに位置するNW85-1次調査地(図6)では、7世紀末頃の堀が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1987]。この堀は南東に落込む自然地形の傾斜に沿って築かれており、その廃絶後に落込みを埋め、整地されている。これまで、この整地作業は難波京の施行との関連が推定されてきたが、今回の調査の結果、寺院に係わるもの可能性が出てきた。また、9世紀代に廃棄された井戸が見つかっており、ここからは重圈文軒丸瓦・蓮華文軒丸瓦・黒色土器・土師器などが発見されている[黒田慶一1991]。また、NW85-37次調査地(図6)では、ほぼ正方位を向く奈良時代中頃の溝が検出されている[大阪市文化財協会1985]。

以上、難波京域を概観すると、台地東辺部に位置し、谷筋が深く入込んだ地形的に不安定な朱雀大路周辺よりも、四天王寺から大川南岸にかけての上町台地の尾根筋の開発が早くから進められていた形跡がうかがえる。難波京の条坊制地割を実施する際に、すでに経済・交易の要所であったこの地域をあらたに開発せず、実際の条坊街区は部分的に施行された可能性が考えられる。京のプランはあっても、京域全面に張り巡らされたものではなく、対外的な威容を保つ必要から、朱雀大路に面した区域に限って条坊制地割が施工された可能性が指摘されている[植木久1991]。

四天王寺 四天王寺は古代より今日まで法灯を伝える日本最古の寺院である。調査地から南西1km、上町台地中央に立地する。その創建の時期については、『日本書記』の2つの造営開始記事の解釈から、推古朝の初年と考えられた時期もあったが、現在では、推古朝の末年に創建を考える説が有力である[村田治郎1966]。1950年代の発掘調査で出土した飛鳥時代の瓦の中には法隆寺若草伽藍の瓦と同範のものが多く認められる一方、型崩れの進行したものが少なくないことから、法隆寺と同時期ないしはやや遅れて造営されたものと考えられ、先の説を支持する結果が得られている。

大化元(645)年難波宮への遷都が四天王寺にとって、整備と発展の好機となった。鎮護国家を祈る場として重視され、来朝の外国使節に対しては、国力や文化を誇示するための対外的意図をもった国家的寺院として発展した。奈良時代には五大寺に次ぐ寺格をもち、寺封を受けてさらに伽藍の整備が進んだ。このことは聖武朝の難波宮の存在と無関係ではなく、同範の瓦が出土していることもこれを裏付けている[大阪市文化財協会1996b]。今回の調査地からは四天王寺創建瓦である素弁蓮華文軒丸瓦が飛鳥時代中頃の遺構から1点、後世の包含層から2点、計3点が出土しており、両者の関係が注目される。

百済郡 古代、難波の地は東生・西成・住吉・百済の4郡から成立していた。このうち、百済郡は660年に滅亡した百済国から日本に亡命してきた王族が難波の地に居住したことを契機に建郡されたという、特殊な歴史的背景をもつ。建郡の時期については、『続日本紀』天平6(734)年3月丁丑条で聖武天皇の難波行幸に際して租・調を免ぜられた12郡が、『倭名抄』に記された摂津国の13郡より1郡少ないとから、郡単位の条里制の呼称をもたない百済郡がこの不足郡に該当すると考えられ、天平6(734)年段階では成立していなかった可能性が高いと推定されてきた。しかし、近年になって、長屋王家木簡のなかに靈亀元(715)年と考えられる「百済郡南里」が確認され[奈良県教育委員会1995]、建郡の時期が靈亀元年以前であることが確定し、さらに百済の王族が日本に居住した664年近くまでさかのぼる可能性が生じてきた。

『倭名抄』によると、百済郡は東部・南部・西部の3郷からなり、こうした郷名は百済郡の地方制度である五部制に由来するものと考えられる。西を東生郡、東を河内国渋川郡、南を住吉郡に接し、他郡に比べきわめて狭小な郡であった。郡域については条里関係の史料がなく、『四天王寺御手印縁起』にみえる敬田院の四至の記述と、明治の地図に残された「百済寺」・「東部」・「東」・「西」などの字名から復元する方法がとられてきた(図6)。その範囲には広狭諸説あるが、現在の大阪市天王寺区と生野区にまたがる上町台地東斜面の古来百済野と称された地域と重なると推定され、近年では百済寺の有力な比定地である堂ヶ芝廃寺を中心とした東西約12町、南北約18町とする藤沢一夫氏の復元案が出されている[藤沢1995]。百済郡は平安時代の終り頃まで史料に散見され、この頃までは存続していたと考えられるが、中世以降まったく史料に現われない[伊藤純1998]。この最大の原因是百済王氏が奈良時代中頃に河内国交野郡へ移住したことにあると考えられる。

難波百済寺と堂ヶ芝廃寺 調査地から南東約400mにある堂ヶ芝の地は、上町台地から岬状に派生した台地上に立地し、白鳳から平安時代にいたる瓦が出土することが早くから知られている[石田茂作1936、藤沢1941]。そのなかには、四天王寺や後期難波宮の瓦と同範のものもみられる。かつては方形柱座を浅く彫り込んだ巨大な塔心礎も残っており、これまで、「玉造四天王寺」[大脇正一1930]、「難波大別王寺」[石田1936]、「摂津国百済寺」[藤沢一夫1969]という古代寺院に比定する諸説が出されている。先の特徴を備えた塔心礎は日本にほとんど例がなく、百済や新羅に多い型式であり、特に百済王都であった扶余の軍守里廃寺の地下式心礎に類似している。また、堂ヶ芝の南方に「百済寺」の字名が残っていること、百済滅亡後の天智3(664)年3月、百済王禪広(善光)を難波に住まわせて以来この地に百済王氏を中心とする百済系の渡来人が集住していることなどから、堂ヶ芝廃寺は百済王氏の氏寺である摂津国百済寺(難波百済寺)に比定される可能性が高い。今回の調査地からは「百済尼寺」の存在を示す墨書土器が多数出土しており、出土した多数の瓦は「百済尼寺」のものであると考えられる。瓦には堂ヶ芝廃寺出土例と同範のものがあり、こうした事実も、百済寺=堂ヶ芝廃寺の有力な論拠となるだろう。

近年、堂ヶ芝廃寺では3箇所で調査が行われている。寺院に関連する明確な遺構は検出されていないが、多数の古瓦が出土している。このうち、現在の豊川閣觀音寺(豊川稻荷)で行われたDS88-1次調査地(図6)では、石田茂作氏によって基壇の可能性が指摘されていた寺域北西の盛土が近代のも

のであることが判明した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990]。この調査地とDS87－3次調査地(図6)では、多数の古瓦が後世の地層から出土している[大阪市文化財協会1987、宮本佐知子・佐藤隆1996]。また、DS89－1次調査地(図6)では、古瓦の出土は少なく、寺院の中心が東方にあることが調査者によって推定されている[大阪市文化財協会1989]。

そのほか注目される遺跡として調査地の南西600mに位置する真法院遺跡がある。この遺跡からは宝暦11(1761)年に無文銀銭が約100枚出土したという報告が松浦武四郎『撥雲餘興』に載せられている[菅谷文則1991]。無文銀銭は、畿内および畿内周辺のおもに7世紀後半の15遺跡から出土している。天武朝にみえる銀や銭にあたり、和同開珎に先行する秤量貨幣とする考えが有力である[国立歴史民俗博物館1997]。この遺跡の実態については無文銀銭以外にまったく不明である。調査地から出土した和同開珎の枝銭・富本銭を加え、この狭い地域に貨幣経済の導入期を物語る資料が集中して発見されていることになる。

また、調査地の地名である「細工谷」や、その北東に位置する「金池」は金属加工を連想させる字名であるが、このうち、「細工」の名が奈良時代にさかのぼることは、石山寺の造営に際しての銅鏡製造の見積書である「東大寺鋳鏡用度注文案」(天平宝字6(762)年4月2日『正倉院文書』、『大日本古文書』15巻、p.182)の中で、「六呂工」、「鉄工」などの工人とともに、「細工」の名があることから確実である[小林行雄1962、藤沢一夫1999]。

以上のように、細工谷の地は地形的には不安定ながらも、難波京の中央にあり、四天王寺、百濟寺、さらに摂津国分寺と推定される国分寺の諸寺院に近接し、北の難波宮とともに古代における政治・外交・文化上の重要地域に位置していたのである。

(岡村)

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 層序と遺構の概要

1) 層序

調査地の旧地形は現在よりも起伏に富んでいた。現在の地表面の高さは東西180mの間に、西から東にTP+15mから10mへ推移するが、旧地形では地山の高さは14mから6mまで、8mの高低差がある。なかでも、A区の谷筋付近はもっとも傾斜が大きい。北壁に近い谷底の高さはTP+8.0m前後であるが、南端ではTP+6.0m近くになり、20mの間に2m下がり、約6°の傾きがある。各時代の地層はこの谷筋を中心に堆積している(図7)。谷の最深部は現地表下5mにあり、この間に谷の形成時から近世にいたる地層を確認し、11層に大別した(図8・9)。一方、B区東半分からA区の南西部にかけては、近年の宅地造成によって地山にいたるまで削平されており、古代の遺構は深い井戸のみが残っていた。C区も現代の表土下は地山であり、遺物包含層は認められなかった。

以下にA区の各地層の特徴と時期について述べる。また、遺構検出面の呼称は[趙哲済1995]に準じた。

第1層：表土と近現代の池の埋戻し土および盛土である。A区の南東には一辺20m以上にわたる石垣で護岸された池があった。地元住民によれば昭和初年までは蓮の栽培が行われたという。この池によって、A区の南東部は削平されており、池底のヘドロからは大正年間の「味の素」のガラス瓶のほか、

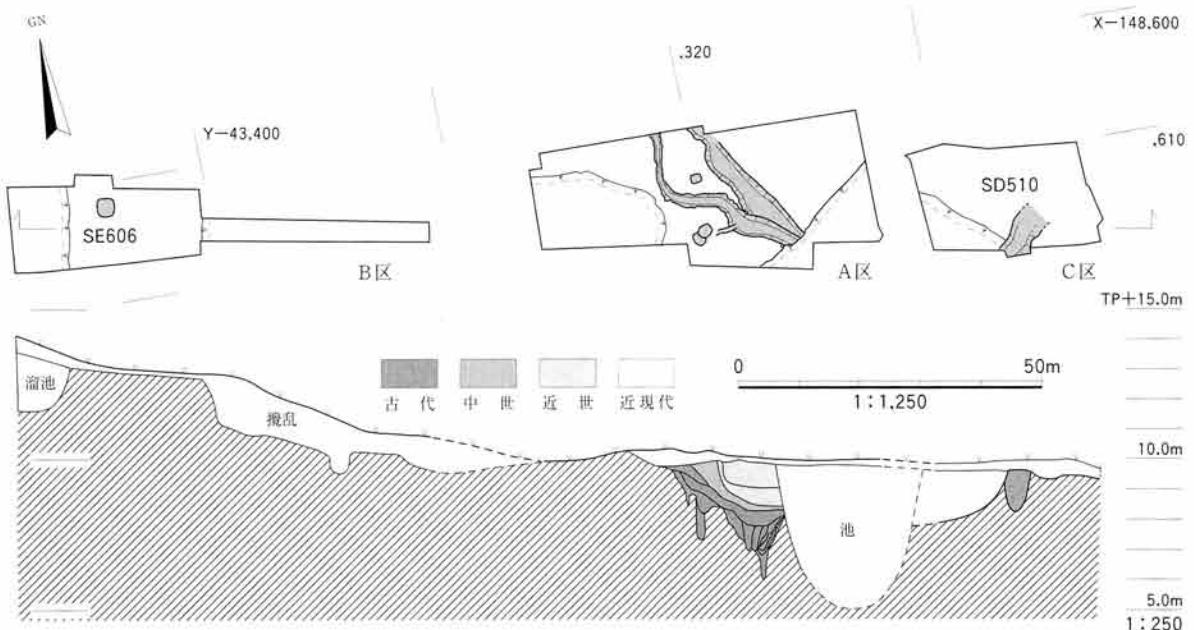


図7 調査地の横断面

古墳～平安時代の遺物が出土した。

第2層：江戸時代の田圃の耕作土である。粗粒砂を挟在する暗灰黄色細粒砂質シルト層であり、層厚40cm前後を測る。17世紀初頭の唐津焼や17世紀中頃の伊万里焼が数点出土しており、17世紀代に限定されるかもしれない。

第3層：12世紀から15世紀にかけての遺物を含む中世の包含層であり、層厚20～30cmの6層に細分される。いずれも黄褐色系の粗粒砂質シルトであるが、下位に粗粒砂が多く入る。第3層上面で第2層を埋土とする田圃や、調査区南東隅で地下げされた耕作関連の遺構が検出された。

第4層：12世紀代の瓦器を含む第4a層と、9世紀後半頃の黒色土器A類、緑釉陶器を含む第4b層に分れる。第4a層は褐色の細粒砂質シルトであり、層厚40cmを測る。第4b層は暗オリーブ褐色の細粒砂質シルトであり、層厚40cmを測る。調査区北西部では第4b層上面で9世紀後半～10世紀前半の柱穴・土壙群が検出された。

第5層：第5a層と第5b層の2層に分れる。第5a層は平安時代初頭に形成された包含層である。湿润な環境で堆積した礫混りの黒褐色粘土質シルトであり、もっとも厚いところで層厚60cmを測る。多数の奈良時代の遺物を含むが、隆平永宝(初鑄796年)が出土しており、地層の形成は平安時代初頭にまで下ることは明らかである。第5b層は灰オリーブ色粗粒砂の水成層であり、奈良時代の遺物を多く含む。谷筋周辺の低地にある奈良時代の遺構を覆っている。第5a層の基底面では飛鳥～奈良時代の遺構が多数検出された。

第6層：6世紀初めから後半にかけて谷筋に堆積した地層である。黄褐色系の粗粒砂質シルトであり、谷の最深部で層厚120cmを測る。3層に細分され、最下層の下部は水成層である。下位層に由来する5世紀代の遺物を多く含む。第6層上面では飛鳥時代初頭の遺構が検出されている。

第7層：谷筋に堆積した5世紀中葉～後半の遺物を多数含む黒褐色シルトの暗色帶であり、谷筋の中央で層高15cmを測る。この下面でSD701が検出された。

第8層：谷筋に堆積した地層である。黄褐色中粒砂質シルトであり、層厚30cmを測る。遺物を含まず、時期は不明である。

第9層：遺物をまったく含まない暗色帶である。

第10層：粘土質である地山にやや砂が混った土質である。遺物をまったく含まない。谷筋ではこの層の上面でSD1001を検出した。

第11層：黄色シルト質粘土の地山である。



写真4 A区南壁層序

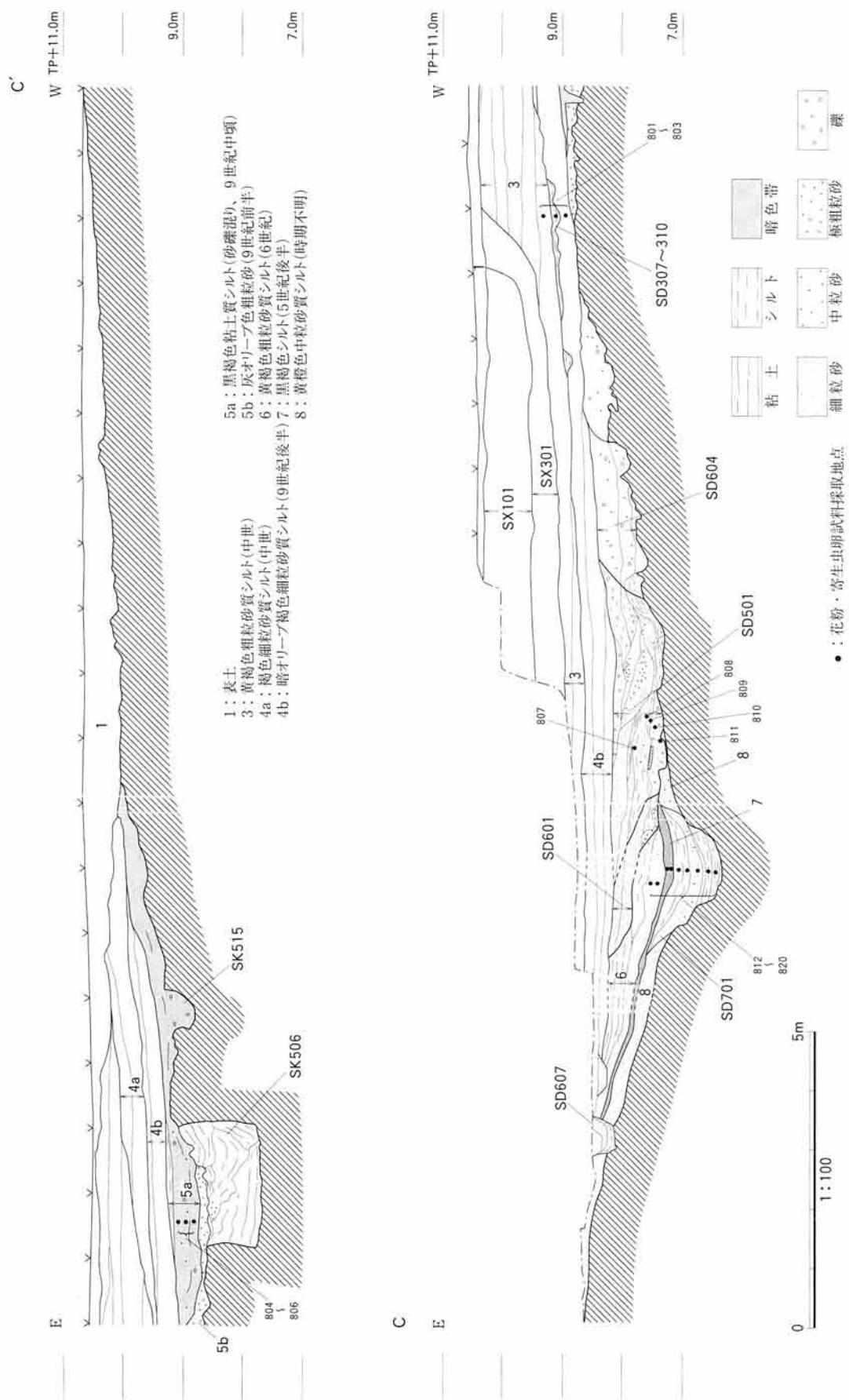


図8 A区南壁断面図

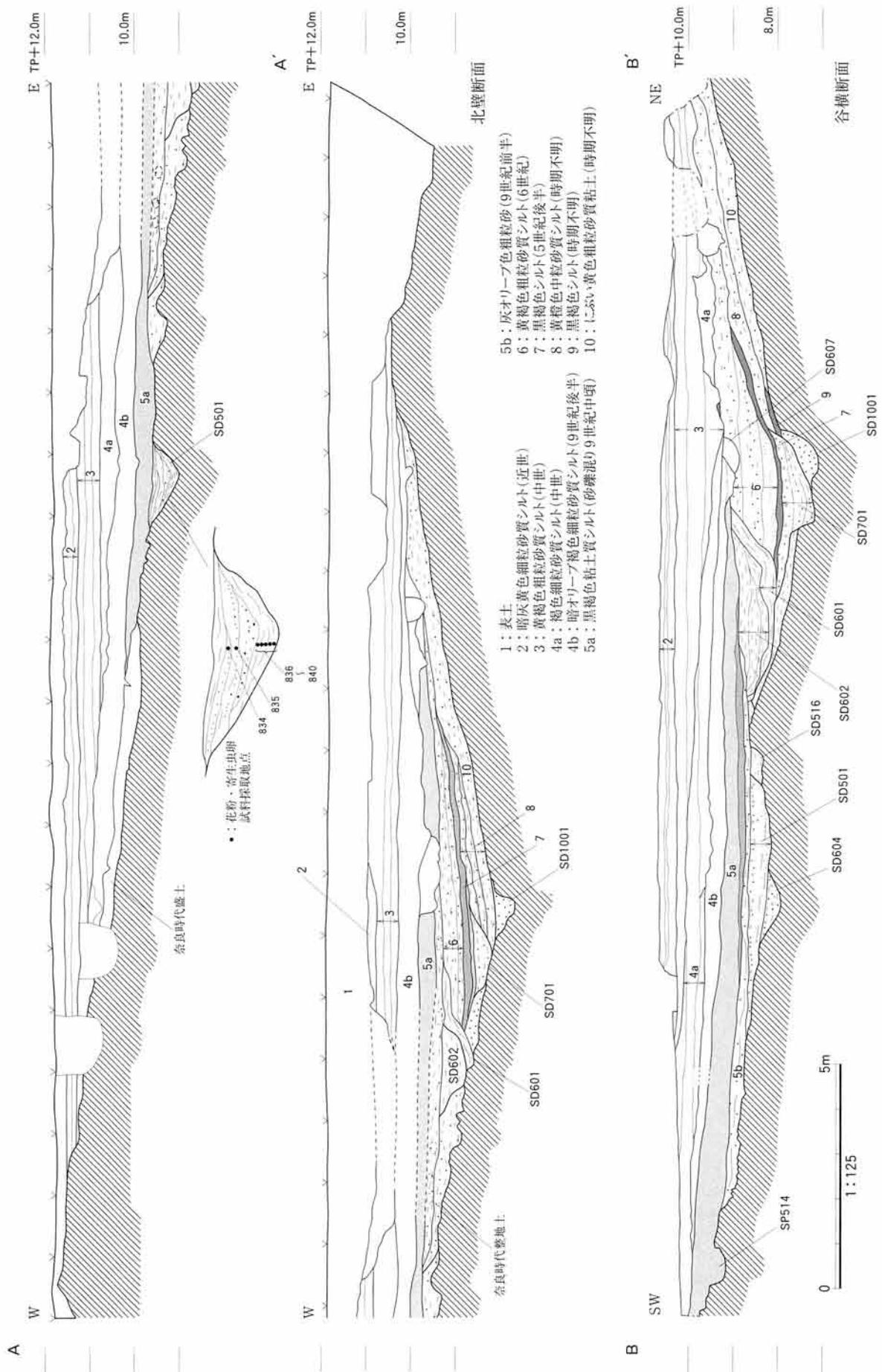


図9 A区北壁・谷横断面図

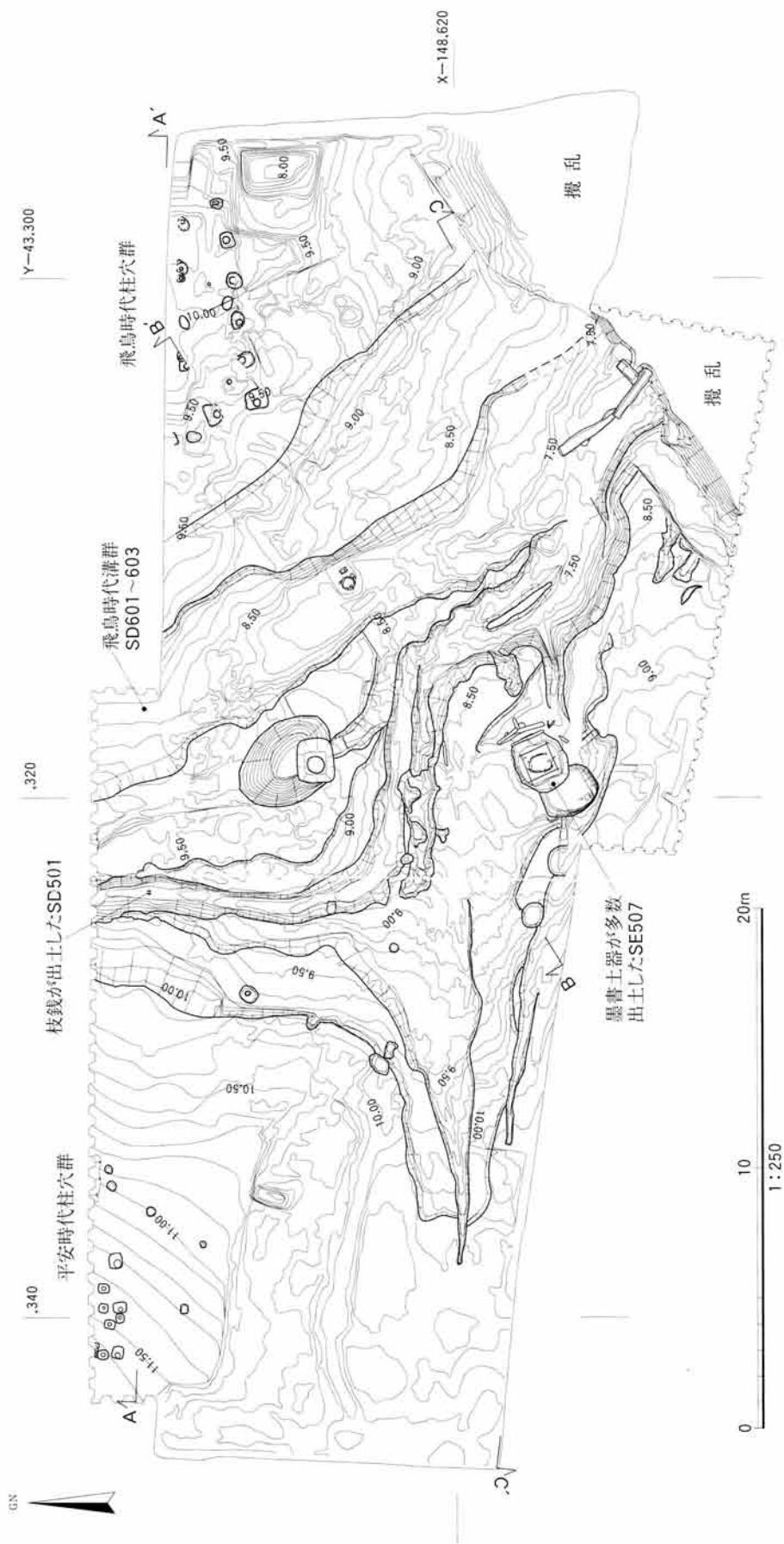


図10 A区の主要な古代遺構平面図

2) 遺構の概要

調査地でまとまって遺物が出土し、具体的な様相がわかるのは古墳時代中期中葉以降であるが、この時期をさかのぼる若干の遺物が出土している。調査地で発見された最古の遺物は石鎌1である(図11)。サヌカイト製の凸基式有茎石鎌であり、弥生時代中期にさかのぼる資料である。また、後期の甕の底部破片も2点見つかっている。弥生時代の遺物はこの3点のみであり、すべて後世の包含層から出土している。弥生時代の遺構は確認されず、その実態はよくわからないが、その遺物量からは周辺に集落の存在を想定しがたい。

また、谷筋に形成された最古の溝はSD1001である(図12)。幅1.3m、深さ1.2mであり、途中から古墳時代のSD701に切られ、その後の流路はSD701に踏襲されていた。埋土は黒褐色シルトであり、鶴嘴を用いてようやく掘削できるほどに堅くしまっていた。遺物をまったく含まず、時期は不明であるが、人工の溝とは考えがたい。埋土からはほとんど花粉が検出されず、浄化の進んだ土壌であった。古い時代にさかのぼる堆積物のようである。

古墳時代中期中葉～中世の遺構には、建物・溝・井戸・土壙・畑などがあり、おもにA区の谷筋を中心に検出されている(図10)。谷の堆積による地形変化と遺構(土地利用)の変遷の関係を整理すれば、おおむね次の4段階を経ていると考えられる。

第1段階は谷の形成から第6層が堆積する古墳時代後期頃までである。地層は旧地形に沿って堆積し、SD701・SX702などの遺構が谷筋近くで見つかっている(図12)。

第2段階は飛鳥時代初頭～奈良時代末葉であり、遺跡の中心時期に当る。第6層の堆積によって、やや平坦化した谷筋近くに柱穴・溝・土壙・井戸など多様な遺構が検出されている。谷筋には飛鳥時代を通じてSD601・602・603の溝群が掘られ、谷の東岸にあたる調査区北東部には、柱穴群が見つかっている(図20)。飛鳥時代末葉～奈良時代後半の遺構はもっとも多い。和同開珎の枝錢が出土したSD501や、「百濟尼寺」を示す多数の墨書き器が出土したSE507など、主要な遺構はこの段階にある(図10・32)。

第3段階は平安時代初頭～9世紀後半である。この段階には第5・4b層が谷に堆積し、谷地形全体の平地化が進み、窪地となった(図62)。第4b層上面で検出した9世紀後半～10世紀前半までの遺構は地形の安定したA区北西部に分布している(図65)。

第4段階は中世以降、宅地化が始まった近代以前までである。13世紀頃には窪地を利用して、段々畑が検出された(図67)。その後、第3層の堆積により、窪地は傾斜地へと変化し、A区は引き続き近世にも耕作地として、土地利用されている。

(岡村)

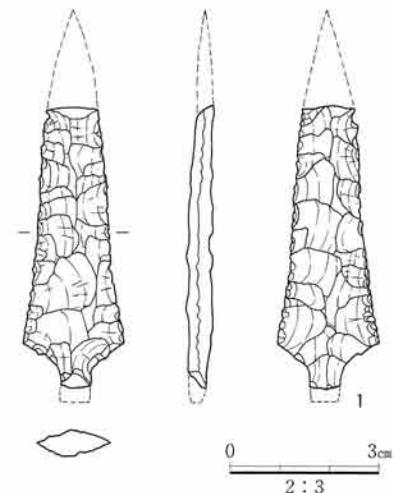


図11 弥生時代の石鎌
現存長5.58cm、幅2.07cm、重さ6.3g

第2節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構には溝・土壙・水溜め施設があり、谷筋あるいはその近くから見つかっている。また、谷筋に堆積した第6・7層からは古墳時代の遺物が多数出土した。古墳時代の遺構はいずれも中期中葉以降のものであり、前期にさかのほる資料はない。遺物は土師器・須恵器・韓式系土器・製塙土器のほか、紡錘車・勾玉などの石製品がある。

1) SD701(図12、図版2)

SD701はA区の谷筋を北西から南東に走る人工の流路である。その流路は先行するSD1001を踏襲している。断面形は調査区南半分で浅いU字形から深いV字形に変化し、一部オーバーハングする。規模は幅2.5m、深さ0.6~0.8mであり、長さ22.5m以上にわたって検出した。最下層が地山の黄色粘土質シルトのブロックを多く含むほかは、埋土はすべて水成層の黒褐色シルト、あるいは粗粒砂質シルトが自然堆積したものである。ほとんど遺物を含まないが、埋土最上層から須恵器甕の破片が数点出土した。内面をていねいに擦り消した初期須恵器の特徴を備えたものであり、中期中葉のものである。埋土は遺構を覆う第7層へと連続的に堆積しており、中期中葉からあまり隔たっていない時期に掘削されたものと思われる。花粉分析の結果、埋土の下層と上層で樹林花粉から草本花粉への転換が認められ、SD701の堆積中にこの地域の植生に大きな変化があった可能性が指摘されている(第IV章第1節)。

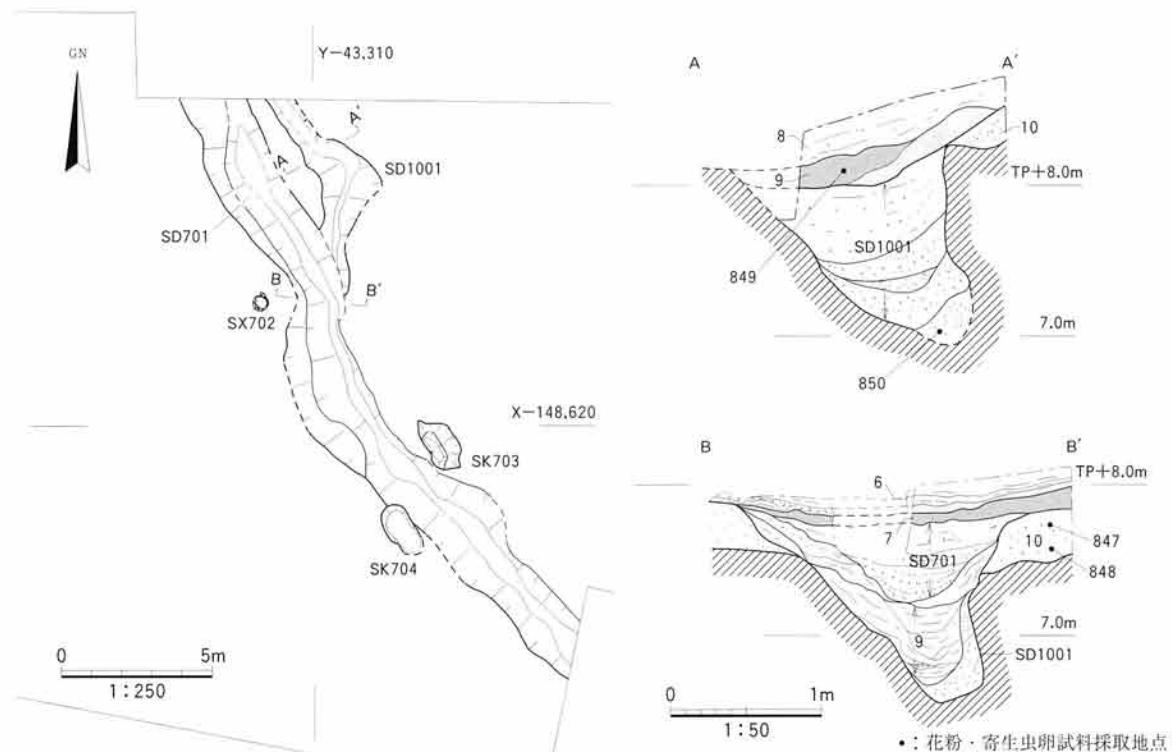


図12 古墳時代以前の遺構実測図

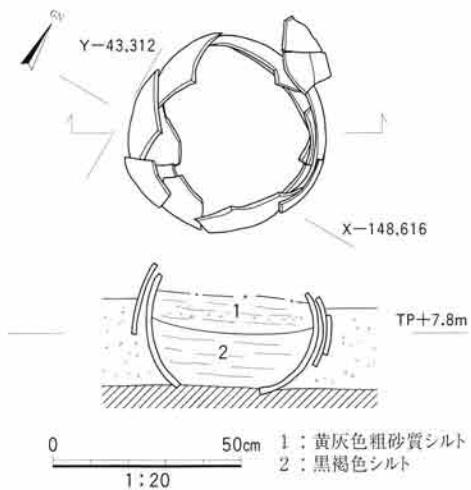


図13 SX702実測図

2) SX702(図13~15、図版3・20)

谷筋の中央から土師器の複合口縁壺3を須恵器の大甕4の破片で覆った遺構が見つかった。3・4とも底部を穿孔していること、内部に水成層が堆積していること、谷筋中央に位置していることから、SX702は土器棺のようにもみえるが、水溜め施設と判断した。2つの土器のほかにも土師器壺2の破片が一部、固定させるために詰め込まれていた。SX702の掘形は確認できなかった。ぬかるんだ地盤に土器が納まる程度の穴を掘ったためであろう。3の口縁部の大半はSX702を切るSD602で出土した。一方、4の口頸部はSX702から4m離れた第7層上面から見つかった。土器の大きさを考慮するとSX702の本来の形態は、複合口縁壺の口頸部まであり、頸部までの大半を須恵器大甕で、一部を土師器壺の破片で覆う構造であったと考えられる。

(岡村)

土師器壺2は口径が19.6cm、復元高が約40cmである。体部の厚さが1.5cm前後と厚いのが特徴である。体部はほぼ球形で、口縁部は真直ぐに外傾して立上がり、端部内面を若干肥厚させている。口縁部の内・外面はナデ調整を加える。体部外面は、縦方向のハケの後に横・斜め方向のハケを施す。内面は横方向の粗いハケで調整しているが、底部にはハケに切られるケズリがみられる。3は複合口縁をもつ壺である。底部を欠く。口径は20.5cmで、現存高は52.0cmである。口縁部は直立し、端部外面を玉縁状に肥厚させる。口頸部外面の調整はハケの後にナデを加える。体部外面の調整は縦方向のハケの後に、肩部に横方向のハケを施している。内面は横方向のハケの後に縦方向のケズリを施している。2・3は船橋O-I型式に属する。4は須恵器大甕である。底部を欠く。口径は40.9cmで、現存高68.9cmである。体部は倒卵形で、口縁部は外反して立上がる。口縁端部下面を突堤状に下方へつまみ出している。体部・口縁部の内・外面ともにいねいなナデを施しており、タタキ目などはすべて消されている。初期須恵器の範疇に含まれる。

(高橋)

3) そのほかの遺構と遺物(図12・16、写真5、図版21)

調査区南寄りでSD701に接してSK703・704を検出した。SK704はSD701を切り、上部を飛鳥時代のSD601に切られる。平面形はやや歪な長楕円形であり、長さ2.0m、幅1.0m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトであり、甕5が出土した。底部を手持ちのヘラケズリで調整し、初期須恵器に属する。SK703から遺物は出土していないが、埋土の特徴から同時代のものと考えられる。このほかにも、飛鳥時代のSD603からではあるが、古墳時代中期後半の須恵器である把手付椀6や高杯7などが出土している。

(岡村)

4) 第7層出土の遺物(図17、図版21)

8・9・21は須恵器である。8は杯蓋で、口径は11.8cmである。口縁端部には内傾した段をもち、外

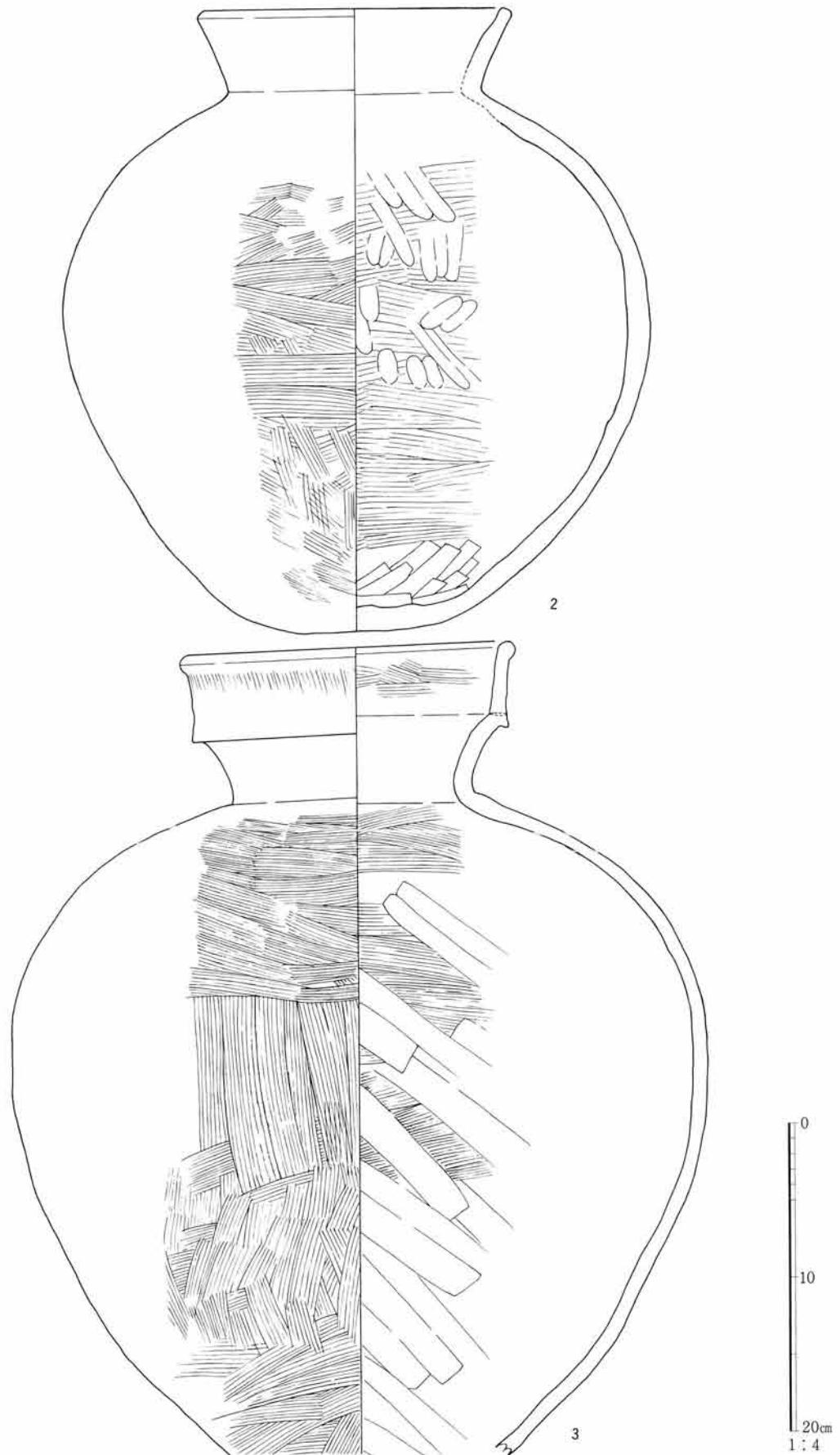


図14 SX702出土土器(1)

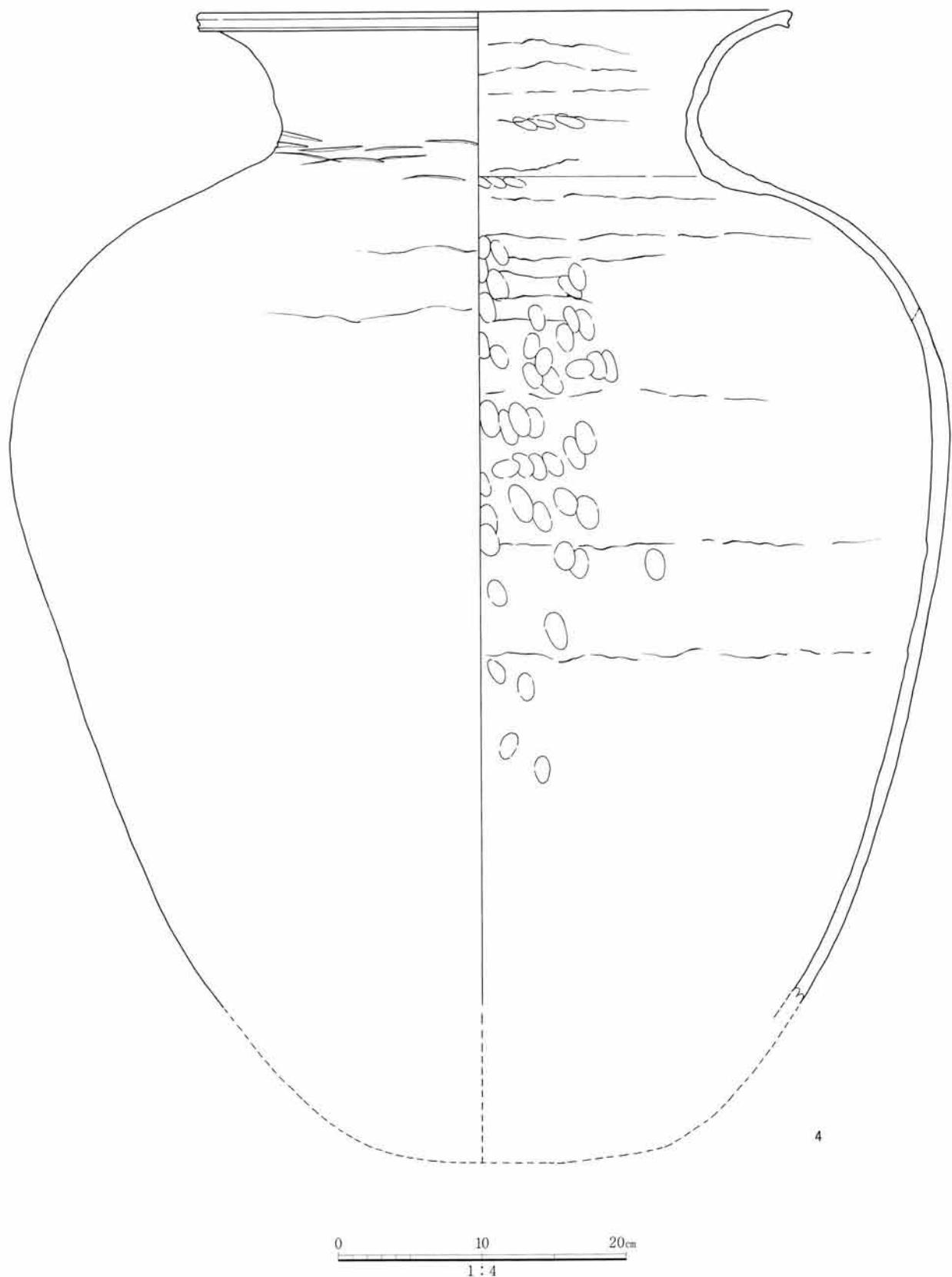


図15 SX702出土土器(2)

面の稜はややあまい。9は有蓋高杯の脚部である。21は穿孔部分を欠くが魂の体部と思われる。肩部にカキメ調整を施す。8・9はTK23ないしTK47型式に属し、21は初期須恵器の範疇におさまる。

10~20・22~26は土師器である。11~16は高杯の杯部、10・17・18は高杯の脚部である。11~13は口縁部が内湾し、端部を丸く仕上げる。14~16は口縁部が外反する。14・15は外面の口縁部と体部の境ににぶい稜をもつが、16にはない。17・18は内部をケズり、のちナデかハケによって比較的ていねいに調整し、杯部との接合部内面には棒状のものによる刺突痕を残す。19・20・24は甕である。19は口径11.8cm、高さ14.9cmである。体部は外面をハケ、内面をナデで調整している。口縁部は内面に横方向のハケを施したのち、内外面をヨコナデによって調整している。20は口径11.4cmで、体部内面にケズりを加えている。24は口径15.0cmで、体部外面をハケ、内面をケズりによって調整する。口縁部は内湾はしていないものの、端部内面をわずかに肥厚させており、布留式の特徴を残している。22は直口壺で、口径8.2cm、高さ12.6cmである。外面はナデで仕上げているが、わずかにハケ目が残る。23・25・26は複合口縁をもつ壺である。23は完形で、口径は17.6cm、高さは44.6cmである。口縁部は外上方に立上がり、端部内面を肥厚させている。体部は外面を縦方向のハケ、内面はナデによって調整している。25・26の口径はそれぞれ20.8cm、19.8cmである。以上の土師器は、14がやや古い特徴をもっているものの、ほかは船橋O-IIないしO-III型式に相当する。以上の遺物から、第7層の年代は5世紀後半とみられる。

5) 第6層出土の遺物(図18、図版21・22)

28・29・32・33は須恵器である。28・29は杯身で、28は口径が10.3cmと小さく、口縁端部に内傾する面をもつ。29は口径10.6cmで、口縁端部を丸く仕上げている。器高は5.7cmと高めで、底部外面の約3分の2にヘラケズリを施している。32は無蓋高杯で、脚部の三方に切込み状の細いスカシ孔をもつ。33も高杯脚部の破片で、スカシ孔を三方、上下2段に穿っている。やや小型であることから無蓋高杯の脚部であろう。28・29はTK23型式、33はTK43型式に属し、32は初期須恵器の範疇におさまるものとみられる。

27・30・31・35~40は土師器である。27は高杯の杯部で、内面に放射状の暗文を施す。30・31は高杯の脚部である。30は内面にケズリやナデを加えて調整するのに対して、31は成形時の絞り痕が明瞭に残る。30は船橋O-IIないしO-III型式に、31はO-IV型式に属する。35は高杯で、口径15.5cm、器高は11.6cmである。厚さは0.8cm前後で全体に厚めである。杯部は緩い屈曲をもって外上方に延び、



写真5 SK704検出状況

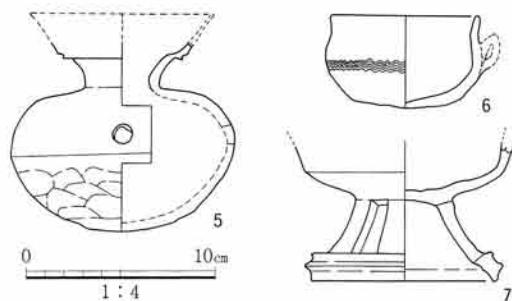


図16 SK704ほか出土土器
SK704(5)、SD603(6・7)

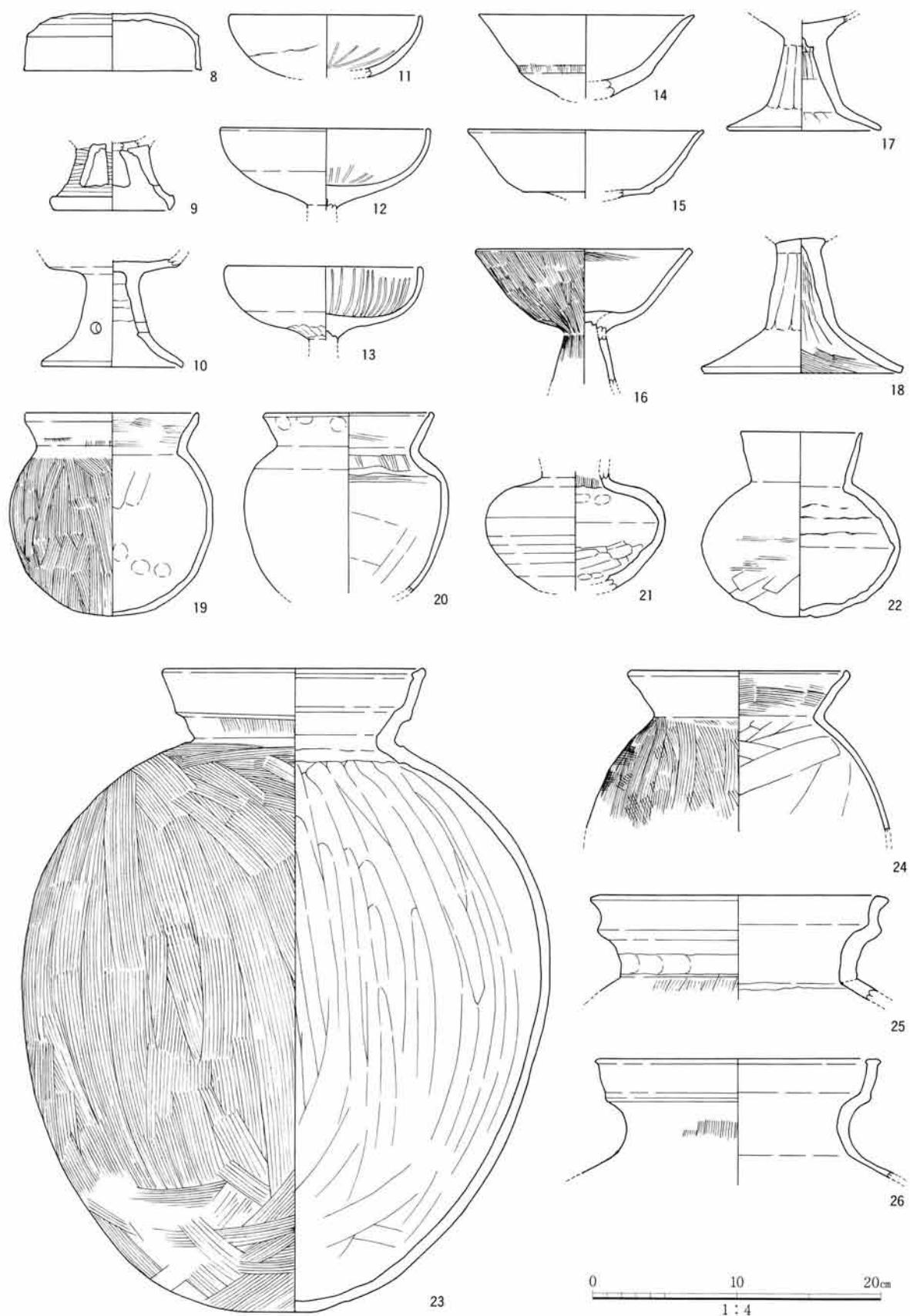


図17 第7層出土土器

屈曲部外面に低平な突帯を貼付けている。杯部内面は部分的にハケを施した後、ナデを加えて仕上げている。外面はナデ調整である。脚部外面はナデを施すが、内面はケズリで調整している。船橋O-I型式前後に相当するものとみられる。36は直口壺の体部である。外面にはハケ、内面にはケズリを施している。船橋O-IないしO-II型式に属する。37は小型の壺で、直立する口縁部をもち、口径は10.0cm、器高は10.3cmである。38・39は甕である。38は口縁端部を上方につまみ上げており、庄内式とみられる。39はやや内湾した口縁部をもち、体部外面にハケ、内面にケズリを施す。口縁端部の肥厚こそみられないものの、布留式甕の系譜を引くものである。40は甕で、外面にはハケ、内面にはケズリを施している。39・40は船橋O-II型式に属する。

34・41は韓式系土器で、いずれも軟質の焼成である。34は小型の平底鉢で、口径は6.8cm、器高は

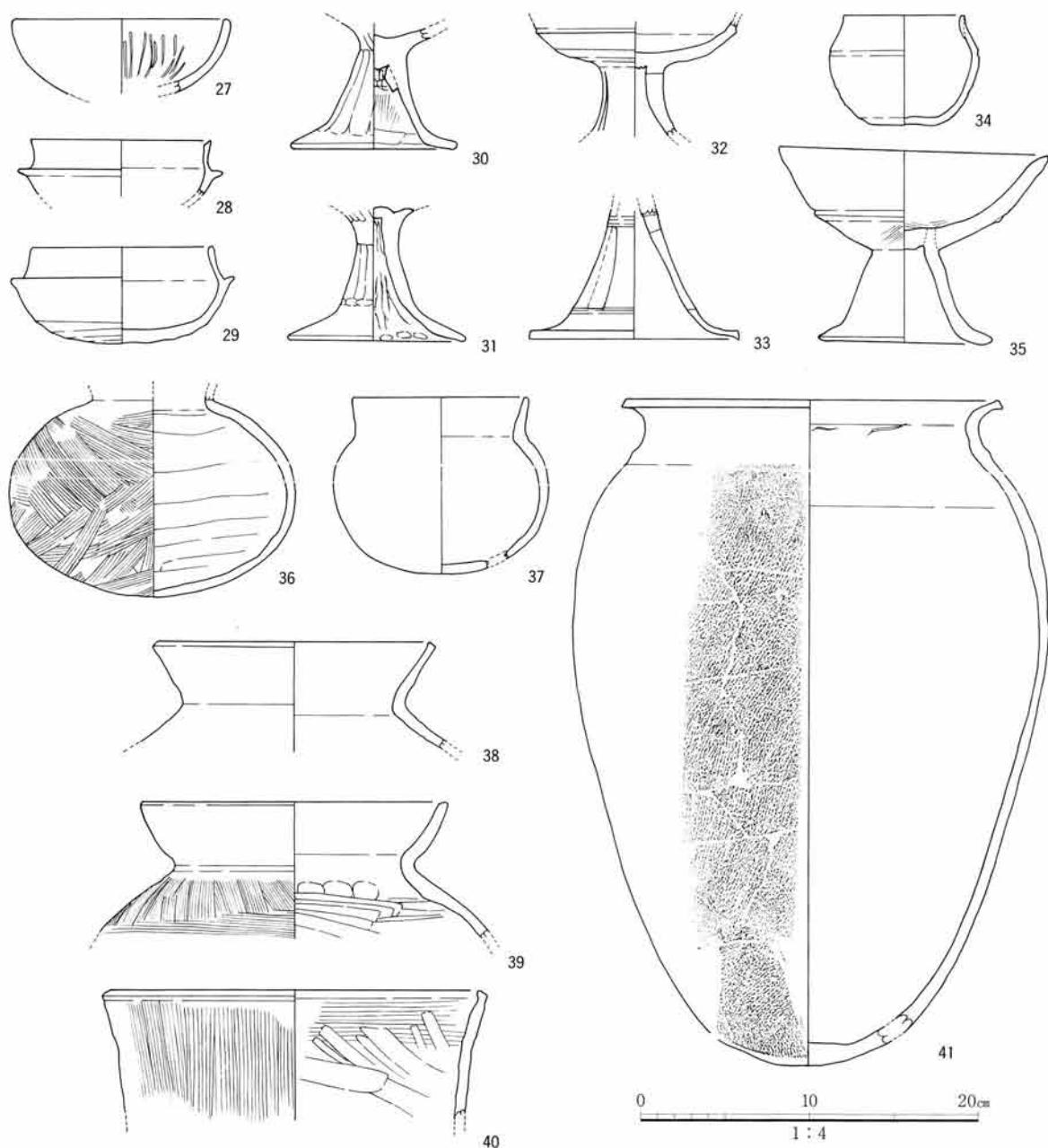


図18 第6層出土土器

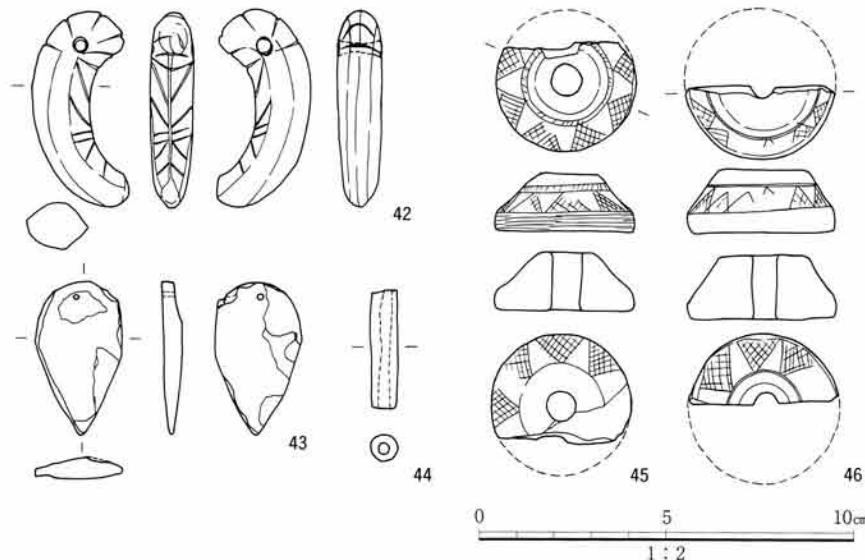


図19 古墳時代の石製品

6.45cmである。最大径は体部上方にあり、口縁に向って内傾し、端部は若干外反ぎみにおさめる。煤が付着しているため細部の調整の観察は困難であるが、内・外面ともにナデを施しているようである。41は長臘甕で、口径は22.0cmで、器

高は39.6cmである。口縁部を外方に折り曲げ、端部は面をもって終わっている。体部外面には縄蓆文のタタキを加え、内面にはていねいなナデを施している。口縁部の内・外面は横ナデで調整している。34・41は5世紀後半に属する。

以上の遺物には、5世紀代のものが多いものの、31や33のように6世紀に下るものも含まれる。このことは、第6層の堆積が最終的には6世紀に下ることを示している。

(高橋)

6) 古墳時代の石製品(図19、図版22)

古墳時代の石製品42～46はすべて後世の包含層である第5層から出土した。42は滑石製の丁字頭勾玉である。長さ5.16cm、重さ16.8gである。43は剣形石製品である。上部に孔を穿つ。長さ3.97cm、幅2.22cm、重さ6.2gである。44は滑石製の管玉である。長さ3.02cm、幅0.70cm、重さ2.6gである。45・46は滑石製の紡錘車である。45は重さ22.1g、46は20.8gであり、ともに側面と底面に鋸歯文を巡らす。以上は古墳時代中～後期のものと考えられる。

7) 小結

調査区からは5世紀中葉～6世紀の遺物が見つかっているが、遺構は5世紀中葉のものに限られるようである。この時期の活動域の中心は地形の安定した調査区北側にあったものと考えられる。

SD701埋土の花粉分析結果によれば、その下層から上層への堆積中に樹木花粉から草本花粉への転換がみられ、森林が急激に減少するという状況がうかがえるという(第IV章第1節)。付近のNW85-1次調査地においても、もっとも古い出土遺物は5世紀中葉に属し、上町台地中央部の消滅古墳にも、この頃のものが知られている。調査数が少ないため、詳細は明確でないが、調査地周辺では5世紀中葉は集落の形成、古墳の築造といった地域開発の時期に当り、その開始もあまり隔たっていない時期にあると予想される。韓式系土器が出土していることはこの地域の開発を考える上で興味深い。その具体的な内容と地域開発の開始時期の特定は今後の課題である。

(岡村)

第3節 飛鳥時代の遺構と遺物

飛鳥時代の遺構には溝・井戸・土壙・柱穴がある。その時期は飛鳥時代初頭から末葉にまで及んでいる。SE606がB区にある以外は、すべてA区の谷筋近くで検出された。なお、遺物のうち、墨書き器・刻書き器・瓦塼類・製塩土器・動物遺体については、別節で述べることにする。

1) SD601・602・603(図20~22、図版4・5・23・24・48・49・53)

i) 遺構

SD601~603は谷筋を利用して掘られた溝群であり、排水を目的としたものと考えられる。切合の関係からSD601→SD602→SD603の順に新しくなる。

SD601は幅5.0m前後、深さ0.7~0.8m、長さ26m以上あり、中央をSD602、南側をSD603に切られる。埋土は黒褐色砂質シルトに粗粒砂が挟在する水成層であり、飛鳥時代初頭の土器が多数投棄されていた。

SD602はSD601を踏襲するように掘られた。幅2.0~4.0m、深さ0.6m、長さ26m以上あり、南側半分をSD603に切られる。埋土は最上層を除き、黒褐色砂質シルトの水成層であり、飛鳥時代中頃の土器が出土した。最上層は地山層の偽礫を含む埋戻し土である。これは奈良時代中頃の遺構群が築かれた時の整地土である。

SD603は谷筋の中央から南方へ掘ら

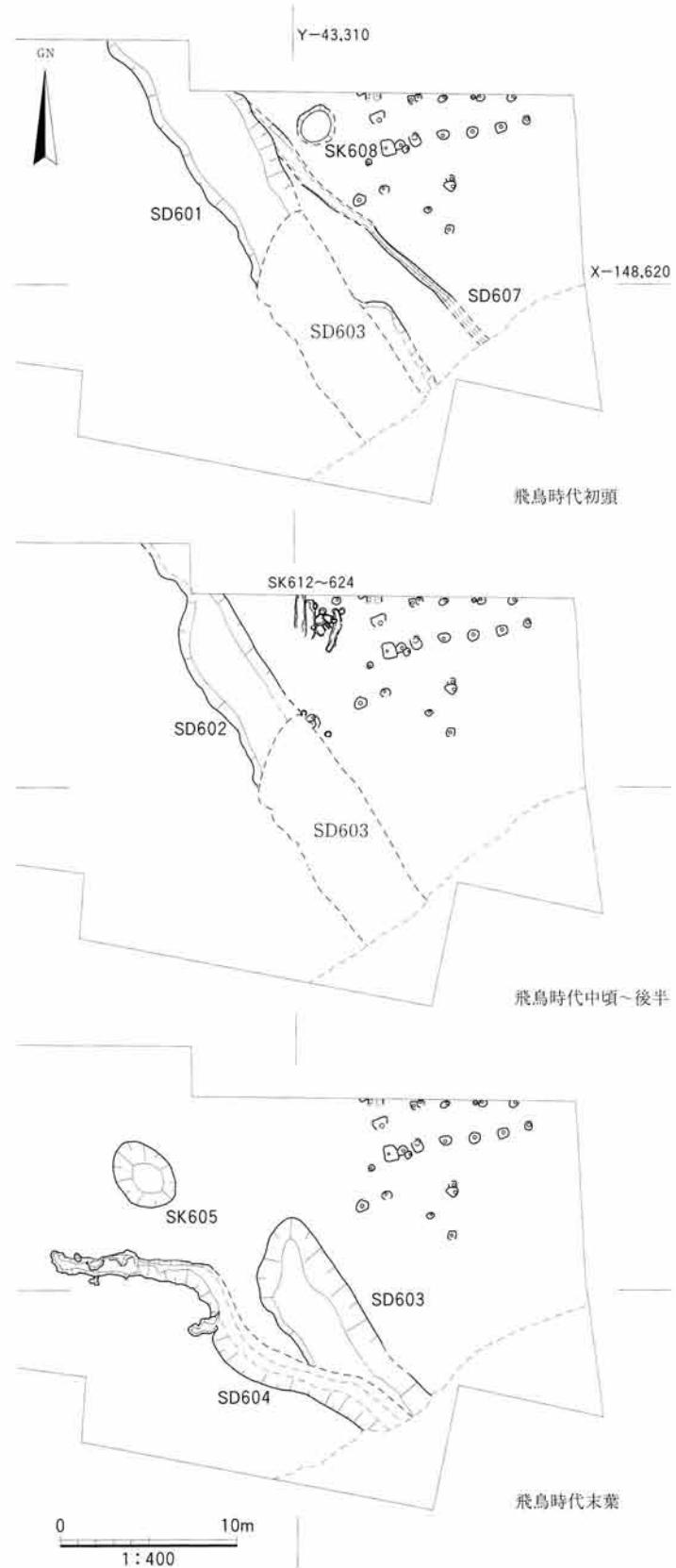


図20 飛鳥時代の遺構の変遷

れた溝で、幅4.4m、深さ0.8m、長さ13.2m以上あり、埋土は黒褐色系の細粒砂質シルトに粗粒砂が挟在する。飛鳥時代末葉頃の土器が出土した。西側から谷筋に流れ込むSD604との切合い関係については、奈良時代のSD501によって切られるために、明らかにできなかった。しかし、SD601・602・603と変遷し、谷筋が埋没していくことを考えると、SD604はSD603が埋没した後に、新たな排水路として掘削された可能性が高い。

SD601～603には多数の遺物が投棄されていた。谷筋に掘られた溝であるために、大雨によって地層が攪拌されたこともあったようであり、下位層に由来する古墳時代の遺物が多数混入していた。特に、この状況は西から流れるSD604や奈良時代のSD501と合流する調査区の南寄りで顕著であった。この付近では各溝の埋土とも同様な黒褐色系シルトと粗粒砂からなり、遺構ごとに正確に遺物を取上げることは困難であった。

ii) 遺物

a. SD601の遺物

土師器・須恵器がほとんどである。瓦は出土していない。土器の大半を須恵器が占め、特に杯Hの割合が高い。図示したもの以外には、土師器甕、須恵器提瓶・鉢・甕がある。古墳時代の混入遺物がかなりあるが、ここでは遺構の時期に係わる遺物を選択して記述する。

47～50は杯H蓋、51～53は杯Hである。48・49の天井部には、それぞれ1本線、2本線のヘラ記号がある。48は焼成不良で灰白色を呈し、内面全面に赤色顔料が付着する。50は天井部にていねいな回転ヘラケズリを施す。51～53の口縁部の作りは鈍い。54は提瓶である。口縁部を欠失する。55～57は高杯である。55は脚部の裾を広く接地させ、三方から円孔を穿つ。56も脚部に三方から粗雑な円孔を穿つ。杯体部外面に「×」のヘラ記号を刻む。57は2段長脚の高杯で三方からスカシ孔を入れる。脚部は焼け歪む。58は壺の蓋であり、体部に2条の沈線と列点文を巡らす。天井部はていねいに回転ナデ調整され、「×」のヘラ記号を刻む。59は壺であり、扁平な肩の張った体部から短く口縁を外反させる。胎土に小礫がめだつ。60は甕である。穿孔部の反対面の頸部に2本の縦方向のヘラ記号を刻む。胎土に小礫がめだつ。61は管状土錘である。長さ6.9cm、径3.0cm、重さは83.9gである。

SD601から出土した杯Hは、杯蓋の口径14.0cm前後、杯身の口径12.0cm前後であり、口縁部の形態・調整からTK209型式に属する。ほかの須恵器も同型式か、やや古いTK43型式に属するものと考えられる。したがって、SD601の最終的な埋没年代は7世紀初頭以降となろう。

b. SD602の遺物

大半が土師器・須恵器で占められるが、注目される遺物として四天王寺式素弁蓮華文軒丸瓦の破片1点がある。SD602は調査地で瓦を出土した最古の遺構である。62～68は土師器、69～76は須恵器である。62～65は土師器杯Cである。底部と体部の境が明瞭でなく、内湾しながら立上がり、口縁端部をやや外反させる。内面に放射状暗文を入れ、口縁部外面をミガキで調整する。62の暗文は粗い。63は外面に黒斑がある。64の口縁部外面のミガキはていねいである。65は外面が磨耗し、体部の調整は不明である。66は鉢Aである。内面に螺旋状+2段放射状+連弧暗文を施す。外面は体部をケズリ、その後にミガキで調整する。口縁部外面は特にていねいなミガキで調整している。67・68は土師

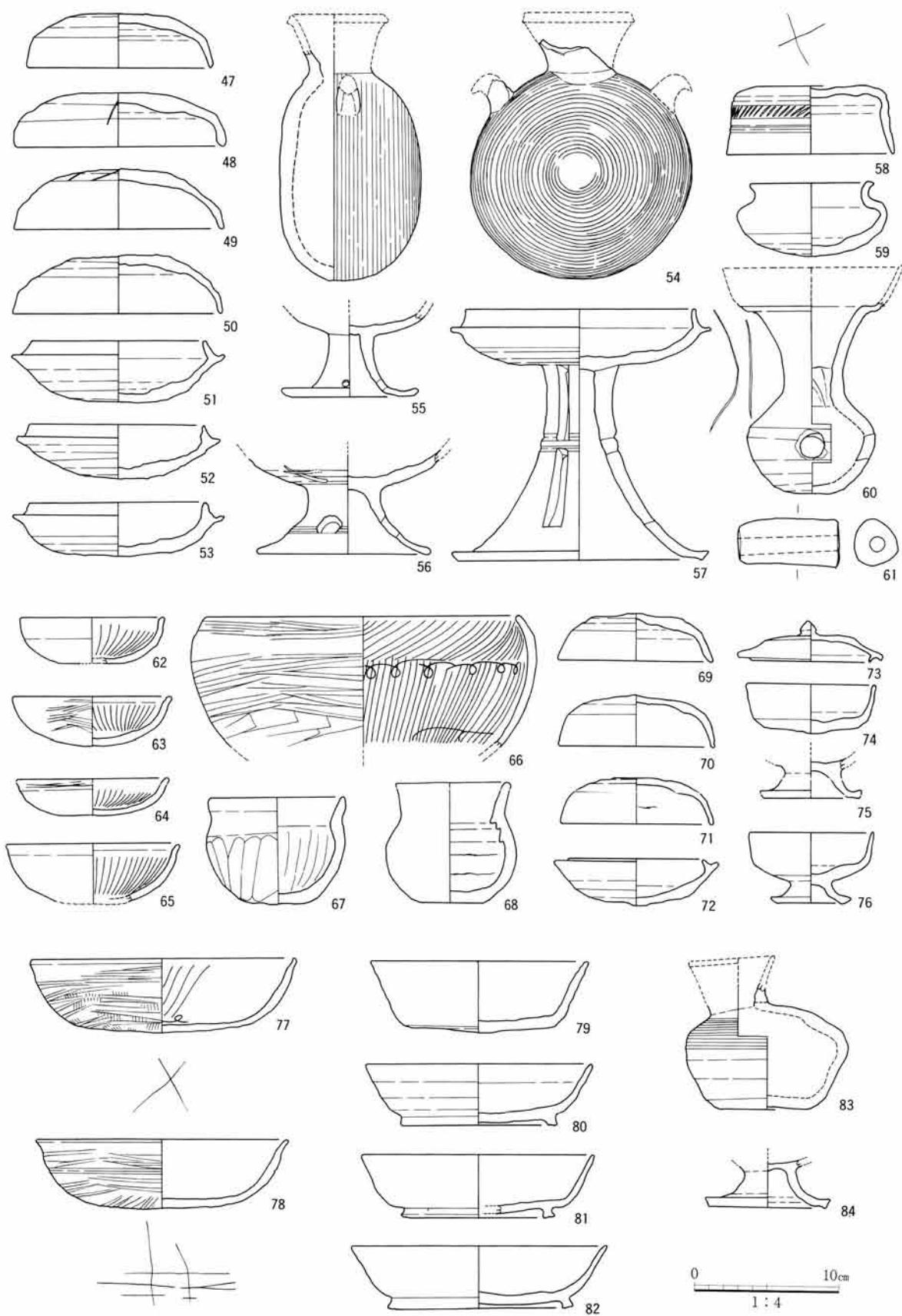


図21 SD601・602・603出土遺物
SD601(47~61)、SD602(62~76)、SD603(77~84)

器の小型の壺である。平底であり、内湾する体部と短く外反する口縁部からなる。67は内外面ともケズリを施し、口縁部をナデで調整する。68は器壁が厚く、内面はナデで調整するが、接合痕をそのまま残す。69～71は杯H蓋であり、天井部はヘラ切りのままで調整しない。69は焼成が甘く、瓦質に近い。70は完形品であり、火を受けている。胎土に小礫の混入がめだつ。71は内面に粘土紐の接合痕がある。72は杯Hである。底部はヘラ切りのままで調整しない。口径9.1cmであり、口縁端部内外面に煤が付着する。灯火器として利用された可能性がある。73は杯G蓋である。74は杯Gである。底部はヘラ切りのみで、調整しない。75・76は短脚の高杯である。76は焼成が甘く、灰白色を呈する。

以上の遺物は飛鳥Ⅱのものが多く、SD602の年代を7世紀中頃に求めることができる。

c. SD603の遺物

土器・瓦塼類のほかに、笏状木製品701・曲物702・長方形槽703などの木製品が出土した。また、富本銭553がこの溝を検出作業中に出土した。第5層を除去しつつ、溝の輪郭を検出している段階であり、第5層から出土した可能性も否定できないが、ここでは一応SD603の出土遺物として報告しておく。

77・78は土師器、79～84は須恵器である。77は土師器杯Aである。外面の底部から体部はハケの後、ミガキ、口縁部はナデの後、ていねいにミガキ調整する。内面は螺旋状+放射状暗文が一部観察できる。内面に煤が付き、灯火器に利用された可能性もある。外面底部に「×」のヘラ記号を刻む。78は口縁端を外反させる杯であり、体部に1条の沈線を巡らせる。外面はミガキ、内面はナデで調整す

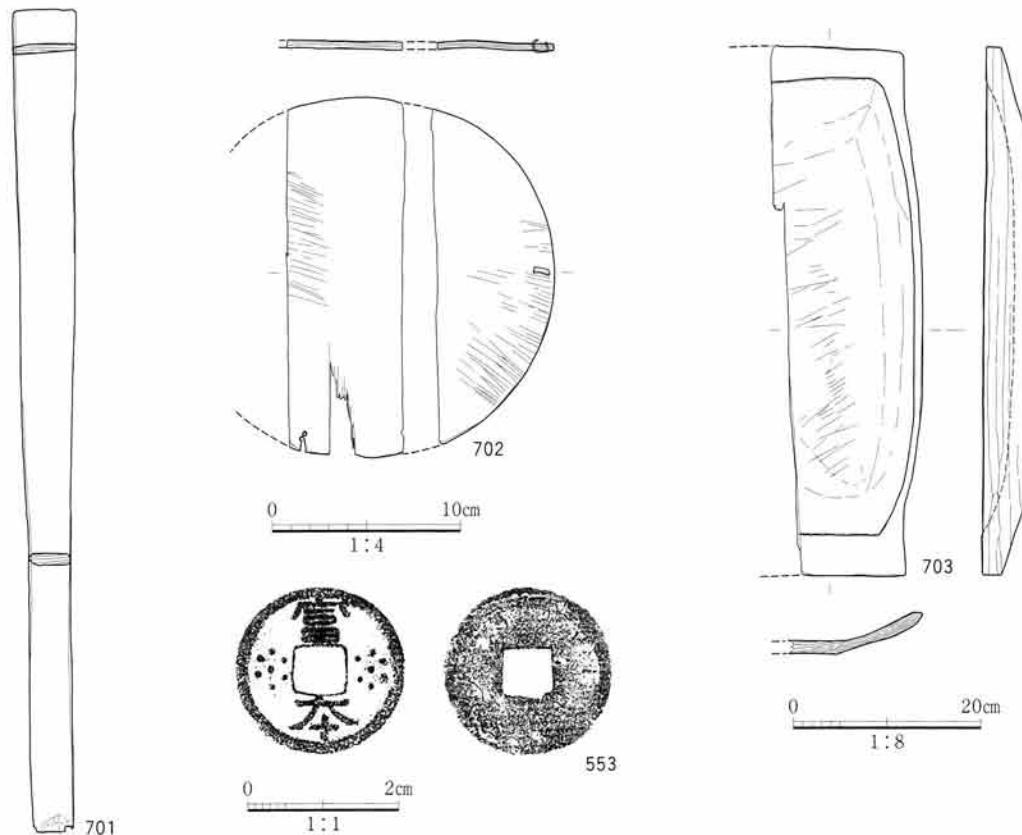


図22 SD603出土遺物

る。外面底部にヘラ記号を刻む。79は須恵器杯Aである。灰白色を呈する。80～82は須恵器杯Bである。口縁を斜め上方に立上げ、高台端部は内傾・外傾両方ある。83は平瓶である。底部未調整である。84は短い脚部をもった高杯である。

土師器杯A77が飛鳥Vのものであり、ほかの遺物もそれよりは古いか、同時期のものであることから、SD603の年代を7世紀末葉頃～8世紀初頭とすることができる。

木製品701は一端がやや幅広となる細長い板であり、笏と考えた。長さ43.7cm、上端幅3.3cm、下端幅2.1cm、厚さは中央がやや厚く、約0.6cm、両端は約0.5cmである。幅広の一面の両側縁を薄く削り、中央をやや肉厚に仕上げている。702は曲物の蓋である。側板を欠くが、結合型式は樺皮結合曲物Bである。復元径19.0cm、厚さ0.4cmである。703は長方形槽である。一側辺を欠く。底面は平坦であり、下面の四稜を面取りして作り出し、両端の木口の下部は内方に向けて斜めに削る。全体にていねいなつくりで、流線的な船底形に仕上げている。長辺56.4cm、残存幅14.0cm、深さ2.3cmである。以上の木製品はSD603から出土し、樹種はすべてヒノキである。

553は銭面の上下に「富」と「本」の字、左右に七曜文を配するもので、富本銭と呼ばれている。外縁径2.28cm、同厚さ0.81mm、重さ2.05gである。これまで平城京左京一条三坊[奈良国立文化財研究所1974]・右京八条一坊十三・十四坪[奈良国立文化財研究所1990]・藤原京右京一条二坊[橋本義則1992]・「大藤原京」域内にある桜井市大福遺跡[山川均1996]という都城遺跡から計4例が知られるのみであった。製造時期は右京一条二坊の出土例から藤原京期にさかのぼると考えられていたが、最近、奈良県明日香村飛鳥池遺跡から、バリ銭を含む33枚が発見されるに及んで、天武朝段階のものであることが確実となった[松村恵司1999]。富本銭はこれまで呪術的性格の強い銭貨(厭勝銭)と考えられてきたが、和同開珎に先立つ天武朝の通用銭である可能性を指摘する説も出されている[松村恵司1998]。553は先の4例の範のどれとも異なる。「富」でなく「富」の字を用いること、文字面・裏面ともに凹凸が小さいことが特徴である。また、飛鳥池出土例に比べると、重量も半分以下であり、薄手に見えるが、これは遺存状態によるのかもしれない(註1)。

2) SD604(図20・23・32・33、図版6・24)

A区中央を西方から谷筋に取付く溝である。溝の大半がSD501・502に切られる(図32・33)。幅0.8m、深さ0.3～0.7mである。埋土は黒褐色細粒砂質シルトと粗粒砂の水成層である。先述したように、SD603の埋没に際して、新たな排水路として設けられた可能性が高い。

遺物は大半が土器であるが、釘や銅板など金属製品が数点ある。85～92が土師器、95～99が須恵器である。85・86は土師器杯Aである。85は内面に螺旋状+2段放射状暗文を施し、外面を底部から口縁部までミガキで調整する。放射状暗文は右下がりである。飛鳥IV～Vのものである。86は内面には放射状+連弧暗文を施し、外面下半部をケズリ、口縁部をヨコナデで調整する。内面全面に漆が薄く付着する。87は杯Cである。内面に放射状暗文を施す。外面は摩耗のため調整不明である。88・89は杯である。ともに内面に螺旋状+放射状暗文を施すが、88は口縁部外面をヨコナデし、下半部をミガキ調整するのに対し、89は全体にミガキ調整する。90は杯Bである。口縁部が内湾し、端部が肥

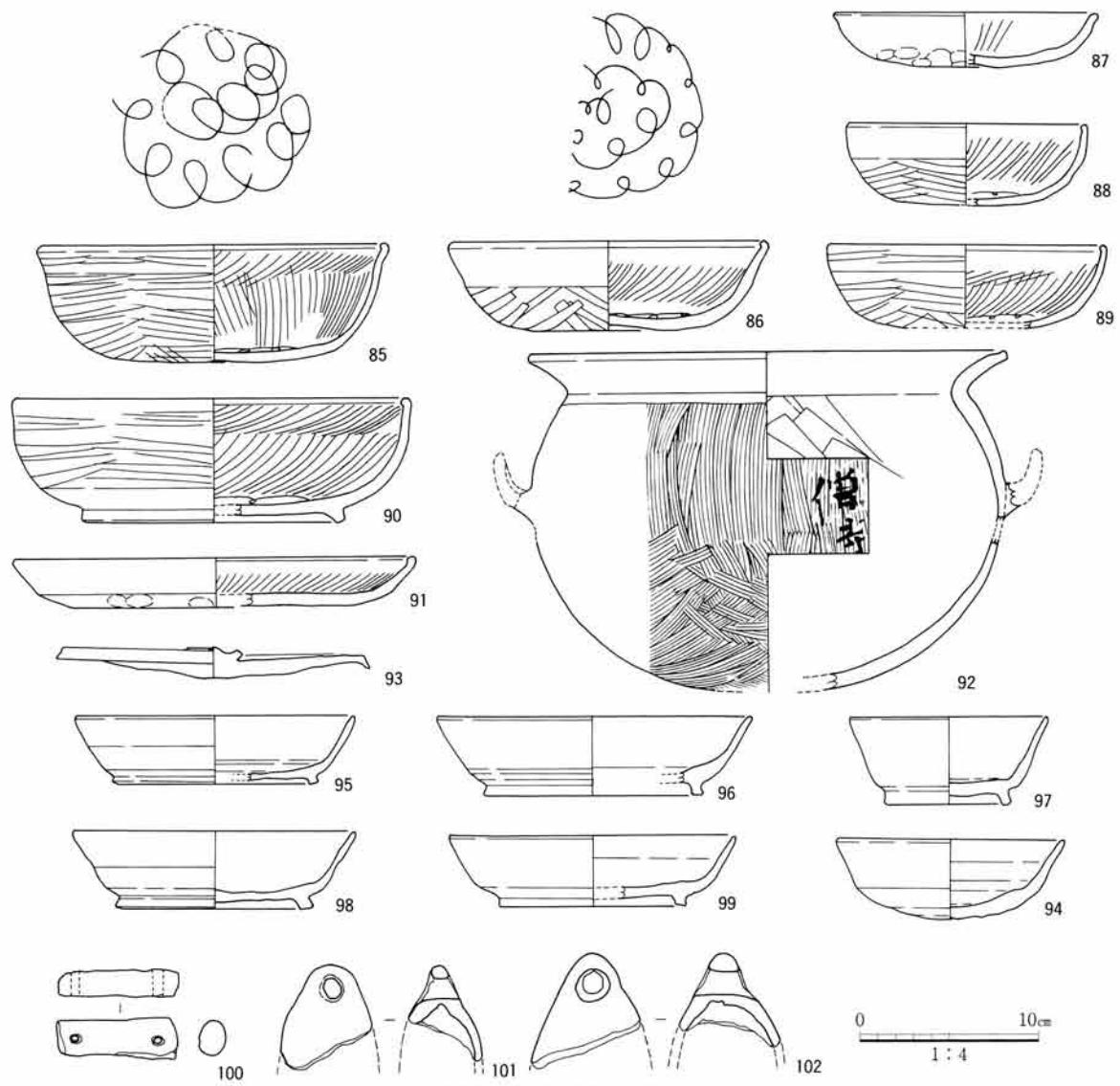


図23 SD604出土遺物

厚する。内面にやや粗雑な螺旋状+2段放射状暗文を巡らす。外面は疎らにミガキで調整する。内外面に漆を塗る。91は皿Aである。内面は螺旋状+放射状暗文を施す。92は甕Bである。体部はやや扁平であり、外面を全面ハケ、内面下半をナデ、上半をケズリで調整する。把手を欠失する。体部外面中ほどに「僧寺」の墨書が読み取れる。93は須恵器杯B蓋である。口縁部は湾曲せず、端部は単純に垂下する。94は杯Aである。底部が丸い。口縁端部に煤が付着し、灯火器として利用されたものと考えられる。95~99は杯Bである。98の底部はヘラ切りのみで調整しない。96の底部内面には墨痕がある。100は土師質土錘である。棒状で、両端に2孔が穿たれる。長さ6.5cm、幅2.0cm、重さ27.5gである。101・102は蛸壺である。破断面は磨滅して丸くなっているが、土錘として再利用された可能性も考えられる。

以上、土師器食器類はおおむね飛鳥Vに相当し、SD604の年代は7世紀末葉~8世紀初頭に求めることができる。

3) SK605(図24・25、図版
4・25)

A区中央に位置し、SE505に切られる。平面形は長径3.8m、短径3.2mの楕円形を呈し、深さ1.2mある。水溜め状の土壙である。埋土は粘土質シルトと砂層の互層からなり、最下層の10層に地山層の偽礫を含んでいる。すべて水成堆積であった。埋土からは、イネ・コムギのほかに、ナス・ヒヨウタン類・トウガンなどの種実が見つかっている。

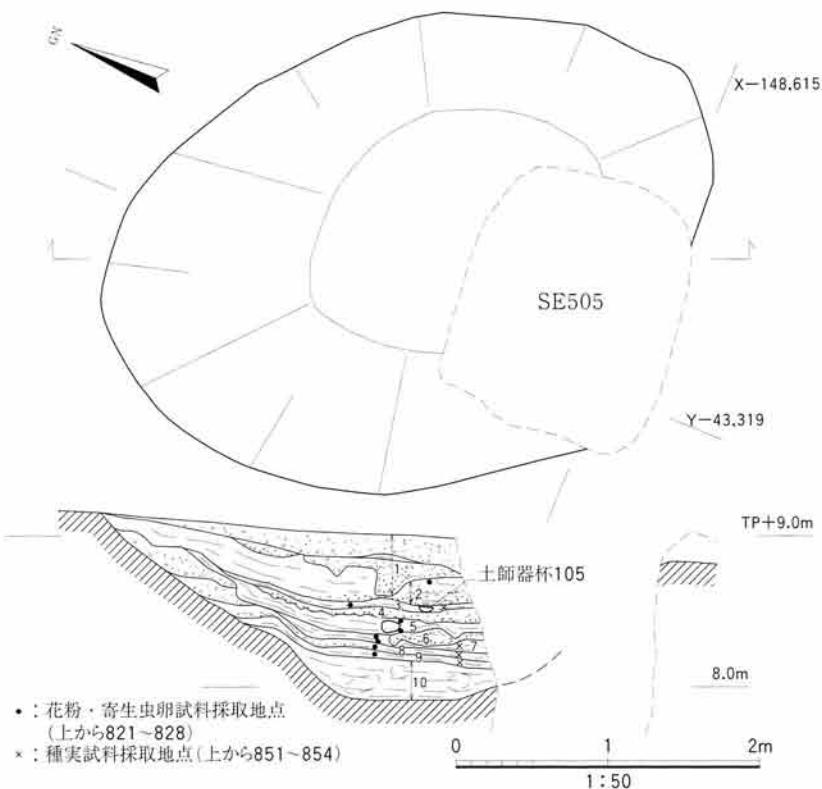


図24 SK605実測図

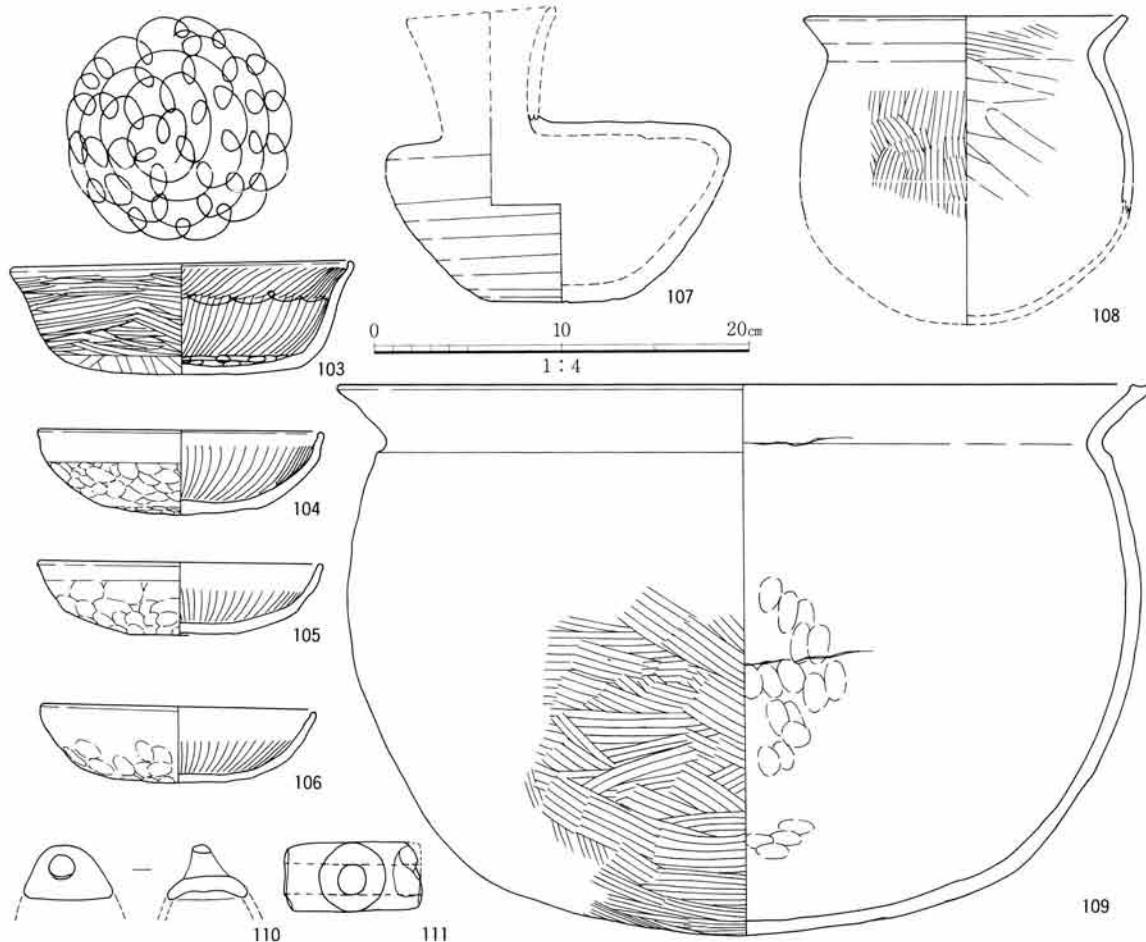


図25 SK605出土土器・土製品

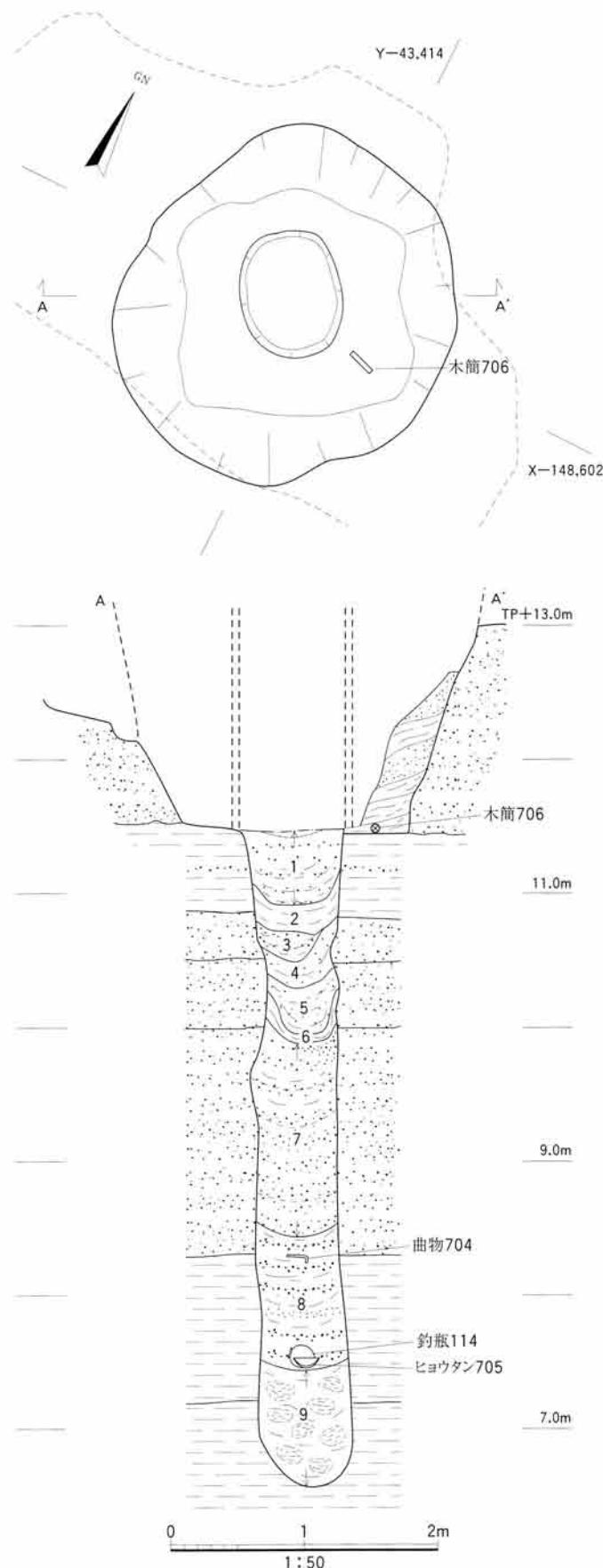


図26 SE606実測図

埋土からは図示した遺物のほか、須恵器高杯・鉢・短頸壺・甕、製塩土器、平瓦がコンテナ3箱分ほど出土している。103は土師器杯Aである。内面に螺旋状+2段放射状+連弧暗文をていねいに施す。外面底部をケズリ、体部全面をていねいなミガキで調整する。104~106は土師器杯Cである。ほぼ同形であり、内面には螺旋状+放射状暗文を施す。外面底部は指頭圧痕が顕著である。105の底部外面には「×」を3つ刻んだ焼成後のヘラ記号がある。径高指数は30である。器形・調整とも飛鳥Vの特徴を示す。107は須恵器平瓶である。肩が張り、頂部は平坦である。口頸部を欠失する。108・109は土師器甕である。108は外面全面をハケで、内面を強いナデで調整する。109は扁平な器であり、鍋とするべきかもしれない。外面は全面をハケで、内面はていねいなナデで調整する。110は須恵質の蛸壺である。身の大半を失っている。割れ面はきれいに磨滅しており、土錘に転用するために研磨されたものかもしれない。111は管状土錘である。長さ7.3cm、径3.5cm、重さ103.8gである。

土師器杯A103と杯C105・106は完形品である。SK605は土師器杯から飛鳥Vの時期となろう。

4) SE606(図26~29、図版17・25・46・48)

B区西寄りで検出された井戸である。掘形上部は攪乱によって大きく破

壊されているが、底部の形態から、平面形は一辺2.7m前後の隅丸方形であったと考えられる。深さは現状で6.5mある。抜取り痕跡があり、井戸側は取り除かれていた。裏込め埋土が北東隅に一部残っており、その最下層から木簡706が出土した。掘形は2段掘りとなっている。平面形は途中から長径0.9m、短径0.7mの楕円形となり、底までの深さは4.9mあった。砂礫層である湧水層はTP +8.3~10.8mにある。調査時も壁の崩壊が著しく、本来は井戸側が存在したものと思われるが、その痕跡は確認できなかった。埋土は最下層が地山層の偽礫を多量に含む砂質土であり、その上位には中・粗粒砂を多く含んだ水成層のシルトが自然堆積していた。このうち8層上部からは曲物704が、下部からは釣瓶に利用した須恵器壺114とヒヨウタンの容器705が見つかった。掘形と井戸側の埋土から出土した須恵器杯蓋は同一型式に属し、SE606は7世紀末葉~8世紀初頭に機能し、廃棄されたものと考えられる。

出土遺物には土器・木簡・曲物・ヒヨウタン容器がある。土器は全部でコンテナ1箱に満たない。図示した遺物のほかには、土師器甕・須恵器甕がある。112・113は須恵器杯B蓋である。ともにつまみを欠失している。扁平な器形に小さなかえりが付く。口径は13.8cmである。飛鳥Vのものだろう。114は須恵器の壺であり、口縁部が打ち欠かれている。頸部には編んだ蔓を巻付けており、釣瓶とし

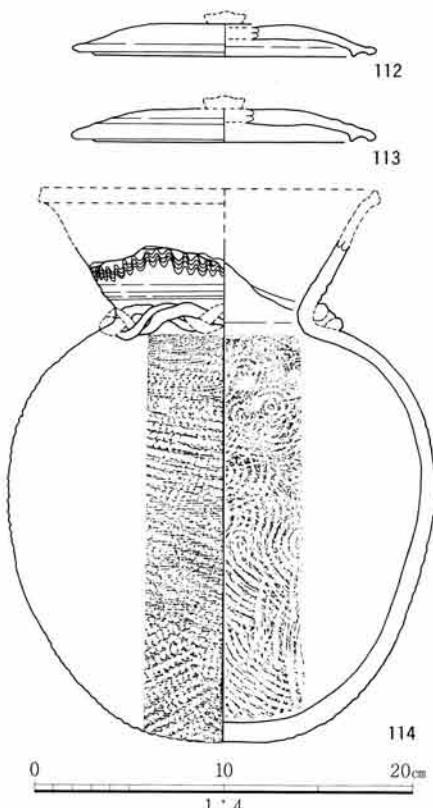


図27 SE606出土土器

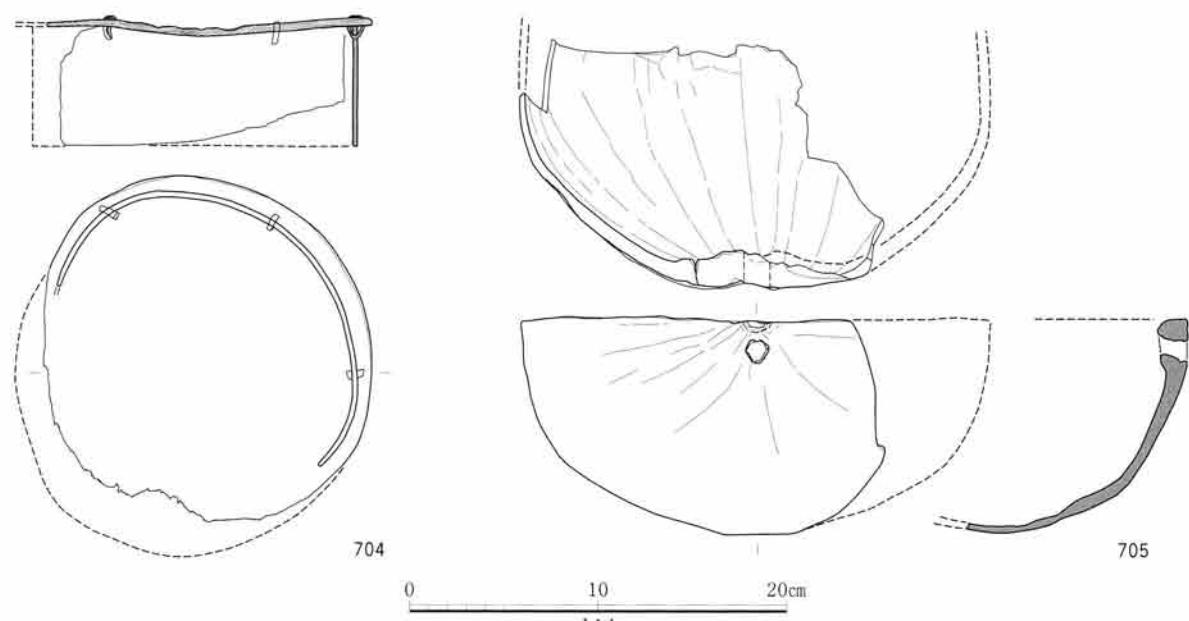


図28 SE606出土木製品

て用いられたものである。頸部に崩れた波状文を巡らす。古墳時代の伝統を受け継ぐ壺である。体部下半月に焼成の際に用いた円形の台の痕が3個所に認められる。



704は楕円形曲物の蓋である。樺皮結合曲物Bである。現存の長径18.4cm、短径17.2cm、厚さ0.5cm、側板の高さ6.8cmであり、蓋板に結合孔が3個所に残る。樺皮は3重に巡る。樹種は蓋・側ともヒノキである。705はヒョウタンの容器である。大型のヒョウタンを縦に2つに割り、軸近くに孔を穿って柄を差込んで用いたものである。復元径26.0cm、高さ11.5cmである。 (岡村)

706は短冊形の木簡である。

「上和尼父南部□□王久支」 181mm×34mm×2mm 011

木簡に比して小さめの文字を片面の上半部にのみ記す。「上和尼」は尼の名前と思われる所以、尼の父の名を記した木簡と考える。「南部」は摂津国百済郡に南部郷があり、また百済・高句麗の五部の制との関連も注目される。「南部」に続く部分はそのままでは読み下せず、渡来系の人名を音で表記した可能性がある。尼寺への一般男性の通行は僧尼令によって規制されていたから、この木簡は「百済尼寺」に出入りする人物が身分証明のため携行したものと考えられる。樹種はヒノキである。(古市)

5) 北東部柱穴群(図30・31、図版5)

A区北東部で30個の柱穴が第6層あるいは地山上面で検出された。谷の傾斜面に位置する。柱穴の形には円形・円形に近いもの・隅丸方形・不整形があり、大きさも一辺30~90cmと多様である。出土遺物が乏しく、時期を判定できないものが大半であるが、SP609からはTK209型式の須恵器杯H身115、SP636からは飛鳥時代後半と思われる須恵器鉢116が出土している。

調査区北東部は攪乱や上位の遺構によって削平されており、柱筋を明らかにできなかったものが多い。柱列の可能性のあるものを3つ提示する。SA648は5間分ある。北に13°振り、傾斜面に沿う。柱間寸法はSP629とSP632間が170cm、そのほかは150~155cmである。SP637以東の柱穴の存在は攪乱のため不明である。柱痕跡の径は20cm前後である。SA649は2間分検出し、柱間寸法はSP628とSP629間で160cmである。西に12°振る。SA648とSA649の柱穴の大きさが異なり、一つの建物を構成するのではなく、別の建物あるいは柵であるかもしれない。SA650は北壁近くで検出された東西2列であり、SP610・622・628・

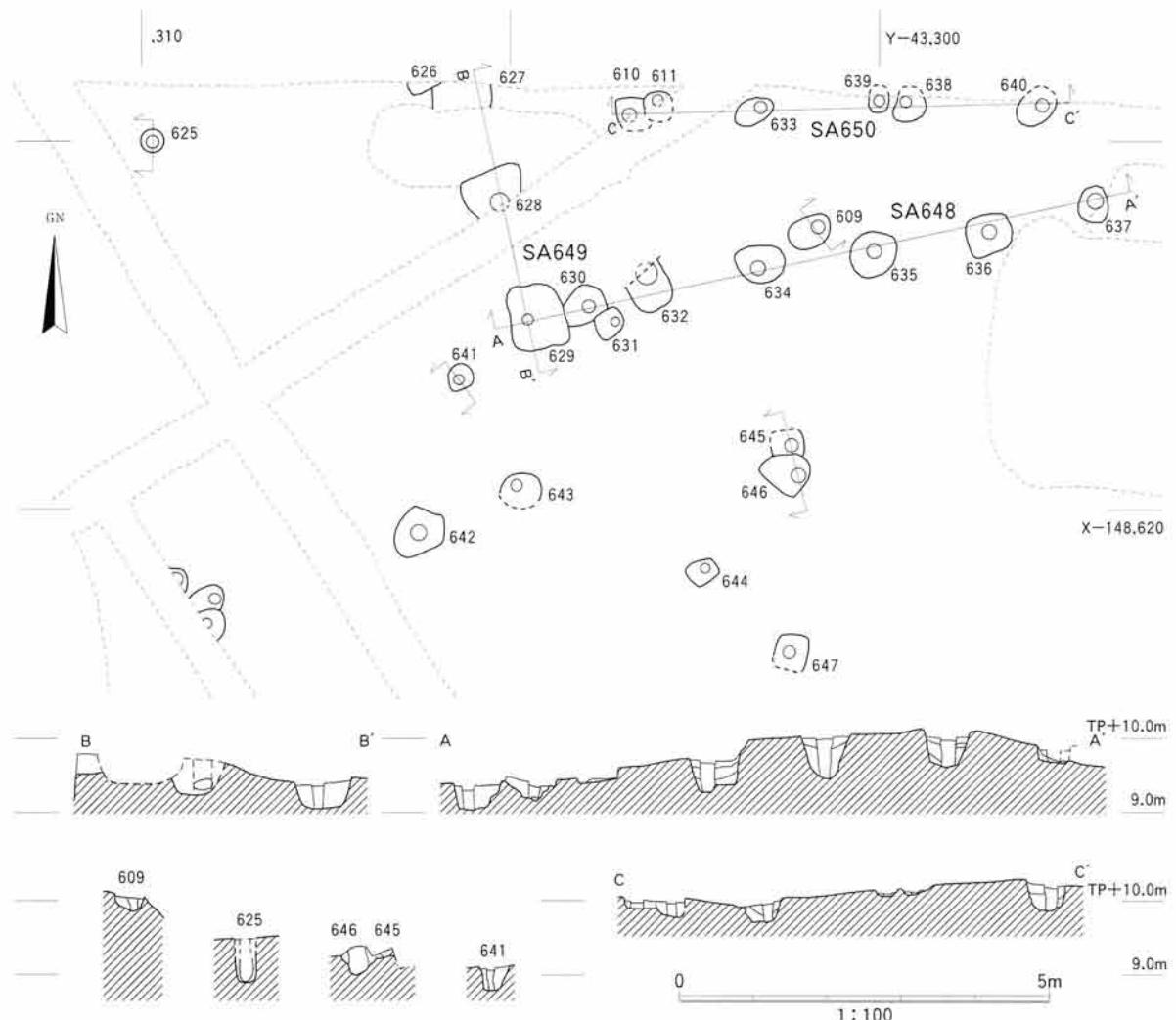


図30 A区北東部柱穴群

640の柱間寸法は、それぞれ180cm、195cm、180cmである。柱痕跡の大きさは径15~20cmである。SP610からはTK209型式の須恵器杯Hの破片が出土している。

正方位を向かないSA648は飛鳥時代後半頃のものと推定される。また、ほかの柱穴も若干の出土土器、埋土の特徴など考慮すれば、柱穴の大半は飛鳥時代に属するものと思われる。

6) そのほかの遺構(図20、写真6)

SK608は径2.0m、深さ1.8mの円形の水溜め状遺構である。TK209型式の須恵器杯片が出土した。柱穴群の西側にはSK612~624が密集して検出された。出土遺物が乏しく、遺構の正確な時期を決めがたいが、SK608の埋没後であること、周辺に飛鳥時代の遺構が密集して分布していることから、おそらく飛鳥時代の遺構群と思われる。また、SD607はSD601に先行する幅0.6m、深さ0.4mの細長い溝であり、TK209型式の須恵器が出土している。

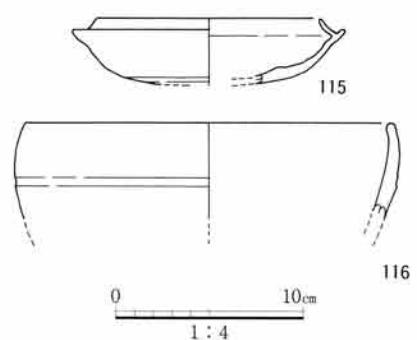


図31 柱穴出土土器
SP609(115)、SP636(116)



写真6 SK608検出状況(北から)

7) 小結

飛鳥時代の遺構も古墳時代と同様、谷筋近くに築かれた。A区北東部には柱穴・土壙が濃密に分布しており、北側に居住区の存在を示している。また、SD601～603には調査区北側で用いられた土器・瓦など多数の遺物が投棄されていた。この谷筋の溝群からは飛鳥時代を通じて遺物が出土しているが、土器の出土量の点では飛鳥Vがもっとも多く、次に飛鳥I、最後に飛鳥II～IVの順となる。瓦は飛鳥時代中頃のSD602から素弁蓮華文軒丸瓦が1点出土している点が注目される。後世の包含層からも飛鳥期の瓦が数点出土しており、先のSD602出土例から考えると、7世紀中頃には小規模な寺が建てられていた可能性がある(本章第7節)。

このほかの瓦は飛鳥時代末葉(白鳳後期)が大半を占める。また、時期が判明した遺構も飛鳥Vのものが多く、この時期が遺跡の画期に当るようである。その要因は多数の瓦から想定される寺院の建立にあった可能性が高い。

註)

(1)飛鳥池遺跡出土の富本銭の実見にあたっては、松村恵司氏(奈良国立文化財研究所)のお世話になった。

第4節 奈良時代の遺構と遺物

奈良時代の遺構には、溝・井戸・土壙がある。この中で特に注目されるのは、和同開珎の枝錢が出土したSD501と、「百濟尼寺」の存在を示す多数の墨書き土器が出土したSE507である。これらの遺構とその出土遺物を中心に報告する。

1) SD501・502(図32~48、表3~5、図版1・6~9・26~30・39~41・46~57)

i) 遺構

SD501はA区の北側から調査区を縦断し、谷に連なる排水用の溝である。約30m分を検出した。溝は初めの約10m間は北から南にまっすぐ伸び、次に屈曲して東に8mほど進み、その後、南東に進路を変えて谷筋にいたる。途中に飛鳥時代のSD604・603を切っており、飛鳥時代の遺物が多数混入していた。幅・深さとも下流に移るに従って規模を増し、幅は1.0~3.5m、深さは0.5~1.0mである。溝南部の大型木製品が発見された場所では、幅3.0m、深さ1.0mであった。南端は現代の池によって切られていた。溝底は北端ではTP+9.0m、南端ではTP+7.0mであり、30mの間に2mの高低差がある。埋土は黒褐色系の細粒砂あるいはシルトを基本とし、中粒砂・粗粒砂が挟在する。最下層は粗粒砂である。水成堆積の特徴を示し、埋戻し、あるいは溝の再掘削の行為は認められなかった。溝半ばから溝中に杭が7本打たれていた。SD501あるいはSD604の護岸施設などに伴うものと思われる。この付近では多数の木材が出土したが(図版8)、杭との関係は明確でなく、施設を復元することはできなかった。SD501は谷筋の溝群あるいは西から谷筋に流れ込むSD604が埋没したために、新たに築かれた溝と推定される。

SD501からは多数の遺物が出土した。その量は土器・瓦ともそれぞれコンテナ50箱分以上に及ぶ。金属製品では和同開珎の枝錢、和同開珎などの錢貨、帶金具・鉢・匙・耳環・切り屑などの銅製品、金鉗・斧・釘などの鉄製品、鉱滓・銅粒・方鉛鉱などの金属加工に係わる遺物が発見された。また、木製品には木簡・糸巻き・屋根材などがある。以上の遺物は溝の底、あるいは底近くから出土するものが多く、溝が掘られてからあまり時間の経たないうちに投棄されたものと考えられる(写真7)。その時期は溝底の土器が平城宮土器Ⅲの段階にあることから、おおよそ8世紀第2四半期を中心とした時期と推定される。埋没した時期は、在地系土器の特徴から奈良時代後半と考えられる。ただし、遺物の大半は溝底近くから出土しており、埋没するまで一様に投棄行為が継続していたのではなく、平城宮土器Ⅲの段階にまとまって廃棄されたものと考えられる。

SD502は、SD501と同様、谷筋に連なる溝である。SE507に近接し、その排水を目的として掘削されたものであろう。断面形はV字形を呈し、幅0.8m、深さ0.6mである(図32・33、図版9)。埋土は黒褐色シルトに粗粒砂が挟在する水成層である。SD502からはSD501と同様に、土器・瓦のほかに、和同開珎や銅製品が出土している。土器の時期は平城宮土器Ⅲの段階にあり、SD501との切合いも認められないことから、同時期に機能したものと考えられる。

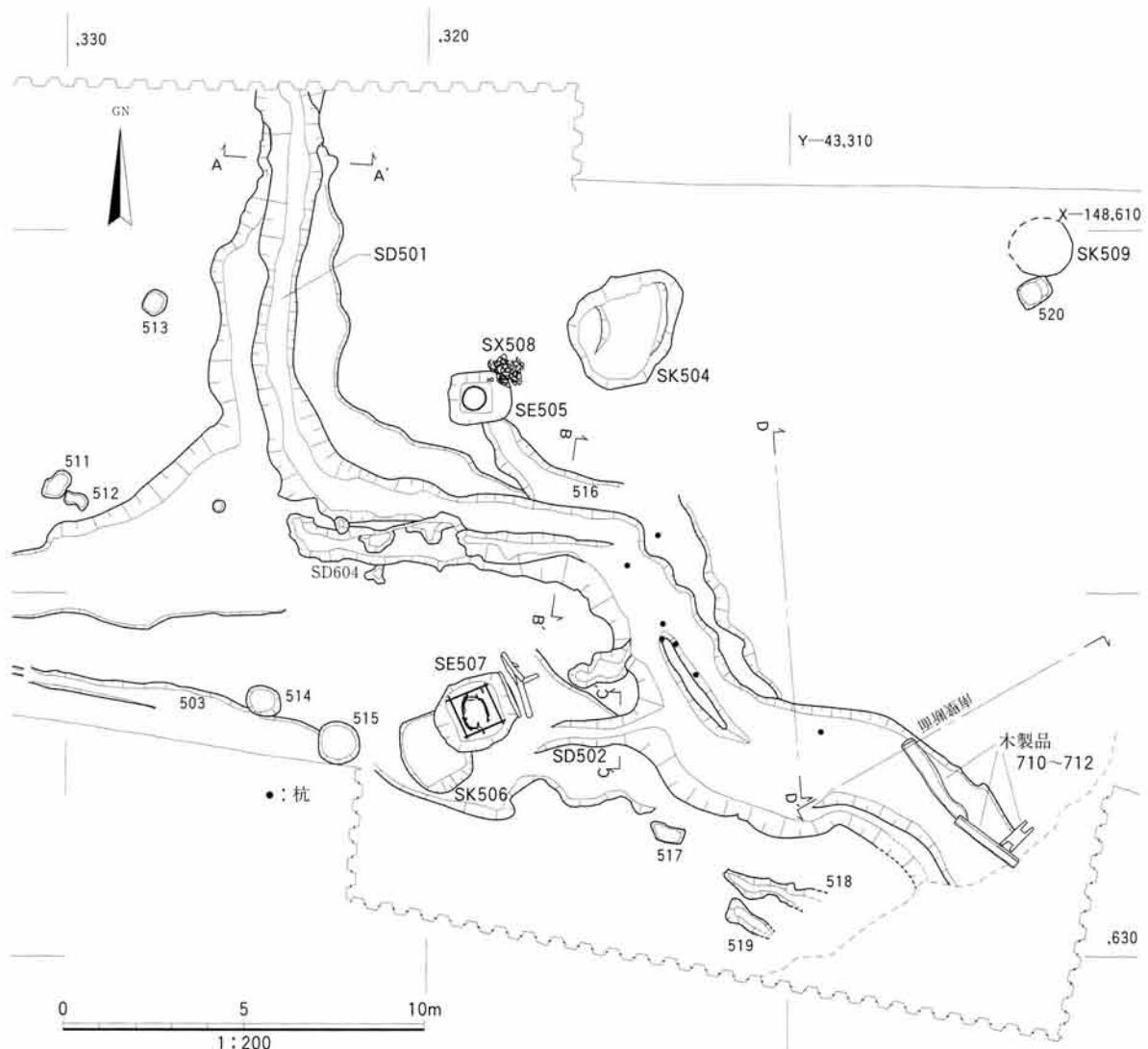


図32 A区奈良時代遺構平面図

ii) 遺物の分布(図34)

先述したようにSD501の埋土は粗粒砂を挟在した細粒砂あるいはシルトからなり、基本的に溝は徐々に自然堆積したようすがうかがえる。大雨によってまとまって土砂が流れることがあったにせよ、常時急激な流れにさらされていたとは考えがたい。したがって、土器や金属製品などの比重の高い遺物は調査区の北方から流されてきたものではなく、投棄された地点からあまり移動していないものと推定される。出土地点を記録して取上げた銭貨や銅製品などの金属製品、銅塊・滓などの金属加工関連遺物は238点あり、このうち、溝底からの高さが5cm以内で出土したものは174点(73.1%)、10cm以内では218点(91.6%)に達する。銭貨に限っても、39枚中、溝底から5cm以内のものは30枚(76.9%)、10cm以内のものは34枚(87.1%)と、ほぼ先の遺物と同様な傾向を示す。比重の高い金属製品は柔らかい堆積層の中で沈下する可能性もあるが、土器や木製品も溝の底から多数出土していることから、溝が掘削されてから時間のたたないうちに、まとめて投棄されたものと考えられる。

遺物の分布は図34に示すように、溝全域に及んでいるが、集中して出土する地点が8個所程度認められる。北からブロックA～Hと呼ぶことにし、金属製品を中心にその構成・特徴について述べる。

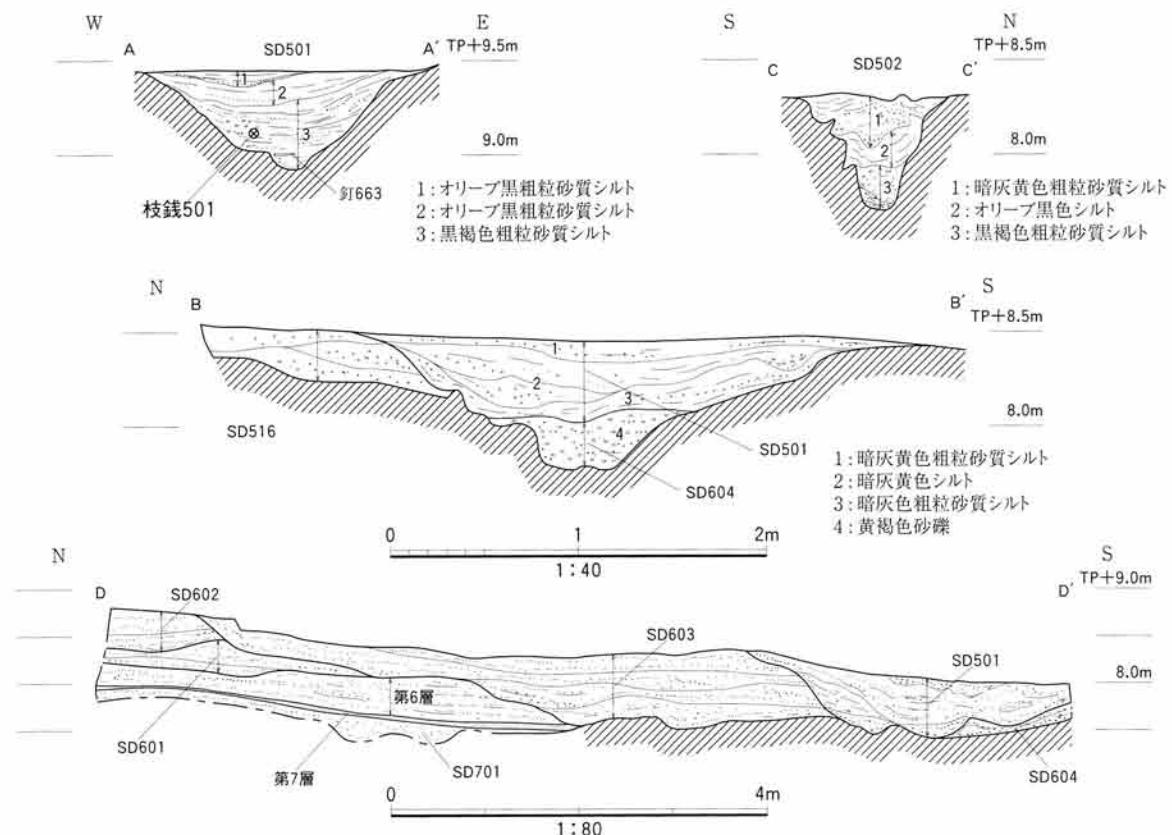


図33 飛鳥・奈良時代溝断面図

約30点の金属製品・金属加工関連遺物の集中をブロックAとした。この中でもっとも注目されるのは、和同開珎の枝銭501である。枝銭は溝底から約12cmの高さで銭文を下に向けて発見された(図33、図版7)。黒褐色砂質シルトと粗粒砂の互層からなる水成層(3層)の中ほどから出土した。検出時は新品の十円銅貨のような銅色であったが、すぐに酸化し始め、赤褐色を呈するようになった。枝銭はほかの遺物よりもやや高い位置から出土しているが、同一地層内にあり、埋没時期に大きな時間差を認めがたい。枝銭の南30cmでは和同開珎503が見つかり、古和同である点が注目される。和同開珎は合計4枚出土したが、いずれも欠損品である。

ブロックBは6点が散漫に分布している。うち1点が和同開珎である。

ブロックCからは28点の金属遺物が出土し、そのうち和同開珎は10枚ある。完形品は2枚のみで

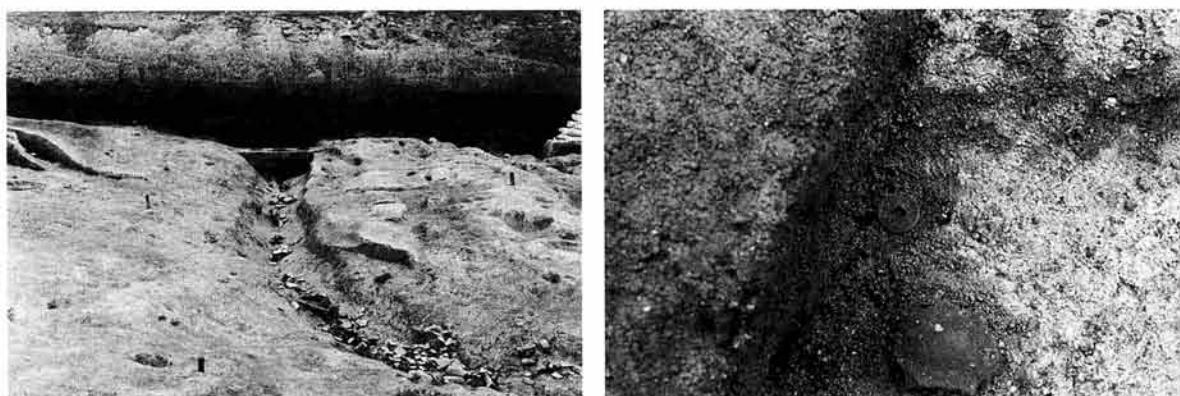


写真7 SD501遺物出土状況
(左:南から、右:南から)

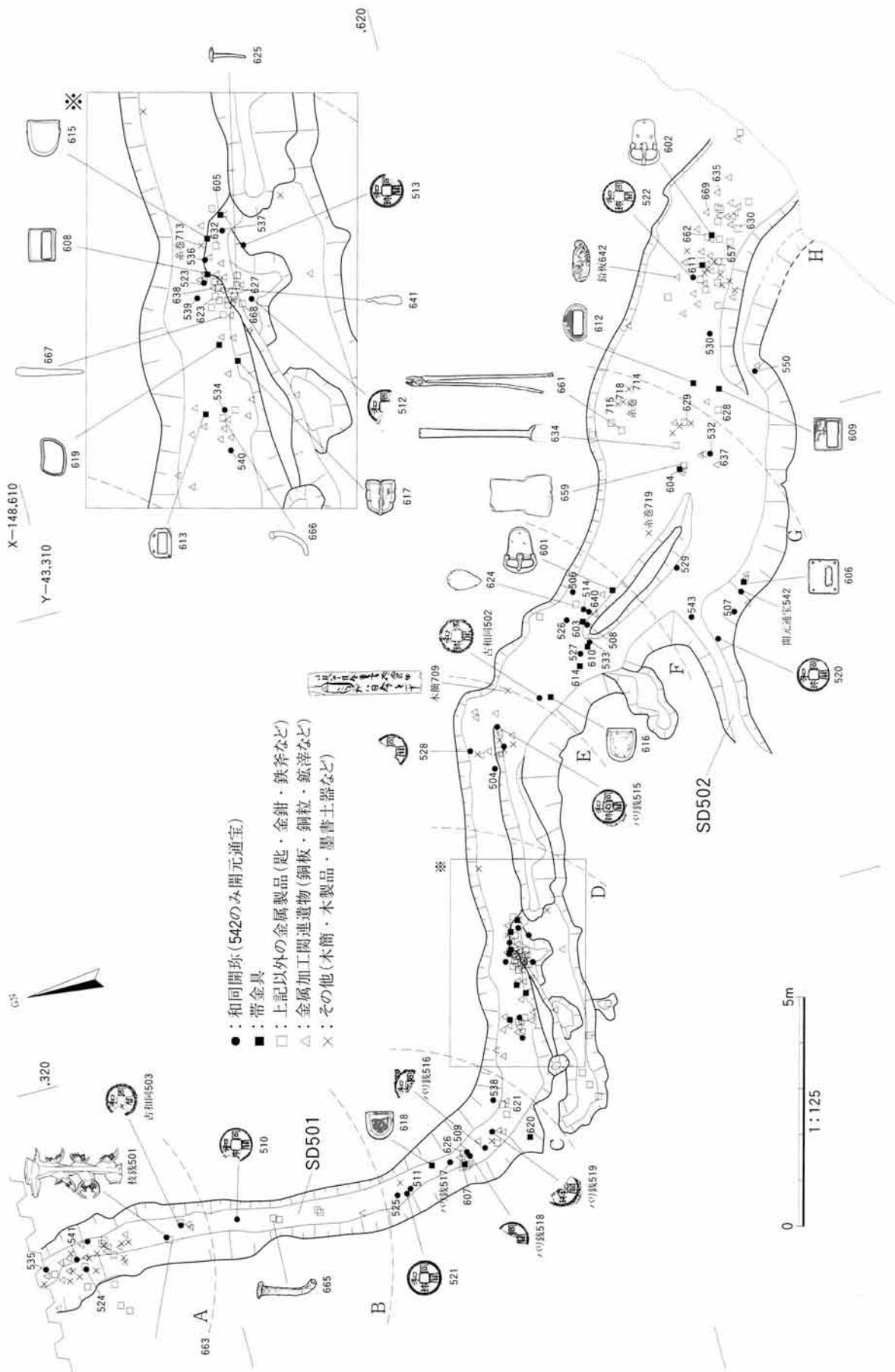


図34 SD501出土遺物の分布

あり、残りの8枚中3枚に明確な鋳バリが認められる。ここから以南では帶金具が出土する。

ブロックDでは約50点が密集して出土した。和同開珎は9枚、帶金具が6点出土している。帶金具は少なくとも4型式があり、1本の帯が投棄された状態ではないことを示している。

ブロックEでは金属製品・金属加工関連遺物18点と木簡709が出土した(図版7)。和同開珎は3枚あり、うち1枚がバリ銭である。ブロックFは和同開珎の比率が高く、金属遺物15点のうち、7点を占める。うち1点が古和同502である。帶金具は5点あり、このうち鉸具603は3.7m離れたブロックGの604と同一個体である。また、ここでは先述したように木製品が多数出土した(図版8)。

ブロックGからは開元通宝542・匙634・鉄斧659・金鉗661・糸巻き715~719など多様な遺物が出土している。

ブロックHはもっとも遺物数が多く、約60点出土した。総数に比べて和同開珎は少なく2点のみである。帶金具の4点のうち、鉸具602・巡方609・丸鞘612がセットとなる可能性がある。また、ここでは大型木製品3点710~712が重なるようにして出土した(図32、図版8)。運搬具710以外は流路に沿って発見された。杭で固定されておらず、上流から流された形跡も見当たらないことから、この場で投棄されたものと考えられる。木製品の下からも刀子・クサビ形鉄製品669・釘・鉱滓などが出土している。

以上の各ブロックの構成をみると、密集度の違いはあれ、和同開珎とそのほかの金属製品の出土地点はほぼ重なっている状況が確認できる。和同開珎が10枚集中するブロックCでも、完形品は2枚しかなく、残りの3枚がバリ銭、4枚が欠損品である。欠損は堆積中に生じたものではなく、投棄時の姿を示しているものと考えられる。また、帶金具は型式の異なるものが同じ地点で出土しており、帶としてではなく、金具そのものが投棄されたことはまちがいない。

したがって、SD501では薄銭のような祭祀的行為を想定しがたく、銭貨も銅製品と同様の扱いで破棄された可能性が高いと考えられる。

iii) 遺物

a. 土器(図35・36、図版26~30・39~41)

SD501・502からは多数の土器が出土している。図示したもの以外にも、土師器杯C・皿A・皿B・皿C・高杯A・高杯B・甌、竈、須恵器甕などがある。

117~131は土師器杯Aである。一般に胎土は精良であり、焼成良好で黄褐色・赤褐色を呈する。口縁部の形態から大きく2分類できる。1つは直立ぎみに立上がり、端部は小さく外反させ、端部内面に圈線を巡らせる在地系の土器117~121・123~128と、もう1つは斜め上方に立上がり、端部を内側に丸く肥厚させるもので、都城系の土器122・129~131である。調整は口縁部のヨコナデのみのものが大半であり、一部底部を削るもの118・122・129・131がある。法量からおおよそ3型式(杯AⅢ・杯AⅡ・杯AⅠ)に分類される。杯AⅢは口径15.0cm前後、高さ3.2cm前後であり、117~125が該当する。杯AⅡは口径18.7cm前後、高さ3.3cm前後であり、128・129が該当する。杯AⅠは口径20.5cm前後、高さ3.5cm前後であり、130・131が該当する。杯AⅡ・Ⅰの129~131は、内面に螺旋状+放射状暗文を施す。杯AⅢ・Ⅱ・Ⅰの径高指数はそれぞれ22.3、18.5、16.0である。なお、本章第7節

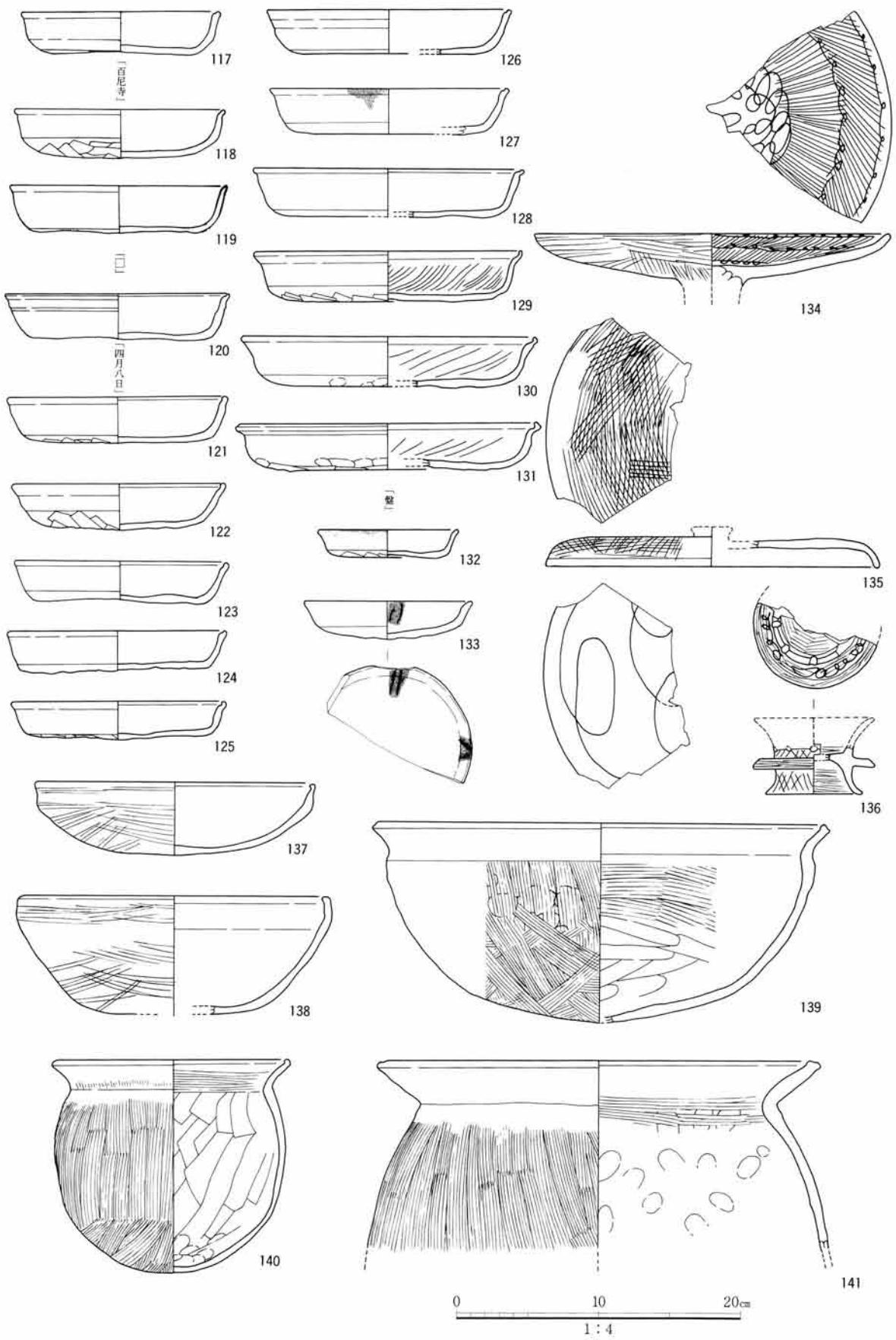


図35 SD501出土土器(1)

で述べるように、117・119・120・131には底部外面に墨書がある。また、123には底部外面に「×」のヘラ記号が刻まれる。

132・133は灯明皿の皿Cである。132は口縁内面3個所と底部に煤がつく。133には口縁部内面の2個所に灯芯痕が確認できる。134は脚部を面取りしない伝統的高杯である。杯部内面には螺旋状+2段放射状+連弧暗文をていねいに施し、外面はヘラケズリ後にミガキで調整する。135は壺の蓋である。内面に螺旋状暗文を施し、外面頂部にミガキを施す。136は托である。精良な胎土を用いて焼成し、灰白色を呈する。一見すると須恵器にみえる。ラッパ状に開く杯部・高台と受部からなる。杯部には八方向に復元できる小さなスカシ孔が穿たれる。調整は受部の下端面を除いて全面ミガキで仕上げられる。特に杯の内面はていねいなミガキが施される。受部の上端面には歪な螺旋状暗文が巡る。復元高5.4cm、径8.4cmである。137・138は鉢Bである。外面をケズリの後にミガキで調整する。138は口縁部・体部の外面を粗いミガキで仕上げる。内面には黒斑がみられる。139は鍋である。内面はハケの後、上端部を残してミガキで調整する。口縁部は強くヨコナデする。140・141は甕Aである。140は内面をミガキ、141はナデで調整する。

142～145は須恵器杯Aである。すべて底部は回転ヘラケズリ痕を残す。144は内面に灯芯痕がある。146～148は形態にバラエティがあるが、灯火器として用いられたものである。いずれも口縁部の内面四方向に灯芯痕が残る。口縁部をヨコナデするのみで、底部外面は調整しない。146は完形品であり、焼け歪む。147は内面全体に煤が付く。148は軟質の焼成であり、口縁部内外面にタールが付着する。149～151は杯B蓋である。149・150は丸い頂部から湾曲してそのまま端部にいたる。149の内面には煤が付き、灯火器として転用された可能性がある。150は胎土に砂粒を比較的多く含む。151は平らな頂部と屈曲する縁部からなり、口縁端部の仕上がりはシャープである。152～156は杯Bである。152には内面に灯芯痕がある。153の底部外面に墨書文字の一部がみえる。154の底部外面には墨書がある。155は底部外面に粘土紐痕を残す。156の杯部内面には墨痕がある。157・158は金属器を模した椀の蓋である。円環状のつまみが付いた丸い頂部から口縁端部を湾曲させる。157は天井部にミガキが施される。158はつまみの内側にヘラで弧状の線刻を入れる。157・158ともに硯に転用されている。159は銅鏡の形態をとる杯Eである。外面をていねいにヘラミガキする。灰色に焼き上がり、火襷を残す。胎土に黒色粒子を多く含む。160は平底に内湾する口縁をもつ鉢である。161は鉄鉢形の鉢Aである。平底ぎみであり、体部外面をヘラミガキする。口縁部、底部は特にていねいである。内面に煤が付く。162は鉢Dである。外反する短い口縁部をひねり出し片口とする。内部に茶色の付着物がある。ほぼ完形である。163は練鉢である鉢Fである。164～166は平瓶である。いずれも体部の肩が稜をなす。164は頂部に灰をかぶる。165は把手がつく。胎土に多く小礫を含む。166の内面全面に漆が付着する。167は銅製品を模した水瓶の口頸部である。口縁端部を欠く。頸部に2条の沈線が巡り、緑色の自然釉がかかる。猿投窯の製品であろう。168は壺Mである。口縁部を欠く。169は肩の張った体部に短い口縁と高台を付けた壺Eである。170は壺の蓋と思われる。宝珠つまみのついた平らな頂部と湾曲する口縁部からなり、端部は下方に突出し、内面にかえりを付ける。頂部全面に灰をかぶる。171は壺Dである。肩の張った扁平な体部に短く直立する口縁と高台をつける。内面

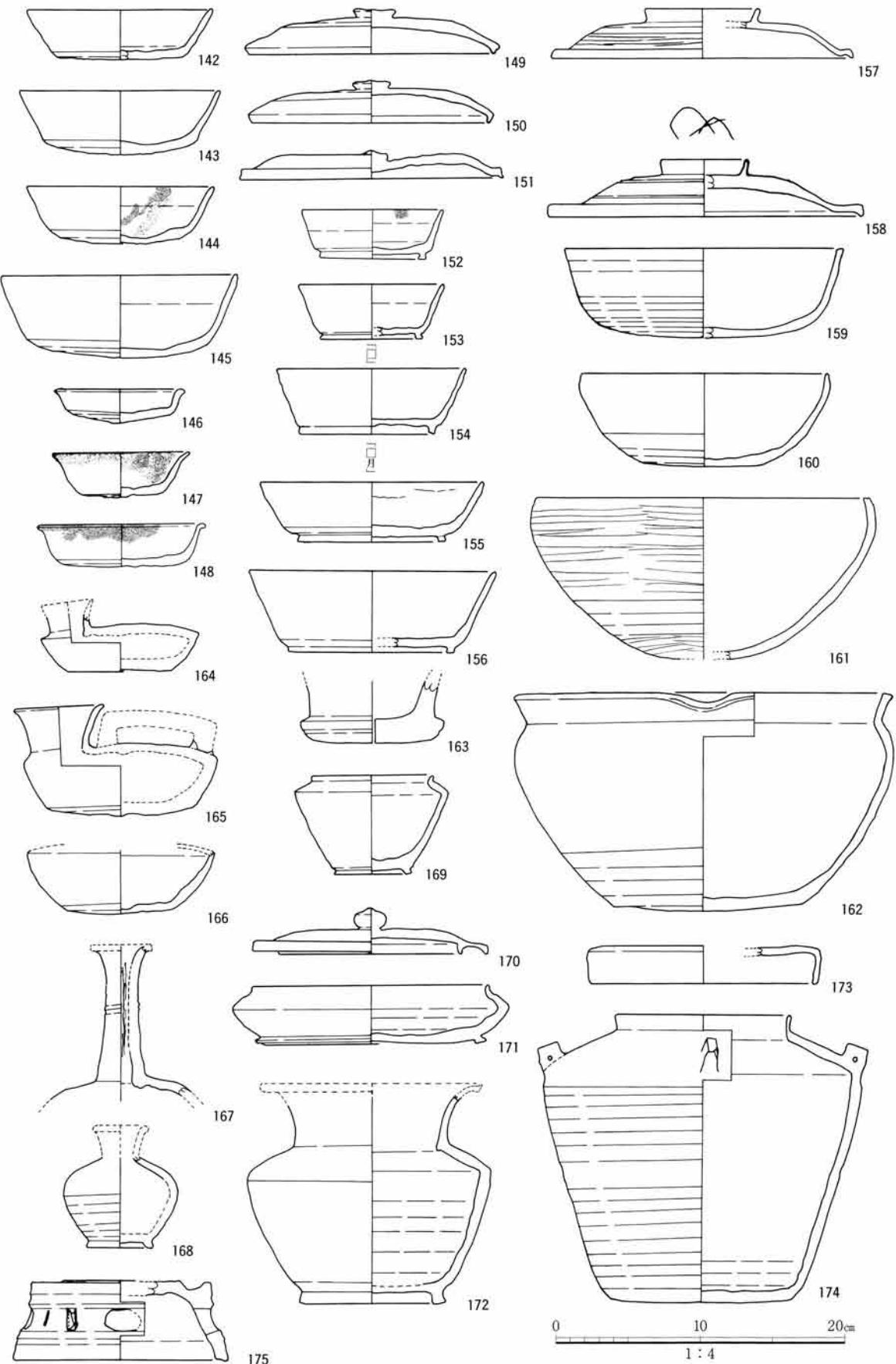


図36 SD501出土土器(2)

に墨が付着し、転用硯である。172は壺Qである。口縁部を欠く。稜角をなす体部に外反する口頸部と高台をつける。173は壺の蓋である。つまみを欠く。転用硯である。174は四耳壺である。体部外面をていねいな回転ヘラケズリで仕上げる。蓋の痕を頸部に残す。175は圈脚円面硯である。3分の1ほど残った円周に丸いスカシ孔が3つ確認できる。スカシ孔の間に縦の線刻が1本ないし3本が入り、規則正しく配列されたものではなさそうである。全体に粗雑な作りである。

SD501から出土した土器には時間幅が認められる。おもに溝底から出土した土師器杯A(129~131)がほぼ平城宮土器Ⅲであるが、在地系の土師器はやや後出する要素をもち、奈良時代後半である。したがって、SD501の掘削時期はおおよそ8世紀の第2四半期を中心とする時期と考えられる。これは溝底から出土した和同開珎などの遺物の年代観とも矛盾しない。溝が埋没した時期は、1点のみで混入の可能性も否定できないが、奈良時代末葉に盛行する器種である須恵器壺M168の存在や在地系土師器の年代観から、奈良時代後半にあると考えられる。ただし、先述したように、金属製品など遺物の大半は溝底近くから出土しており、SD501への廃棄行為は、平城宮土器Ⅲの段階に集中したものと考えられる。

(岡村)

b. 銭貨(図37~40、表3・4、図版51~53)

SD501からは和同開珎の枝銭1点(501)、和同開珎40枚(502~541)、開元通宝1枚(542)、種類不明の銭貨1枚、SD502からは和同開珎1枚(543)が出土した。その計測値は表4に示した。

枝銭 湯口と鋳棹(湯道)、その左右に3枚ずつ並んだ和同開珎6枚からなる。長さ11.90cm、幅5.80cm、重さ78.90g、湯口の幅3.22cm、厚さ1.59cm、湯口下の突起部の幅5.74cm、銭501-bの直径は24.50mmである。現状で鋳棹全体が軽くSの字に波打ち、右下の銭は折れ曲っている。これは、鋳造後、土圧などによって変形したものである。湯口上端の平坦面と鋳棹は垂直でなく、約10°傾きがみられる。

鋳造の際に鋳型が文字の面が下になるように傾いていたことを示しており、意図的なものであるならば文字をきれいに鋳上げるための工夫である。湯口下には左右に突起があるが、生成の理由は不明である。銭はすべて湯回りが悪くて欠損しており、その端部は丸くなっている。湯道の断面は半円形を呈する。湯道と製品をつなぐ堰は薄いところで厚さ0.1~0.2cmである。鋳棹の下端は、折り取られたような破面になっている。

以上から鋳型の成形方法を推測すると、個々の製品(銭)と湯道の部分は原型を用いて型取りした後、湯口と堰を範で彫ったようである。銭の配し方、堰の形状などが精緻ではないことから、湯口・湯道・銭が一体となった原型を用いたとは考えがたい。

完形の銭がなく、和同開珎の型式は明確ではないが、右上の銭501-cは外郭と和の「口」の第2画の長さから、

表3 SD501出土金属製品ほか

種類	点数	種類	点数
銭貨		薄板	13
和同開珎枝銭	1	粒	14
和同開珎	40(+1?)	粒(滴形)	1
開元通宝	1	塊	8
銅製品ほか		鉄製品	
鉗具	4	斧	2
巡方	5	鉗	1
丸柄	5	釘	34
鉈尾	4	刀子	6
責金具	2	鉢形製品	2
碗	2	鍋	3
匙	1	鎖	1
耳環	1	クサビ形製品	1
歩搔	1	タガネ形製品	3
歩搔リング?	1	その他	
鉢	5	鉛板	1
棒状・線状	7	方鉛鉢	2
板状	16	鉢滓・板状不明品	46

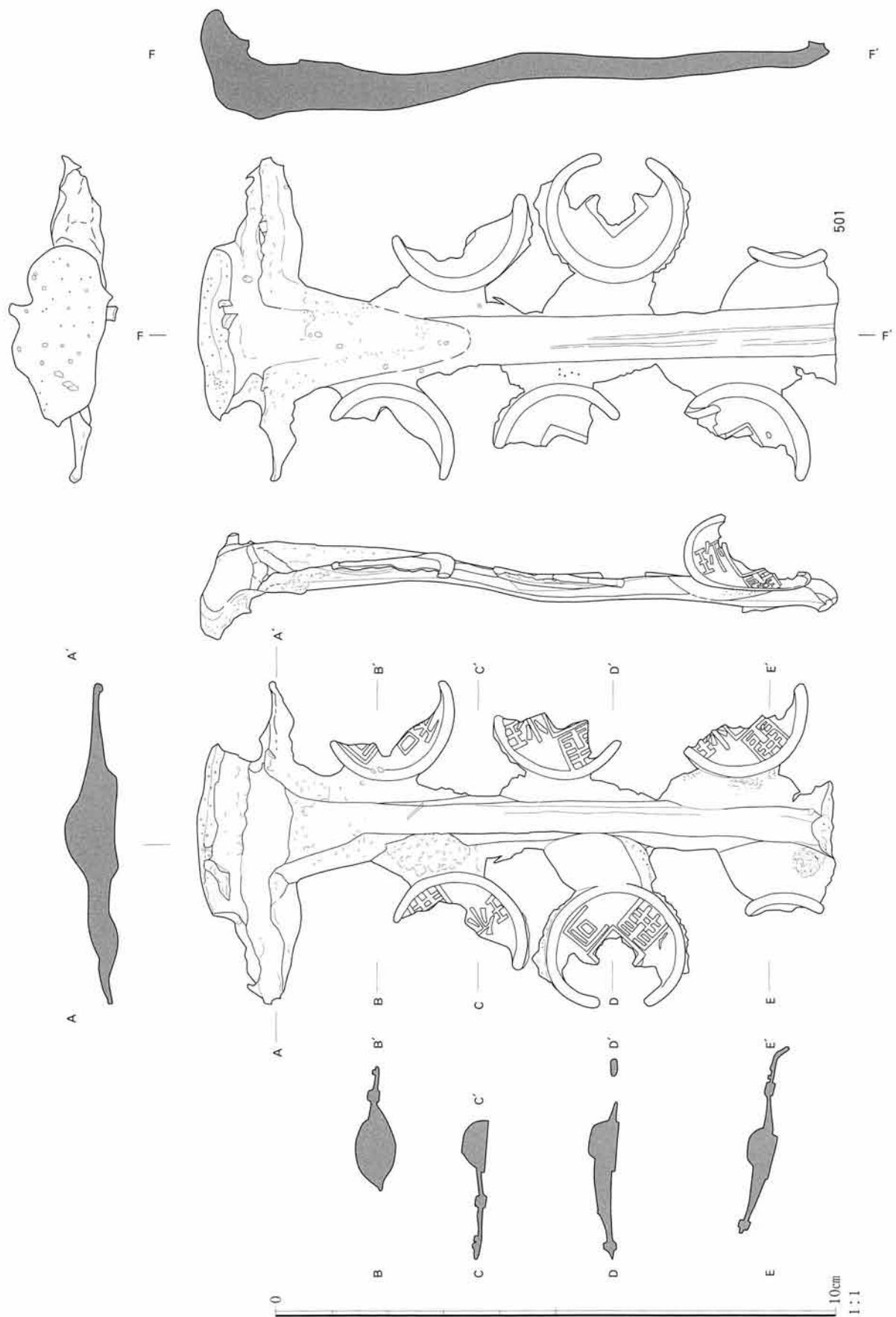


図37 SD501出土枝銭



図38 枝銭拓影(1:1)

「降和」のF型式である可能性が高い。これらとほかの和同開珎の大きさ・範傷などの特徴から同範関係を調べたが、同範と判定できたものはなかった。

和同開珎の枝銭は、戦前に広島県安芸郡音戸町瀬戸島から発見されたという報告があり、その写真が『天平地宝』[帝室博物館1937]に掲載されている。しかし、そこで枝銭とされているものは、いわゆる通常のバリ銭である。発見者は、もとは数枚の銭が連なっており、そのうちの2枚を折り取ったと報告しており、元来は枝銭の形態をとっていたものらしいが、今日伝わらない。したがって、現存する和同開珎の枝銭は全国で本遺跡出土例だけということになる。 (伊藤・岡村)

和同開珎 完形品および完形に近いものが18枚ある。このうち502・503の2枚が「開」字を配するいわゆる古和同である。そのほかは門構えの内柱が中梁より伸びずに、隸書風に開く「開」字を配する隸開和同(新和同)である。発掘調査で発見された確実な古和同は、これまで平城京東三条大路調査のSD650から出土した1枚しか知られていない[奈良国立文化財研究所1974]。

出土例には鋳上がりがよいものが比較的少なく、不良品のめだつ点が特徴である。4枚に大きなバリが認められ、このうち519は孔の詰まりを穿ち取ろうとしたタガネの痕がある。515・516は堰が残っている。503は湯が回らなかった鋳損ないであり、「開」の下の外縁に堰の痕跡がある。517・528には孔内に小さなバリが認められる。このほかにも543には鋳型のズレがみられ、524・538~540は銭文が不鮮明である。510・511は「同」の字の「一」と「口」の間に範傷がある。512は2つに折り曲げられている。これは土圧ではなく、人為的に折り曲げられたものである。また、第IV章第3節で詳述するように、いくつかの和同開珎には、鉛と考えられる成分が粒状に偏析していることが明らかになった。

型式別にみると、もっとも標準的なA型式(504~519)が16枚、不隸開であるB型式(502・503)が2枚、「珎」の字がやや小さく「小珎」と呼ばれるC型式(520)が1枚、「和」の「口」が内郭寄りに配置される「降和」と呼ばれるF型式(521~525)が5枚、型式不明(526~541)が16枚ある。B型式の502は中央孔が広く、文字の小さい「広穿小字」に属し、503は孔の小さい狭穿系である。重量ならびに径は1.45 g、23.7mmを最小に、2.91 g、25.2mmを最大とし、ばらつきが多い。範傷などから同範と認定できるものはなかった。

開元通宝 542は溶融しかけたようで、半分しか残らず銭文も明瞭でないが、「通」の字が読み取れる。古代の銭貨で銭文の右片に「通」の字を配するのは開元通宝だけであることから、銭種を判断した。

c. 金属製品(図41~43、表3・5、図版54~57)

SD501からは、銭貨を除く金属製品が91点出土した。銅製品が38点、鉄製品が53点であり、このほかにも銅板・銅粒などの金属加工関連遺物が50数点ある。その内訳は表3に示すとおりである。

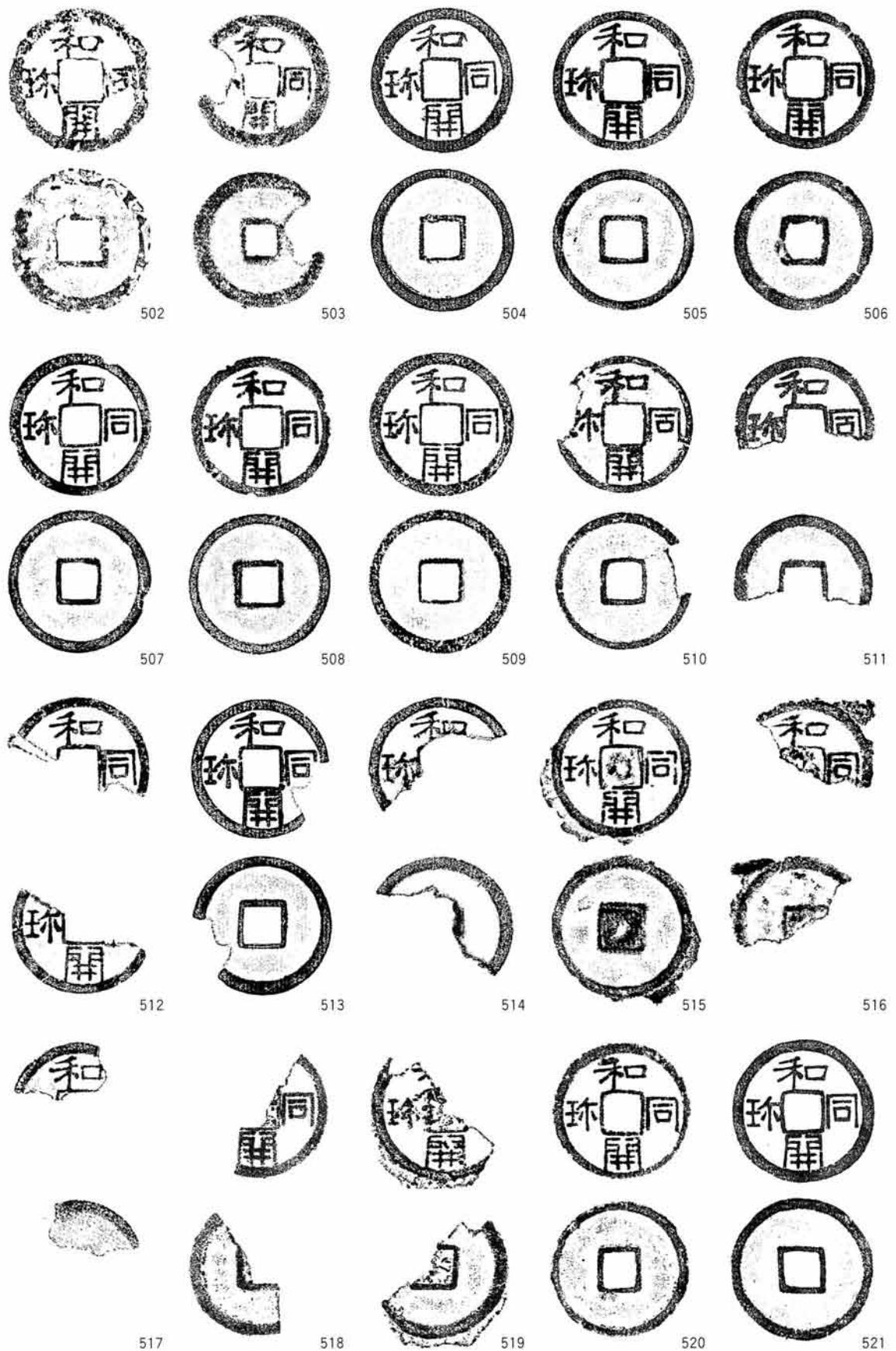


図39 SD501出土錢貨拓影(1:1)

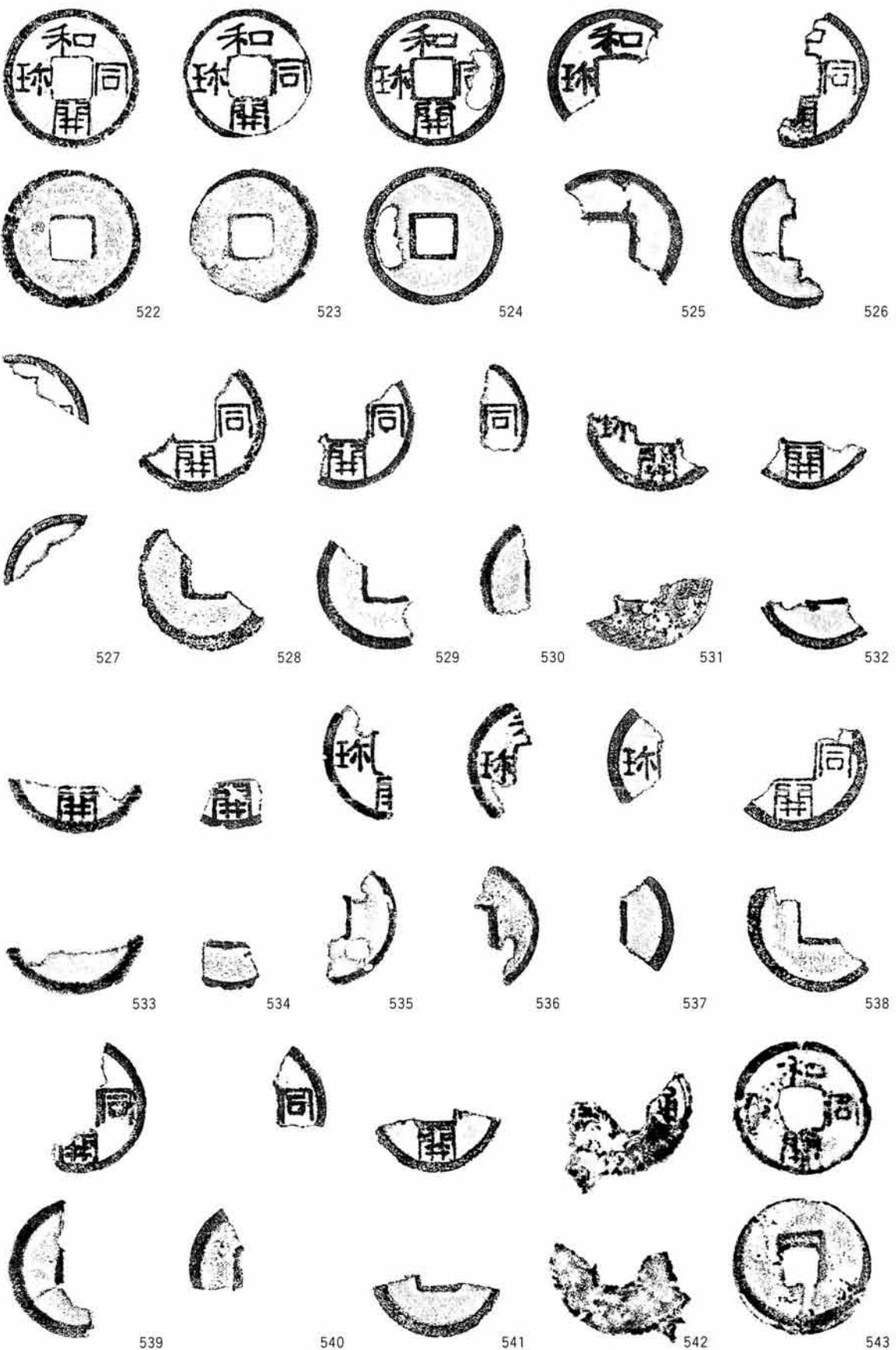


図40 SD501・502出土錢貨拓影(1:1)

SD501(522~542)、SD502(543)

表4 錢貨一覧表

番号	銭種	型式	備考	重量	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	造構・地層	ロック	レベル
502	和同開珎	B	不隸開・完形	2.54	24.87	19.67	8.32	7.06	1.17	0.57	SD501	F	0
503	和同開珎	B	不隸開・堰痕あり・鑄造欠陥	2.91	(23.69)	(18.36)	6.57	5.40	(1.31)	0.59	SD501	A	6
504	和同開珎	A	完形・鑄造欠陥	2.81	25.21	20.89	7.81	6.44	1.41	0.44	SD501	E	21
505	和同開珎	A	完形	2.24	24.53	21.03	7.98	6.42	1.12	0.40	SD501	D	?
506	和同開珎	A	完形	1.45	24.22	20.64	7.93	6.47	1.39	0.49	SD501	F	0
507	和同開珎	A	完形・鑄上がり良好	2.50	24.80	21.12	7.81	6.39	1.40	0.40	SD501	G	3
508	和同開珎	A	完形	2.76	24.45	20.67	7.85	6.50	1.36	0.53	SD501	F	0
509	和同開珎	A	完形・鑄造欠陥	2.44	25.03	21.00	7.78	6.38	1.34	0.40	SD501	C	2
510	和同開珎	A	破片	2.38	(24.04)	(21.28)	7.96	6.53	(1.27)	0.57	SD501	B	5
511	和同開珎	A	破片・鑄造欠陥	1.62	(24.50)	(20.29)	(7.76)	(6.18)	(1.36)	(0.57)	SD501	C	3
512	和同開珎	A	完形・折曲・鑄上がり良好	2.72	—	—	—	—	—	—	SD501	D	23
513	和同開珎	A	破片・鑄造欠陥	1.43	(24.11)	(20.70)	8.03	6.38	(1.27)	(0.42)	SD501	D	8
514	和同開珎	A	破片	0.60	—	—	—	—	(1.43)	(0.53)	SD501	F	3
515	和同開珎	A	完形・バリ銭・鑄造欠陥	2.67	24.40	20.51	7.65	6.68	1.43	0.53	SD501	E	0
516	和同開珎	A	破片・バリ銭・堰あり	1.49	—	—	—	—	(1.34)	(0.34)	SD501	C	0
517	和同開珎	A	破片・孔隅バリ	0.40	—	—	—	—	(0.81)	(0.29)	SD501	C	0
518	和同開珎	A	破片・バリ銭	0.60	—	—	—	—	(1.31)	(0.44)	SD501	C	0
519	和同開珎	A	破片・バリ銭・鑄造欠陥	2.21	—	—	—	—	(1.98)	(0.84)	SD501	C	12
520	和同開珎	C	完形・鑄造欠陥	2.40	24.23	20.57	7.91	6.07	1.42	0.51	SD501	G	17
521	和同開珎	F	完形・鑄上がり良好	2.72	24.84	20.31	7.96	6.32	1.20	0.37	SD501	C	0
522	和同開珎	F	完形・鑄造欠陥	2.35	24.38	20.68	7.76	6.91	1.37	0.58	SD501	H	4
523	和同開珎	F	ほぼ完形・鑄造欠陥	2.26	—	—	8.04	6.83	(1.38)	0.70	SD501	D	0
524	和同開珎	F	ほぼ完形(孔有)・鑄造欠陥	1.66	24.20	20.95	7.92	6.26	0.98	0.36	SD501	A	2
525	和同開珎	F	破片・鑄造欠陥	0.96	—	—	—	—	(1.19)	(0.31)	SD501	C	2
526	和同開珎	X	破片	0.85	—	—	(7.60)	(6.28)	(1.33)	(0.41)	SD501	F	0
527	和同開珎	X	破片	—	—	—	—	—	—	—	SD501	F	0
528	和同開珎	X	破片・孔辺バリ	1.63	—	—	—	—	(1.75)	(0.59)	SD501	E	5
529	和同開珎	X	破片	0.88	—	—	—	—	(1.47)	(0.56)	SD501	G	2
530	和同開珎	X	破片・鑄造欠陥	0.36	—	—	—	—	(0.92)	(0.41)	SD501	H	1
531	和同開珎	X	破片	0.97	—	—	—	—	(0.95)	(0.51)	SD501	C	?
532	和同開珎	X	破片	0.59	—	—	—	—	(1.44)	(0.40)	SD501	G	3
533	和同開珎	X	破片	0.60	—	—	—	—	(1.30)	(0.47)	SD501	F	0
534	和同開珎	X	破片・鑄造欠陥	0.47	—	—	—	—	(1.33)	—	SD501	D	0
535	和同開珎	X	破片	0.44	—	—	—	—	(1.36)	(0.44)	SD501	A	54
536	和同開珎	X	破片	0.69	—	—	—	—	(1.36)	(0.34)	SD501	D	11
537	和同開珎	X	破片	0.46	—	—	—	—	(1.47)	(0.47)	SD501	D	9
538	和同開珎	X	破片・鑄造欠陥	1.15	—	—	—	—	(1.34)	(0.40)	SD501	C	0
539	和同開珎	X	破片・鑄造欠陥	0.87	—	—	—	—	(1.46)	(0.55)	SD501	D	0
540	和同開珎	X	破片・鑄造欠陥	0.57	—	—	—	—	(1.49)	(0.67)	SD501	D	2
541	和同開珎	X	破片・鑄造欠陥	0.93	—	—	—	—	(1.28)	(0.53)	SD501	A	9
545	和同開珎	A	完形・鑄造欠陥	2.68	25.11	20.64	7.77	6.44	1.40	0.36	第5層	—	—
543	和同開珎	A	破片・鑄造欠陥	1.87	23.93	20.63	7.96	6.03	1.53	0.81	SD502	G	5
550	和同開珎	A	破片	0.94	—	—	(7.48)	(6.81)	(1.11)	(0.42)	第4b層	H	—
546	万年通宝	G	完形・鑄造欠陥	3.37	25.29	20.13	8.04	6.29	1.56	0.61	第5層	—	—
544	神功開宝	E	破片・鑄造欠陥	2.72	(25.25)	(20.96)	7.96	6.36	(1.59)	(0.80)	SE507	—	—
547	神功開宝	E	完形・鑄造欠陥	2.96	24.66	21.15	8.34	6.29	1.43	0.63	第5層	—	—
548	隆平永宝	C	完形・鑄造欠陥	2.83	24.69	21.72	8.76	6.91	1.35	0.63	第5層	—	—
549	隆平永宝	G	完形・鑿跡	2.25	24.25	20.72	8.08	6.69	1.17	0.46	第5層	—	—
551	隆平永宝	C	完形・鑄造欠陥	2.47	25.01	21.63	8.57	6.89	1.35	0.66	第4b層	—	—
552	隆平永宝	G	完形・鑄造欠陥	3.00	24.90	20.78	8.71	6.84	1.46	0.70	第4b層	—	—
553	富本銭		完形・鑄造欠陥	2.05	22.80	19.40	7.31	6.25	0.81	0.60	SD603?	—	—
542	開元通宝		破片溶融	3.40	—	—	—	—	(2.57)	SD501	G	0	

1)重量はg、長さはmm表示。

2)外縁外径・内内径・内郭外径・内内径は2計測値、外縁厚・文字面厚は4計測値の平均値。計測部位は[奈良国立文化財研究所1974]に従う。カッコ内は平均値をとれないもの。

3)レベルは溝底からの高さを示し、cm表示。

帶金具 朝服に用いる腰帶の金具である鉸具4点、巡方5点、丸鞆5点、鉈尾2点の計16点、馬具の帶金具と考えられるもの2点、責金具2点が出土した。銅鎔には黒漆が残る例が多く、六位以下の官人が佩用した「烏油腰帶」に用いられたものと考えられる。

601・602は完形の鉸具である。「C」字形の外枠の一端に刺金を入れた軸棒を通し、切込みを入れた板金具で軸棒を挟み込み、3本の鉢で帶端部に固定させている。602の刺金・板金具・外枠の間の隙間が大きいのは、使用減りかもしれない。ともに、鋳造後、全体に稜をヤスリでていねいに整形している。遺存状態は良好であり、刺金は現在も動く。603は表金具、604は裏金具で、同一個体である。3.7m離れて出土した。601・602に比べ、帶側の縁が直線的であり、2個所を鉢で留める点が異なる。603は外縁をヤスリで面取りしている。605～609は巡方であり、表金具4点と裏金具1点がある。表金具605・607～609は横長の矩形を呈し、下寄りに長方形のスカシ孔を入れ、裏面の四隅に鉢足がつく。表面の周縁を面取りする。605は下部の破片であり、一部歪んでいる。表裏面に黒漆が残る。606は裏金具であり、もっとも大きい。スカシ孔に鋸バリが残る。607は少し歪んでいる。裏側のスカシ孔近くに、小さな穴がある。608・609は長さが異なるが幅はほぼ等しい。609は黒漆が残る。607は包含層出土の673と組み合わないが、同大である。610～614は丸鞆であり、表金具3点と裏金具2点がある。表金具610・612・614は半円形を呈し、下寄りに長方形のスカシ孔を入れ、裏面の三方に鉢足がつく。610・612は表裏面に黒漆が残る。611は裏金具であり、610と組み合う。613は側辺が直線の裏金具であり、4個所に鉢孔がある。ほかに比べて残りが悪い。614は下半部を欠損する。615～618は鉈尾であり、表金具1点と完形品3点がある。615は表金具であり、裏面三方に鉢足がつく。616の表裏面には黒漆が残る。617は飾りがあり、馬具の鉈尾である。618は小さく、腰帶でなく、馬具などに用いられたものだろうか。617・618ともに黒漆を残す。619・620は責金具であ

表5 SD501出土帶金具法量表

番号	種類	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	透孔(cm)	備考	ブロック	レベル
601	鉸具	15.2	3.65	2.90	5.5		完形	F	0
602	鉸具	11.6	4.05	2.70	3.9		完形	H	0
603	鉸具	5.4	3.70	2.50	1.0		表金具・破片	F	0
604	鉸具	4.2	3.30	2.50	1.0		裏金具・破片	G	0
605	巡方	2.5	3.20	1.15	1.7		表金具・破片	D	8
606	巡方	6.7	3.00	2.60	1.4	1.80×0.65	裏金具・完形	G	0
607	巡方	3.2	2.40	2.10	0.8	1.88×0.68	表金具・完形	C	0
608	巡方	3.8	2.30	1.90	1.8	1.97×0.74	表金具・完形	D	0
609	巡方	2.4	2.10	1.80	1.7	1.79×0.72	表金具・完形	H	0
610	丸鞆	2.0	2.60	1.70	1.4	1.97×0.65	表金具・漆・完形	F	0
611	丸鞆	1.5	2.75	1.60	1.0	2.01×0.67	表金具・完形	H	0
612	丸鞆	2.1	2.50	1.55	1.5	1.69×0.62	裏金具・漆・完形	H	8
613	丸鞆	0.6	2.10	1.55	0.8	1.49×0.66	裏金具	D	0
614	丸鞆	0.5	2.00	1.05	1.2		表金具・破片	F	0
615	鉈尾	11.4	3.15	3.00	1.5		表金具・破片	D	11
616	鉈尾	20.0	2.90	2.50	6.1		完形・漆	F	0
617	鉈尾(馬具)	20.3	3.10	2.60	6.6		完形・漆	D	0
618	鉈尾(馬具?)	8.4	1.95	1.90	5.6		完形・漆	C	0
619	責金具	6.0	3.50	2.35	5.2			D	3
620	責金具	1.5	2.40	1.30	3.8			C	0

レベルは溝底からの高さを示し、cm表示。

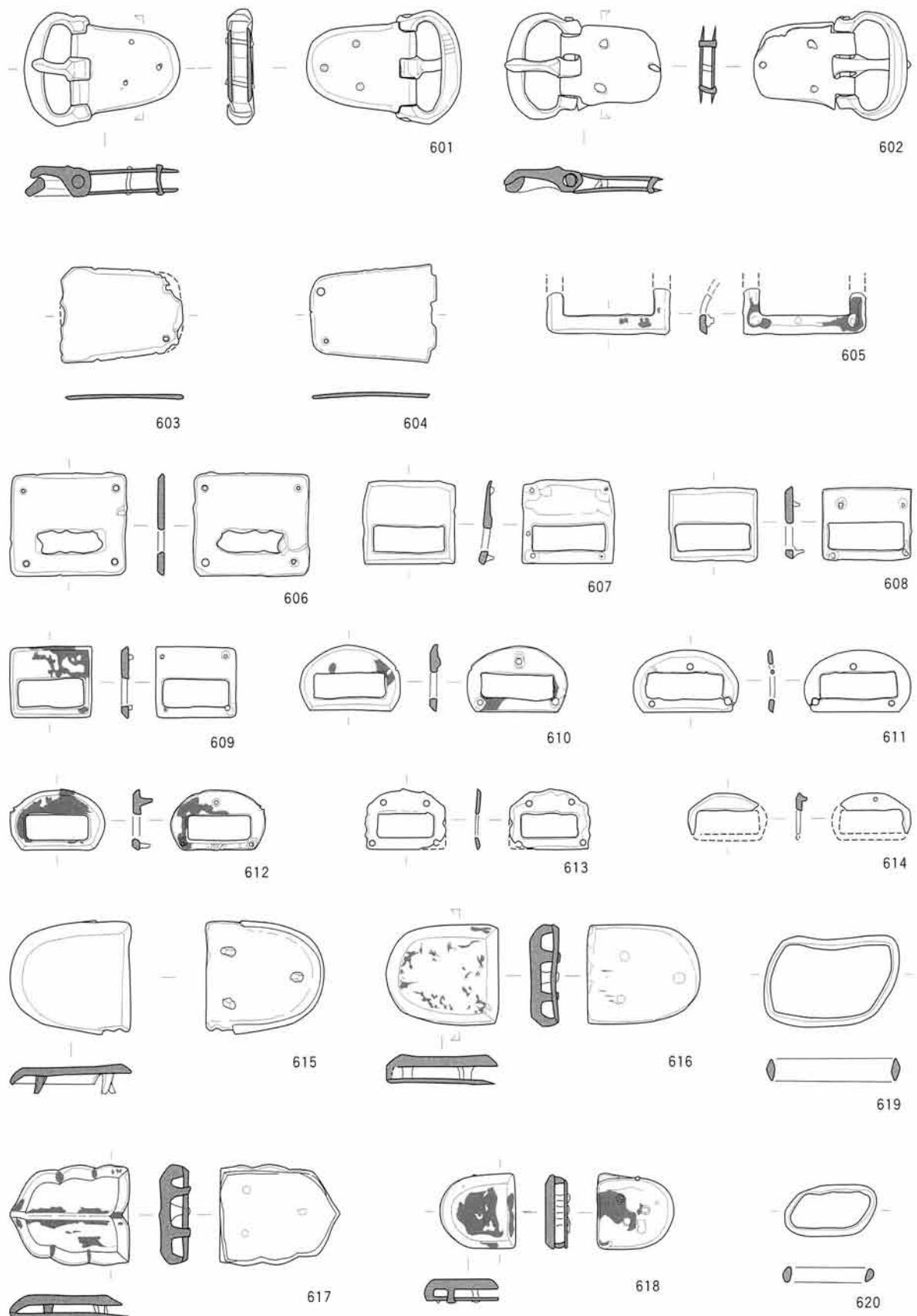


図41 SD501出土帶金具

り、大小2点ある。いずれも歪んでいる。619は鋳造後、ヤスリでていねいに稜を作りだし、断面三角形に整形している。620はやや整形があまく、一部稜をつくらない。

正倉院伝世品や山口県見島出土例から、鎧帶は鉸具・鉈尾と巡方4点・丸鞆5~7点から構成されると[関根真隆1974]、出土した鎧の数は帶1本分にも満たない。しかし、鉸具は3個体分あり、巡方は607と608を同一型式とすると4型式、丸鞆は610と611が組み合うので4型式存在する。丸鞆613・614と同一型式の巡方はないことから、全体では少なくとも6本分の帶金具が存在することになる。

なお、帶金具の大きさは平城京出土例を基にして[佐藤興治1974]で提示された帶金具Aの6型式分類と一致しないものが多い。鉸具601~604、巡方607は縦・横の長さが異なる二型式に一致しており、巡方606、丸鞆613は法量が二型式の中間にある。6型式分類に合致するものは、丸鞆では612がA V型式、614がA IV型式であり、610・611がA V型式に近い。巡方では、608がA V型式に近い。鎧の大きさは位階を反映をするものと考えられており、平城京出土例と今回の出土例の違いについては今後検討を要する。

そのほかの銅製品 621は銅鏡の口縁部の破片である。周縁1.90cmしかない残欠である。口径は12.6cmに復元できる。口縁端部内面を三角形に肥厚させる。622は金銅製の耳環である。直径1.50cm、環の太さは長軸0.45cm、重さ2.8gである。623は断面が丸い小円環で、長径0.7cm前後である。歩搖の円環であろうか。624は木の葉形の歩搖である。長さ3.00cm、幅1.80cmである。鉈625~629は大小5本が出土した。脚の断面形が角形と丸形がある。625~628は円形の頭と脚を一体に鋳出す。625は長さ3.82cm、頭の径1.55cmであり、脚は頭の中心から偏って取付く。脚は断面が角形で、先端は四角い。626は長さが2.52cmと短い点以外は、625と同じ特徴を備える。627・628は円形の頭に短い逆円錐形の脚がつく。627は長さ、頭の径ともに1.20cm、628は長さ0.66cm、頭の径0.57cmである。いずれも脚の断面は円形である。629は球形の頭をもつ小さな鉈であり、長さ0.69cm、径0.16cmである。630は1本の細い棒がねじられた製品であり、両先端が尖る。長さ6.45cm、太さ0.19cmである。631は棒状で、箸であろう。現状は湾曲する。棒の片方に一条の溝を螺旋状に切り、この先端を丸く仕上げている。もう一端は欠損する。蛍光X線分析の結果、銅と錫の合金である「さはり(響銅)」と判明した。632・633は棒状で、断面が四角く、一端が曲る。632は両端を欠き、長さ6.72cm、太さ0.32cmで、焼けた跡がある。633は一端が折れしており、長さ13.05cm、太さ0.33cmである。634は匙である。柄は直線的な薄い板からなる。匙面は橢円形を呈し、浅い。現存長20.32cm、現存幅2.54cm、柄の幅1.65cm、中央の幅1.16cm、匙に近い部分の幅1.20cm、柄の厚さ0.15cm、中央の厚さ0.12cm、匙に近い部分0.23cm、匙の厚さは0.07~0.11cmと薄い。匙と柄が作る角度は15°程度である。蛍光X線分析の結果、材質は631と同様に「さはり」であった。

製品ではないが、銅板・銅粒・銅塊・鉛板・方鉛鉱・鉱滓などが出土した(図42、図版55・57、643~656は図版のみ)。銅板は形態・大きさがさまざまなもののが約30点あり、代表的なものを図示した。635~637は薄板の切り屑である。635は木の葉形の薄板の切り屑で、2個所に円孔を開ける。長さ3.23cm、幅1.64cm、厚さ0.02cmである。636は細長い薄板であり、長さ2.82cm、幅0.85cm、厚さ0.01cmで

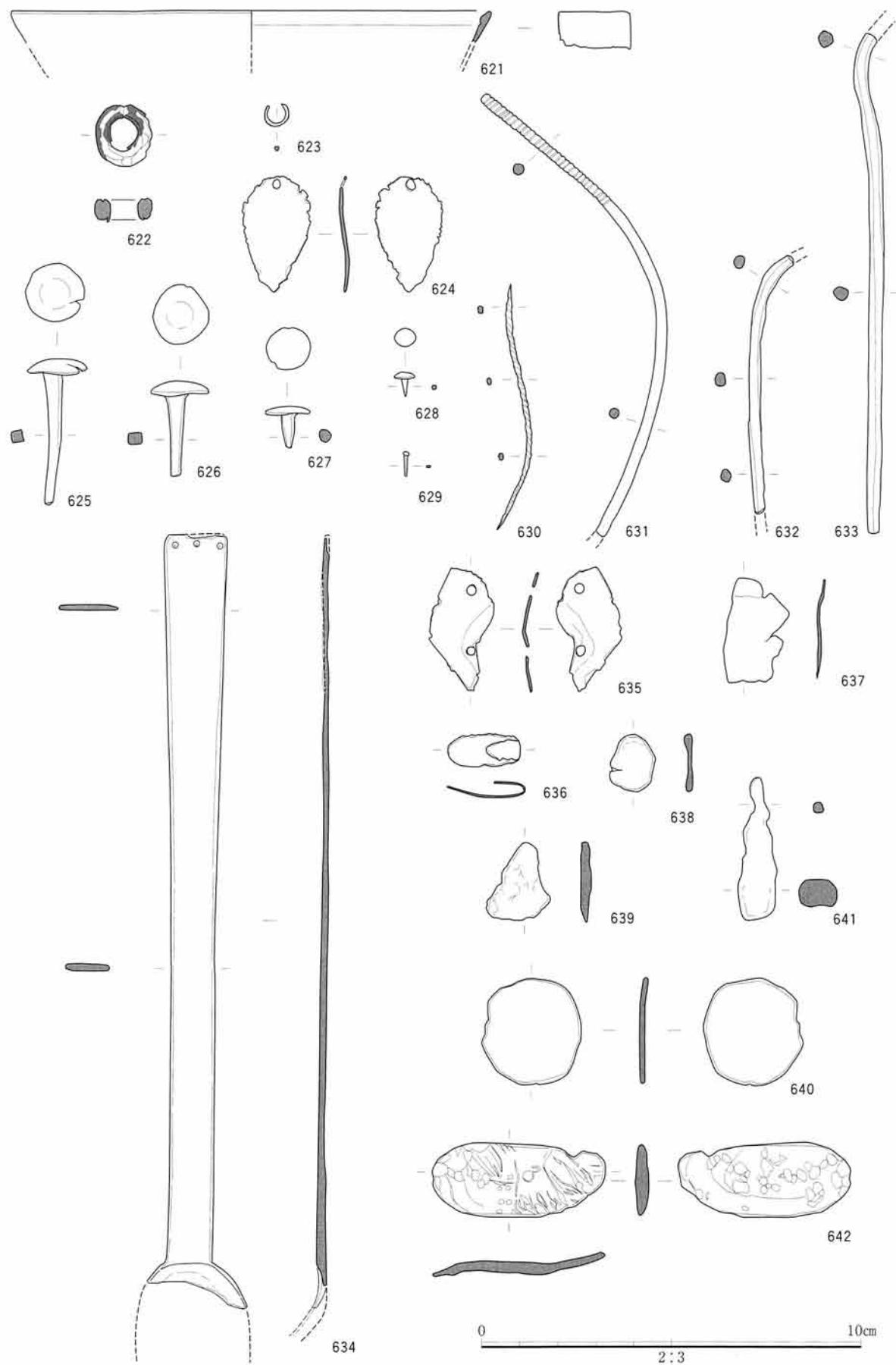


図42 SD501出土銅製品ほか

ある。637は長さ2.68cm、幅1.53cm、厚さ0.07cmである。一端に切断痕がある。638は銅粒を叩き延したものと考えられ、長軸1.49cm、厚さ0.18cmである。重さ0.9gである。639は三角形をした銅板であり、長さ2.08cm、幅1.66cm、厚さ0.27cm、重さ2.6gである。640は円形の薄板であり、長径2.72cm、短径2.44cm、厚さ0.14cm、重さ4.5gである。蛍光X線分析の結果、ほぼ純銅であることが判明した。

銅粒は15点出土した。641のように滴形のもの(6.7g)や、643のように球形のもの(1.9g)がある。球形のものは、銅を溶かして鋳造を行った際に、滓のなかにとり残された溶銅が球状に固まつたものである。銅塊は形態・大きさはさまざまなものが8点出土している。647のように金鉗などの工具の先端に付着したような形の塊(21.0g)もあるが、大半は645(16.3g)や646(11.4g)のように不定形である。このほかにカスカスの厚板状・延棒状のものがある。642は鉛板である。細長い板で表裏面とも酸化し黒灰色を呈するが、縁部に地金の鉛色を露出する。長さ4.51cm、幅1.88cm、厚さ0.15~0.25cm、重さ12.6gである。蛍光X線分析の結果、材質は鉛で微量の鉄と銅を含んでいることがわかった。648は鉛の原材料となる方鉛鉱である。六面体の結晶で、一部が溶融しかけたかのごとくただれてい。長さ1.00cm、幅0.91cm、厚さ0.45cm、重さ1.5gである。649~656は鉱滓である。鉱滓は大小さまざまな形態のものが、約30点出土している。656は碗形の滓である。

鉄製品 657・658は鉄製容器の口縁部である。鍋だろうか。いずれも直立ぎみであり、657は口縁端にほぼ水平な面をつくる。復元直径19.2cmである。658は端面がやや内傾し、口縁下部が屈曲する。復元直径21.6cmである。器壁の厚さは657が0.50cm、658が0.45cmである。659は鍛造の有肩式鉄斧である。袋部の一部を欠損する。全長5.79cm、刃幅3.78cm、袋部は厚さ0.20cmの鉄板を折り曲げて、内寸2.52cm×0.98cmの中空をつくり、袋部は全長の半分を占める。重さは50.3gである。大きさからみて手斧であろう。660は厚さ0.18cmの鉄板を折り曲げて逆円錐形に作った鉢形をした製品である。先端を欠損する。現存長7.16cm、上端の径2.65cmで、重さ33.2gである。上端は鉄板を折り曲げており、筒部の断面形は円に近い六角形から、先端では長方形となる。また、中には木製の柄が残っていることなどから、工具と考えられる。金属加工に係わる工具の可能性もある。661は鉄製の金鉗である。把は閉じた状態で錆化、固着している。把の一方が曲っており、後端を欠失しているが、全体の保存状態は良好である。全長34.45cm、口の長さ3.20cm、重さ119.7gである。口の形状は通常のものと異なり、嘴形を呈し、両刃はやや内側に曲っている。口先の厚さは0.35cmときわめて薄い。把は角のやや丸い角棒であり、肩で幅1.00cmを測る。後端に向って徐々に細まり、端部で幅0.6cm前後となる。交差部は幅1.91cm、厚さ0.33cmであり、中央に孔を開け、太い銅鉢で強くかしめる。あそびはほとんどないと思われる。金鉗の先端には黒色物が付着しており、分析の結果、ピッチ類の可能性が示された(註1)。この金鉗は金属加工に用いられたと思われるが、先端部の形状は、鍛造などの作業で熱加工中の製品を掴んだり、鋳造の際に坩堝を挟んだりするには不都合である。662は刀子である。切先と茎端部を欠損する。両面平造りであり、残存長10.60cm、刃元の身幅1.40cm、棟の厚さ0.48cmである。SD501から刀子は6本出土しているが、そのほとんどが欠損品、あるいは錆化が進行したものである。663はほぼ完形の方頭釘である。長さ10.16cm、釘頭の一辺0.97cmである。664は脚の上端を叩きのばし、直角に折り曲げて釘頭とした折頭釘である。現存長3.77cm、脚の断面は長方形で長辺0.55

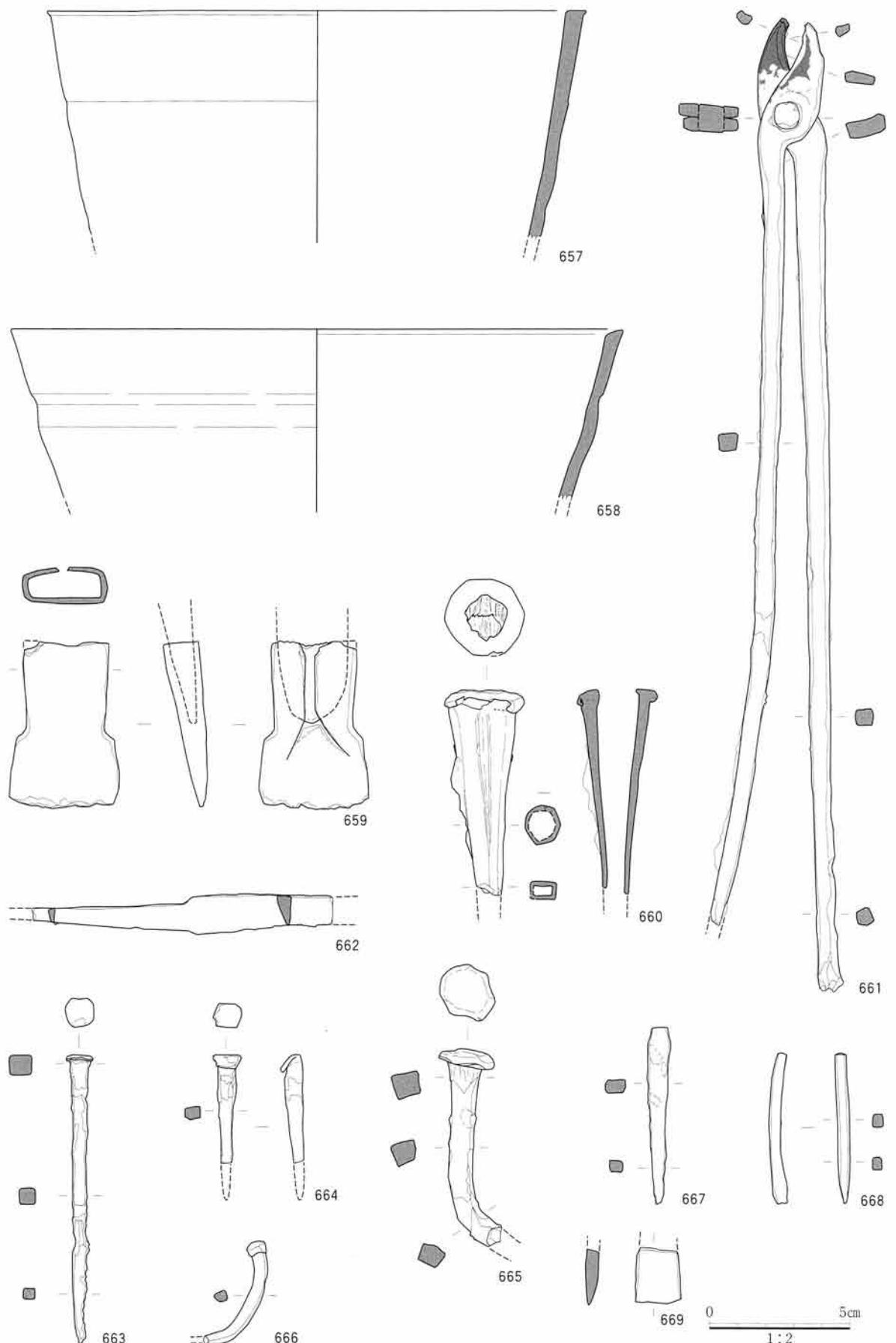


図43 SD501出土鉄製品

cm、重さ2.6 gである。665は大型の円頭釘であり、途中から折れ曲り、先端を欠く。現存長6.92cm、脚幅0.80cmで、全体に錆化が著しい。脚は頭の中心から偏って取付く。666は頭部が潰れた釘である。途中から折れ曲り、先端を欠く。現存長4.12cm、脚の断面は長方形であり、長辺0.45cm、重さ23.5 gである。667・668はタガネ形製品である。667は現存長6.20cm、断面は長方形である。重さ6.4 gである。668は両刃で、断面は長方形である。現存長5.24cmである。669は片刃のクサビ形製品である。上端を欠失する。現存長1.84cm、刃幅1.67cm、重さ2.1 gである。(岡村・伊藤)

d. 木簡(図44・45、図版46・47)

SD501からは削り屑1点を含む4点の木簡が出土した。削屑はわずかに墨痕があるが、字形をなさない。

707は断簡である。

「逐物意」 (75)mm×(16.5)mm×(2)mm 081

端正な初唐風の書体である。2個体に分離していたものを接合した。「逐物意」の文言は、『千字文』に「逐物意移」があり、その習書と考えられる。「物を逐えば意移る」と読み、事物の変遷を見て惑い動くものは志も常に変わって定まらない、という意味である。『千字文』を写した木簡はすでに藤原・平城京でも出土例があるが、「逐物意移」の部分は初例ではなかろうか。

708は貢進物付札である。

〔升カ〕
・「播磨国□郡□□」

〔少カ〕 〔呂カ〕
・「里秦人□田万□□一石」 131mm×19mm×5mm 083

大宝元(701)年～靈亀元(715)年の国郡里制下の木簡であり、国・郡・里・人名の表記とともに書風も古様をとどめる。「播磨国」に続く部分は、「竹」とも「加」とも読めるが不明である。「竹」のばあい、「タカ」と読み、多可郡と考えられる。「加」のばあい、賀古郡あるいは賀茂郡が考えられる。『和名類聚抄郡郷里驛名考證』[池邊彌1981]によると、〔升カ〕□□里はいずれの郡にもみられない。秦人は播磨国では賀茂郡山田郷にみえる[竹内理三・山田英雄・平野邦雄編1966]。また、一石の貢進単位は長屋王家木簡では封戸の可能性が指摘されており、注意を要する。



707



708



0 5cm
1:1

図44 SD501出土木簡(1)

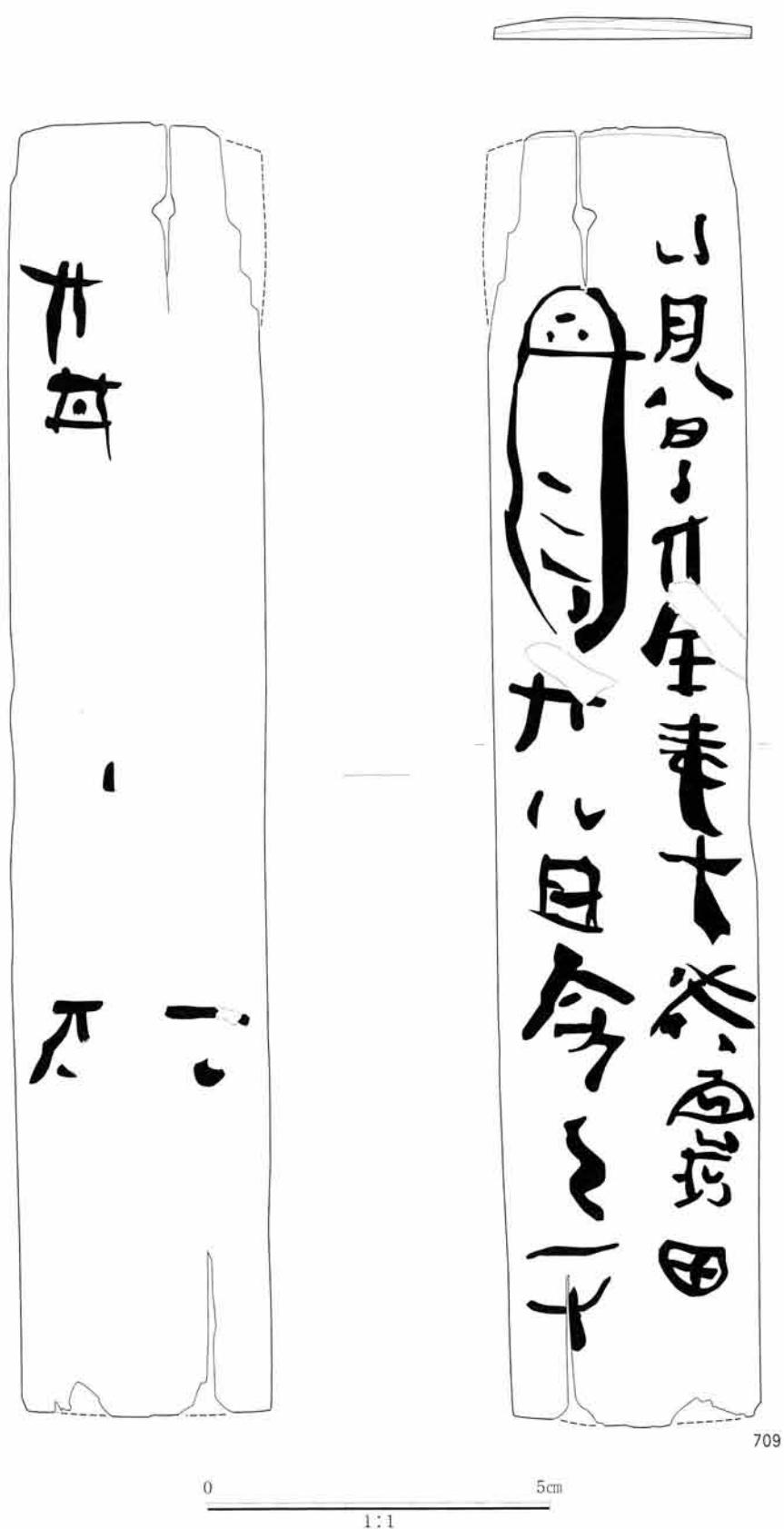


図45 SD501出土木簡(2)

709は完形の木簡であり、上端近くに孔がある。

- ・「○□月八日□□丁欲[]田
- []月八日□々[]」
- ・「○[]」 199mm×37mm×2mm 011

月日で始まり、文章を訂正した痕があるが、内容は判然としない。書体は隸書の雰囲気を強くもつており、きわめて特徴的な書体である。 (古市)

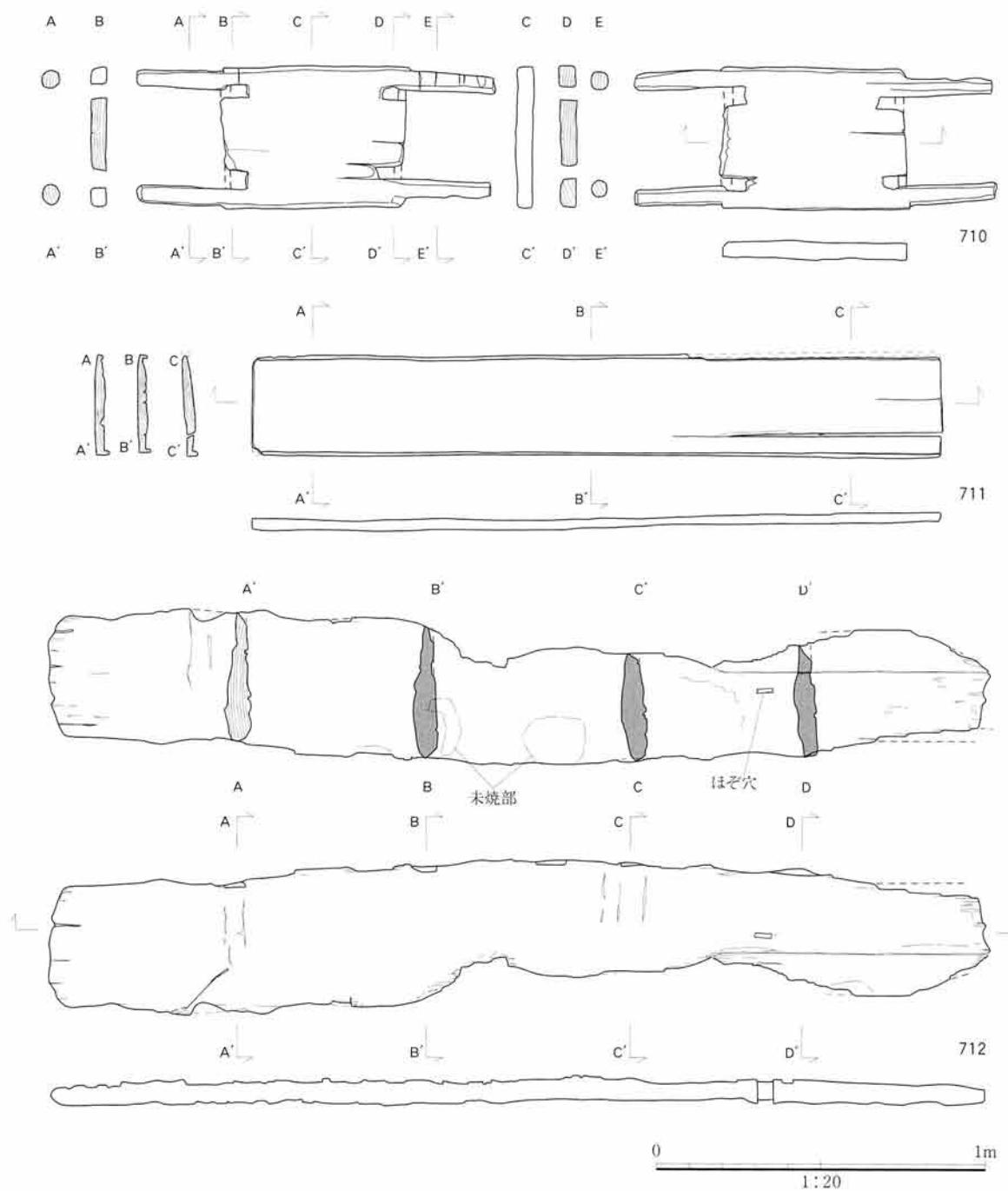


図46 SD501出土木製品(1)

e. 木製品(図46~48、図版8・48~50)

710は担架式の運搬具と思われる。台と4本の把手からなる。台は長さ56.0cm、幅43.0cm、厚さ5.0cmあり、4個所にはぞ穴を穿つ。把手は台の少し内側に付き、丸く削り出される。全長109.0cmである。樹種はヒノキである。711は大和葺きの下材である。側縁の一部を欠く。両側縁に突起部を作りだし、中央部を山形に隆起させる。表面は裏面よりも傷みが著しい。長さ209.5cm(7尺)、幅30.0cm(1尺)、厚さ3.5cmである。スギを用いる。712は建築部材と思われる。長さ287.5cm、幅40.0cm、厚さ8.5cmの大型の板材である。一側縁に5個所の凹みがある。全体に火を受けて炭化しているが、中央に未焼部があり、梁材かもしれない。本来の形態が判然としないが、中央の凹みを中心に左右対称となる材のようである。樹種はヒノキである。

713~719は糸巻きである。713~717は中小のA型式に伴う横木である。板の中央を幅広く残し、両端を棒状に削って枝部を作る。長さは最小で9.1cm、最大は10.3cmである。713・714・716・717には枠木との結合のための木釘孔は認められない。718はAⅢ型式の糸巻きの枠木の端部である。横木との結合部から剝形に入る先を欠失する。結合部から端部は直線的に削り出している。背面は丸くする。横木との木釘孔はない。枠木の残存長11.5cm、同幅1.5cm、同厚さ1.4cm、結合孔の径1.0cm前後である。719はAⅢ型式の糸巻きである。1本の枠木に2本の横木が結合した状態で出土した。背面をていねいに丸く面取りする。枠木と横木を結合する木釘が残る。枠木の横木との結合部から端部までの長さが異なるのが特徴である。枠木の長さ26.0cm、同幅1.1cm、同厚さ2.3cm、結合孔の径1.0cm前後、横木の復元長12.2cm、同幅2.4cm、同厚さ1.0cm前後、軸孔径1.0cm前後、糸巻きの復元直径13.4cmである。中型に属する。720は糸巻きの軸棒の可能性が考えられる。長さ24.2cm、径0.9cm前後である。10面ほどの面取りして、円形に仕上げている。中央がやや太い。一端に切込みがあるが、自然の割れかもしれない。もう一方の端から4cmのところがさざくれている。装着時のものかもしれない。

721は中空の半球に長方形の孔が開けられた製品であり、燭台の可能性がある。時代は下るが、中世の絵巻である『春日権現験記伝』や『慕帰絵詞』に同様なものが描かれている。裏側は五方向から底部を粗野に抉り込み、器状に加工している。径20.0cm、高さ8.6cm、孔の長さ8.4cm、幅3.0cmである。孔の上端は平坦な面をつくる。心持材を用い、材はヒノキである。722は挽物の高台のつかない皿B類である。白木作りである。復元径26.6cm、高さ2.2cmである。器の内面から口縁部外面にかけて輻轤挽きし、底部外面は削られる。723は蓋である。側面端部は少し削られているが、ほぼ原形を留めている。やや歪な円形を呈し、板の周縁部を斜めに削り落とす。側面に釘孔を確認できないので、曲物の蓋ではないようである。一面に先の鋭いもので線刻されているが、何の文様であるか不明である。両面とも焦げ痕がある。復元径15.5cm、長さ15.6cm、厚さ0.9cmである。724・725は円形曲物の蓋板である。ともに側板を欠く。樺皮結合曲物Bであり、側板が立てる蓋板の位置に圈線が巡る。724は復元径18.5cm、厚さ0.8cm、725は復元径20.2cm、厚さ0.5cmである。725は結合孔の近くに小孔が穿たれている。ともにSD502から出土した。樹種はヒノキである。726は上端を圭頭状にして下端を剣先状につくり、上端近くの木口側面の左右から切込みを入れたC型式の斎串の破片である。左右の側辺と下半部を欠く。残存長12.5cm、最大幅1.9cm、厚さ0.3cmである。樹種はヒノキである。SD502か

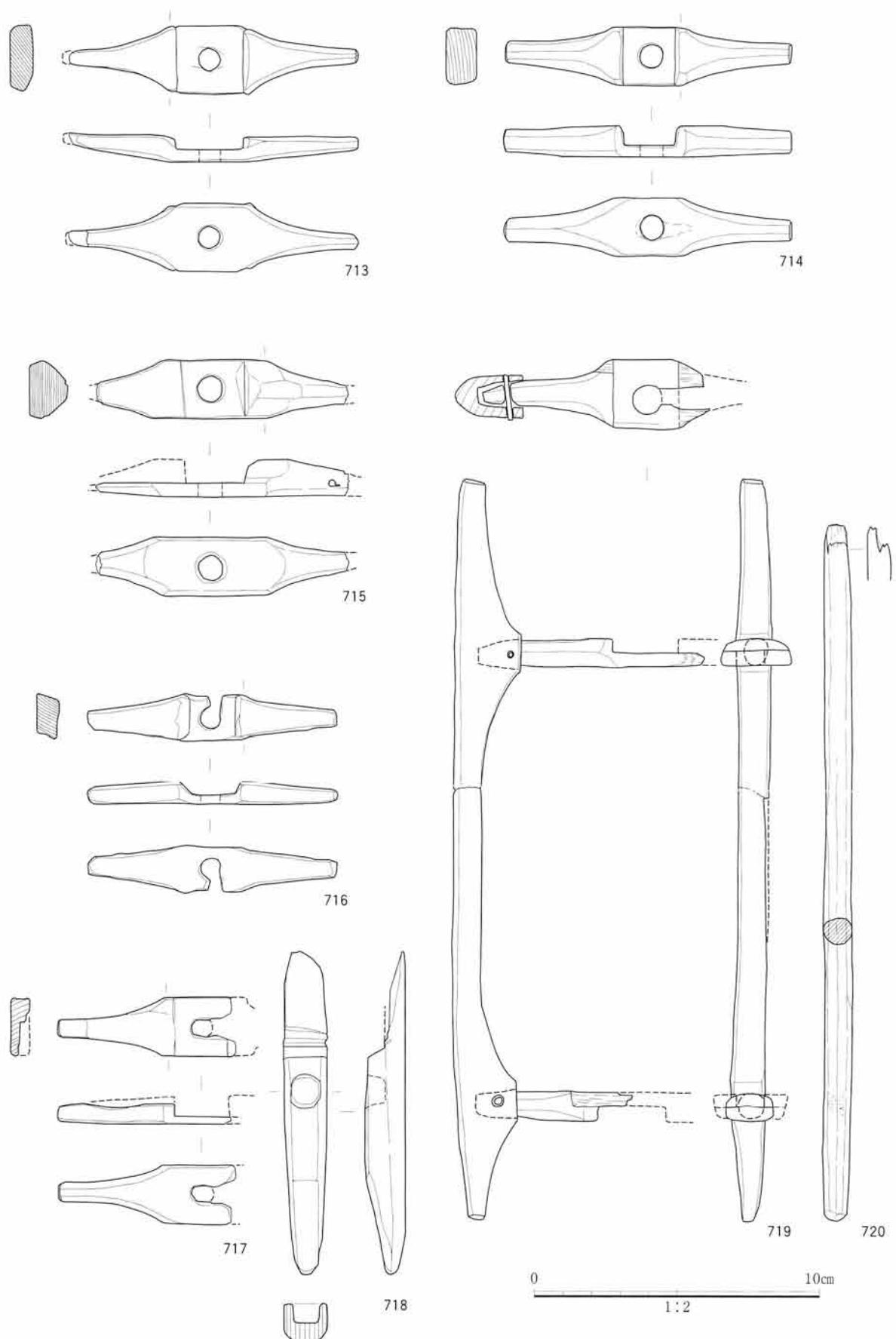


図47 SD501出土木製品(2)

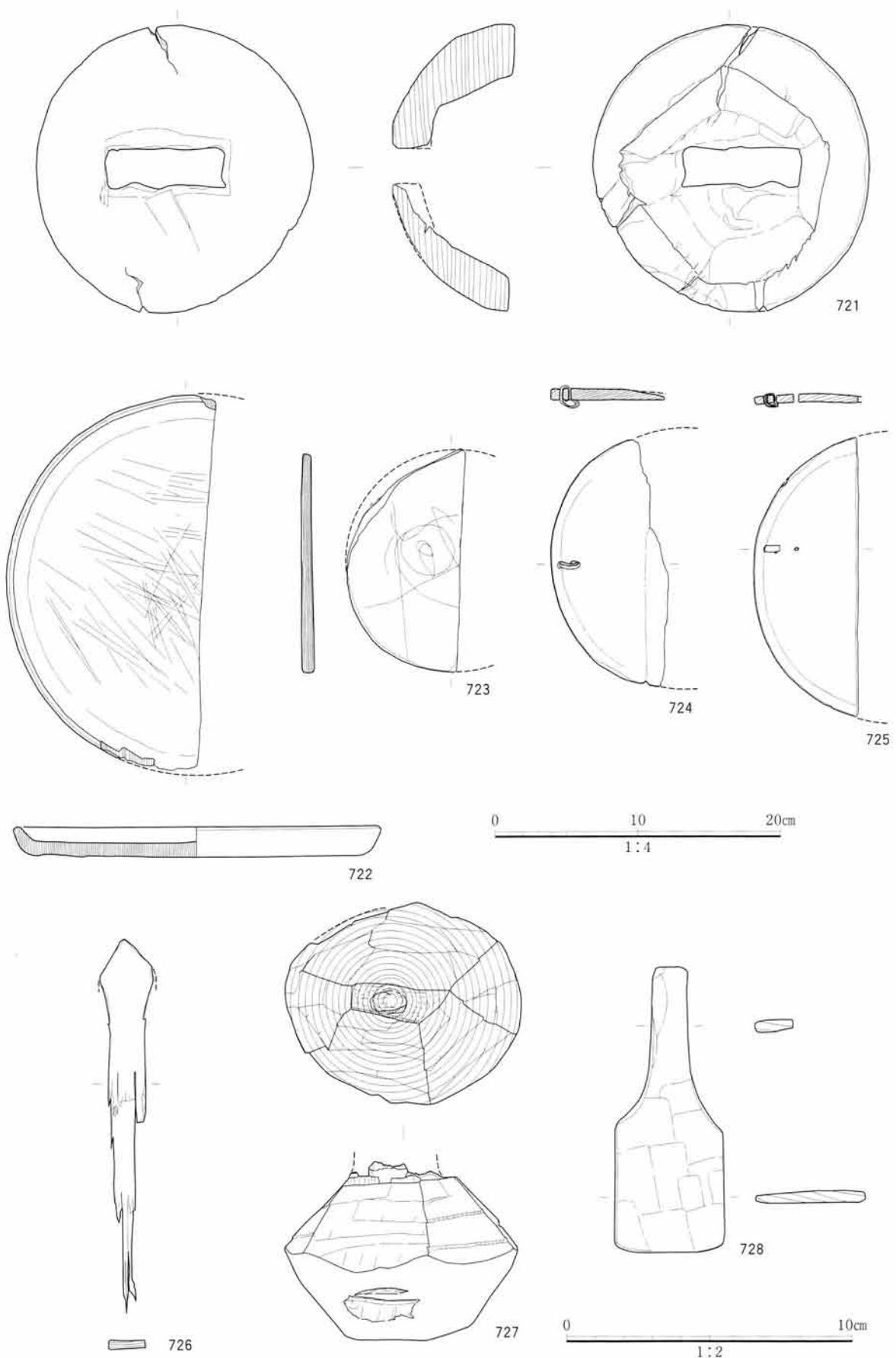


图48 SD501·502出土木製品
SD501(721~723·727·728)、SD502(724~726)

ら出土した。727は頂部に柄の痕があり、底部が敲き潰れていることから、楕と考へた。最大幅8.3cm、残存高6.3cmである。心持材を縦木取りし、上半部を四角い柄を削り残して六方向から面取りしている。樹種はヒノキである。728はA型式の小型の匙形木器である。身の先端は細い板の一端を身とし、頸部から幅を狭めて柄を作る。身の先端は平坦で片刃としない。身の両側縁は丸く削り落として整形している。図示した面が若干膨らむ程度で、裏面は平坦であり、表裏の区別は明確でない。長さ9.9cm、幅3.8cm、厚さ0.4cmである。樹種はヒノキである。

2) SK504(図49・50、図版10・31・32)

SK504はA区の中央北寄りで検出された浅い土壙である。平面形が歪な円形を呈し、長軸3.5m、短軸2.6m、深さは0.3m前後である。埋土は黒褐色粘土質シルトが水平に堆積し、下層に少量の炭が混る。遺構検出時から土器・瓦が露出していた(図版10)。上・下層の遺物は接合するものが多く、遺物は一括して投棄されたものと考えられる。

コンテナ5箱分の遺物が出土した。大半が土師器・須恵器であり、ほかに少量の瓦・鎌などの鉄製品・砥石がある。土師器・須恵器はそれぞれ30個体以上あり、大半が食器類である。図示したもの以外に、土師器の鍔釜、須恵器の壺・甕、製塩土器がある。

177~184は杯Aである。口縁部はSの字を描くように、斜め上方に伸び、端部を内側に丸く肥厚させている。都城系の土器の様相を示す。齊一性が高く、法量から口径11.8cmの杯AⅢ177・178、口径14.6cmの杯AⅡ179・180、口径

16.0cmの杯AⅠ181・182の3型式に分類できる。径高指数は16.5を示す。

177~179は灯芯痕があり、灯火器として利用されている。調整はすべて口縁部をヨコナデし、底部をヘラケズリする。179・183には粗い螺旋状+放射状暗文が内面に施される。184は例外的に大きな杯であり、内面底面に2重の粗い螺旋状暗文を施す。体部外面に「尼寺」の墨書がある。「寺」の下半部は肉眼でははつきりしないが、赤外線写真で確認した。185~187は鉢Bである。体部外面をヘラミガキ、内面をナデで仕上げる。186・187はまったく同形であり、体部から底面にかけて、焼成後のヘラ記号がある。189・190は小型の甕Aである。内面をヘラ



図49 SK504実測図

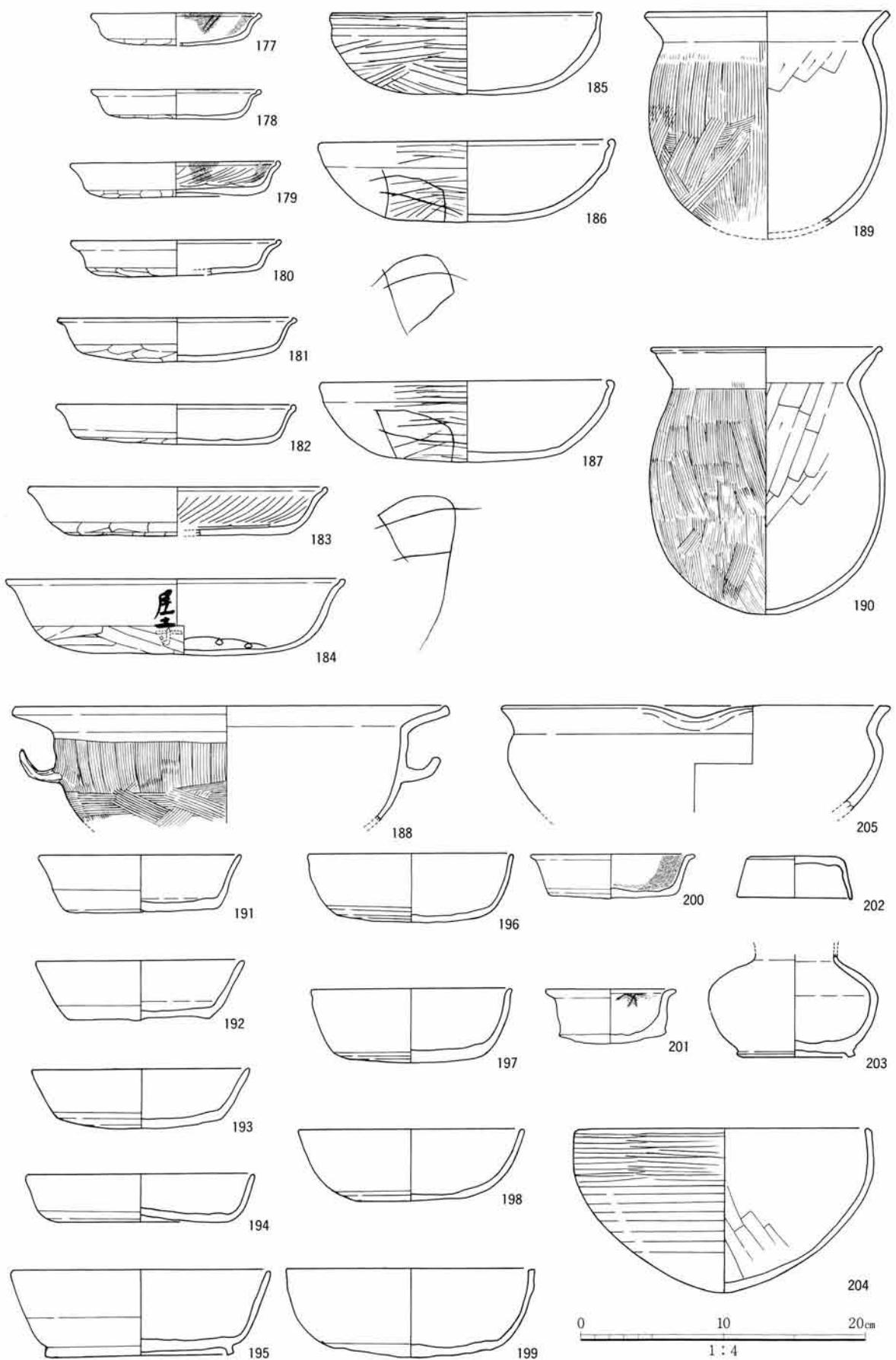


図50 SK504出土土器

ケズリ、外面をハケで仕上げる。188は鍋Bである。191~205は須恵器である。191~194は須恵器杯Aである。191・192は焼成があまく、灰白色を呈する。底部はヘラ切り不調整である。191は内外面に煤が付く。194は口縁部が直立ぎみで低平な杯である。193・194の底部は回転ヘラケズリで仕上げる。195は大型の杯Bである。196~199は銅鏡を模した杯Eである。196~198は底部外面をていねいな回転ヘラケズリで仕上げる。198・199の口縁端部はやや内傾する面を作る。198は火櫻を残し、胎土に黒色粒子を多く含む。199は底部ヘラ切り不調整であり、体部から口縁にかけてナデで仕上げる。200・201は灯火器に用いられた杯である。口縁部を水平に伸ばすのが特徴である。底部はヘラ切り不調整で、口縁部をヨコナデで調整する。202はおそらく壺の蓋だろう。頂部はヘラケズリ後に、ミガキで調整する。内面に灰をかぶる。203は高台のつく壺である。底部内面に白色の付着物がある。204は鉢Aである。底部は尖る。体部外面はていねいなヘラケズリ、口縁部をヘラミガキで調整する。胎土に黒色粒子を多く含む。205は片口鉢である。

以上、SK504の土器群は土師器杯Aの口縁端部の形態、簡略化した放射状暗文や、個々の土器の特徴、土器の組成などからみて、平城宮土器Ⅲに属する。

3) SE505(図51・52、図版11)

SE505はA区の中央で検出された井戸である。SK605を切る。掘形の平面形は1.7m×1.5mの隅丸長方形を呈し、深さは2.0mである。井戸側には径0.7mのヒノキの刳り抜き材を用いる。上端が腐食のため、やや尖りぎみとなるが、そのほかの保存状態はきわめて良好である。水溜めはなかったが、井戸底は周りより0.2mほど円形に凹んでおり、小さな丸石が不規則に置かれていた。井戸側の最下部には四角い孔が2つ開けられている。地下水の導入口を意図したものか、あるいは運搬のための紐孔として機能したものだろうか。下から0.6mに切込みが材の3分の1まで及んでおり、柱などの再利用の可能性もある。枠の東側には径5cmほどの5本の棒が壁との隙間に突き刺されていた。井戸側を掘形へ導く際に用いられたものだろうか。掘形は粘土層にあり、湧水層には達していない。調査時にも地下水はまったく出なかった。

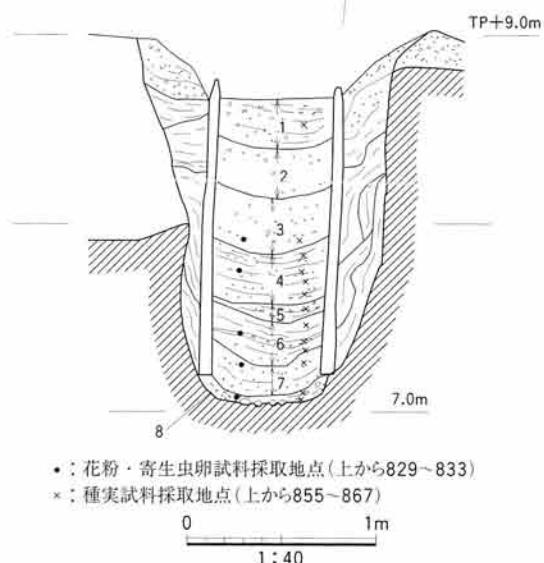
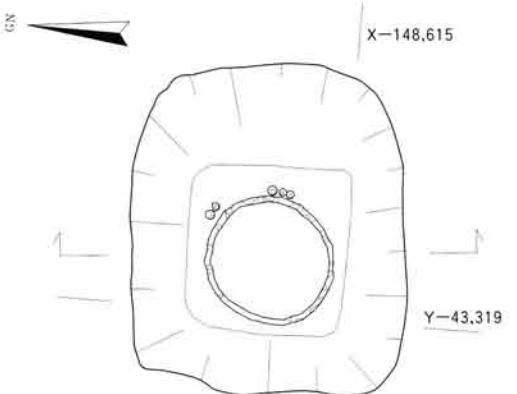


図51 SE505実測図

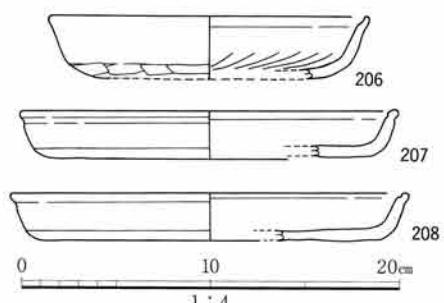


図52 SE505出土土器

埋土は黒褐色シルトと粗砂からなり、自然堆積の特徴を示す。埋土からはウシ・ウマ・ネズミ・マ・イワシとともに、多数のカエルの骨が出土した(図版58・本章第10節)。裏込め・井戸側内ともに出土した土器は少量であるが、顕著な時期差を認めがたく、奈良時代中頃に掘削され、後半に埋没したものと推定される。

出土遺物には図示したもの以外に土師器甕、須恵器杯B・H、竈、瓦片がある。206は土師器杯Aである。底部をヘラケズリ、口縁端部をヨコナデ調整する。内面には放射状暗文を施す。207・208は皿Aである。器壁が厚い。208は底部を軽く削る。208は裏込め、それ以外は井戸側内から出土した。これらの遺物群はおおよそ平城宮土器Ⅲがあるいはやや下るものと考えられる。

4) SE507・SK506(図53~58、写真8、図版12・13・33~36・39~41・48・49・53・55)

i) 遺構

SE507はA区中央南寄りで検出された井戸である。谷筋の南縁辺の地山が南から一段下がった場所に立地する。掘形は胴の張った矩形を呈し、長さ2.3m、幅2.1mである。深さ2.8mまで掘込まれているが、粘土層の範囲であり、湧水層にはいたっていない。調査時に水はまったく湧かなかった。井戸側は横板を井籠組した井戸側Aと、後に作られた筒状の井戸側Bからなる。

井戸側Aの側板は北側が5段分、そのほかが6段分、計23枚分残っていた。北側が1段欠けているのは、井戸側Bを納める時に抜き取られたのかもしれない。長さ130~150cm、幅35~50cm、厚さ5cm前後の板を合い欠きほどで組み上げ、内法120cmの空間を作る。板の表裏面は手斧でていねいに仕上げられ、幅6cm前後の手斧痕を残す。23枚中7枚の板に運搬用の紐孔と推定される方形孔が短辺近くに認められ、転用材である可能性がある。井戸底には拳大の円礫が疎らに敷かれていた。水溜めの施設はない。

井戸側Bは船形をした2つの縦材729・730の側縁を合わせ、筒状の空間を作る。内法は長辺80cm、短辺60cmの楕円形を呈する。上端を幅10~20cmの細長い板で筒の周囲を取囲む。井戸側Aとの間の埋土はしまりが悪い。

埋土は下から4層がシルトを挟在する粗粒砂であり、井戸の機能時の自然堆積と考えられる。3層は粘土質シルトであり、この下部からは墨書土器を含む多数の完形の土器・神功開宝544・鉄鎌670が見つかった。2層は厚い粗粒砂であり、人為による埋戻しである可能性が高い。1層は黒色粗粒砂

質シルトであり、自然堆積である。多くの土器が出土したが、破片であり、ゴミとして処理されたものと考えられる。1層と3層の出土土器には型式差がなく、井戸の埋没は長期に及んだものではないようである。3層下部からは21個体の完形品が出土しており、井戸鎮めの儀式に用いられたものと考えられる。



写真8 SK506木製品出土状況(北から)

井戸側Bに用いられた縦材は上端が腐朽している

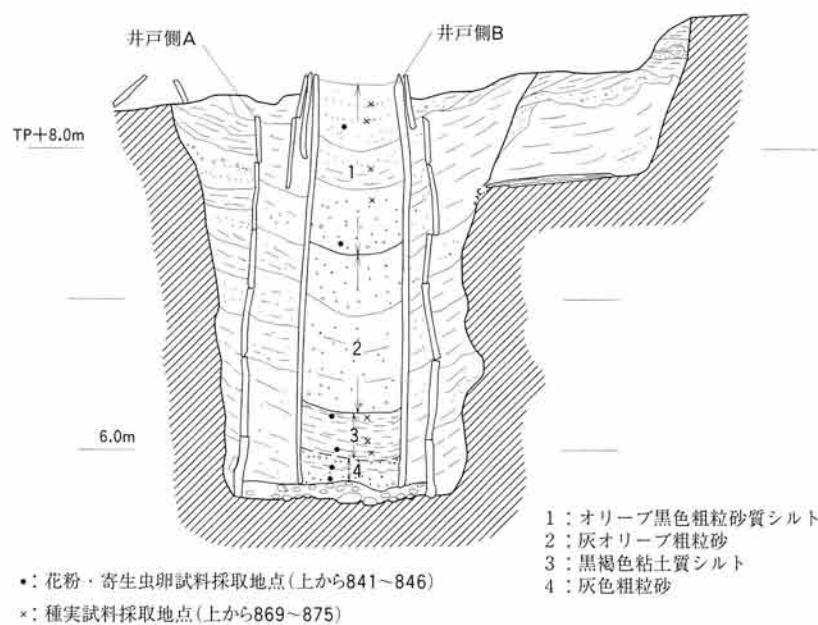
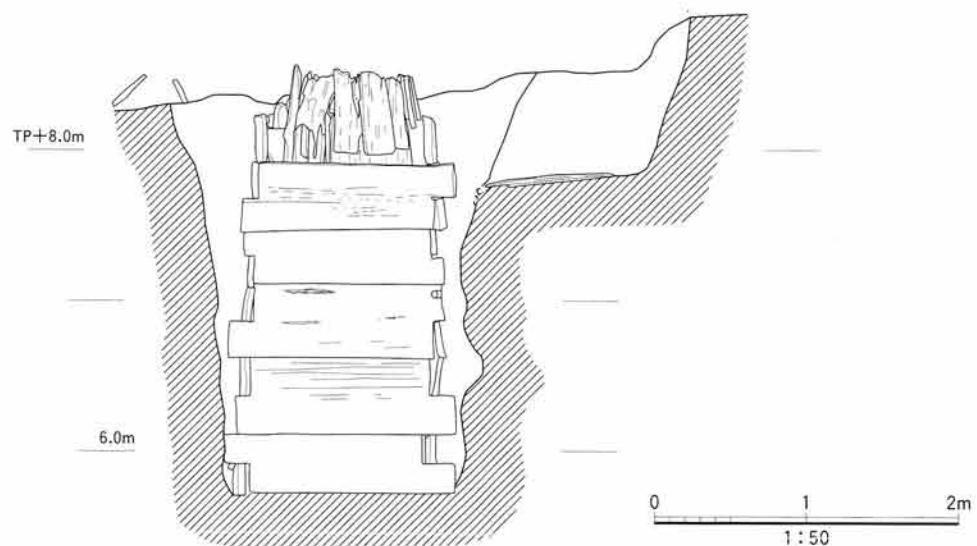
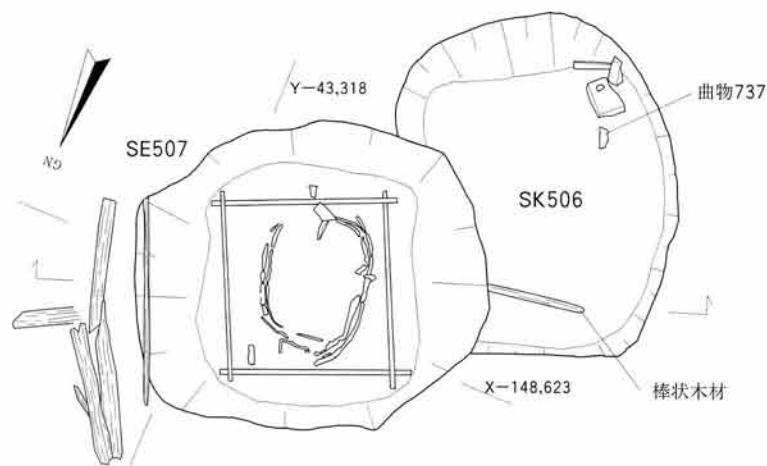


図53 SE507・SK506実測図

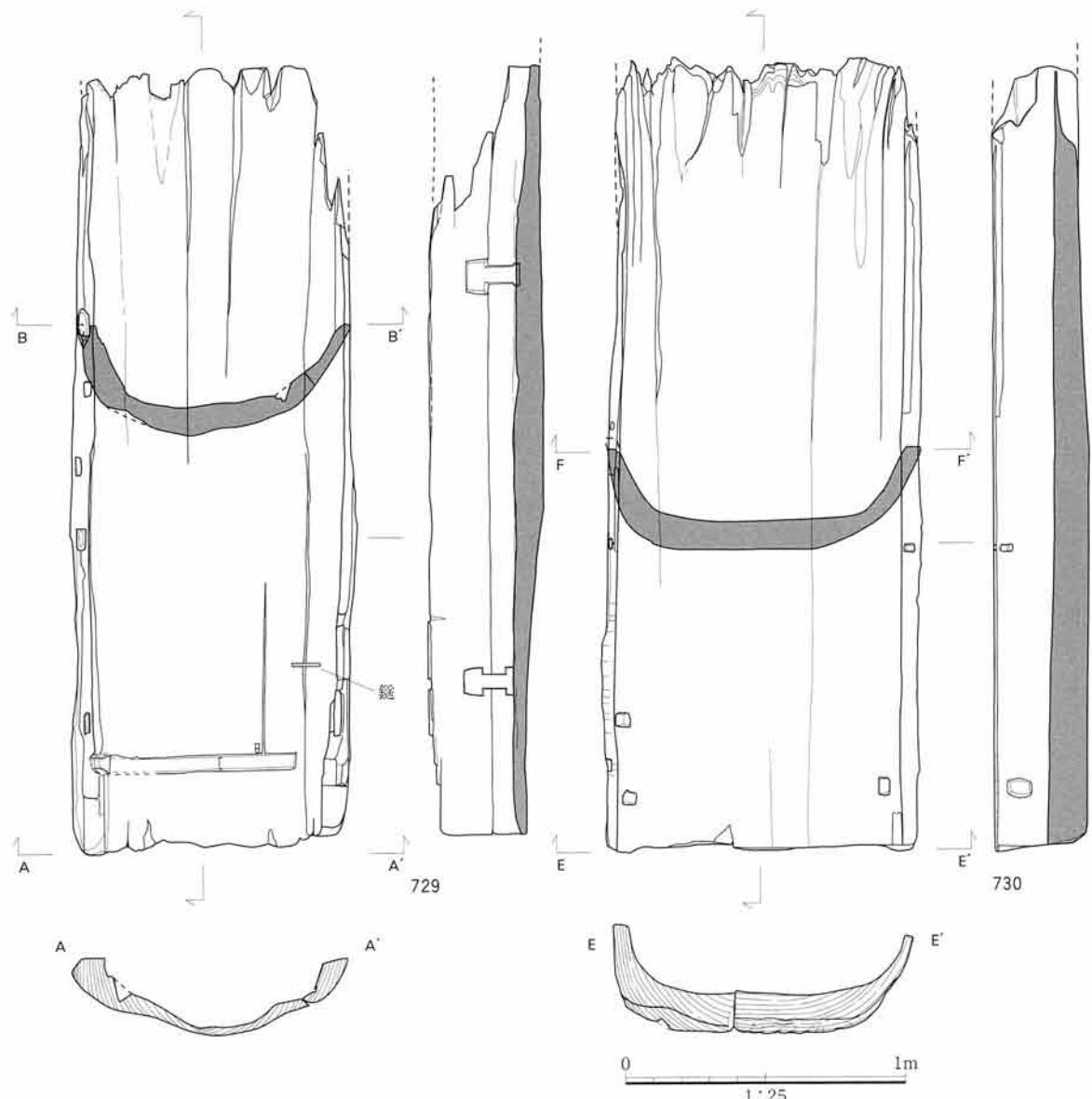


図54 SE507井戸側B

以外は、保存状態が良好である。ほぞ穴や仕口があり、転用材であることは明らかである(図54)。東側に用いられた材729は長さ275cm、幅100cm、厚さ10cmであり、内側下端近くに、抉り込みがある。縦割れした材を結合するために、外面からは木製の栓を埋め、内面からは鎌が打たれる。側縁の端面には5個所のほぞ穴がある。西材730は東材よりもひとまわり大きい。長さ277cm、幅110cm、厚さ15cmである。西材と異なり、平底を呈する。中央近くの側縁端面に左右対称の位置に孔を穿つ。下端近くに3つの孔を開け、そのうちの2つは対置している。両材ともスギであり、同じ木から作られているようであるが、直接接合しない。材の形態・特徴から、本来は船あるいは樋であったと推定される。

井戸の東側で長板4本を板杭で固定した樋状の木組み施設を検出した。この施設は井戸側Aの掘形埋土の上部にあり、井戸側Bに伴うものとみられる。木組み施設の付近には土器・瓦・曲物を含む遺物が散乱していた(図版12)。

井戸の時期については、井戸側Bの埋土から神功開宝(初鑄765年)が出土しており、土器群が平城

宮土器VIにあたることから、奈良時代末葉あるいは平安時代初頭に廃棄されたものと考えられる。掘削時期は、裏込めからは少量の土器しか出土せず、判定しがたいが、井戸の排水用の溝と考えられるSD502が平城宮土器IIIの段階と考えられることから、奈良時代前半～中頃に掘削された可能性が高い。そうだとすると、SE507は約半世紀にわたって機能したものと推定される。

第IV章第2節で報告しているように、辺材の一部が残る横板の年輪年代測定を実施した。その結果、最外輪が651年と判明した。本来の辺材の厚さからさらに約30年分の年輪が見込め、伐採時期は7世紀末葉と考えられる。推定される井戸の掘削年代と数十年の開きがあることになり、転用材である可能性が高い。

SE507は難波京域でこれまで発見された中で最大の井戸である。横板井籠組井戸は「官衙の井戸」と呼ばれる[黒崎直1976]。平城京の同時期の例でも、内法120cmを越える井戸のほとんどが、「1町以上の宅地を占有する高位の貴族、官人など、きわめて限られた階層の住人の宅地内」で築かれたものという[奈良国立文化財研究所1990]。

SK506は掘形の平面形が長辺2.2m、短辺1.8mの矩形を呈し、深さ1.2mある。底から曲物737などの木製品が出土した(写真8)。埋土は地山を含む埋戻し土であり、掘削後すぐにその土で埋戻したようすが観察できる。埋土から遺物はまったく出土せず、時期は不明であるが、平面形態がSE507に類似し、最初に試みた井戸の掘形かもしれない。

ii) 遺物

a. 土器(図55・56、原色図版2、図版33～36・39～41)

209～216は土師器杯Aである。成形・調整ともに斉一性が高い。胎土は精良であり、焼成良好で灰褐色、あるいは黄褐色を呈する。211を除き、すべて完形品である。口縁部は斜め上に伸び、端部は小さく外反し、丸くおさめる。口縁端部内面に圈線が巡る。口縁部はヨコナデされ、底部は調整しない。径高指数は20前後であり、法量から2型式(杯A II・杯A I)に大別される。杯A IIは口径14.2cm前後、高さ3.0cm前後の一群であり、209～212が該当する。杯A Iは口径16.4cm前後、高さ3.5cm前後の一群であり、213・215・216が該当する。214は例外的に器高は前者で、径は後者に属する。SE507出土の土師器には、内面に螺旋状暗文を施すものが多く、外に弧を向けるタイプ(外向型)と中心に弧を向けるタイプ(内向型)がある。213・215は内向型に属する。211には内面に庖丁のような鋭利な刃物を使ってできた傷痕が残る。210・213・215は使用された痕跡が希薄である。

外面底部に209・215は「尼寺」、210は「百尼」、212は「百尼」と木の葉の絵画、214は「券」、216は「酢殿」の墨書がある。216は外面に3本線のヘラ記号が刻まれている。211は底部に「百」が書かれており、続く文字の一部がみえる。

217～222は土師器皿Aである。218を除き、完形品あるいはほぼ完形品である。口縁部は斜めに伸び、端部の形状は杯Aに近い。調整は口縁外面をヨコナデするのみである。径高指数は12.5であり、法量から2型式(皿A II・皿A I)に大別される。皿A IIは口径15.7cm、器高2.0cm前後であり、217・218が該当する。皿A Iは口径20.0cm、器高2.5cm前後であり、220・221が該当する。219は両型式の中間に位置する。219～221には内面に鋭利な刃物を使ってできた傷痕が残る。217・219は外向型、

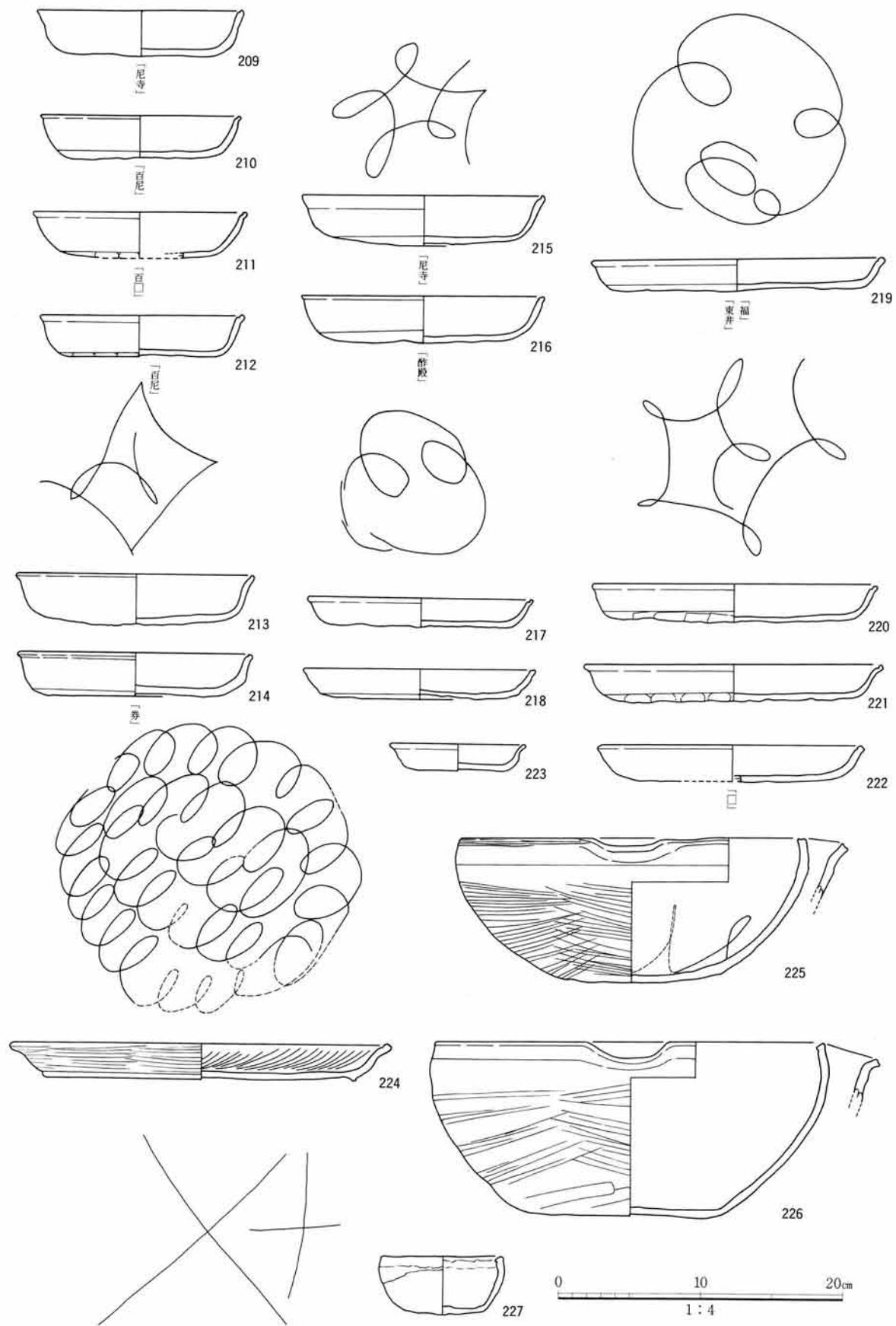


図55 SE507出土土器(1)

211・218・222・225は1層出土、そのほかは3層下部出土

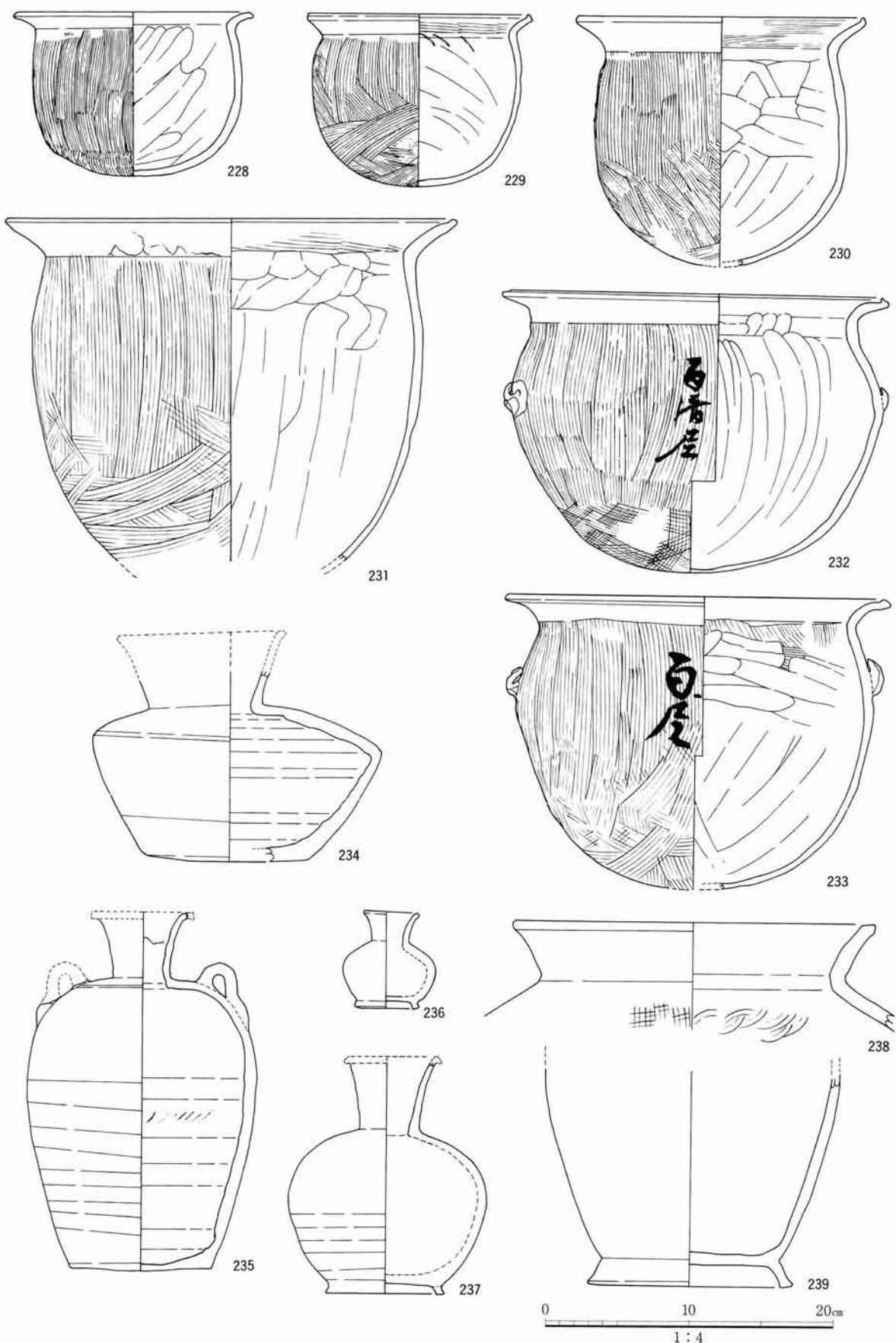


図56 SE507出土土器(2)

231・238・239は1層出土、そのほかは3層下部出土

220は内向型の螺旋状暗文を内面に施す。219の底部外面には「東井」と「福」の墨書がある。222の底部外面には大型の墨書があるが、中央を欠いていて、判読できない。221の底部外面には「×」のヘラ記号と棒状のもので引っかいた痕がある。223は土師器皿Cの完形品である。使用痕跡が希薄である。224は土師器皿Bであり、ほぼ完形品である。口縁部外面を磨く。内面には螺旋状+放射状暗文をていねいに施す。底部外面には「×+」のヘラ記号が刻まれる。225・226は片口の土師器鉢Bである。225は内面に内向型の螺旋状暗文を施し、ナデで調整する。体部外面はヘラケズリ後、粗いミガキで調整する。226は内面に茶色付着物がある。調整は内面がていねいなナデ、体部外面はミガキである。227は完形の小型鉢である。粘土紐の接合痕を明瞭に残す。内面片方に煤が付着しており、灯火器として利用されている。228～233は土師器の甕である。228・229はほぼ同法量の平底ぎみの小型甕の完形品である。228は内面をケズリ、外面をハケで調整する。口縁端部は内外面ともヨコナデする。外面に煤が全面に、焦げが口縁部近くに付着する。229の調整は口縁部内面に粗いハケを用いる以外は、228と同じである。230は中型の甕である。231は大型の甕である。頸部がややすぼり、長胴ぎみの体部に斜めに延びた大きめの口縁部をつける。230・231とも調整は229と同じである。232・233は甕Bである。いずれも、ほぼ完形品である。ほぼ同じ法量、器形である。退化した把手を付ける。

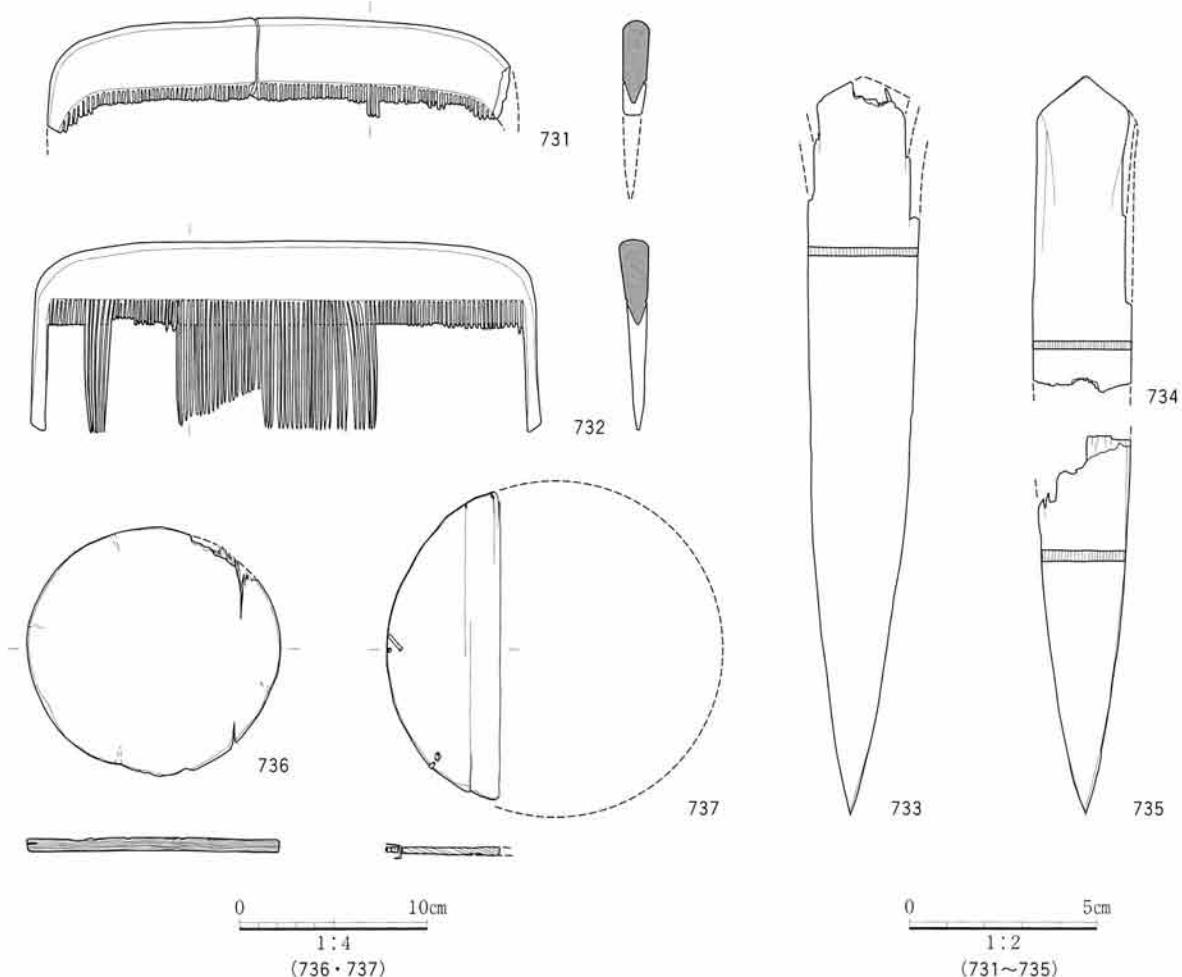


図57 SE507・SK506出土木製品

SE507(上面:736、掘形:733・735、1層:732・734、3層:731)、SK506(737)

233は内面上半部にハケが残る。ハケの後、ヘラケズリする。外面はハケである。口縁内面はハケで、外面はヨコナデである。232は体部外面に「百濟尼」、233は「百尼」の墨書がある。234は須恵器の平瓶である。口縁部を欠く。灰白色を呈し、焼成がややあまい。235は須恵器壺Nである。口縁端部と把手の片方を欠く。体部中央までていねいに回転ヘラケズリを施す。236は高台の付いた小型の壺Mである。胴部の形態はやや扁平ぎみである。237は壺Lであり、口縁端部を欠く以外は完形品である。238は甕である。内外面ともていねいなナデで外面の格子タタキ、内面の当て具の痕が消されている。239は壺の高台部であり、内面に白い付着物がある。

SE507の土師器はほとんどが在地系の土器で占められる。杯Aは小型化しており、調整は口縁部のナデのみである。土師器杯皿の法量と須恵器壺Mの存在から、ほぼ平城宮土器VIの段階にあたり、奈良時代末葉～平安時代初頭のものと考えられる。

SE507の3層下部から見つかった井戸鎮めに用いられたものと考えられる土器は23個体あり、その内訳は土師

器が杯A 7・皿A 4・皿B 1・皿C 1・片口鉢1・小型鉢1・甕A 3・甕B 2、須恵器が壺N 1・壺L 1・壺M 1である。

b. 木製品(図57、図版48・49)

731・732は長方形で肩に丸みのあるA II型式の横櫛である。歯の挽き出し位置を決める切り通し線は背の上縁に平行している。731は長さ12.6cm、復元幅4.8cm、最大厚0.7cmである。総歯数91本で、3cmあたり約24本である。732は長さ13.3cm、復元幅5.0cm、最大厚0.8cmである。総歯数は112本で、3cmあたり約27本である。表面をていねいに研磨する。樹種はいずれもイスノキである。733～735は斎串である。いずれも上端を圭頭状にして下端を剣先状にしたり、上端近くの木口側面の左右から切込みを入れるC型式に属する。733は木口側面の左右から2つずつ切込みを入れたC IV型式である。長さ19.4cm、最大幅2.9cm、厚さ0.2cmである。734は切込みを1つ入れたC III型式で、残存長8.3cm、幅2.6cm、厚さ0.2cmである。735はC型式の下半部の破片である。残存長10.0cm、最大幅2.4cm、厚さ0.3cmであり、3点の中でもっとも厚い。736は曲物の底板である。側板を欠き、径は13.3cmである。板の周縁に木釘の孔が4個所認められる。うち1つに木釘が残る。裏面の傷みが著しい。SE507上面から出土した。737は曲物の蓋板である。側板を欠く。樺皮結合曲物Bに属し、周縁に寄った結合孔が2個所にある。733～737の樹種はすべてヒノキである。

c. 金属製品(図58、図版53・55)

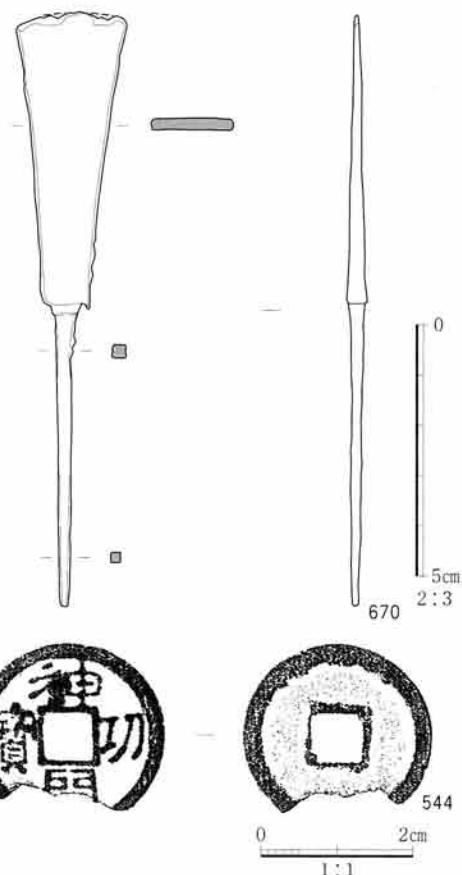


図58 SE507出土鉄鎌・銭貨

3層下部(544・670)

670は斧矢式鉄鎌で、全長11.72cm、茎長6.05cm、刃幅2.12cm、刃厚0.23cm、重さ15.9gを測る。

神功開宝544は「刀」の第2画が長く延び、「長刀」と呼ばれるもので、E型式に属する。範の崩れが顕著である。670・544とともに3層下部から出土した。

5) SX508(図59~61、図版10・38)

A区中央やや北寄りで検出した。東西1.1m、南北1.0mの範囲に土師器・須恵器・竈形土器・円筒埴輪など時代の異なる遺物の破片が敷き詰められていた。掘形がなく、面を揃えて敷くことを意図したものと考えられるが、機能・目的については不明である。SE505の埋没後に造られていること、第5層で覆われていることから奈良時代後半~末葉の遺構と考えられる。

出土遺物のうち、円筒埴輪は粗いタテハケで調整する古墳時代後期のものである。240は須恵器杯Aである。241は杯Bである。242は長頸壺の胴部である。上半部に自然釉が付着する。243も長頸壺である。肩部に竹管文と櫛描き列点文を巡らせ、頸部を竹管文と沈線で飾る。頸部の竹管文は全周せず、途切れる。口縁部内面と肩部に灰をかぶる。口径15.4cm、現存高24.2cmである。これらの須恵器は飛鳥時代後半~奈良時代前半のものと考えられる。

244は用途不明の大型須恵器である。上下は不明であるが、ここでは図のように仮定する。截頭円錐形が一方へ傾いたような形態をとり、高さ55.2cm、底部の径51.5cmである。約4割残存し、上下まで接合する部位があり、全体の形状を復元することができた。上半部が傾いてい

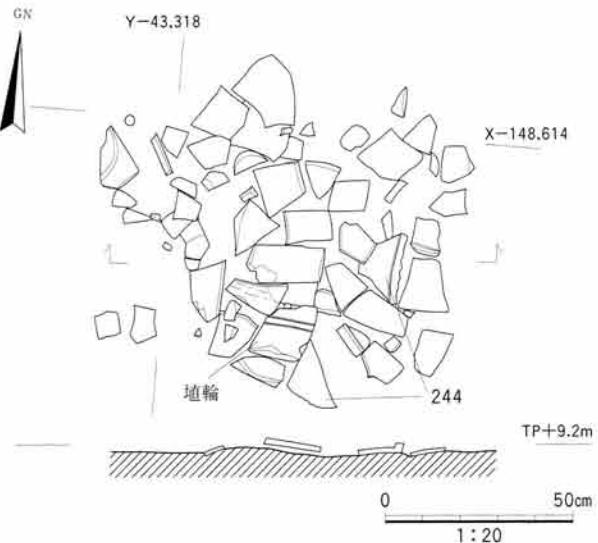


図59 SX508実測図

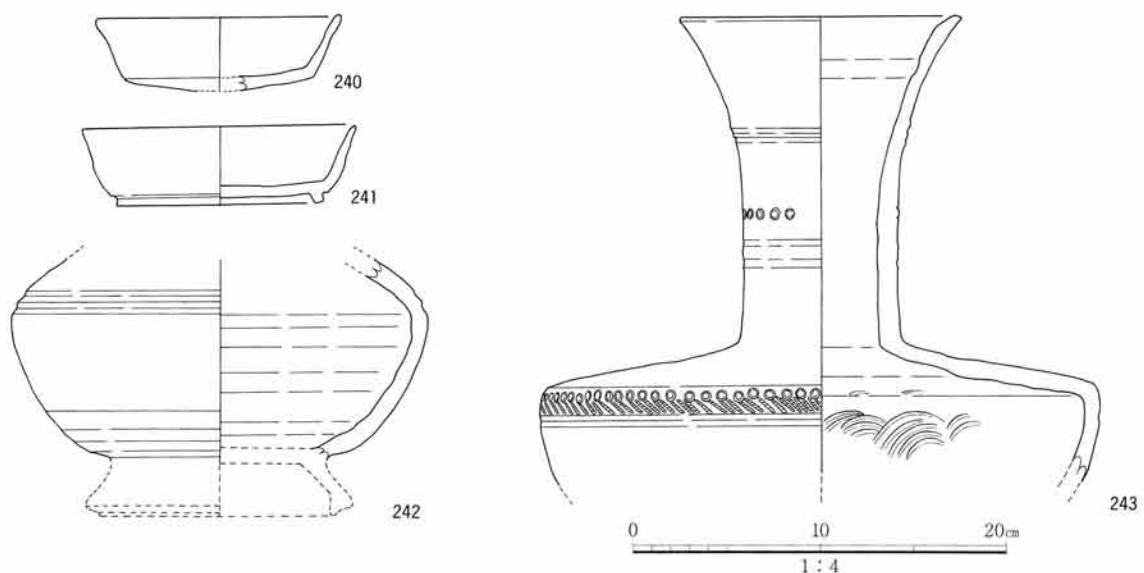


図60 SX508出土土器

るのは、本来の意図によるものか、あるいは焼け歪んだのかよくわからない。把手は2つ見つかった。把手の剥離痕が体部の半ば下寄りにあり、3個所以上に把手があったことが確認できる。復元では4個所としている。

外面は把手以下を格子タタキの後に、横方向のヘラケズリ、把手近くを下から上、上半部を上から下へのヘラケズリで仕上げる。口縁部は肥厚する。内面の調整は横方向のナデである。胎土に小礫が多く混入する。また、混和材と思われる白色粘土粒が斑点状をなし、黒色粒子がケズリによって流れで尾を引く特徴があり、ほかの須恵器と明確に区別できる。底部の2個所で焼成前乾燥時の亀裂を粘土で補修しているが、焼成後、効果なく割れてしまっている。底部外面に低い突帶を貼付ける。底面は刀子のような鋭い利器で切り取っており、藁の痕跡が残る。

類例は大阪府柏原市高井田遺跡の谷-1東半出土例(図193の遺物番号126)にある[柏原市教育委員会1989]。焼成のあまい須恵質の破片であり、全体像がうかがえないが、体部下端が肥厚すること、把手がつくこと、体部が傾くことなどの特徴が244と一致する。報告書では竈と推定されているが、口縁部・焚口部を欠失しており、244のような形態に復元することも可能である。6世紀末葉～7世紀中葉の遺物とともに出土しているという。

244の破片はおもに第5層から出土した。その出土地点はSX508を中心にして、18個所に及び、もっとも離れた2地点は20m隔たっていた。遺物埋没後の空間移動を伝える興味深い資料である。

6) そのほかの遺構と遺物(図32・61、図版38)

SK509はA区北東部で検出された。遺物が集積する範囲を径1.8mの範囲で確認したが、明確な遺構の輪郭を見つけることができなかった。穴を掘らず、土器をまとめて投棄した跡と判断した。出土遺物は土師器・須恵器があり、須恵器杯B蓋245・杯A246などが出土した。245は焼け歪み、天井部が丸い。245・246の器形からみて、SK509は奈良時代前半のものと考えられる。SD503はA区南東部の壁沿いで検出した長さ5.2m、幅0.4m、深さ0.1mの細長い溝状遺構である。SK515に切られる。土師器・須恵器・瓦が出土している。須恵器の蓋247はスカシ孔があり、外面に樹木状のヘラ描きを

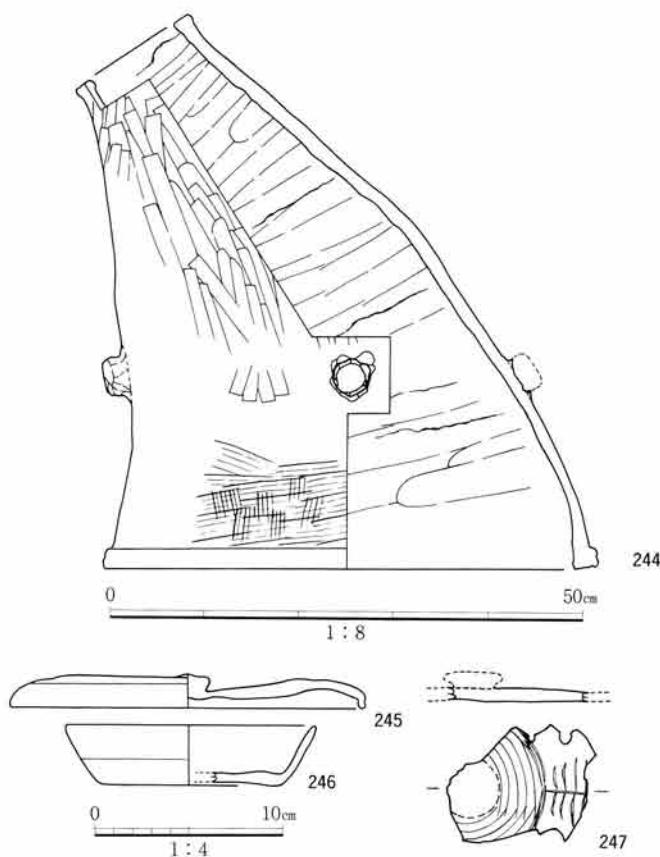


図61 SX508ほか出土土器

SD503(247)、SX508(244)、SK509(245・246)

した珍しい資料である。天井部をていねいにヘラミガキしており、金属器の香炉を写したものだろうか。時期を特定できないが、埋土や周辺の遺構の状況から飛鳥時代末葉～奈良時代前半のものと思われる。C区の南端では北東から南西に伸びるSD510が検出された(図7、図版19)。幅4.0m、深さ1.2m、長さ5.0m以上ある。埋土は黄褐色系の粗粒砂質シルトが自然堆積していた。出土遺物が乏しく、古代の遺構としか判断できない。

7) 小結

調査地では奈良時代に属する顕著な柱穴は検出されておらず、当時の活動の中心は地形的に安定した調査区北側にあったものと考えられる。奈良時代の遺構で時期が判明するものは、8世紀第2四半期～後半にあり、この時期に人間活動がもっとも活発化する。枝錢が出土したSD501や多数の墨書土器が見つかったSE507はその代表的なものである。

SE507から出土した「百済尼」・「百尼」・「尼寺」の墨書土器によって、「百済尼寺」というべき寺院の存在が明らかになった。このほかに調査地からは寺院の存在を示す多様な遺物が出土している。第一に飛鳥時代末葉～平安時代前期の多数の瓦がある。第二にSD501から出土した大和葺きの下材は、法隆寺金堂の裳階の例に見られるように、寺院に用いられたものだろう。第三に多数の灯明皿、あるいは灯明器として用いられた土器は、一般集落ではほとんど見られないものであり、日常的な照明・仏会などに大量の燃灯を要した寺院に相応しい。この寺院が「百済尼寺」である可能性はきわめて高い。

SD501からは銅の切り屑や、金鉗といった工具、銅粒や鉱滓が見つかっていることから、調査地の近辺に金属製品の加工に係わる工房が存在したことはまちがいない。ただ、これまで知られている鋳造・鋳錢工房に比べると、銅粒・銅板・鉱滓が圧倒的に少なく、鋳造遺跡につきものである坩堝や輔羽口が確認されていない。このことは工房がすぐ近くではなく、ある程度隔たったところにあることを示しているのかもしれない。SD501に先行する飛鳥時代末葉のSD604からも数点の銅板が出土しており、工房の時期はこの時期までさかのほる可能性がある。

帶金具などの銅製品は漆まで塗られた完成品であり、未成品の可能性のある巡方1点を除けば、失敗作あるいは未成品は枝錢と和同開珎のバリ錢だけである。こうした状況から和同開珎がこの地で製造された可能性も十分考えられる。この点については第V章で触れることにしたい。 (岡村)

註)

(1) 黒色付着物の分析を佐藤昌憲氏(奈良国立文化財研究所)に依頼した。以下にその報告を掲載させていただく。

先端の黒色付着物は、一見、漆のようであるが、微量(1 mg 以下)を採取し、金属台上でプレスして薄層とし、顕微赤外分析装置で赤外吸収を測定したところ、スペクトルは漆とかなり異なった特徴を示した。

吸収の最大値は約 $1,436\text{ cm}^{-1}$ にあり、また、約 866 cm^{-1} 、 737 cm^{-1} に2本の鋭いピークを示す。約 $2,954\text{--}2,866\text{ cm}^{-1}$ に3本のメチレン基による有機物としての特徴をもっている。

標準品として完全に一致する物質はないが、ほぼ同じような赤外吸収パターンを示すのはピッチ類である。これは天然のアスファルト由来の可能性が高い。

第5節 包含層出土の古代の遺物

第5・4b層からは、コンテナ200箱以上の遺物が出土した。その量は飛鳥・奈良時代の遺構から出土した遺物量に匹敵する。第5層以上の包含層で注目すべき遺物は緑釉陶器である。緑釉陶器は第6層上面あるいは第5層基底面で検出した遺構ではまったくみられなかった。第5層から6点、第4b層から20点、第4a層から2点、第3層から1点が出土している。また、錢貨では和同開珎・神功開宝に代わって、隆平永宝(初鑄796年)が登場し、平安時代初期以降に第5層が堆積したことを示している。この節ではおもに遺跡の時期・特徴に係わる遺物を報告する。

1) 土器・土製品(図63、図版14・37・38)

248～260は第5層から出土した。248は土師器杯Bである。胎土は精良で赤褐色に堅く焼き上がる。外面高台部付近に「百」の墨書がある(図75)。平安時代前期のものであろうか。249・250は土師器皿Cである。249は平城宮土器VIの頃のものであろう。251は土師器皿Aである。口縁部は外傾する。252は緑釉碗である。銀化のため黒色を呈する。底部を削り出す。253～255は緑釉皿であり、高台を削り出す。253には底部に陰刻があるが、文字か記号か判別できない。254・255は蛇の目高台をもつ。以上の緑釉はすべて軟陶であり、9世紀中頃のものと考えられる。256は奈良二彩の火舍である。口縁部を外反させ、底部に脚の痕跡が残る。257・258は須恵器杯B蓋、258は内面に「廣」の墨書がある(図75)。259・260は圈脚円面鏡である。陸部と海部が段差で区別されるタイプである。259は外堤径が16cmであり、圈足部に15個前後の長方形スカシ孔を入れる。260は外堤径で32.8cmを測る大型品である。復元高13cm、圈足部に33個前後の長方形スカシ孔を入れる。以上から、第5層は9世紀中頃までに堆積した包含層と考えられる。

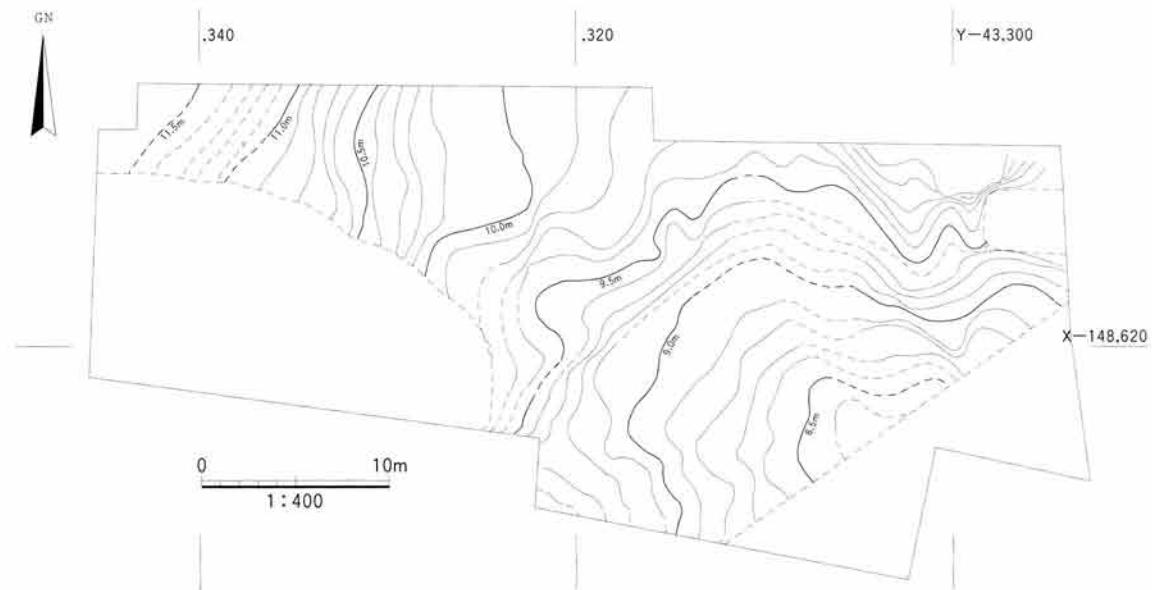


図62 第4b層下面平面図

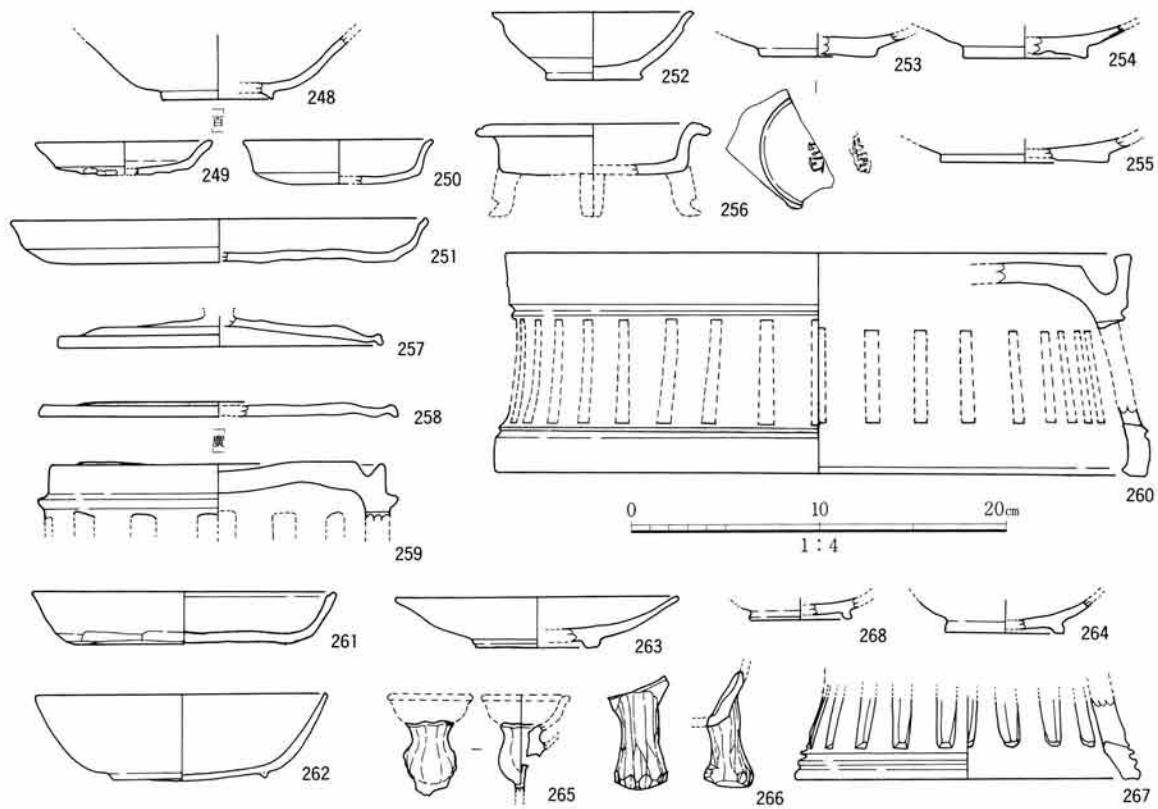


図63 包含層出土遺物(1)

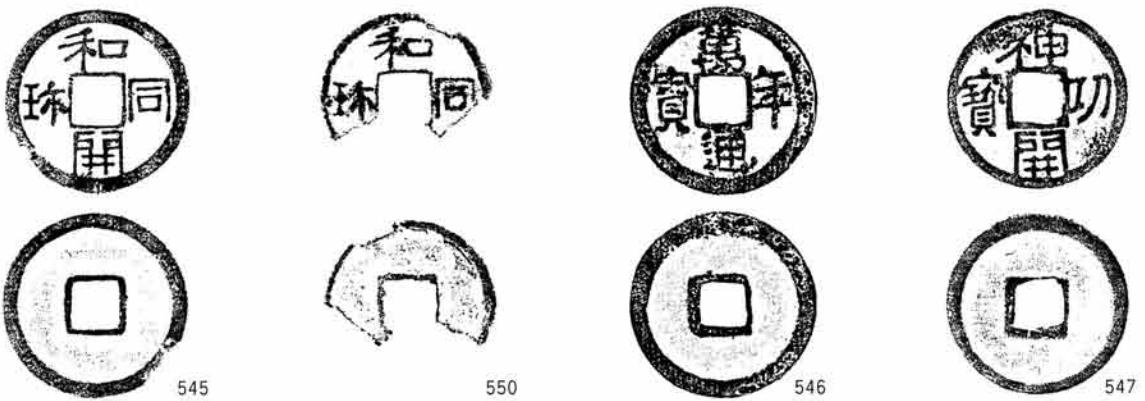
第5層(248~260)、第4b層(261~267)、第3層(268)

261~267は第4b層から出土した。261は土師器皿Aである。口縁端部は外反し、ほとんど肥厚しない。262は黒色土器A類の椀である。深い椀形に小さな輪高台を付け、器壁は薄い。内外面にミガキが部分的に見えるが、磨滅のため詳細は不明である。9世紀後半のものだろう。263・264は緑釉陶器皿である。263は硬陶であり、削り出し高台である。264は軟陶で、貼付け高台である。265は淨瓶の受水部である。軟質であり、9個所程度の面取りをする。猿投産であろう。266は火舎の獸脚と思われる。脚は15個所程度面取りし、5個所の切れ込みを入れて指を表現する。水平な底部から直線的に斜め上方に口縁部が開く器形が復元できる。267は圈脚円面硯であり、スカシ孔は約22個穿たれる。底径18.2cmである。第4b層の時期は黒色土器椀262や、緑釉の特徴から9世紀後半と考えられる。268は軟陶の緑釉陶器椀である。貼付け高台であり、高台部に施釉しない。10世紀前半のものだろう。中世の地層から出土した。

2) 銭貨・金属製品(図64、図版52~56)

銭貨・鋳棹・鍛造鉄斧・帶金具が出土した。銭貨は第5層から和同開珎1枚・万年通宝1枚・神功開宝1枚・隆平永宝2枚の計5枚、第4b層から和同開珎1枚・隆平永宝2枚の計3枚が見つかった。

545・550はもっとも標準的なA型式の和同開珎である。万年通宝546は「年」の第4画が横位置につく「横点萬年」と呼ばれるG型式である。547は神功開宝である。「刀」の第2画が長く延び、「長刀」と呼ばれるもので、E型式に属する。「神」の上と「功」の下に、範の崩れがみられる。548・549・551・552は隆平永宝である。548・551は「平」の第1画と第4画の間隔が狭く、末画が長い「長平」と呼ばれ

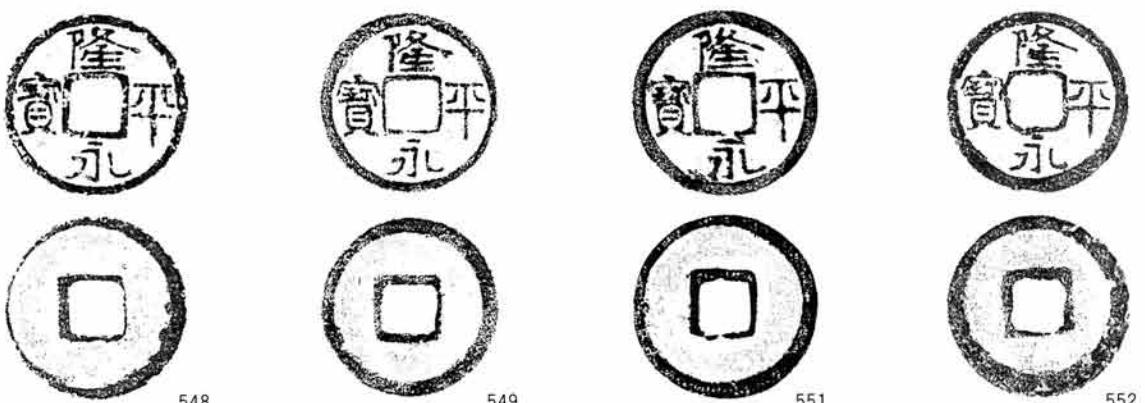


545

550

546

547



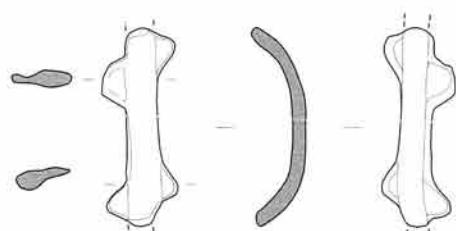
548

549

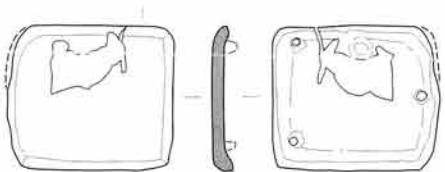
551

552

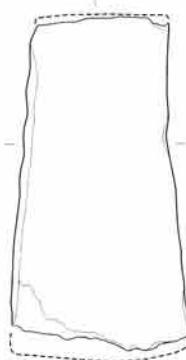
0 2cm
1:1



671

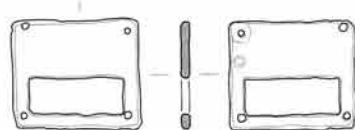


673



672

0 5cm
2:3



674

図64 包含層出土遺物(2)

第5層(545~549)、第4b層(550~552、672・674)、第4a層(673)、第3層(671)

るC型式である。548は型合わせがずれている。549・552は外縁の内径、文字が小さく、「中字」と呼ばれるG型式に属する。552に型合わせのずれがあり、549は銭面に鑿で加工された痕がみられる。

671は鋳棹である。全体に磨滅が著しい。鋳造後に変形し、湾曲している。棹の左右に2つずつ堰がつく。長さ3.87cm、幅1.45cm、重さ6.1gである。棹の断面形は半円形で、幅0.60cm、厚さ0.28cmである。銭貨のような小型製品の鋳棹である可能性が高い。中世の包含層から出土した。672は鍛造鉄斧である。刃部先端と袋部の折り返しを欠損する。現存長6.73cm、刃幅3.52cmであり、袋部は厚さ0.25cmの鉄板を折り曲げて、内寸2.35cm×0.73cmの中空を作る。袋部は全長のほぼ半分を占める。重さは46.1gである。大きさから手斧であろう。第5層から出土した。673は鉈尾の表金具である。錆化が著しく、中央の一部が欠ける。鉈足が3つつく。SD501出土例と比べると、端部の形態が直線的である。長さ3.30cm、幅2.90cmである。第4a層から出土した。674は巡方の裏金具である。風化が著しい。長さ2.60cm、幅2.20cm、スカシ孔の大きさは長さ1.91cm、幅0.72cmである。第4b層から出土した。

3) 小結

先述したように、第5層は9世紀中頃、第4b層は9世紀後半に堆積した遺物包含層である。これらの地層の堆積により、谷地形の平坦化が進んだ。調査地ではこの時期に属する明確な遺構は検出されていないが、綠釉陶器・円面鏡など多様な遺物の存在から、前代に引き続き活動域にあったものと考えられる。第5層からは多数の瓦が出土しており、平安時代初頭と考えられる瓦を含んでいる。後続する時期の明確な瓦がないことは、第5層の堆積時に調査区北側に想定される寺院の廃絶あるいは規模縮小などの変化を示唆するものかもしれない。

(岡村)

第6節 平安時代以降の遺構と遺物

1) 平安時代の遺構と遺物(図65・66、写真9、図版14)

平安時代の遺構には柱穴・土壙がある。第4b層上面もしくは地山上面で検出された。A区の中央から南東に向っては、中世の耕作に伴う地下げSX301によって削平されており、遺構は調査区の北西部に偏って検出された。北西隅では柱穴(SP410～421)、中央寄りでは土壙(SK423～446)が主体をなす。柱穴群はTP+11.5m前後、土壙群はTP+10.8m前後にあり、高低差がある。土壙群は24個からなる。大きさ・形態はさまざまであるが、深さは20cm以内の浅いものがほとんどである。埋土は下層が砂礫、上層が灰黄褐色系の砂質土が自然堆積する特徴がある。柱穴は12個見つかった。一辺35～50cmの隅丸方形で、柱痕跡の径は15～20cmある。SP413・417・419はほぼ柱筋がとおり、北に広がる建物と考えられる。東西2間分を検出し、1間は180cmである。ほかの柱穴は組み合わないが、北に向けて広がっているようである。土壙・柱穴とも出土した遺物は細片が多く、正確な時期を決めがたいが、黒色土器A類を含むものが多く、9世紀後半から10世紀前半頃のものと考えられる。

中央北寄りでSK401を検出した。東西130cm、南北120cmの歪な円形をした土壙である。南西部で一段凹み、深さは25cmある。埋土は炭を若干含んだ粘土質シルトであり、底面近くで口縁の欠けた黒色土器A類の椀269が見つかった。10世紀前半頃のものと考えられる。SK401の北側で東西に6本並ぶ杭列を検出した。現状で杭はやせ細っているが、その痕跡は径15～25cmあり、SP405のように50cm以上打込まれているものもあった。第4b層上面で検出されていること、杭列の中央にSK401が位置していることから、SK401と杭列は関連した遺構である可能性が高い。機能・用途は不明である。

2) 中世の遺構(図67、図版15)

第3層基底面で土壙・段々畑を検出した。SK305は東西4.0m、南北2.0mの不整形な土壙であり、深さ0.8mあった。埋土からは13世紀頃の瓦器椀が出土した。また、谷筋が埋没してできた窪地の傾

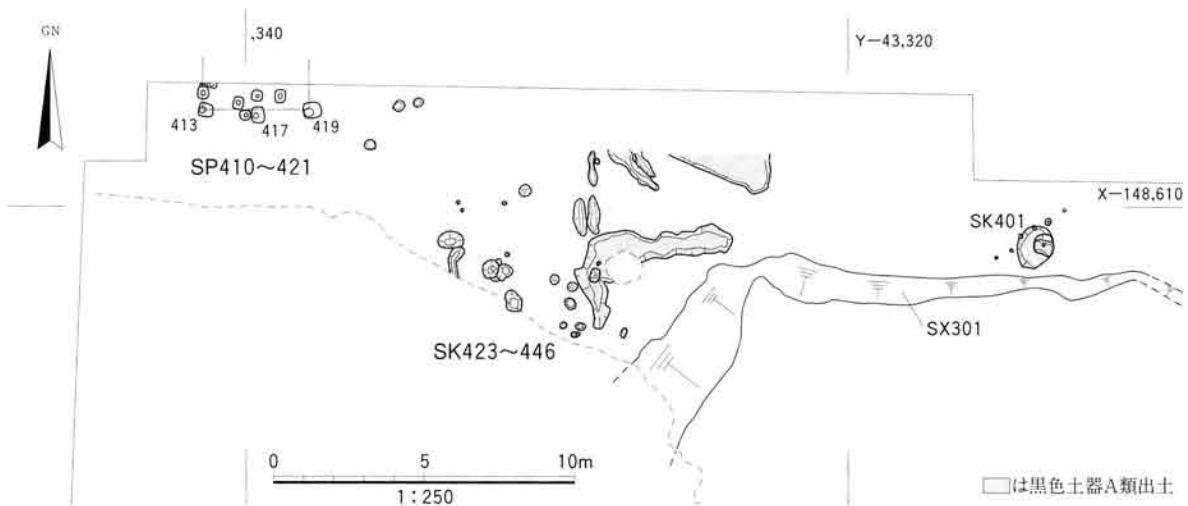


図65 第4b層上面検出遺構平面図



写真9 SK401検出状況(上:北から、下:東から)

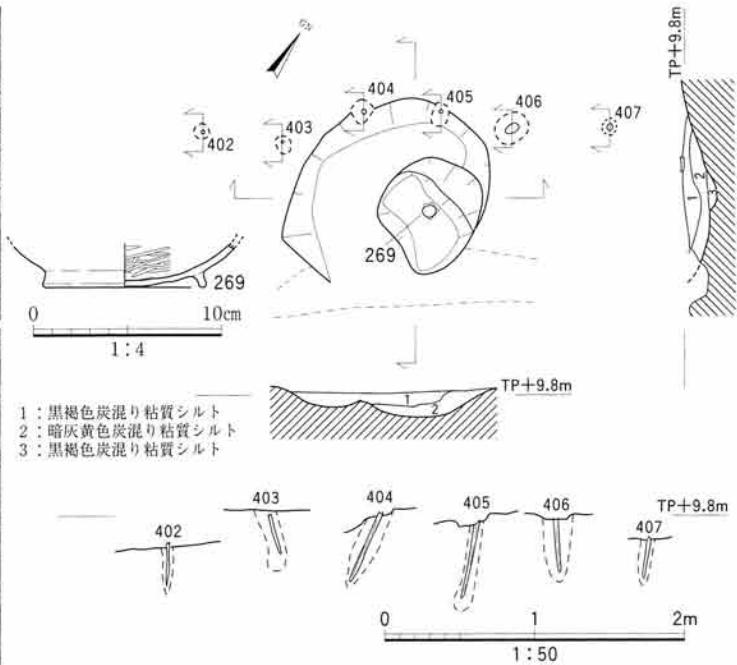


図66 SK401実測図

斜に沿って、幅0.3m前後、深さ0.1m前後のSD307～312が見つかった。段々畑に伴う耕作溝と考えられる。灰色粘土質シルトの埋土から13世紀頃の瓦器片が出土した。

3) 小結

9世紀後半～10世紀前半の遺構の規模は、前代の飛鳥・奈良時代に比べて縮小しているものの、北西部に建物群があり、調査区は集落の一角に当ると考えられる。しかし、遺構や包含層に含まれた遺物量は急減している。奈良時代の遺構を埋没させた第5層、その後に形成された第4b層の段階で、この地域の景観に大きな変化があったように思われる。また、この後、13世紀頃まで顕著な遺構・遺物は認められない。中世以降の調査地は完全に耕地化している。

(岡村)

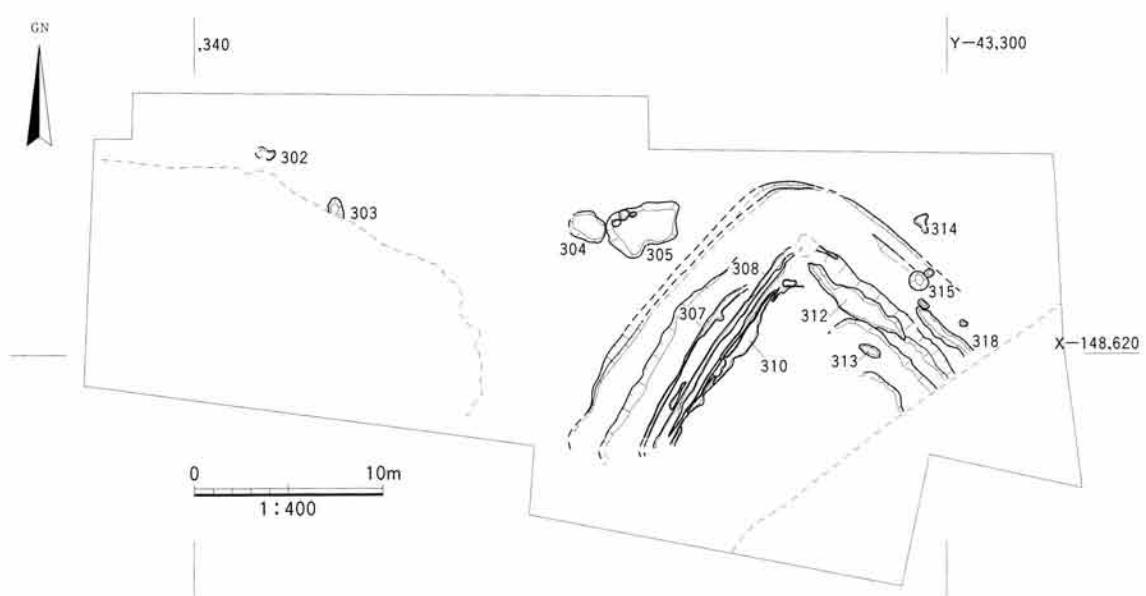


図67 第3層基底面検出遺構平面図

第7節 墨書き土器・刻書き土器(図68~75、表6、図版39~41)

飛鳥・奈良時代の遺構、平安時代の包含層から出土した墨書土器は84点、刻書土器は1点を数える。墨書土器の内訳は土師器69点、須恵器15点と土師器が大半を占める。器種では甕の6点以外は、78点が杯・皿の食器類である。墨書銘の位置は、甕はすべて体部外面であり、杯・皿は底部外面が72点、杯蓋の内面が1点、外面が1点、体部外面が4点である。

遺構別ではSD501から48点と約6割を占め、次にSE507が13点、そのほかの飛鳥・奈良時代の遺構から11点、包含層から12点である(図68)。先述したように、SE507からは井戸鎮めに用いられたと考えられる土器が23点あり、そのうち9点に墨書が認められた。

遺構別にみると、SD603からは270～272、SD604からは92・269が出土した。飛鳥Vの遺構であり、これらの墨書土器片は飛鳥時代末葉以前のものと判断される。次に奈良時代中頃～後半の遺構であるSD501～503、SK504・SE505から54点、奈良時代末葉～平安時代初頭と考えられるSE507から13点、もっとも新しい資料は第5層から出土した248である。平安時代前期の土器であろう。

84点中、墨痕しか見えないものが13点ある。残りの71点に文字あるいは記号が確認でき、そのうち判読可能なものは45点ある。これらの文字の記載内容を多い順に並べると、1：寺院に係わるもの22点、2：「盤」という器名を示したもの7点、3：月日を記したもの2点、そのほかは4：施設名、5：吉祥句、6：記号などが各1点ずつとなる。

1 : 「百濟尼」(232)、あるいは「百濟尼」と推定されるもの(270)、「百尼寺」(117)、「尼寺」(184・209・215・276)、あるいは「尼寺」と推定されるもの(305)、「尼」(277~279)、「百尼」(210・233)、「百尼□」(311)、「寺」(282・309)、「寺」と推定されるもの(284)、「□寺」(283)、「百」(248・313)、「百」と推定されるもの(310)、「百□」(211)がある。「百濟尼」・「百尼寺」・「百尼」・「尼寺」は「百濟尼寺」を意味するものと考えられる。

1点しか見つかっていないが、92の「僧寺」は注目に値する(図69)。「百濟尼寺」と対をなす百濟寺を示すものと考えられる。やや扁平な甕の体部外面に墨書があり、SD603とSD604の合流地点から出土した。甕は飛鳥Vのものと思われる。

「百濟尼寺」を示すもっとも古い墨書き器は270の「□齊尼」であり、飛鳥時代末葉頃のSD603から出

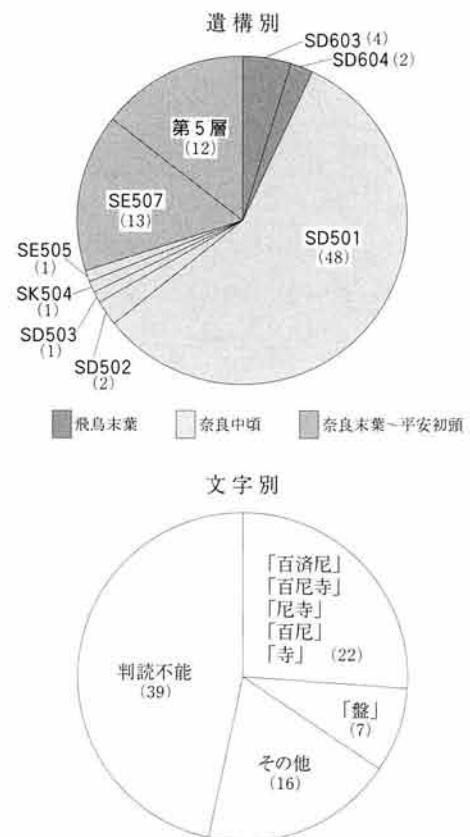


図68 墨書き器の内記

表6 墨書・刻書土器一覧表

遺構	番号	文字	土器	器種	記載位置	備考	遺構	番号	文字	土器	器種	記載位置	備考
SD603	270	□□尼	土師器	食器類	底部外面	□齐尼カ	SD501	299	□	土師器	甕	体部外面	
	271	□	須恵器	杯A	底部外面	□=本カ		300	□	土師器	食器類	底部外面	
	272	得	土師器	食器類	底部外面			301	□	土師器	食器類	底部外面	□=尼カ
SD604	92	僧寺	土師器	甕B	体部外面		SD502	302	□	土師器	食器類	底部外面	暗文あり
	269	知	土師器	食器類	底部外面			303	□	土師器	食器類	底部外面	「〇〇」の記号か
SD501	117	百尼寺	土師器	杯A	底部外面		SD503	304	□	土師器	食器類	底部外面	□=俘カ
	119	「の」字状	土師器	杯A	底部外面	記号か		308	□	土師器	食器類	底部外面	「堂」などの冠の部分か
	120	四月八日	土師器	杯A	底部外面		SK504	184	尼寺	土師器	杯A	体部外面	暗文あり
	131	盤	土師器	杯A	底部外面	暗文あり		309	寺	土師器	食器類	底部外面	
	154	□月	須恵器	杯B	底部外面	□=四カ	SE505	209	尼寺	土師器	杯A	底部外面	
	273	□	須恵器	杯A	底部外面	□=百カ		210	百尼	土師器	杯A	底部外面	
	274	秋	須恵器	杯B	底部外面			211	百□	土師器	杯A	底部外面	
	275	□	須恵器	杯B	体部外面	転用侃		212	百尼	土師器	杯A	底部外面	文字の上に葉の絵
	276	尼寺	土師器	食器類	底部外面			214	券	土師器	杯A	底部外面	
	277	尼	土師器	食器類	底部外面	暗文あり		215	尼寺	土師器	杯A	底部外面	
	278	尼	土師器	食器類	底部外面			216	酢殿	土師器	杯A	底部外面	焼成後のヘラ記号
	279	尼	土師器	食器類	底部外面			219	東井・福	土師器	皿A	底部外面	
	280	□	土師器	食器類	底部外面	□=尼カ		222	□	土師器	皿A	底部外面	記号あるいは絵画か
	281	□	土師器	食器類	底部外面			232	百済尼	土師器	甕B	体部外面	
	282	寺	土師器	食器類	底部外面			233	百尼	土師器	甕B	体部外面	
	283	□寺	土師器	食器類	底部外面			305	□寺	須恵器	食器類	底部外面	□=尼カ
	284	□	土師器	食器類	底部外面	□=寺カ、暗文あり		306	十	須恵器	杯B	体部外面	あるいは十カ
	285	倭家	土師器	食器類	底部外面	暗文あり		307	□	土師器	食器類	底部外面	刻書土器、□=林カ
	286	盤	土師器	食器類	底部外面	暗文あり	第5層	248	百	土師器	杯B	高台附近	堅い焼き、胎土精良
	287	盤	土師器	食器類	底部外面			258	廣	須恵器	杯B蓋	蓋内面	
	288	盤	土師器	食器類	底部外面			310	□	土師器	食器類	底部外面	□=百カ
	289	□	土師器	食器類	底部外面	□=可カ		311	百尼□	須恵器	食器類	底部外面	
	290	□	土師器	食器類	底部外面			312	□□□	須恵器	杯B	底部外面	
	291	十	土師器	食器類	底部外面	あるいは十カ		313	百	須恵器	杯B	底部外面	
	292	秋	須恵器	食器類	底部外面			314	□西	土師器	食器類	底部外面	
	293	□	土師器	食器類	底部外面			315	盤	須恵器	食器類	蓋外面	
	294	行	土師器	食器類	底部外面			316	盤	土師器	食器類	底部外面	
	295	□	土師器	食器類	底部外面			317	盤	土師器	食器類	底部外面	
	296	□	土師器	甕				318	□	土師器	食器類	底部外面	写真のみ
	297	□	土師器	食器類	底部外面			319	□	土師器	食器類	底部外面	写真のみ
	298	□	土師器	食器類	底部外面								

※ 墨痕しか確認できないものは除いた。

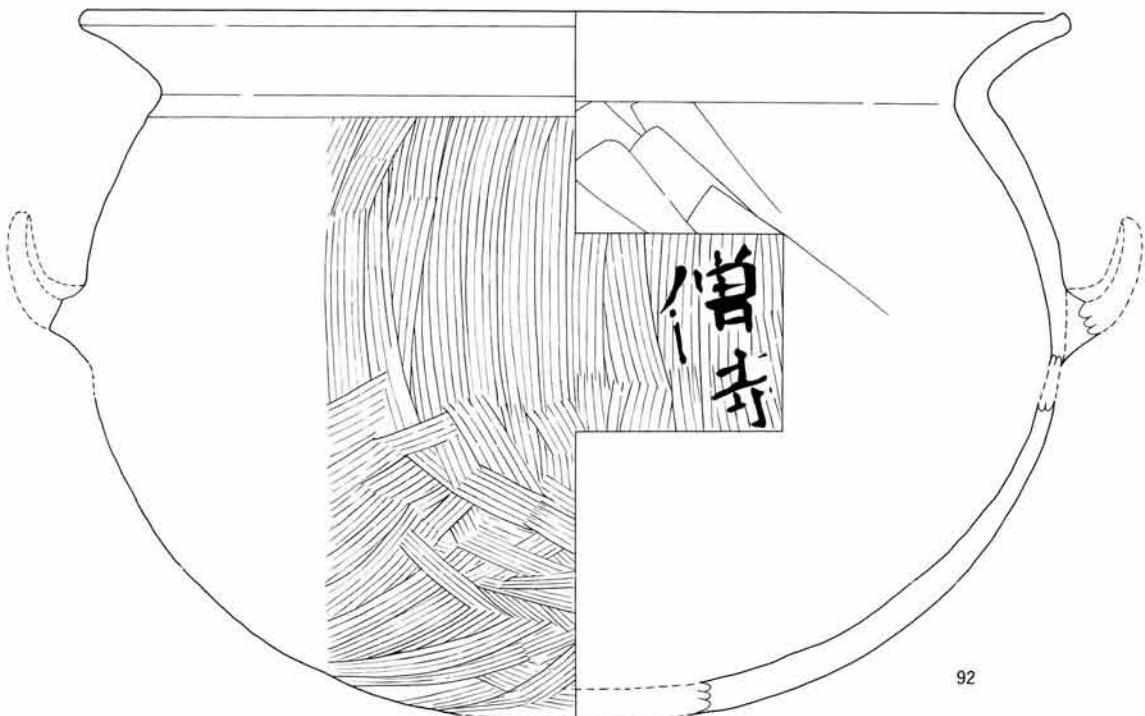
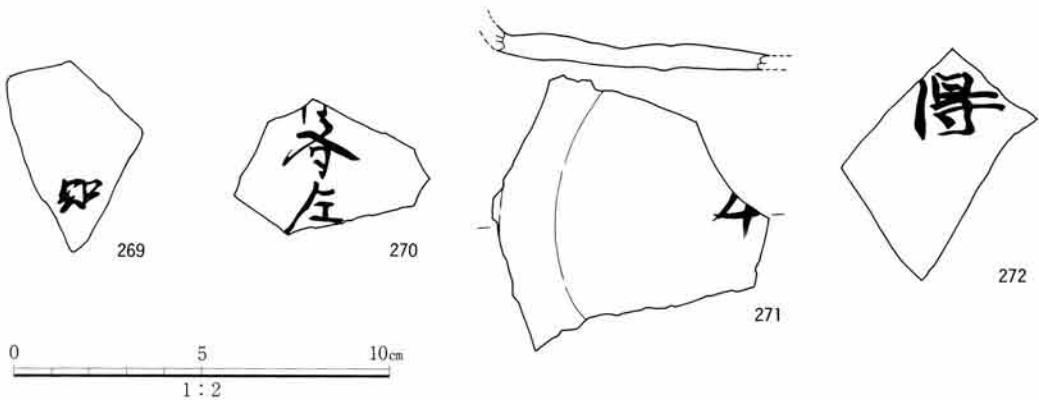


図69 飛鳥時代末葉の遺構出土の墨書土器

SD603(270~272)、SD604(92・269)

土している。また、もっとも新しい墨書土器は248の「百」であり、平安時代前期のものと考えられる。したがって、墨書土器からみると、「百濟尼寺」の存在は飛鳥時代末葉～平安時代前期に確認できることになる。

2 : 「盤」と記された土器131は、杯Aに分類されるものである。

3 : 120は「四月八日」と読める。4月8日は釈迦の生誕を祝う灌仏会に当り、また、飛鳥寺の丈六の銅仏像の完成を伝える『日本書紀』推古天皇14(606)年4月壬辰条に「是年より初めて寺ごとに四月八日、七月の十五日に設斎す」とあるように、7月15日の盂蘭盆会とも連動した重要な仏教儀礼である。154の第1字も、木簡709の第1字と類似し、「四」である可能性が高い。

4 : 216の「酢殿」は、文字通り酢を管理したことであろう。

5 : 219の「東井」・「福」のうち、「福」は吉祥句である。「東井」は東にある井戸をたんに表したもの

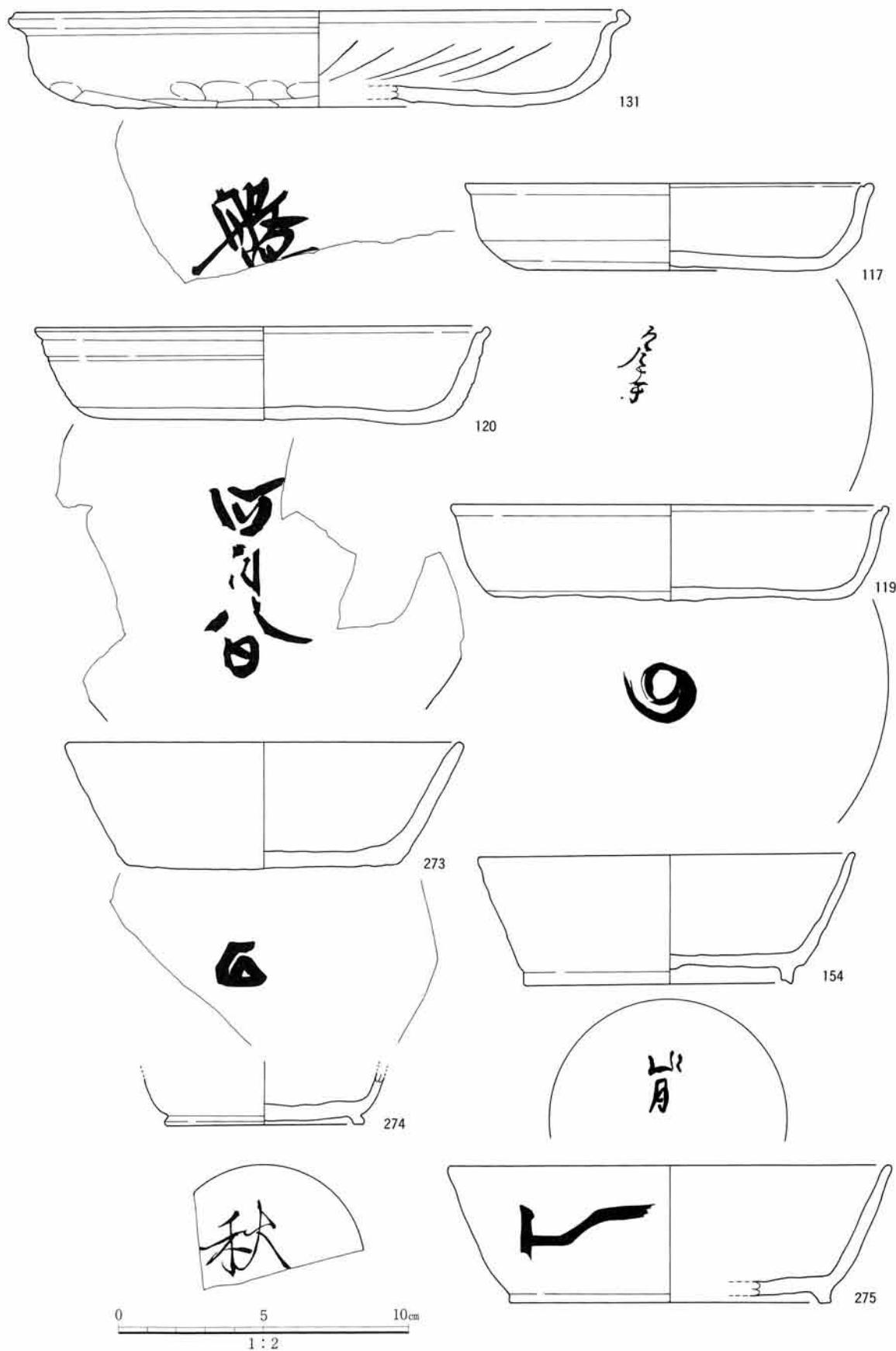


図70 SD501出土墨書土器



図71 SD501・502出土墨書土器
SD501(276~302)、SD502(303・304)

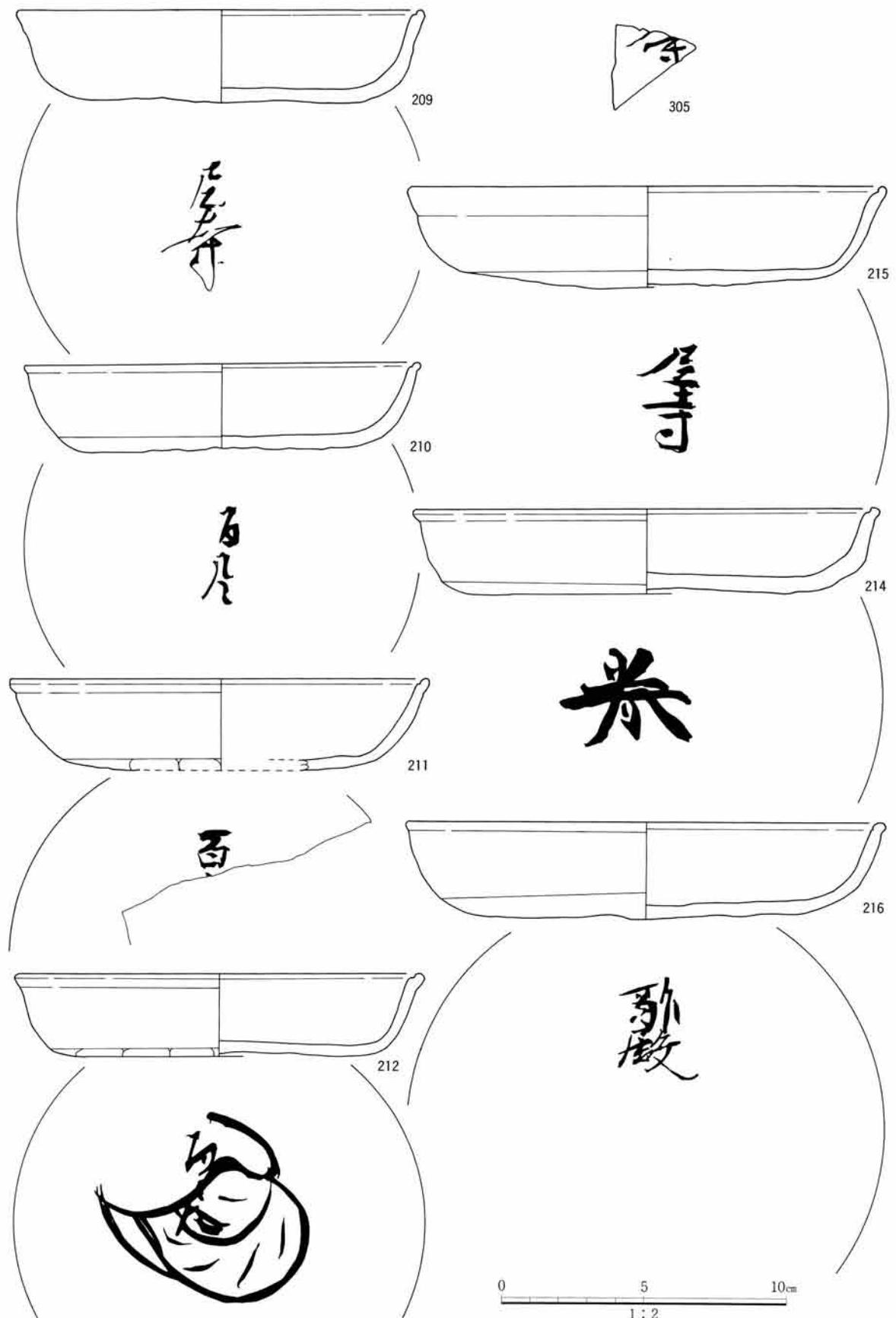


図72 SE507出土墨書土器(1)

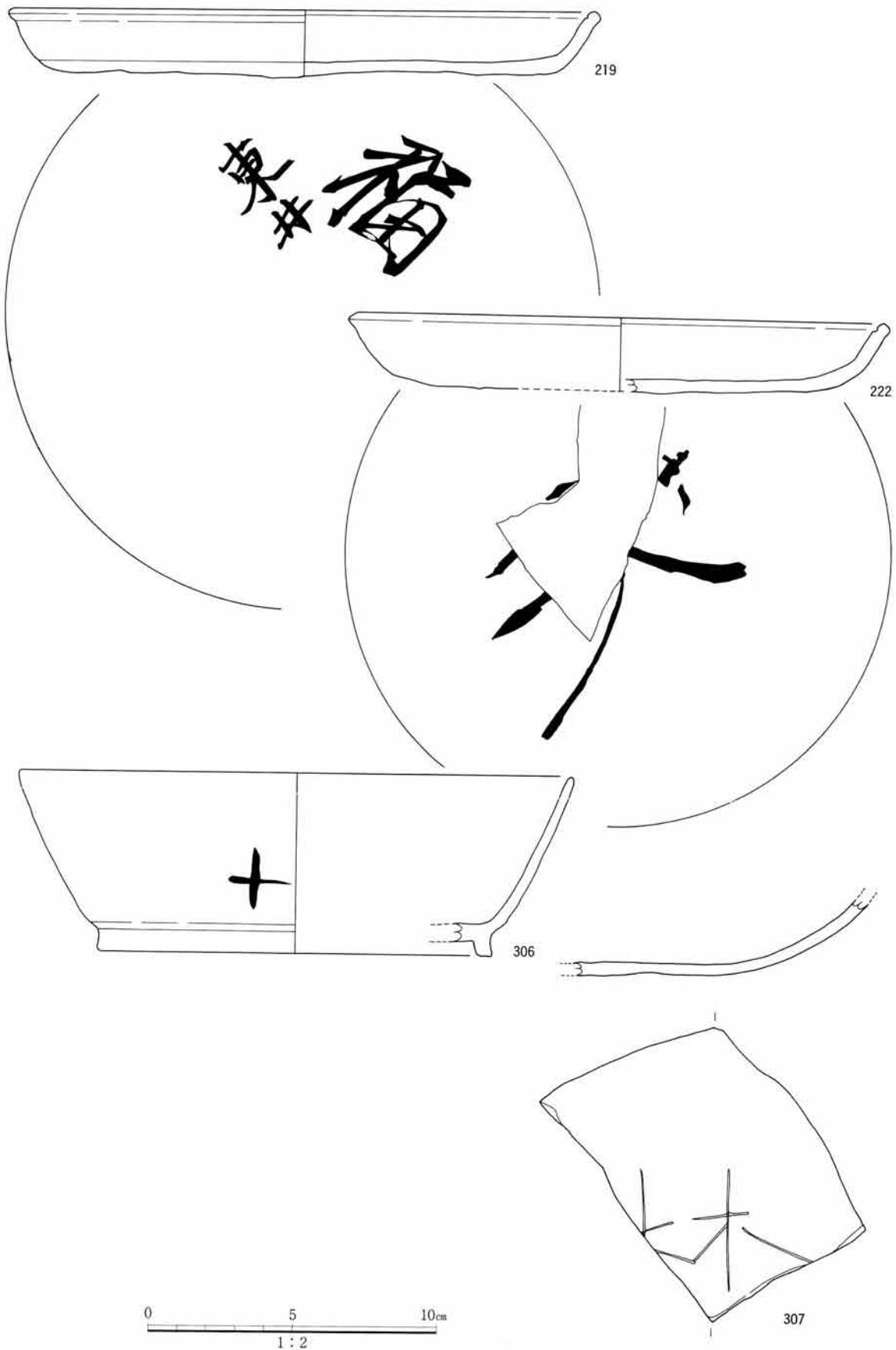
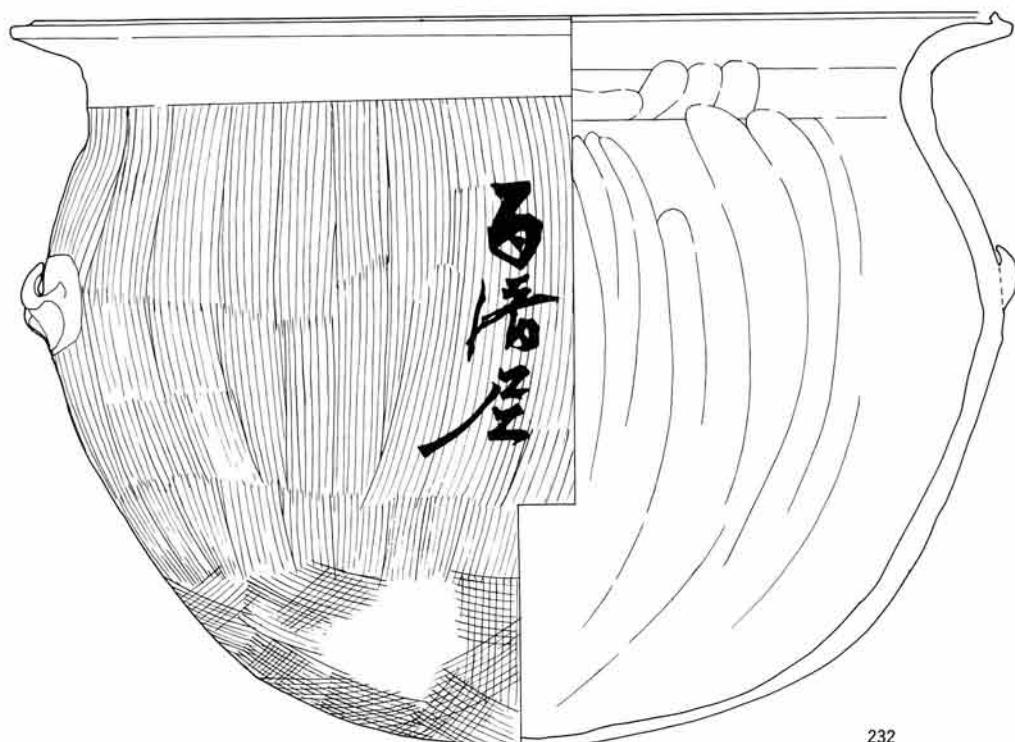
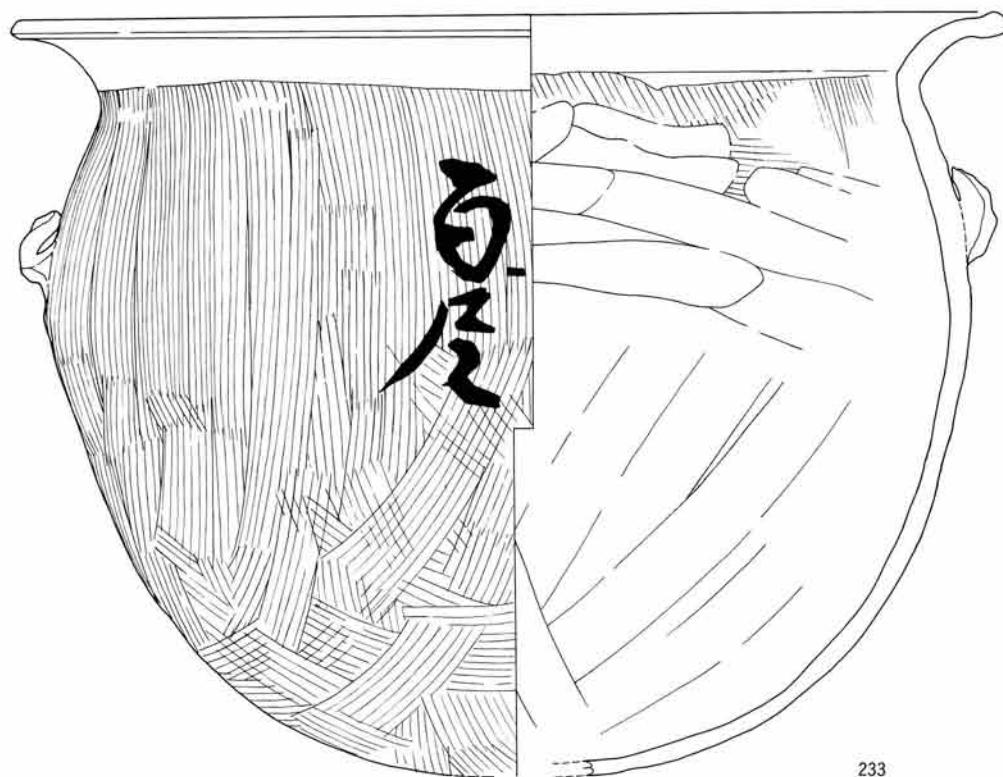


図73 SE507出土墨書・刻書土器



232



233

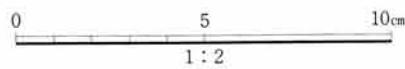


図74 SE507出土墨書土器(2)

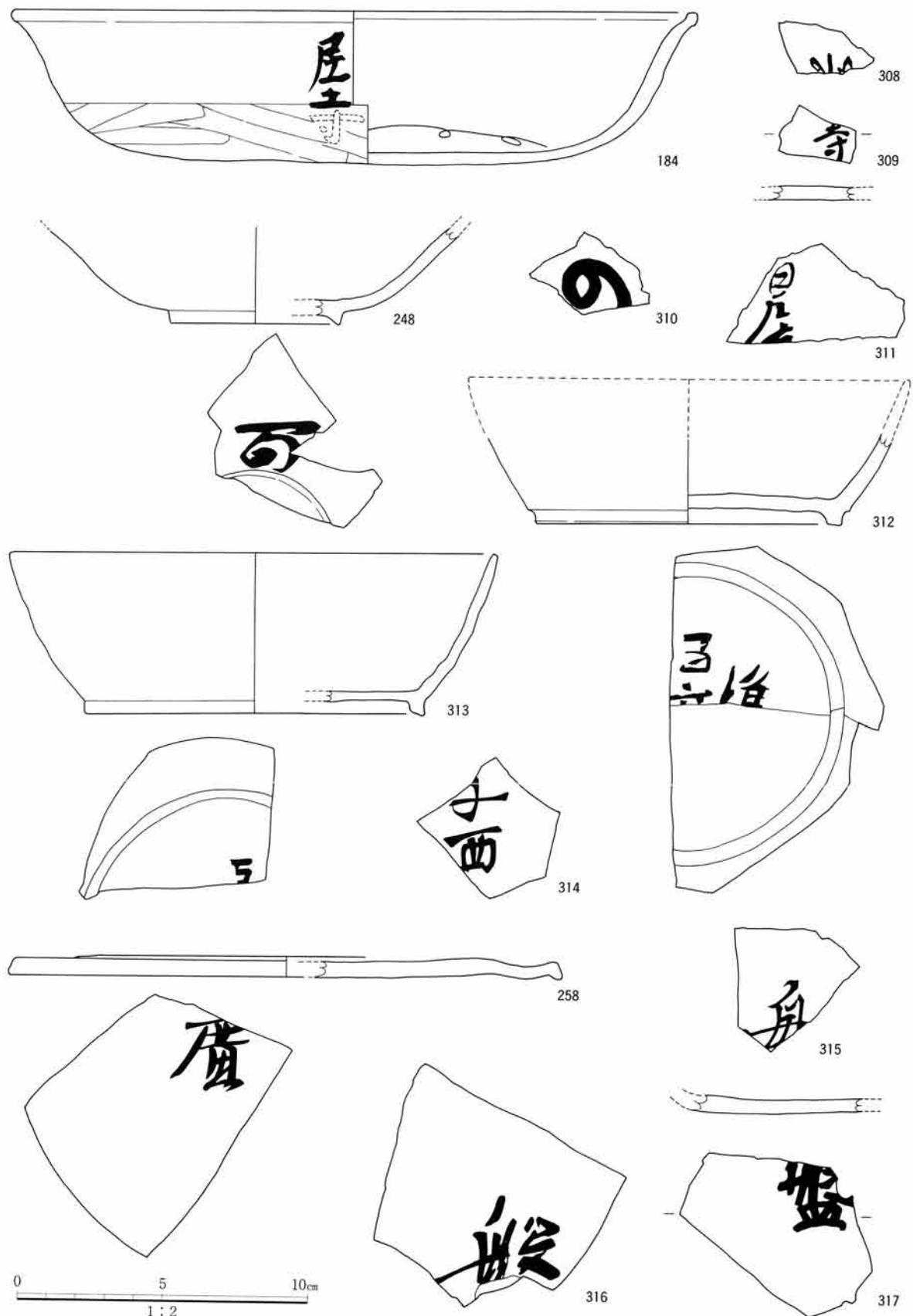


図75 奈良時代の遺構・第5層出土の墨書き器

SD503(308)、SK504(184)、SE505(309)、第5層(248・258・310～317)

とも考えられるが、水を司る星宿でもある。SE507の井戸鎮めの儀式に係わる土器であるだけに、後者の可能性は十分に考えられる。

6 : 303の「〇」はもとは2つ以上あったようである。119・273は「の」字のような記号である。291は漢数字の「十」、あるいは記号の「+」であろうか。

このほかに文字が鮮明であるが、意味がよくわからないものには、「知」(269)、「得」(272)、「秋」(274・292)、「倭家」(285)、「廣」(258)がある。307は「林」という文字が焼成前に刻まれた刻書土器である。

(岡村・古市)

第8節 瓦塼類

瓦塼類は第6層上面検出遺構(SD602)から第2層にわたって出土し、コンテナで約200箱分ある。第5層からの出土がもっとも多く、遺構ではSD501からが顕著である。しかし、瓦類は原位置から離れて2次堆積したものであるので、地層・遺構別には記述せず、瓦の種類ごとに分類して報告する。丸瓦・平瓦のほかに、軒丸瓦・軒平瓦・鷲尾・鬼瓦・熨斗瓦・面戸瓦と塼がある。範型、範の彫り直し、製作技法などから軒丸瓦は12種、軒平瓦は9種に分類され、飛鳥～平安時代初期までの様式がみられる。なお、瓦の分類は、軒瓦には種類別にローマ数字を頭につけ、つづいて範型にはアルファベットの大文字を、範の彫り直しには同小文字を、同じ範型で製作技法の大きく異なるものにはアラビア数字を順次つけて同一グループを表した。丸・平瓦や道具瓦も各々の特徴によって分類し、軒瓦に準じて同様の記号を使った。軒瓦の計測値とおもな遺構・地層別出土数は表7に示した。

1) 軒丸瓦(図76、図版42・43)

i) 素弁蓮華文軒丸瓦

IA 401は弁端点珠の八葉素弁文で、中房は小さく1+6の蓮子を配し、外区は小さな素文縁である。瓦当裏面は中央が盛り上がる回転ナデを施し、丸瓦との接続は片柄式である。胎土は良質で焼成は硬く、灰白色を呈する。四天王寺創建瓦と同範で、大きく型崩れをした段階のものである[藤沢一夫1965、文化財保護委員会1967]。

ii) 単弁蓮華文軒丸瓦

IIA 402は弁端を丸くやや隆起させて、子葉を線で表す八葉蓮華文である。間弁はクサビ形で、外縁は残っていない。ほとんど白色に近く、胎土には夾雜物が多く含まれ、ほかの軒瓦とは異なる。

iii) 重弁蓮華文軒丸瓦

III A 蓮弁は重弁八葉で弁端は丸く輪郭線で表す。間弁もV字状に切込む重弁である。外区は連珠文を配する高い凸線帯と低い鋸歯文の周縁とからなる。丸みを帶びて突出する中房には1+7の蓮子が不均等に並ぶ。同範で製作技法の異なるものがあり、III A1とIII A2に分け、どちらとも決められないものはIII A不とした。堂ヶ芝廃寺に同範瓦がある[石田茂作1936、前田洋子1983、京都市埋蔵文化財研究所1996、宮本佐知子・佐藤隆1996]。

III A1 403は薄手の瓦当であり、瓦当裏面の下半部に回転ナデによる断面三角形の突帯を付す。丸瓦も薄く、瓦当との接合位置は高い。補強粘土は少なく、ナデ調整をする。

III A2 404のようにIII A1よりも範型が崩れ、中房の蓮子は大きくなり、近接する3個は基底でくついている。瓦当はIII A1よりも厚く、瓦当裏面や頸の調整はナデによるが、三角形の突帯はない。丸瓦の接合位置はやや低くなり、丸瓦の先端にキザミをいれるものがある。胎土は砂粒を含み、焼成は軟質なものから硬い須恵質のものまである。

iv) 複弁蓮華文軒丸瓦

IVA 複弁八葉と間弁を輪郭線で表し、弁端は高い凸線帶までとどく。外縁は28の線鋸歯文と細い凸線外周帶とからなる。中房には $1+5+9$ の蓮子を配するIVAAと、中房を彫り直して0.8cmと高くし、さらに突出した蓮子を $1+5+8$ に配するIVAbとがある。同范の瓦が堂ヶ芝廃寺にある[石田1936、藤沢一夫1941、前田1983、大阪市文化財協会1989、宮本・佐藤1996]。

IVAA 丸瓦の接合位置は比較的高く、丸瓦先端にキザミをいれる例がある。補強粘土は比較的少なくナデ調整をする。胎土は砂を含み、焼成は硬質で灰～灰青色を呈するものと、405のようにやや硬質でほとんど黒色に近いものとがある。前者には界線にヘラケズリするものもみられる。

IVAb 406のように文様の崩れが多くなる。IVAAよりも平均して瓦当が厚く、丸瓦との接合位置が低くなり補強粘土も多い。調整は丸瓦凸面・顎部にヘラケズリを多用する。胎土に多量の砂を含む。

なお、IVAAかIVAbかは判別できないが、407には接合部の丸瓦先端に径1.6cmの半円状にくりぬいた羽車形がみられる(図版45)(註1)。IVAもIVAAとIVAbの区別のつかないIVA不が多い。

v) 重圈文軒丸瓦

VA 408は直径約13cmの小型の三重圈文瓦である。外縁は高く圈線は細く、第3圈と外縁との間隔が狭い。細土で軟質、灰色を呈する。後期難波宮6012と同范で難波宮瓦として作られたものであろう[大阪市文化財協会1995]。

VB 409は小型の三重圈文で、圈線はほぼ等間隔である。後期難波宮6021と同范である[大阪市文化財協会1995]。

VI A 直径15.5cmの軒丸瓦である。中房に当る直径7.6cmの範囲は基底面が高く、外縁との間には2本の圈線が巡る。外縁のすぐ内側の基底面はほかよりも高くなる。中房には中心に不整形な凹み、直径5.5cmの細い圈線がある。中房の上辺と下辺に範の彫り過ぎが認められる。VI AaとVI Abとがある。

VI Aa 410は横方向に細かい木目が走る。

VI Ab VI Aaの范型の圈線を太く彫り直している(411)。外縁にケズリ、その内側の基底面をヘラで彫り下げる例がみられる。

vi) 細弁蓮華文軒丸瓦

VII A 412は16葉に復元される蓮華文軒丸瓦で、外縁幅は広く連珠文を配す。珠文は28の可能性がある。蓮弁も珠文の配置も不揃いである。中房は直径5.1cmで蓮子は剥離している。胎土には砂粒が多く、焼成は軟質である。同文の瓦が堂ヶ芝廃寺から出土している[大阪市文化財協会1996b]。

vii) 蓮華文軒丸瓦

VIII A 413は平坦な弁区に6葉の弁と間弁を線彫りしたかのような小片である。弁と外縁との間に珠文帯がある。胎土には砂粒が多く、軒丸瓦III A・IV A・VII Aとよく似ている。興国高校敷地内で行ったNS89-22次調査で同文の軒瓦片が出土している[松尾信裕1990]。

2) 軒平瓦(図77、図版43)

i) 無文軒平瓦

IA 無文で形態・製作技法は平瓦と変わらないが、凸面に赤色顔料が線状に付着していることが

表7 軒瓦の計測表

単位:cm、():復元値

軒 丸 瓦											瓦当厚	全長	出 土 遺 構・地 層						計			
分類	直 径	内 区				外 区				幅	内 縁		外 縁		SD 602	SD 604	SD 503	SD 501	SE 507	第5層 以上	計	
		中房径	蓮子数	弁区径	弁数	幅	文様	幅	高		文様・特徴											
I A	(16.8)	(3.6)	1+6	14.6	素弁8	1.2		0.3	0.7	無文・直立	1.9		1					2	3			
II A	(16.0)			(13.6)	单弁(8)														1	1		
III A1	(16.3)			12.2	重弁8	2.2	1.0	珠文	1.1	線鋸齒文	(2.5)							2	1	3		
III A2	16.2	4.9	1+7	12.2	重弁8	2.2	1.0	珠文(21)	1.0	線鋸齒文(28)	2.8							4	4	8		
III A不																1		5	4	10		
IV Aa	16.8	7.3	1+5+9	13.0	複弁8	1.6	1.2	線鋸齒文28	0.3	0.3	無文・直立	2.9					3	3	7	8	21	
IV Ab	17.0	7.4	1+5+8	13.4	複弁8	1.6	1.0	線鋸齒文28	0.4	0.3	無文・直立	3.2					4	9	4	17		
IV A不																1	1	11	7	20		
VIA	(17.5)	5.1	1+?	(12.3)	細弁(16)	(2.1)	1.7	珠文(28)		(0.1)	無文・直立	(2.8)						1	1	2		
VII A					?	(2.3)	1.3	珠文	(0.7)	(0.6)	無文・直立	(3.0)						1		1		
内 区											外 区			瓦当厚	全長							
直 径		中房径	第1圈内径	第2圈内径	第3圈内径	内区径	外 縁			幅	高	文様・特徴										
VA	(13.2)		2.4	5.4	(9.1)	(11.0)	0.8	1.1	無文・直立	(3.2)								1	1			
VB	(13.6)		(2.2)	(5.1)	(8.2)	(11.0)												1	1	2		
VI Aa	(15.5)	7.6	5.5	9.0	(11.5)	(13.7)												1		1		
VI Ab	15.5	7.7	5.5	8.7	11.6	14.1	0.7	0.5	無文・直立								3	4	1	8		
											(計)			1	1	1	11	4	49	31	98	
軒 平 瓦																						
分類	弦幅	内 区		上 外 区			下 外 区			厚	瓦当厚	全長	出 土 遺 構・地 層						計			
		厚	文様	内 縁		外 縁		内 縁					SD 602	SD 604	SD 503	SD 501	SE 507	第5層 以上				
				厚	文様	厚	高	厚	文様	厚	高											
I A			無文									2.4						3	0	3		
I B			無文									3.2			○	○	○	○	○	○		
II A1	(32.0)	3.6	忍冬唐草文		界線1	1.7	0.1		界線2	0.9	0.5	8.2		1	2		2		5			
II A2	(31.0)	3.6	忍冬唐草文		界線1	0.4	0.2		界線2			5.1		1	1			3	5			
VI A	(29.0)	2.9	均整唐草文			0.4	0.3			0.4	0.2	(5.5)						7	3	10		
内 区											上 外 区			下 外 区			瓦当厚	全長				
弦幅		内区厚	文様	中央厚	圈内厚	圈外厚	厚	高	厚	高												
		III A	(28.0)	2.0	重郭文	0.7		0.5	0.5	0.4		3.2						2	1	3		
		III B		1.8	重郭文	0.7		0.5	0.3	0.4	0.3	2.9						1	4	1	6	
		III C		3.2	重郭文		0.5	2.0	0.5	0.3	0.4	0.3	4.3						1	1		
		III D		3.2	重郭文		0.6	2.0	0.5	0.5		(4.3)							1		1	
											(計)			2		6	1	17	8	34		
											(総合計)			1	3	1	17	5	66	39	132	

ら軒平瓦に使われたことがわかる。414は厚さ2.1cmで、凸面には瓦当から10.5~11.7cmのところに赤色顔料がある。凸面は平瓦III Bと同類の斜格子タタキである。

I B 415は厚さが約3cmあり、端面は無文で肥厚していないが、軒平瓦として製作されている。

端面にケズリやミガキが施されているものもある。凸面のタタキは平瓦III Bの斜格子タタキで、側縁は面取りするものが多い。凹面には桶板模骨痕があり、側縁がわに分割突起痕がみられるものもある。

ii) 忍冬唐草文軒平瓦

II A 中心飾から左右に3単位反転させた忍冬唐草文を主文とする。中心飾はハート型の内郭に、複線で表す花冠部と左右の外郭とからなる。唐草の基幹と伸長葉も複線である。唐草文の上には1本、下には2本の界線がある。同じ範型で外縁の有無によって II A1 と II A2 に分ける。

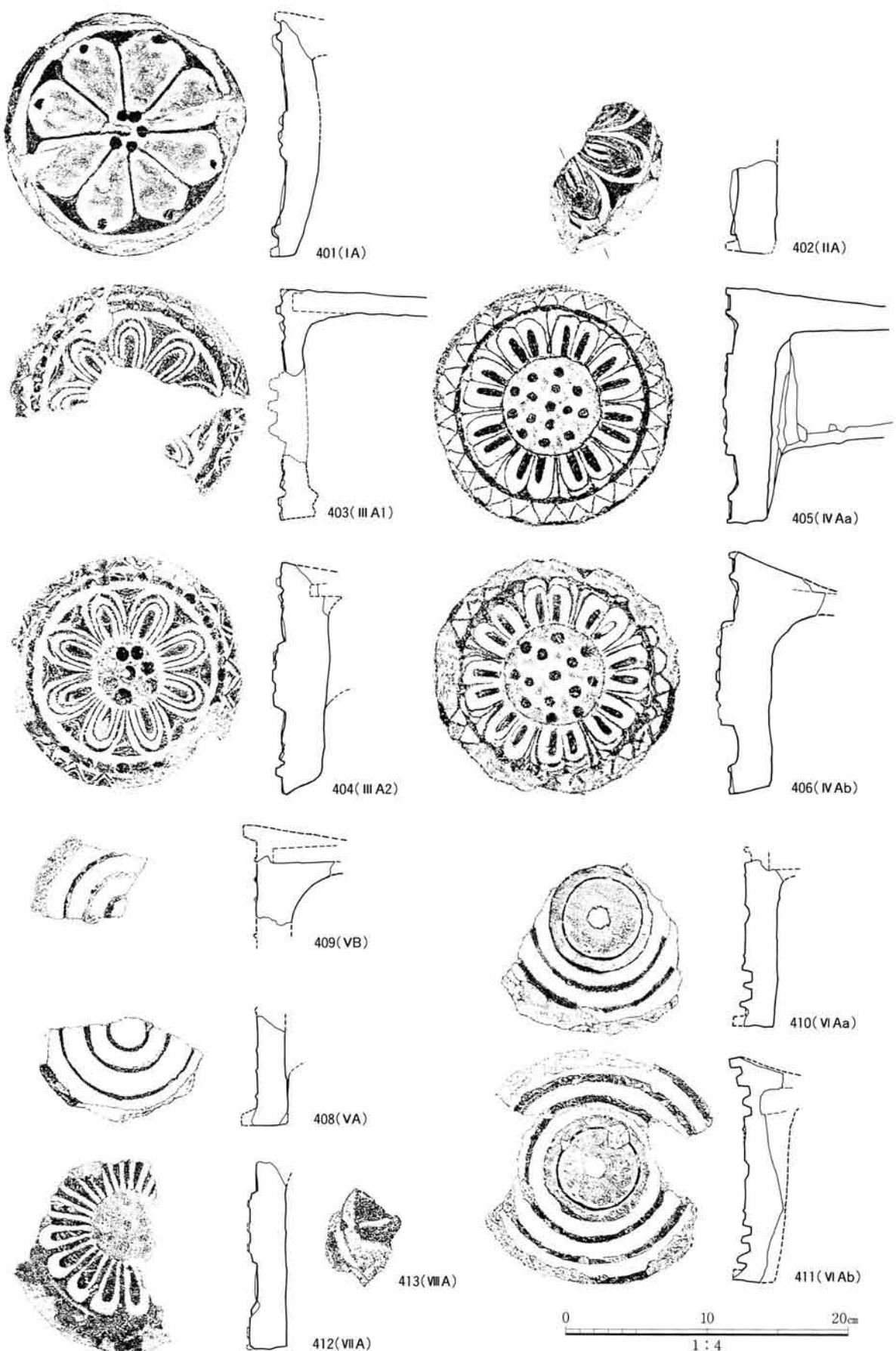


図76 軒丸瓦

SD501(411)、SE507(405・409)、第5層(401・406・408・410・412・413)、第4層(402～404)

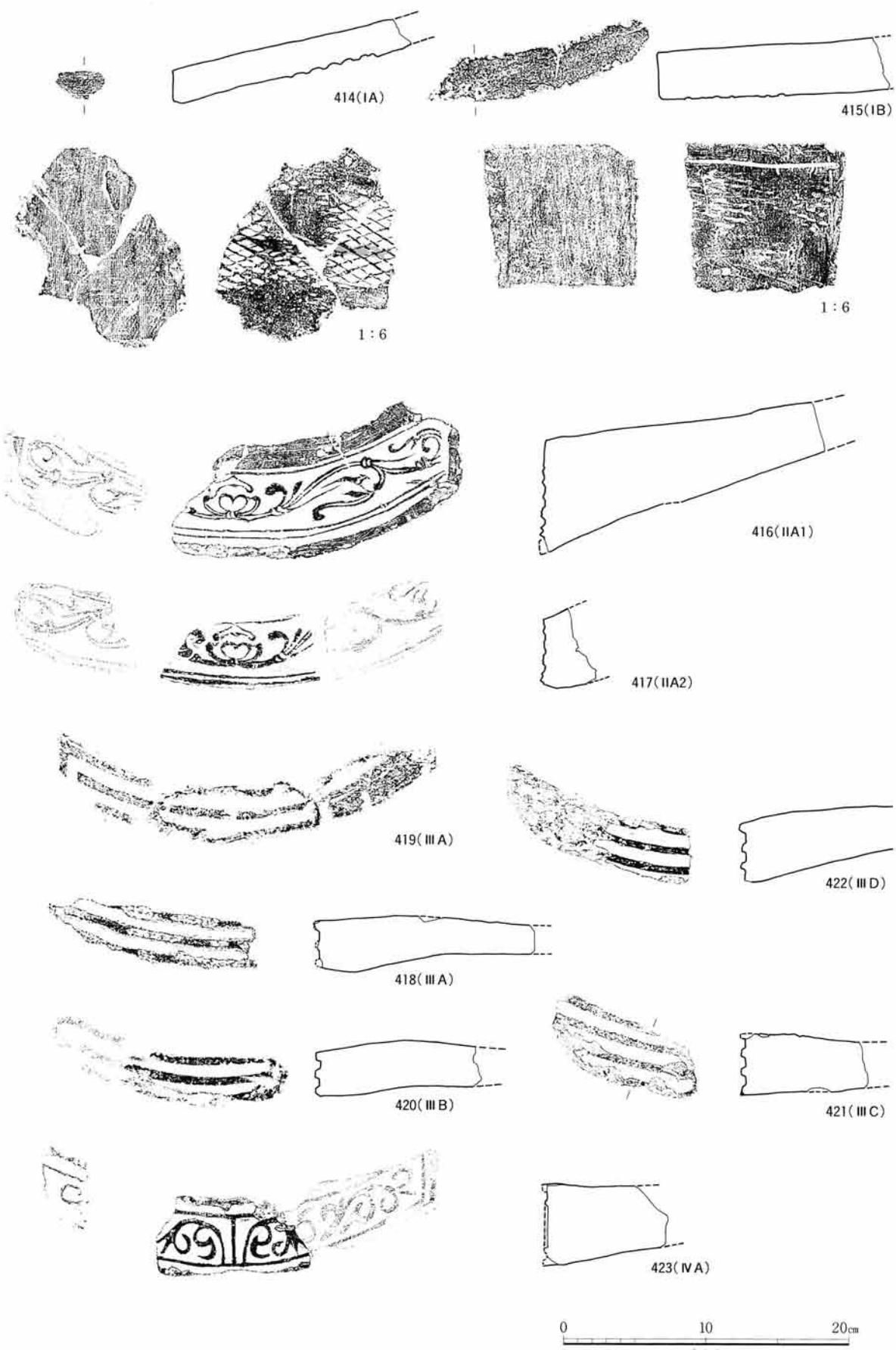


図77 軒平瓦

SD501(416・417・419)、SE507(422)、第5層(414・415・418・420・423)、第4層(421)

II A1 416の外縁は厚く、外縁上をヘラケズリする。直線に近い曲線顎で狭い顎面をもち、斜格子タタキの痕跡が残る。平瓦にも凸面に斜格子タタキ痕がみられる。凹面には模骨痕があり、瓦当がわは横方向にヘラケズリし、側縁は垂直に切落とし、面取りをする。焼成は硬質で、須恵質に近いものもある。胎土には多量の砂を含む。

II A2 包み込み式の瓦当で、上・下の界線から外はない(417)。平瓦の端面にはキザミをいれて接合を助けているが、出土した軒瓦はすべてここで剥離している。

II A1は中心飾や唐草文の複線が明瞭であるが、II A2には1点を除いて複線の境がなくなっている、あたかも単線のようになっている。したがって製作はII A1の方が先である。

iii) 重郭文軒平瓦

III A 外縁の中に1本の弧線を配する軒平瓦である。弧線の断面は台形を呈し、高さと厚さは外縁と変わらない。419は弦幅約28cm、瓦当厚は3.2cmと比較的薄い軒瓦である。顎は418にみられるように1cm余りの平坦面をもち、平瓦部から顎にかけては曲線である。顎の成形には凸面に厚い粘土を貼り、平瓦部を縄叩き板で縦方向から少し斜めに叩いたあと、顎部はさらに斜め方向に叩き、その後横方向のヘラケズリで仕上げている。一方、凹面は平瓦部まで深く抉り取って瓦当を整えている。III Aには瓦当の上方に範の外枠痕を残すものがある。また、範型が文様面の全体に及ばず、419のように右、あるいは左の脇が平らな面のままの瓦もある。凹面に模骨痕はなく、側縁がわを軽くヘラケズリしている。淡灰色で長石を含む多量の砂が混っている。

III B III Aをやや小さくしたもので、420は形や製作技法など419と同じ特徴をもつ。

III C 421は弧線が2本で、左脇では上の弧線は端まで延びている。弧線の断面は台形で外縁の高さと同じである。胎土には大小の砂粒を多量に含み、瓦の表面が残存せずわかりにくいが、III A・III Bとほぼ同様の作り方と思われる。

III D 422は上外縁と2本の弧線の一部が残存する小型の軒平瓦である。弧線の端はわからない。外縁はやや高く、弧線の断面は半円形でその特徴は細かい胎土とともに後期難波宮所用瓦に似ている。しかし、同範例はなく、弧線も外縁も力強い難波宮瓦に対して、優しい感じの文様である。

iv) 均整唐草文軒平瓦

IV A 中心に上・下界線と結ぶ垂線があり、その両側から唐草文が派生し3回転する。第1文様のはじめに枝分かれして屈折する支葉は垂線と合わせて中心飾りを意図しているようである。屈折する支葉は第1・第2文様の最後にもあってこの唐草文の特色といえよう(423・424)。平瓦部はほとんど残っていないが、凹面には粗い布目痕があって模骨痕はみられず、凸面は縦方向に全面ヘラケズリをしている。胎土には砂粒が多く、淡灰または濃灰色を呈している。

3) 丸瓦・平瓦(図78・79、図版44)

丸瓦・平瓦は大量なので、遺構に伴うものや製作技法に特徴のあるものをコンテナに約10箱抽出して整理した。丸瓦には玉縁式のIと行基式のIIに大別できる。平瓦はわかりやすい凸面の叩き板痕によって分類を試みた。おもなものは凸面を全面ナデ調整し、叩き板の痕跡の残らないものをI、平行

タタキをⅡ、格子タタキをⅢ、縄タタキをⅣとした。

i) 丸瓦

ⅠA 425は長さ42.8cm、広端幅19.5cm、玉縁の長さ6.8cmの丸瓦で、玉縁は径の小さい筒形で作り、布目は玉縁内面にもついている。玉縁凹面の端・側縁がわは面取りする。凸面は横方向のナデによりタタキ痕を消すが、一部に平行タタキ痕が残る。胎土・焼成とともに良好で、淡青灰色を呈している。

ⅠB 玉縁式で奈良時代以降の丸瓦を1片抽出している。

ⅡA 426は行基式丸瓦の広端部である。凸面は横にナデ調整し、小さな格子タタキが認められる。

ⅡB 凸面に縄タタキの痕が残る行基式丸瓦で、427は長さ39.0cmであり、広端幅19cm、狭端幅13cmに復元できる。

ⅡC 縄タタキ目の行基瓦で、狭端部の側縁を切落すものがある。

ii) 平瓦

ⅠA 428は狭端幅24.0cm、厚さ2.2cmで、凹凸両面を横方向にナデ調整し、布目やタタキ痕を残していない。同様の作りで厚さ1.2cmの小型平瓦もある。胎土・焼成とも良好である。

ⅠB 429は厚さ1.9cmで粘土継目・分割破面を残す。凹面には布目痕があるが、凸面は全面を横方向にナデ調整しており、タタキ痕はみえない。428・429はSD501から出土した。

ⅡA 430は凸面平行タタキの平瓦片である。

ⅢA 431は変り格子タタキともいべきか、横平行に太い線を彫り、縦方向の線は細くきれぎれで端まで届かない。平瓦の隅を切落としている。

ⅢB 菱形をした斜格子タタキで、叩き板には数種ある。この斜格子タタキの平瓦が数量的に多い。432は斜格子タタキの平瓦で、最大幅30.0cm、厚さ1.9cmで広端の両隅を切落としている。2種類の叩き板が使われていて、1つは軒平瓦414のタタキと同じである。叩き板は長さ9cm、幅は10cm以上ある。凹面には桶板模骨痕・分割突起痕があり、布目には継目のほか、広端がわに10cm×6.5cmの当て布をした縫いがみられる。

ⅢC 433は粗い格子タタキの小片で、隅を切落としている。

ⅢD 斜格子が正方形に近い434は、縦長の叩き板で約5cm間隔に叩きしめている。

ⅣA 435は凸面が縄タタキで、縦方向に叩く。凹面には桶板痕があり、隅を切っている。胎土には砂粒を多く含んだ硬質の瓦である。縄タタキであるほかはⅢBと同じ特徴をもっている。

ⅣB 436は凹面に桶板痕、凸面には縦方向の縄タタキが平行に走る。側縁は凹面に対して鋭角で垂直に切落としている。胎土は良質、焼成は軟質で、これらの特徴は後期難波宮瓦と同じである。

ⅣC 437は長さ36.2cm、残存最大幅26cm、厚さ1.7cmの平瓦である。凸面は縄タタキで、狭端がわから、縦から斜め方向に2~3度叩いている。凹面に桶板痕はなく、布目は狭端まで続くものがある。砂粒が多い。

ⅣD 438は凸面縦方向の縄タタキで、凹面には桶板痕がなく布目は側縁まで続いている。

ⅣE 439は長さ37.5cm、残存最大幅27.5cm、厚さ2.3cmの平瓦である。凹面に桶板痕はなく凸面には粗い縄タタキを施す。

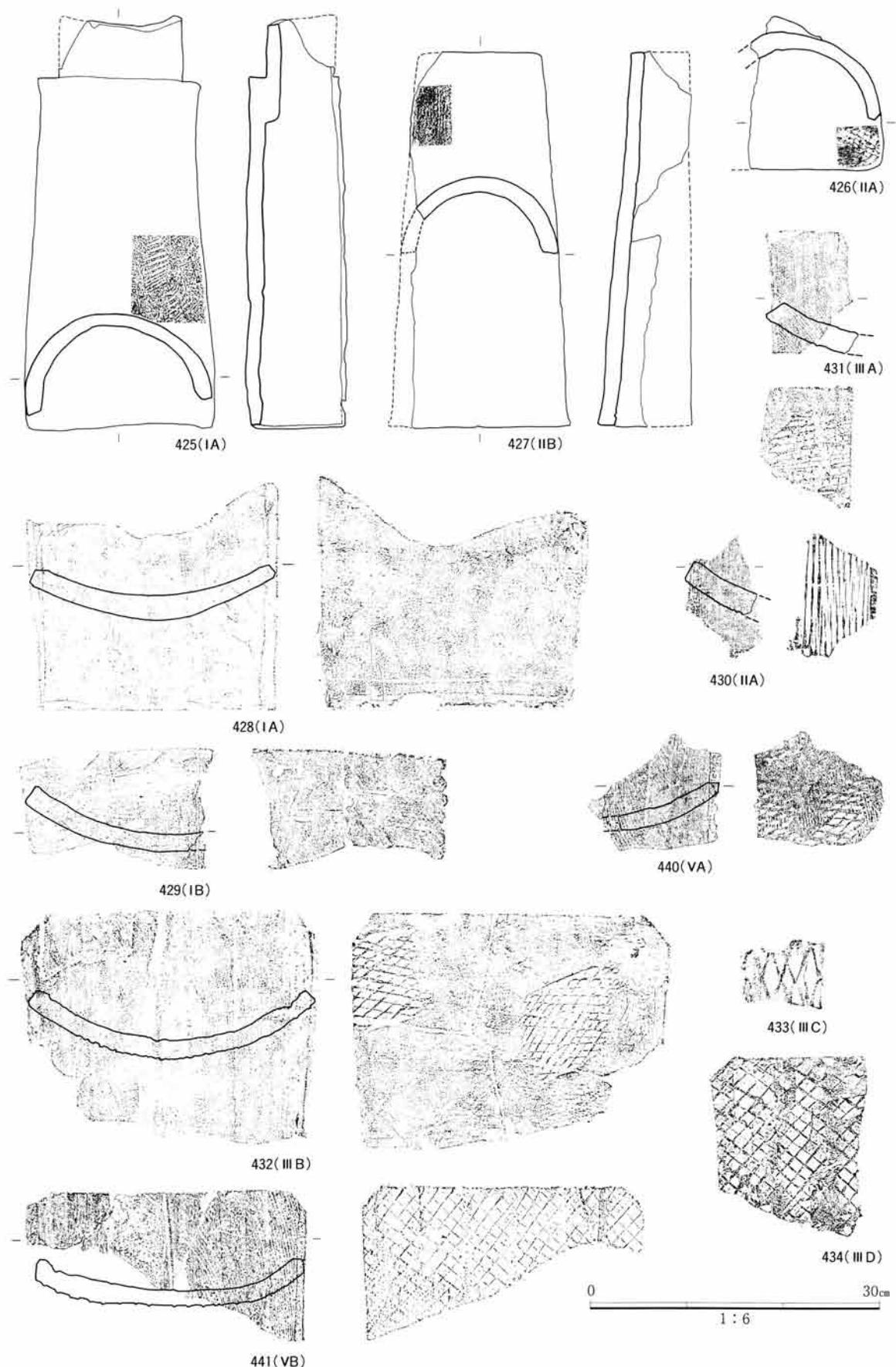


図78 丸瓦・平瓦

SD602(429)、SD501(425・427・428・431・440・441)、SK515(430)、SE507(426)、第5層(432・434)、第4層(433)

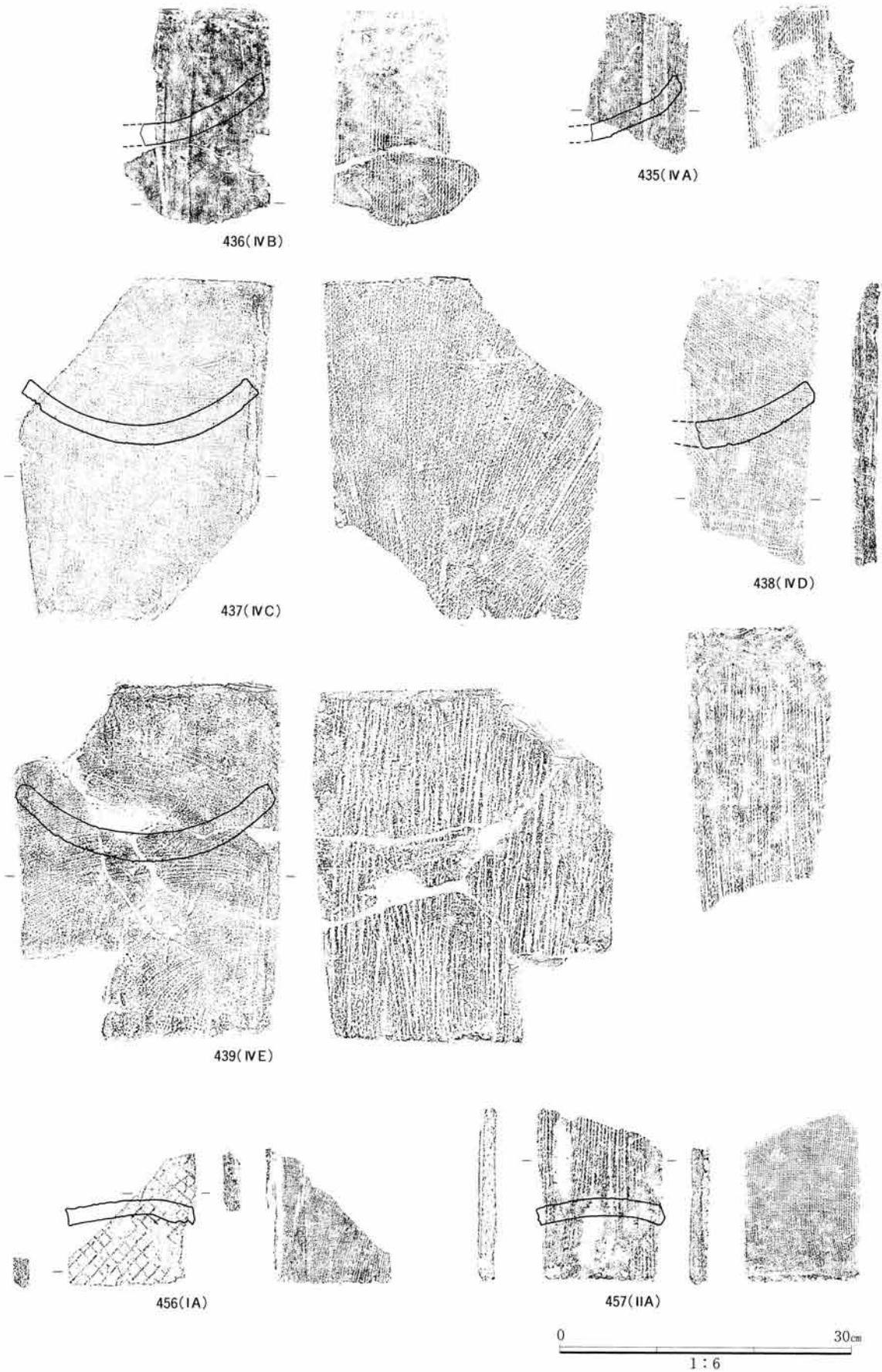


図79 平瓦・駁斗瓦
SD501(435・457)、SE505(437)、SE507(436)、第5層(439・456)、第4層(438)

IVC～IVEは1枚作りであろう。

VA III Bの斜格子タタキに繩タタキを施す440がある。凹面には桶板痕があり、粘土継目痕も残る。

VB III Dと同様の斜格子タタキのあと部分的に繩タタキを施す(図版45)。441の凸面斜格子の叩き板はIII Dとは別のものである。凹面には桶板痕・分割突起痕・粘土継目痕があつて桶巻作りである。最大幅28.0cm、厚さ1.6cmで広端隅を切落としている。砂粒が多く硬質である。

4) 道具瓦(図79・80、図版45)

i) 鳴尾

鳴尾片は寒風窯系が4片、蓮華文帯のある打越瓦窯系が5片出土している[奈良国立博物館1970、奈良国立文化財研究所1980a、大脇潔1998]。ほかに鳴尾の可能性のあるものが3片ある。

IA 頭部に庇をもつ442、葉状文の鰐443～445は寒風窯系で、硬質で斜格子タタキが認められる。445は葉状文と焼成がほかと少し異なる。

II A 446には蓮華文が2個並んでいるが、外区の線鋸歯文と蓮弁の先が僅かにわかる程度である。蓮華文が径約10cmに復元でき、鋸歯文が乱れて、一部格子になっている。打越窯系の蓮華文帯鳴尾片であり、四天王寺Eの範型b[奈良国立文化財研究所1980a]と同範の可能性が高い。447・448は446に近い蓮華文帯の一部とみられる。449は鰐の小片である。450は胴部の可能性があり、裏面に同心円の当て具痕が認められる。いずれも白色～淡黄白色で焼成は軟質である。

ii) 鬼瓦

鬼瓦は4片、4個体分が出土している。範型によって作られている。

IA 451～453は同じ文様の鬼瓦で、451は外縁の珠文帯と右眉・眉間、452は剥離しているが、右目と鼻・髭、453は左顔の口から顎にかけての部分である。大きく開いた口には上下の歯と、歯茎や歯の痕がある。上歯と下歯の空間が大きいので、舌も表現されていた可能性がある。厚さは約4cmである。固定のためには451の眉間に釘孔、453の裏面に削り込みの跡がある。452に固定痕はない。451と452の眉と眉間 452と453の髭を重ね合わせて反転すると図80のように復元できる。頂部から顎までの長さは復元値で約23.5cmである。外形は珠文帯をもつアーチ形、団栗眼に獅子鼻はいわゆる南都七大寺式[山本忠尚1998]に依るが、下歯や下顎まで表現しているのは独特のものといえよう。

IB 455はIAよりも珠文が大きいが同様の鬼面文であろう。

iii) 稼斗瓦

IA 斜格子タタキの平瓦を半截した稼斗瓦で、456の原体はIII Dである。441と同じ叩き板で幅は14.0cm、凹面には桶板痕・分割突起痕がある。

II A 457は繩タタキ1枚作り平瓦IV Dを原体として分割した稼斗瓦である。幅12.5cmで側縁に布目痕ともう片方に分割痕がみられる。

iv) 面戸瓦

丸瓦の側面から斜めに切落とした破片、横幅10cm、縦9cmが1点出土している。

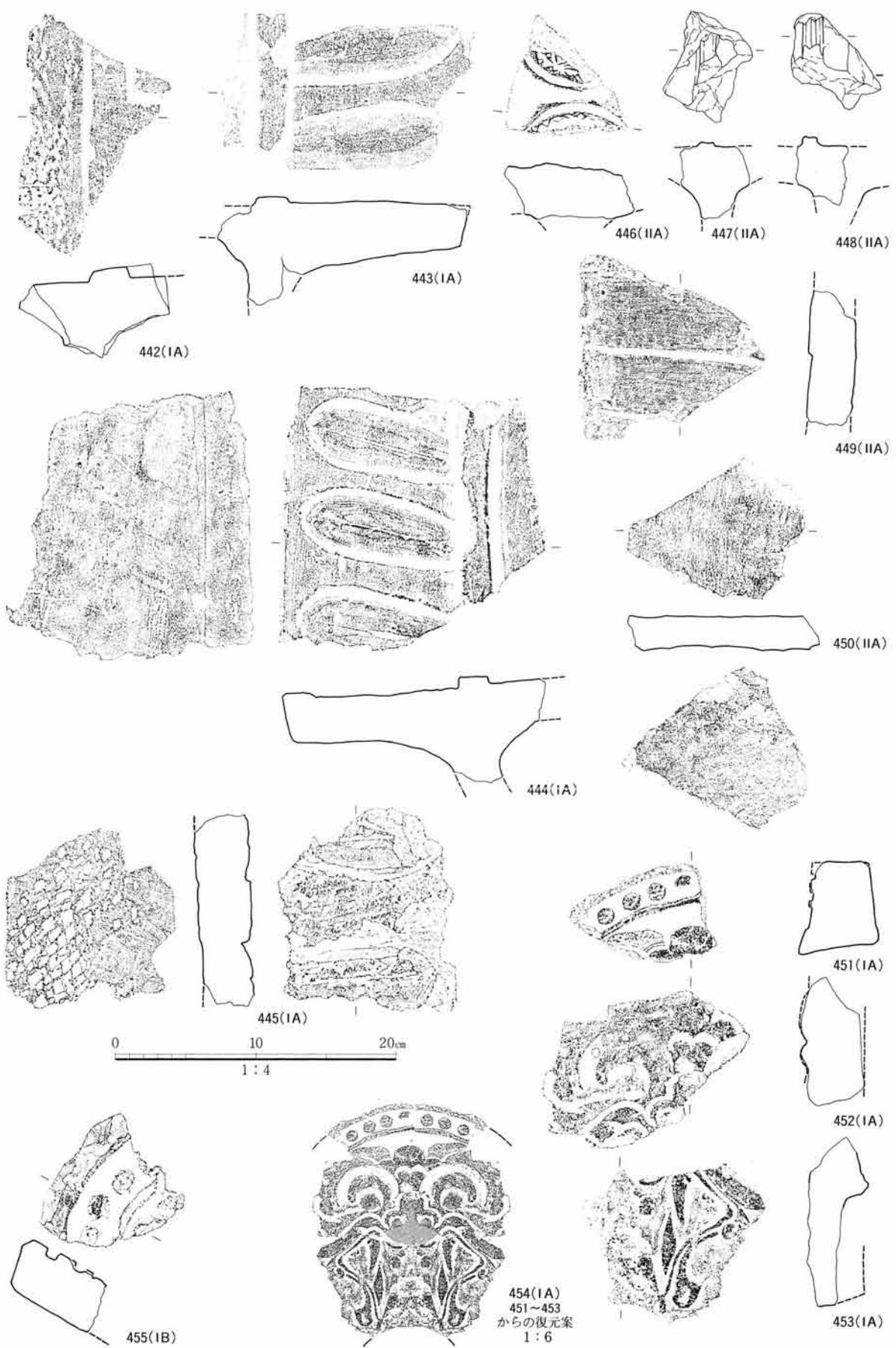


図80 鳥尾・鬼瓦

SD501(442)、第5層(443・444・447・448・450・451・453・455)、第4層(446・449・452)、第3層(445)

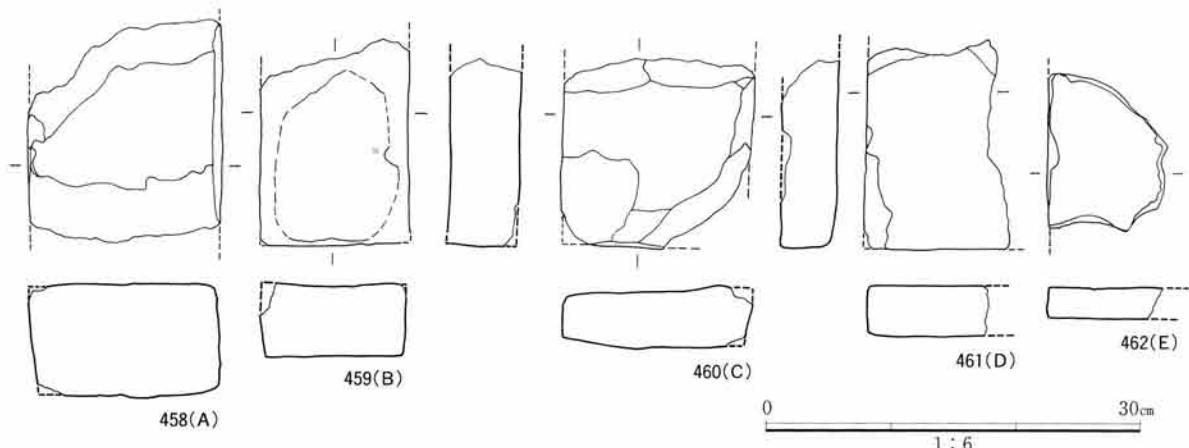


図81 塚

SD602(461)、SD501(458・460・462)、SD502(459)

5) 塚(図81)

塚片は11点で大半がSD501から出土している。厚さによって5分類(A~E)した。

A 458はもっとも厚いところで9.3cm、幅15.0~15.6cmの長方塚である。厚さ数ミリの粘土板を積み重ねて、端・側面を切落とした作りとみられる。

B 厚さ約6cm、幅12cmの長方塚である。型枠に粘土をつめて、底・端・側面をヘラケズリで仕上げる。459は上面と片方の側面に磨滅痕がある。塚に赤色顔料の付着がある。あと2点出土している。

C 460は最厚5.4cm、幅15.1cmの長方塚である。作り方はAと同様で端・側面はヘラケズリする。

D 461は厚さ4.2~4.5cmの破片で、ほかに5点ある。幅や長さはわからない。

E 462は厚さ2.7cmの粘土板状の破片である。

以上、どの塚片も焼成は軟質で磨滅が激しい。A・B・Eの胎土は細かく、C・Dは砂を多量に含み、軒丸瓦ⅢA・ⅣAの胎土と似ている。

6) 小結

今回報告する瓦類は、四天王寺、堂ヶ芝廃寺、後期難波宮の瓦と関係が深い。特に堂ヶ芝廃寺とは緊密である。軒丸瓦を中心とした瓦の組合せと変遷についてまとめる(図82)。

①細工谷遺跡出土の瓦でもっとも古いものは飛鳥様式軒丸瓦ⅠAである。四天王寺創建時の範型が大きく崩れたものと同範で、百濟系である。製作技法・胎土・焼成も四天王寺瓦と同類で、楠葉平野山瓦窯の生産であろう。丸瓦ⅠA・平瓦ⅠAも同瓦窯出土瓦と類似点が多い[八幡市教育委員会1985・1992]。軒平瓦は抽出されていないが、おそらく無文軒平瓦か平瓦であろう。この一群が細工谷遺跡のⅠ期の瓦の組合せになる。SD602の伴出土器の年代から7世紀中頃には小規模な寺が建立されていた可能性が高い。

②Ⅱ期の軒丸瓦ⅢA・ⅣAから堂ヶ芝廃寺との関係が深くなる。堂ヶ芝廃寺では、四天王寺と同範である白鳳様式の単弁蓮華文軒丸瓦が古く、つづいて重弁蓮華文軒丸瓦と法隆寺系の複弁蓮華文軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦になる。細工谷遺跡軒丸瓦ⅢA1・ⅢA2は堂ヶ芝廃寺の重弁蓮華文軒丸瓦と、軒丸瓦ⅣAa・ⅣAbは堂ヶ芝廃寺複弁蓮華文軒丸瓦と同範関係にある(註2)。軒丸瓦ⅢA2と軒丸瓦ⅣAa

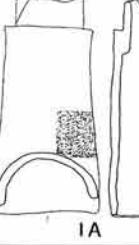
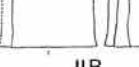
	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦・平瓦
I 期	 IA		 IA
II 1期	 II A  IV Aa  IV Ab	 IA  II A1  II A2	 IA  II A  II B  II C  IA  II B  II C  II D  IA  II B  II C  II D
II 2期			 IA  IA  IA  IA  IA  IA  IA  IA  IA
III 期	 VA  VI Aa  VI Ab	 III A  III B	 II B  IV A  IV B  IV C  IV D  IV E
IV 期		 IV A	

図82 瓦の組合せ案

は製作技法がよく似ており、ほぼ同時期に作られた軒丸瓦であろう。軒丸瓦IVAbは範の彫り直しだけでなく、調整がヘラケズリに変わるなど、少し遅れて製作された瓦と考えられる。

忍冬唐草文軒平瓦IIA1・IIA2は、接合時の平瓦先端のキザミなど、軒丸瓦III A2・IV Aaと共に通の技法が認められる。細工谷遺跡の忍冬唐草文は堂ヶ芝廃寺の軒平瓦を基に新しい範を作ったのである。

丸瓦はIIA・IIB、平瓦はIIA、IIIA~D、IVA、VA・VBがII期と考えられる。丸瓦は堂ヶ芝廃寺[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990]と同じく行基式で、タタキには格子目と縄目がある。平瓦はIIIBの格子タタキが先行し、VA・VBやIVAのように縄タタキも併用されたとみられる。桶巻作りで、広端部の両隅を切落とすのも特色の一つである。

II期の瓦のおもな組合せは、軒丸瓦III A2・IV Aaと軒平瓦IA・IB・IIA1・IIA2、丸瓦IIA、平瓦IIIBが考えられる。軒丸瓦III A1は堂ヶ芝廃寺の瓦を転用した可能性がある。後出の軒丸瓦IVAbと組合せになるのは、軒平瓦では特定できず、丸瓦はIIB、平瓦はIIID・IVA・VA・VBで叩き板が長方形に長くなった段階のものも考えられる。

鷗尾はⅠAの寒風窯式が古く、次にⅡAの打越窯系が作られるが、製作地や工人については不明である。ⅡAに当る打越窯鷗尾については8世紀初葉の年代が比定されている[菱田哲郎1988]。

各種の瓦がそろい、量的にも群をぬいて多いⅡ-1期に、細工谷遺跡に関連した寺は規模を拡大し、むしろこの時期になって伽藍が整備されたといえよう。Ⅱ期の瓦類は白鳳後期に比定される[奈良国立博物館1970]。そしてⅡ-2期の瓦類はⅡ-1期の補充とみておきたい。なお、鷗尾を除く瓦窯は堂ヶ芝廃寺と同じであろう。

③軒丸瓦VA・VBは、後期難波宮所用瓦と同範で、平瓦IVBも後期難波宮と同じ瓦である。四天王寺や堂ヶ芝廃寺と同様に後期難波宮瓦が搬入されている[網伸也1992]。

④軒丸瓦VI Aa・VI Abは軒平瓦III A・III Bとの組合せが考えられる。平瓦はIVCであろう。軒丸瓦VI Aは重圈文であるが、後期難波宮の文様とは大きく異なる。中央の地面を高くしてそこに圈線をおくところは平城宮6016A(註3)に類似している。軒平瓦III A・III Bは文様の特徴は異なるが、後期難波宮6571と同文である。平城宮と難波宮の影響で作成された軒瓦の組合せといえようか。また、軒丸瓦VI Aaには木目痕があり、彫り直した軒丸瓦VI Abと合わせて、少なくない量が生産されたと考えられる。

細工谷遺跡では、この段階で四天王寺や堂ヶ芝廃寺とは別の文様の瓦をもった。しかし、堂ヶ芝廃寺にも難波宮6572と同文の軒平瓦があり、同じ重圈文系で別々の文様をもったというべきかもしれない。平城宮6016Aは天平初年頃の瓦と推定されている[奈良国立文化財研究所1991]が、それよりは後出で、軒丸瓦VA・VBとも合わせて、Ⅲ期は難波宮が皇都となった744年頃以降ではなかろうか。

⑤細工谷遺跡でもっとも新しいのはⅣ期の瓦群で、軒平瓦の文様に特色がある。軒瓦がもっとも多く廃棄されているのは第5層で、この頃に細工谷遺跡に関係する寺院は大きな転換期を迎えていた。

細工谷遺跡出土の瓦類からは、調査地に近い所に7世紀中頃には小さな寺が建立された可能性が高く、その後の経緯は明確でないが、7世紀末から8世紀初めに、伽藍が整備された。その後の修復・差し替えもあるが、9世紀のある段階でその寺は縮小か廃絶したとみられる。「百濟尼寺」の墨書土器と共に伴した瓦類は同寺所用の屋瓦である可能性が高く、一方、堂ヶ芝廃寺は摂津国の難波百濟寺といわれており、両者の関係は、瓦類からも緊密であったことをうかがわせている(註4)。 (八木)

註)

- (1)花谷浩氏(奈良国立文化財研究所)の御教示を得た。
 - (2)堂ヶ芝廃寺の瓦では、軒丸瓦III A1とIV Aaが一般に知られている。今度、既報の中に軒丸瓦III A2とIV Abもあることがわかった。軒丸瓦III A2は『大阪市立博物館報』No26 1987、の8頁写真6がこれに当る。軒丸瓦IV Abは[大阪市文化財協会1989]にある。[藤沢1941]274頁、「第二期類B類複弁紋系類 難波百濟寺式軒丸瓦資料表」の2もこれに当るかと思われる。収蔵品を見せていただいた大阪市立博物館の厚意に謝意を表したい。
 - (3)『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996 p.7、6018Cから型式変更した。
 - (4)瓦の整理は、当初宮本佐知子が実施し、それを八木が引き継いだ。その後も宮本、佐藤隆はじめ当協会調査員から多くの協力を得た。
- また、前田洋子氏(大阪市立博物館)には、堂ヶ芝廃寺の瓦をはじめ多くのご教示を得ることができた。深謝する次第である。

第9節 製塩土器

今回の調査では、SD501を中心にコンテナ2箱の製塩土器が出土した。ここではそれらを形態的特徴・胎土などから5つに分類して報告する。

I：全体の器形が深鉢状を呈する一群。外面に粘土接合痕を残す。内面に横方向のナデを施す。

II：口縁端部が屈曲して外反する一群。全体としては小型の鉢形を呈するものと思われる。内外面ともナデ調整されているものが多いが、一部内面がハケで調整されている個体もある。口縁端部に外傾した平坦面を作る。

III：外面にタタキ目をもつ一群。全体の形は不明。内面はナデを施す。

IV：全体の器形が円筒形を呈する一群。内外面をハケ目で調整し器壁が薄手のものと、器壁が比較的厚く外面に指頭痕を残し内面にナデを施したものとがある。

V：内面に布目をもつ一群。内面の布目に粗密の両方がある。外面に指頭痕を残すものもある。全体としては円筒形または逆円錐形の鉢形を呈すると考えられる。

以上の分類を指標に、出土した製塩土器をSD501出土のものとSD501以外から出土したものに大別し、おもなものを図示し、述べていく。

SD501出土資料 総破片数は452点を数える。320～322はI群に属している。うち320・321は胎土にモミを含む。323はII群に属する個体である。全体の破片数からみた割合はもっとも少ない。324はIII群に属する。内面の調整は不明であるが非常に平滑である。IV群は内面にハケ目をもち、器壁が比較的薄い一群(325・326)と外面に指頭痕をもち内面をナデ調整し、器壁が比較的厚い一群(327)とがある。328・329はV群に属している。他群に比べて胎土に含まれる砂粒が小さい。

SD501以外出土資料 総破片数は196点を数える。330・331はI群に属する。外面の粘土接合痕は指などでナデ消そうとした痕が部分的にみられる。332はII群に属する。胎土に細かい砂粒を非常に多く含む。333はIV群に属する個体である。全体の約4分の1が残存しており、出土した製塩土器のうちで、この個体がもっとも大きく復元できた(図版38)。334はV群に属する。外面が斑点状に桃色に変色している。

表8 製塩土器出土数一覧表

型式名 遺構名	布目なし					布目あり(V)		その他	計	モミ・スサ混
	I (粘土接合痕)	II (口縁外反)	III (外面タタキ)	IV (内・外内面ハケ)	分類不能	粗	密			
SD501	26 (5.8%)	14 (3.1%)	28 (6.2%)	42 (9.3%)	215 (47.5%)	15 (3.3%)	104 (23.0%)	8 (1.8%)	452	9 (2.0%)
	325(71.9%)					119(26.3%)				
SD501以外	15 (7.7%)	6 (3.1%)	1 (0.5%)	12 (6.1%)	115 (58.7%)	5 (2.6%)	40 (20.4%)	2 (1.0%)	196	4 (2.0%)
	149(76.0%)					45(23.0%)				
計	41 (6.3%)	20 (3.1%)	29 (4.5%)	54 (8.3%)	330 (50.9%)	20 (3.1%)	144 (22.2%)	10 (1.5%)	648	13 (2.0%)
	474(73.2%)					164(25.3%)				

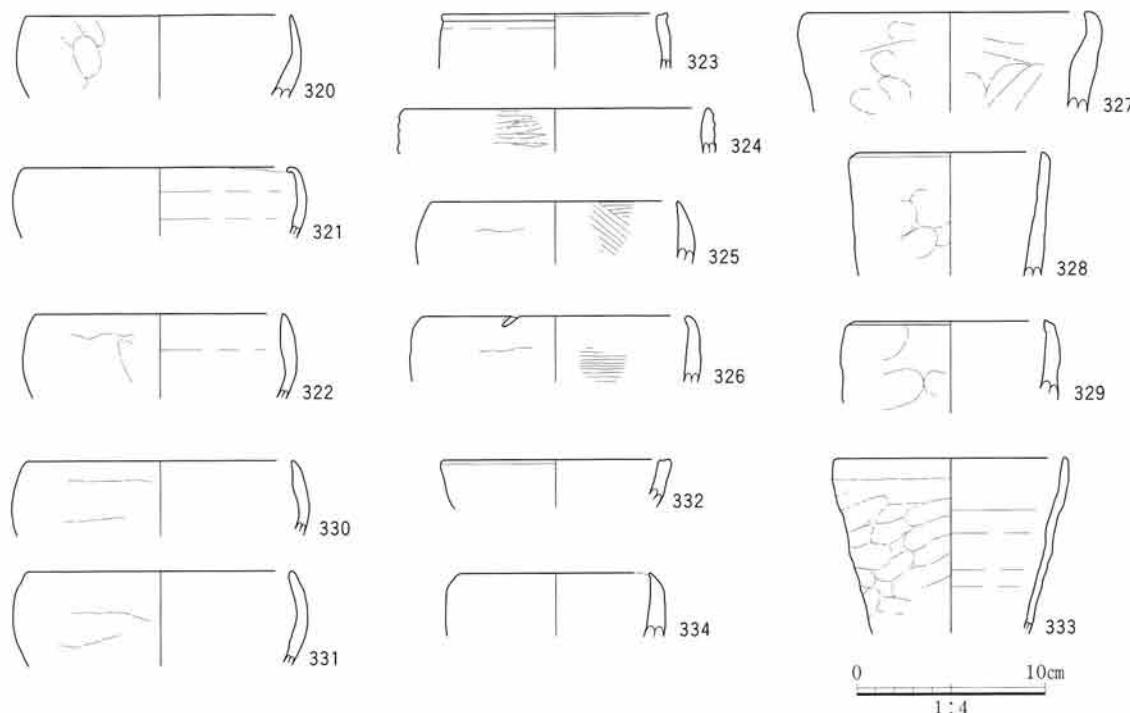


図83 製塙土器

SD501(320~329)、SK504(333)、第5層(330~332、334)

細工谷遺跡出土の製塙土器の産地には以下の地域が推定される。

I : 大阪湾北部沿岸から播磨(淡路を含む)にかけての瀬戸内海東部地域

II : 和泉から紀伊にかけての大坂湾東部沿岸地域?

III : 現在のところ生産地不明

IV : 紀淡海峡を中心とする地域

V : 北部九州を含む瀬戸内海西部地域

以上のように当遺跡では、複数の地域の製塙土器が混在して出土する様相がうかがえる。つまり、この遺跡で使用された塩は複数の塩の生産地から供給されたといえよう。枝銭が検出されたSD501から出土した製塙土器は、全体的に器壁の薄いものが多く、V群に分類される布目をもつ一群の全体に占める割合が低いことなどの特徴があげられる。製塙土器の内陸地での出土が急増する8世紀後半よりも、若干古い要素であり、SD501出土の土器群とも矛盾しない。製塙土器に入った塩の用途としては、現在、食用・工業用・祭祀用の3つが考えられている。工業的用途の代表としては平城京左京三条四坊七坪の和同開珎鑄造遺構に伴って出土した製塙土器が挙げられる[奈良国立文化財研究所1980b]。しかし、鑄造遺構と製塙土器が出土した遺構との間に時期差がみられるといった指摘もあり、塩の工業的用途についてはそれを裏付ける明確な出土例をもたないのが現状である。今回、和同開珎の鑄造に関連する遺物とともに製塙土器片が出土したことは、内陸地出土の製塙土器および内容物である塩の用途の問題に少なからず影響を及ぼすといえよう。

(小野)

第10節 動物遺体

1) 資料の採集方法と同定結果

資料は採集方法により2大別され、一つは発掘調査中に採集されたもの、もう一つはSE505の埋土を水洗選別した際に採集されたものである。後者は井戸埋土を半裁した際に、厚さ20~25cmごとに採集した土壌を1mmメッシュを用いて水洗した際に見つかったもの(上位から順に資料1~4とする)だが、当初の作業目的が土器片や微細な金属製品・木製品の採集であったため、動物遺体がすべて採集されたかどうか確証がない。しかし、残り半分の埋土を種実分析用に細かく分層して持ち帰った資料があり、これに包含される骨の将来的な分析に先立つ予測資料として報告することとする。

これらの資料を同定した結果、下記のような魚類1種、両生類2種、哺乳類3種が判明した(図版58)。カエル類の同定以外は筆者所蔵の現生標本との比較によった。標準和名および学名、その配列は、魚類は[益田一他編1984]、両生類は[野村家宏・長谷川善和1979]、哺乳類は[北隆館編集部編1981]・[今泉吉典1960]に従った。

硬骨魚綱 Class Osteichthyes

ニシン科 Family Clupeidae

マイワシ *Sardinops melanostictus* (Temminck et Schlegel)

両生綱 Class Amphibia

アカガエル科 Family Ranidae

ヤマアガエル *Rana (Rana) ornativentris* Werner

ツチガエル *Rana (Rana) rugosa* Schlegel

哺乳綱 Class Mammalia

ネズミ科 Family Muridae

ネズミ亜科 Murinae

属種不明 gen. et sp. indet

ウマ科 Family Equidae

ウマ *Equus caballus* Linnaeus

ウシ科 Family Bovidae

ウシ *Bos taurus domesticus* Gmelin

2) 各動物種の出土状態

ウマとウシは、歯や骨の一部分が溝や井戸の発掘中に採集された。このほかの種類はSE505埋土の水洗選別中に採集された。マイワシが一部分のみの出土であったのに対し、ネズミ亜科はある程度の部位が揃っている。さらに、アカガエル科アカガエル属の2種は大半の部位が揃っており、またビビアナイトの付着によって交連した状態が保たれたものも多くみられた。このような状況や生態、食料

としての利用価値から判断して、アカガエル属とネズミ亜科は自然死したものが井戸中へ落込んだ可能性が高い。

したがって、マイワシ・ウマ・ウシは明らかに人間が遺跡内に持ち込んだものといえる一方で、アカガエル属・ネズミ亜科は考古資料といえるかどうか検討を要する(註1)。以下、この二つの観点から動物遺体の記載と検討を行う。

3) 動物遺体の記載

i) マイワシ

SE505内資料4の土壌中から見つかった。出土部位は左角骨と左下鰓蓋骨が各1点である。ほかにも骨表面の特徴が魚類の鰓蓋に近似するものがみられたが、部位の同定にはいたらなかった。両部位の特徴はニシン科のそれと一致し、ウルメイワシ・キビナゴ・マイワシ・サッパ・コノシロ・ドロクイと比較した結果、マイワシに酷似していたことから、本種に同定した。資料の大きさは標準体長15.5cmの標本よりわずかに小さい。

ii) アカガエル属

SE505から非常に多くのカエル遺体が出土した。そのうち、種名が判明したものはヤマアカガエルとツチガエルであった。出土量は表9に示した。表中でアカガエル属と記したものは、種名を同定し得る形質を有さない部位あるいは破片資料である。そのうち資料4のアカガエル属に属する仙椎1点には奇形したものがみられた。通常左右1個の横突起が各2個あるものである。また、同定の確度が低いものには?を付した。しかし、これらは同一層準から出土している上記2種のいずれかに由来することが推測される。

a. 各種の記載

各種の部位の特徴は以下のようである。記載には[野莉家・長谷川1979、1985]・[H. Nokariya 1984]を参考にした。

ヤマアカガエル

前額頭頂骨：幅は近位端に近づくにつれて徐々に減る。後頭突起は発達し、後方に突出するが、その遠位端は骨体の後縁より前方にある。occipital canal(後頭溝)がみられるが、眼窩孔の後縁に達しない。眼窩孔の中ほど後位のくびれがわずかに発達する。

楔骨：外側突起は前外方へ突出する。flange(鍔)はやや発達する。腹側の後縁は前方へわずかに湾曲する。背側の後縁は波状を呈し、その前端はflangeの後端よりもわずかに後方に位置する。

剣状骨：bladeの長さはala(翼)を含む幅よりもわずかに長い。alaの前縁はbladeにはほぼ直角に交わる。後縁は前方へ強く湾入する。左右のalaの遠位端は前後方へ広がる。bladeの頸部はわずかに発達する。後突起の遠位端はalaの後端と同じレベルにある。

上顎骨：顔面部の前縁はほぼ直線的で、背側へ傾斜する。顔面部の背縁はほぼ直線的である。背側突起は背側方へ突出する。翼状突起は弱く発達する。

肩甲骨：肩峰突起前縁部は凹む。骨体前縁は後方へ強くへこむ。下肩甲稜は鳥口突起前縁に沿って

表9 カエル遺体一覧表

資料番号	資料1						資料2						資料3			資料4		
レベル(m)	8.05~7.80						7.80~7.60						7.60~7.40			7.40~7.20		
層 準	3層~4層最上部						4層						5層~6層上部			6層下部~7層上部		
体積(cc)	35,325						28,260						28,260			28,260		
種 名	ヤマアカガエル	ツチガエル	アカガエル属	ヤマアカガエル	ツチガエル	アカガエル属	アカガエル属	ツチガエル	アカガエル属	ヤマアカガエル	ツチガエル	アカガエル属	アカガエル属	ツチガエル	アカガエル属	ツチガエル	アカガエル属	
左 右	L	R	-	L	R	-	L	R	-	L	R	-	L	R	-	L	R	-
前額頭頂骨							13	12							13	16		
楔師骨									1							8		
剣状骨									5							11		
後頭骨										2	3		1					14 11
上顎骨	2						1	8	14						10	14		
下顎骨				1	1					10	15		1					11 13
肩甲骨	21	21						10	13						5	7		
上腕骨♂		1		1				10	12						6	5		
上腕骨♀	1	2						9	10						11	7		
橈尺骨				2	3					9	13		1					13 11
腸骨	1	2	1			1		22	20						19	19		
大腿骨				2						17	17							15 15
脛腓骨				3	1					24	23		4					16 18
跗骨										3	5							6 5
環椎												13						14
椎骨						2						98		3				72
仙椎			1							13						7		2
尾椎						1						20						14
最少個体数	2		1		(3)		1		22		(24)		(4)		19		(16)	

先端より基部まで走り、そこから骨体前縁に平行に走る。肩峰突起先端の前後幅は、骨体遠位端前後幅にほぼ等しい。

上腕骨：上腕結節は発達が悪い。内側上顆の先端は滑車最下端と同レベルである。側面観で三角隆起の前縁は直線的である。前面観で三角隆起の前端が一部内側へ突出する。内側翼の発達したものと雄、発達しないものを雌と判断した。

仙椎：椎体前面は凸である。横突起は棒状で、外側後上方へ向う。横突起上の稜は人字形で、横突起中央を通って先端まで走る。椎孔上では前縁寄りを通る。

腸骨：腸骨突起角がやや狭い(45~60°)。腸骨翼が発達し、上縁は上方に湾曲する。腸骨翼の上端と上角は同レベル。腸骨粗面の後下端と寛臼上縁は離れている。

ツチガエル

すべての部位がヤマアカガエルに比して明らかに小さい。

前額頭頂骨：幅は近位端に近づくにつれて徐々に減る。後頭突起はよく発達し、後外方に突出する。その先端は骨体の後縁より後ろに延びる。後頭溝がみられる。頭頂稜はわずかに認められる。

楔師骨：骨体長は骨体幅とほぼ等しい。前方突起はわずかに突出する。骨体背側の前縁は前方へ弓なりにそる。外側突起は前外方へ突出する。その両端の距離は骨体長よりも長い。flangeはやや発達する。背側の後縁は前方へ湾曲し、その前端とflange遠位のコーナーは同じレベルにある。

剣状骨：bladeの長さはalaを含む幅よりもわずかに長い。alaの前縁はbladeに直角に交わる。後縁は

前方へほとんど湾入しない。後突起の遠位端はalaの後端と同じレベルにある。

上顎骨：顔面部の背縁はほぼ直線的である。翼状突起は発達する。lingual shelfの近位端はよく発達し、背側へ傾斜する。

肩甲骨：肩峰突起前縁部は凹である。腹面観で関節窩の前縁はあまり前方へ湾曲しない。下肩甲稜はあまり発達せず、鳥口突起前縁に沿って先端より骨体の1/2付近まで走る。

上腕骨：上腕結節がよく発達する。内側上顎の先端は滑車最下端と同レベルである。外側翼がわずかにみられる。骨体の左右幅のわりには骨体長が短い。三角隆起の前下縁はなだらかな角度で骨体前縁に交わる。内側翼の発達したものを雄、発達しないものを雌と判断した。

仙椎：椎体前面は凸である。横突起は棒状で、外側後上方へ向う。横突起状の稜は十字形で、横突起中央を先端近くまで走る。前関節突起は小さく、前縁は直線的で、左右幅は広い。左右横突起のなす角度が広い。

腸骨：腸骨突起角は広い(90°近い)。腸骨翼はよく発達し、腸骨翼の最上端は上角よりも上方にある。腸骨粗面はよく発達し、その後下端と寛臼上縁は離れている。腸骨体基部は寛臼前端と接する。

b. 出土部位

表中に示した部位のほかにも多数の部位が認められた。部位によって多寡がみられるものの、最少個体数に近い数が複数の部位で記録された。人為あるいは自然為の選択性はほぼなかったと考えてよいと思われる。また、頭蓋骨や椎骨、肢骨には交連した状態を多数確認することができた。以上から、井戸に侵入した時点での姿は生体あるいは腐敗が進んでいない死骸であったと推測される。

c. 年齢と性別

年齢は骨端部の状況からみて、すべて変態後で、なおかつ繁殖年齢に達しているものばかりであった。また、性別は上腕骨の内側翼の発達度から判断でき、雄雌の比率は資料4のツチガエルでは6:11、資料2のツチガエルでは12:10、資料1のヤマアカガエルでは1:2と、どちらかに著しく偏重することは少ないと思われる。

d. 出土量とその傾向

今回の資料で最少個体数を算出すると、下位から順に、資料4ではツチガエルが19個体、資料3ではアカガエル属が4個体(大きさはすべてツチガエルに近い)、資料2ではアカガエル属24個体(うちヤマアカガエル1個体・ツチガエル22個体)、資料1ではヤマアカガエル2個体、ツチガエル1個体で、合計50個体に及ぶ。これらは遺構埋土の一部から検出されたにすぎず、もっとも多かった資料2の密度で、すべての井戸埋土に含まれていたと仮定すると、井戸全体で約470個体ものカエルが含まれることになる。実際にはこれほど多くないにしても、これまでに知られている縄文時代以降の遺跡から見つかったものとしては全国的に見てもっとも多い例といえる。

そして、今回の資料では、産出数の多い資料と少ない資料がレベルごとに順に出現し、また、上部ほどヤマアカガエルの比率が高いように見える。また、SE505以外で同様な土壤水洗作業を行った遺構にはほとんどカエルの骨は含まれておらず、本遺構にのみ出土が集中しているように見える。しかし、採集精度が一定しているとはいがたいので、これらの真偽や要因は将来的により精度の高い

方法で採集した資料の分析によって明らかにしたい。

iii) ネズミ亜科

すべて資料2から見つかった。出土した部位と数量は、右上顎骨1点、下顎切歯左右各1点、右橈骨1点、寛骨左右各1点、大腿骨左右各1点、脛骨左2点・右1点、環椎1点、腰椎1点である。上顎骨には第2臼歯が植立し、臼歯は有根で歯冠が短く、数個の咬頭をもつ鈍頭歯型であるので、ネズミ亜科の一種と思われる。また、脛骨の形態からみて2種が含まれると思われ、これを考慮した最少個体数は3個体となる。右大腿骨の遠位端は癒合しておらず、若い個体のものといえる。比較的多様な部位が出土したので、自然死したものである可能性が考えられる。種の同定を行っておらず、詳細は今後の課題としたい。

iv) ウマ

調査地東部で検出した谷内に位置する遺構・包含層から見つかった。以下、上層より順に記載する。なお、年齢は[西中川駿・松元光春1991]の歯冠高による推定式を利用したが、出土資料の歯根部に欠損が顕著であったことから、おおよその推測にすぎない。

9世紀前半に属する第5層からは、左上顎第1後臼歯M¹が1点出土した。歯冠エナメル質の近遠心長は28.0mm、頬舌幅は25.2mmである。歯根は未形成で、残存部分での歯冠高からみて5歳よりも若い個体の歯と推測される。なお、第5層からはウマあるいはウシのものとみられる肢骨の破片も出土している。

8世紀後半に属するSD501からは、右上顎第3後臼歯M³と左上顎臼歯の破片が出土した。M³の歯冠エナメル質の近遠心長は26.5mm、頬舌幅は21.0mmである。歯根は形成初期で、残存部分での歯冠高からみて年齢は8歳前後と推測される。

7世紀末葉～8世紀初頭に属するSD603からは、左上顎第2後臼歯M²および第3後臼歯M³が出土した。M²の歯冠エナメル質の近遠心長は25.0mm、頬舌幅は22.4mmである。歯根は未形成で、残存部分での歯冠高からみて年齢は4～5歳前後と推測される。M³は後端部が未咬耗で、萌出して間もないものと推測される。[M. A. Levine 1982]によれば、M³において咬耗がすべての咬合面に及んでいないのは3～6歳の期間と推定され、本資料はその段階の後期に位置づけられる。M²とM³は同一個体と推測され、総合的に判断すれば、年齢は4～5歳前後と推測される。

7世紀初頭のSD601からは、左上顎第2前臼歯P²が出土した。欠損が著しく、計測は不可能である。歯根は形成され、残存部分での歯冠高からみて年齢は4～5歳前後と推測される。

v) ウシ

B区西部の7世紀末葉に属するSE606の抜き取り穴中から、右中手骨の遠位端が出土した。外側半の破片で、破面は磨滅している。滑車部の計測値から推測した遠位端最大幅は約54mmで、[西中・松元1991]の推定式に照らせば、体高は115cmと推測される。

4) 動物利用の様相

今回の資料はいずれも断片的なものであったが、いくつか注目される点もある。

まず、SE505からマイワシが出土したことは、本地点の性格を考慮すれば、当時の水産物流通を考える上で興味深い。マイワシは大阪湾で多く漁獲された魚種と推測されるが、実物資料はさほど知られていない。これまでには桑津遺跡(弥生時代中期)[久保和士1996b]、難波宮下層遺跡(7世紀前半)[久保1997]でニシン科の遺体が出土しているにすぎない。一方、漁具資料からみると、飛鳥から奈良時代にかけて上町台地西側の地域では曳網用と思われる管状土錘や工字形土錘が多くみられるようになることから、本地域の漁業生産に一定程度の向上があったと推測される。その漁獲物にはマイワシなど内湾性浮魚類も含まれていたと思われ、これが都市に流通していた可能性も考えられる。しかし、飛鳥・奈良時代の食料残滓の検出例やそのための努力は不十分といわざるを得ないのが現状であり、今後、水洗選別法を積極的に導入することも重要な手立てとなろう。

ウマとウシは骨に比べて残りやすい歯が大半で、どのような経緯で遺跡内に遺存したものか不明である。ただし、ウマがウシよりも多い状況は7世紀代の森の宮遺跡[久保1996a]や住友銅吹所跡[久保1998]とも共通し、難波京域における家畜の構成を追認しうる資料ともいえる。

5) カエル遺体から推測される古環境

以上のように、カエル2種とネズミ類が調査地周辺に生息していたことが明らかとなった。ここでは、多産したカエルから遺跡周辺の古環境を推測したい。

i) カエル2種の形態と生態

まず、出土した2種の形態と生態を[松井正文他1989]・[千石正一他編1996]によってみてみよう。ヤマアカガエルは本州・四国・九州・佐渡島に分布する。成体の体長が雄42~60(平均48)mm、雌36~78(平均68)mmで、雌は雄よりも明らかに大型である。平地や丘陵地にも分布するが、山地が多い。繁殖期は2~4月が普通だが、早いばあいには1月、遅いばあいには6月下旬となる。繁殖場所は湿原・湿地・道路や河川敷の水溜り・池・沼・湖・水田などで、総じて日当たりのよい浅い止水が選ばれるが、弱い水流のあることもある。繁殖期の水温は6℃前後で、産卵数は1,000~1,900個である。幼生の変態期は通常6~8月頃で、変態時の体長は11~20mm程度である。雄では性的成熟に達するまで2~3年を要し、雌では同じく、さらに年数を要すると思われる。晩春から秋の非繁殖期にはおもに森林周辺で生活し、昆虫・ミミズ・ナメクジなどを食べる。晩秋になると産卵場に移動する個体が多くなる。溝や水田の水底の泥の中、崖の土中などで冬眠する。寿命は4~5年程度らしい。アナグマ・イタチ・サギ類に捕食される。鳴き声はキャララ・・・・と聞こえる。

ツチガエルは本州・四国・九州・佐渡島・隠岐・壱岐・五島列島などに分布する。体が多数のいぼに覆われているため俗にイボガエルと呼ばれている。成体の体長が雄37~46(平均41)mm、雌44~53(平均50)mmで、雌は雄よりも明らかに大型である。平地から低山地にかけて分布し、広い河川の川原まで広い範囲に生息する。都市部の池にも生息する。水辺のすぐ近くに生息し、これを離れることはない。繁殖期は長く、5~9月に及ぶ。繁殖場所は水田・池・沼・溝・用水路・湿原・湿地の水溜り・広い河川の川原にある水溜りなど、浅い止水や緩い流れである。一腹中の完熟卵数は1,000個くらい。産卵は特に水温に影響され、日中平均気温が18℃以上にならなければ始まらない。5日で孵化し、通

常は幼生越冬し、翌年の5～8月に変態する。12月下旬～3月末から4月初めが越冬期間である。変態時の体長は25mmほどである。多くは変態の翌年に性的成熟に達するらしい。餌としてアリを非常に多く食べるのが特徴で、クモ・双翅類の成虫や幼虫・ゴミムシなどの鞘翅類、鱗翅類幼虫などもよく食べる。幼体と成体は池や小川の底の泥の中など、水中で越冬することが多い。寿命は3年以上。いやな臭いを出すためか、ヘビ類に捕食されることは少ないようである。鳴き声はギュウ・ギュウと聞こえる。

ii) 古環境復元に係わる予察

以上の生態をみてもわかるように、種によってずいぶん異なる生態もある。したがって、種同定がなされれば、これらのカエル遺体も古環境分析の材料となると思われる。

その前提として、どのような過程を経て遺構内にカエル遺体が形成されたのか、考察する必要がある。出土部位の概観から、これらは生体か腐敗の進んでいない死骸の状態で井戸内に侵入したと考えられた。では、侵入の要因は人為あるいは自然為いすれであったのだろうか。人間が意図的に投げ込んだものと考えたばあい、食用とはせず投げ込むこと自体に意味を求めるべからず、カエルとしてめだつような種が選択されていないことや、集落域の放棄後もそのような行動を継続していたことになることから、説得力に欠ける。自然に侵入したと考える方が妥当であろう。そのばあい、行動中に井戸に落込んだ生体、あるいは近辺から流れ込んだ死骸の二通りの侵入形態が想定される。しかし、SE505の位置をみると、この東側には谷地形、西側にはSD501があるので、流れ込みを想定するのは困難と思われる。もし流れ込んだのであればほかの遺構にもカエル遺体が同様に認められてよいはずである。したがって、これらはカエルが井戸内に自然に落込んだものと解釈するのが妥当であろう。そのばあい、カエルには垂直の高い遮蔽物を乗り越えることは困難であるので、井戸放棄後直ちに井戸側が撤去されていた状況が想定される。このような生態からみて、遺構内ではカエル遺体は非常に局地的な条件のもとで出現するものと思われる。なぜ、多数のカエルが井戸に落ちたのか、想像の域を出ないが、日常的あるいは季節的な移動のルート上にSE505が位置していた可能性も考えられる。

このようにみると、SE505の周辺にカエルの行動範囲があったことになり、出土個体がいすれも繁殖年齢に達していることから、繁殖場所への移動経路に相当していた可能性もある。小型のカエルの行動半径はさほど広くないと思われるので、近辺に繁殖に適した水辺があったのだろう。また、出土2種がいすれも丘陵地に分布することは、遺跡の立地とも適合し、カエルの生息に適した環境が展開していたと思われる。また、大量に産出した背景には、生息数が多かったことが推測される。そして、当然のことながら遺跡周辺での音響環境の再現に役立つだろう。今回の資料のみから推測できるのはこの程度であるが、今後の資料分析にあたって、どのような可能性を有しているだろうか。

まず、細かな層位的検討により、堆積物の季節性を推定しうる可能性がある。越冬期間と繁殖期間に種ごとに差異があるからである。次に、遺跡の消長と考え合わせて、生息数の多さの要因を環境の変化に求めることができる可能性がある。仮に、遺跡の衰退期に当るSE505にだけ多く認められるならば、居住域の放棄とともにカエルの生息数が増加したのかもしれない。そして、このようなカエル遺体から導き出される情報と、花粉・種実・昆虫遺体の情報を総合化することで、より綿密な古環境

復元ができるものと思われる。

以上から、これらのカエル遺体も考古学的に意味のある資料と考えることができよう。

最後に、難波京域におけるカエルに関する文献資料に触れておきたい。『続日本紀』延暦3(784)年5月条には、「今月七日卯時、蝦蟇二万許、長可四分、其色黒斑、従難波市南道、南行池列可三町、隨道南行、入四天王寺内、至る午時、皆悉散去」とある。かなり詳細に記述されている点は注目されるが、蝦蟇を故事として用いただけかもしれない、内容の真偽は明らかでない。しかし、これまで一般的に解釈されているように、ここに記された蝦蟇をいわゆるガマつまりヒキガエルに単純に比定するには問題がある。なぜならば、大きさが4分とヒキガエルの成体に比してきわめて小さいからである。ただし、変態直後の個体であれば、ヒキガエルとすることも可能であり、大きさと色調からみれば、小型のアカガエル属の一種とすることもできよう。つまり、今回大量に発生していたことが推測されたツチガエルである可能性もないわけではなく、SE505と時期的にも符合する記事であるだけに興味深い。

(久保)

註)

(1)筆者はこれまで明らかに人間によって遺跡内に持ち込まれた動物体を検討の主対象としてきた。今回のアカガエル属にみられるような自然死したと思われる遺骸を大量に報告するのは、本稿が初めてであるので、動物遺体に関する筆者の考え方を記しておきたい。

遺跡から出土する動物体の一部は考古学的にみれば動物遺体となり、古生物学的にみれば動物化石の範疇に属すると、筆者は考えている。

しかし、一口に遺跡から出土する動物体といつても多様である。その種類には、a. 骨角や皮革など動物体を用いた製品やその未製品、b. 食料残滓やaの加工時の残滓、c. 遺跡周辺で生息していた小動物(ネズミ類や昆虫など)の遺骸、d. 家畜の遺骸、e. 人類の遺骸が考えられる。dやeはaやbにも含まれうる。これを[鈴木公雄1988]による考古資料の区分に照らせば、aが①人類がある目的をもって製作・加工したもの、bとdが②人類によって利用された自然界の物質、cの一部が③人類の活動や行為によって自然界に生じた変化を示す物的証拠にほぼ相当する。

筆者のいう動物遺体はa～eのすべてを指す用語ではない。動物遺体の分析は古生物学の方法が基礎となっていると考えれば、[井尻正二1949]の古生物学の対象からaとeは除外されていることから、動物遺体にも含めない方が妥当と考えている。また、筆者は動物遺体は考古資料であるという立場をとるので、cのすべてを動物遺体とすることはできない。しかし、それを人間が持ち込んだものでないと断定し、なおかつ③のケースではないと判断するにいたる手続きを行うことは必要である。したがって、まったく分析もせずに、考古資料ではないと断定することは困難と考えるので、分析対象から除外するものではない。その上でbとd、そしてcの一部を動物遺体と呼称するものである。

第Ⅳ章 分析と検討

第1節 細工谷遺跡の古環境復元

株式会社 古環境研究所
金原正子

1)はじめに

分析対象となったのは、5世紀後半以前～鎌倉時代にわたる谷内の堆積物と7世紀末葉から9世紀初頭にかけての遺構の堆積物である。花粉分析・種実同定・寄生虫卵分析を実施し、難波京域の植生および環境の推定を行う。

自然科学における花粉分析は、広域に堆積した湖沼や湿原の堆積物を対象として、花粉層序に基づく比較的広域的な植生変遷の推定に用いられてきた。遺跡の堆積物では、遺構内の堆積物などの分布範囲の狭い集水域の不明瞭なものも多く、広域な対比を前提とした自然科学の解析法が適応していないことも示唆されている[金原正明1993]。このような遺跡の堆積物に対しては普遍的な解析法を持ち得ていず、試料となる堆積物の堆積状況と抽出された花粉群集の特徴によって解析し推定しているのが現状である。きわめて局地性を示す花粉群集の存在も示されている。

種実同定においても、大型植物遺体である種実が花粉などの微遺体より移動性が相対的に低いとみなされ解析され推定されるにとどまる。寄生虫卵分析では、出現密度が高いと糞便の累積である可能性が高いと示唆されるが[金原正明・松井章・金原正子1994]、低密度のばあいは漠然と汚染によるものという推定にとどまる。また、花粉群集と種実群集は、母植物における花粉や種実の生産性、堆積物中の保存性、同定される分類群の階級に差違があるため、必ずしもパラメータとして一致せず、植生の推定を困難にしている。

ここでは以上の研究の現状を踏まえ、細工谷遺跡の植生と環境を推定し、ほかの都城遺跡との比較を行う。

2)試料・層序・遺構について

花粉分析と寄生虫卵分析は、発掘調査担当者が採集した試料(堆積物)を用いた。種実同定試料はすでに水洗が行われたものを用いた。各地点ないし遺構における層序関係は結果の図に示す。

i)花粉分析試料および寄生虫卵分析試料(図8・9・12・24・51・53、図版59)

花粉分析試料と寄生虫卵分析試料は同じ試料を用いた。

a. A区南壁(図8)

第4a層(13世紀頃)の801、第3層基底面検出SD310(13世紀頃)の802、第4b層(9世紀後半頃)の

803、第5層(9世紀前半)の804~806、SD501下部(8世紀中頃)の807~811、第6層(6世紀)の812・813、第7層(5世紀後半)の814・815、SD701(5世紀中葉以前)の816~820、の20試料である。いずれもシルトを主とする堆積物である。

b. SK605(7世紀末葉~8世紀初頭、図24)

821~828の8試料で、シルトないし粘土を主とする。寄生虫卵分析試料は821~823・825・827・828の6試料である。

c. SE505(8世紀中頃~後半、図51)

829~833の5試料で、いずれもシルトである。寄生虫卵分析試料は829~833の5試料である。

d. SD501(北壁、8世紀中頃~後半、図9)

834~840の7試料で、いずれもシルトである。寄生虫卵分析試料は834・835・840の3試料である。

e. SE507(8世紀末葉~9世紀初頭、図53)

841~846の6試料で、シルトを主とし下部では砂が主となる。寄生虫卵分析841~846の6試料である。

f. 第9・10層・SD1001(図12)

847~850の4試料である。

ii) 種実同定試料

a. SK605(7世紀末葉~8世紀初頭、図24)

851~854の4試料である。

b. SE505(8世紀中頃~後半、図51)

855~867の13試料である。

c. SD501(8世紀中頃~後半)

868の1試料である。

d. SE507(8世紀末葉~9世紀初頭)

869~875の7試料である。

3) 花粉分析

i) 方法

花粉粒の分離抽出は、試料に次の順で物理化学処理を施して行った。①5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。②水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。③25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。④水洗した後、氷酢酸によつて脱水し、アセトトリス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。⑤再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。⑥沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1,500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1,000倍で行った。花粉の同定は、[島倉巳三郎1973]、[中村純1980]をアトラス(参考図版)とし、所有の現生標本との比較で行った。結果は同定レベルによって、科・亜科・属・亜属・節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できるばあいはそれらを別の分類群とした。イネ科についてはイネ属を[中村純1974・1977]が現生標本の表面模様の比較から細分している。ここでは現生標本の比較において個体変化や類似種があることから、表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴を総合的に比較してイネ属型として細分した。

ii) 花粉群集の特徴と分帶(図84・85)

分析結果は花粉総数を基数とする百分率を算定し花粉ダイアグラムにして示した。

a. A区南壁

花粉組成より下部より、I~IV带の4つの花粉帶を設定した。なお、上部の801~804からはあまり花粉が検出されなかった。

I带(817・819)では、コナラ属コナラ亜属が優占し、コナラ属アカガシ亜属をおもにクリーシイ属・マツ属複維管束亜属・スギなどが伴われる。草本花粉の占める割合はきわめて少ない。

II带(812~816)には、コナラ属コナラ亜属が減少し、イネ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科をおもにアカザ科-ヒユ科などの草本花粉の占める割合がやや高くなる。樹木花粉ではクリーシイ属・ツガ属・マツ属複維管束亜属・スギの出現率がやや増加する。

III带(808~811)では、樹木花粉の割合が低くなり、草本花粉の占める割合が高くなる。草本花粉ではイネ科が優占し、アカザ科-ヒユ科の出現率も高くなる。ミズアオイ属の出現率は一時的に高くなる。ほかにクワ科-イラクサ科の出現率もやや高い。この帶の上部でイネ属型花粉が増加し、ソバ属も伴って出現する。

IV带(805~807)では、ヨモギ属・アカザ科-ヒユ科とマツ属複維管束亜属・スギ・クリーシイ属が増加する。

b. SK605

草本花粉の占める割合が高く、イネ科が優占する。ほかに草本花粉はアカザ科-ヒユ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科をおもにアブラナ科・オオバコ属・タンポポ亜科・キク亜科などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属・スギ・マツ属複維管束亜属・クリーシイ属がおもに出現する。

c. SE505

草本花粉の占める割合が高く、イネ科とアカザ科-ヒユ科をおもに、ヨモギ属・カヤツリグサ科の草本花粉が優占する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属・マツ属複維管束亜属・スギをおもに出現する。中部(832)でイネ科・アカザ科-ヒユ科が減少し、相対的にはかの要素が増加する。上部に向って、イネ科・アカザ科-ヒユ科・ヨモギ属はやや高率になる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属・マツ属複維管束亜属・スギがおもに出現し、イネ科花粉の挙動と逆の相関を示す。

d. SD501(北壁)

上部は花粉があまり検出されなかった。下部では草本花粉の占める割合が高く、イネ科が優占し、

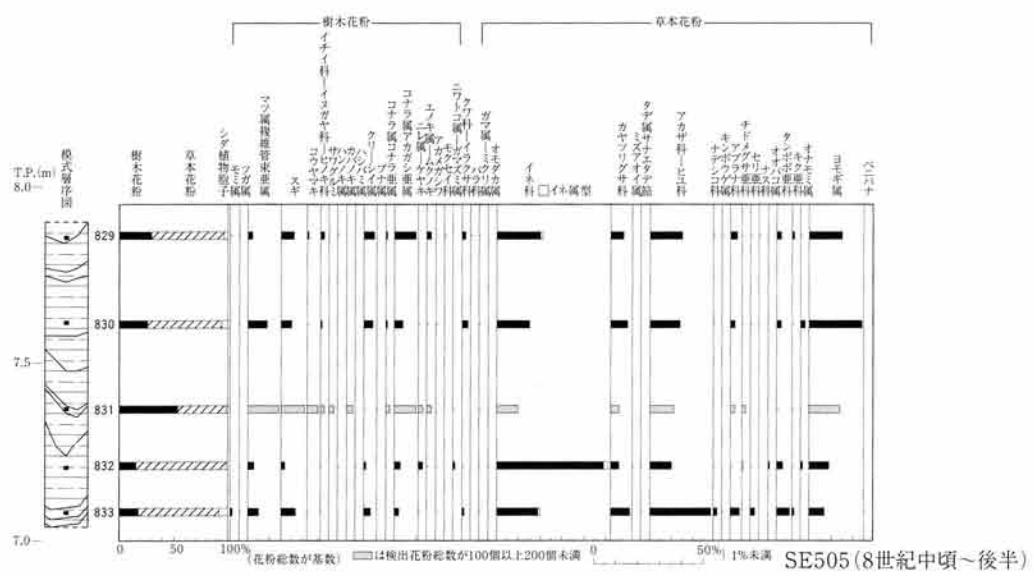
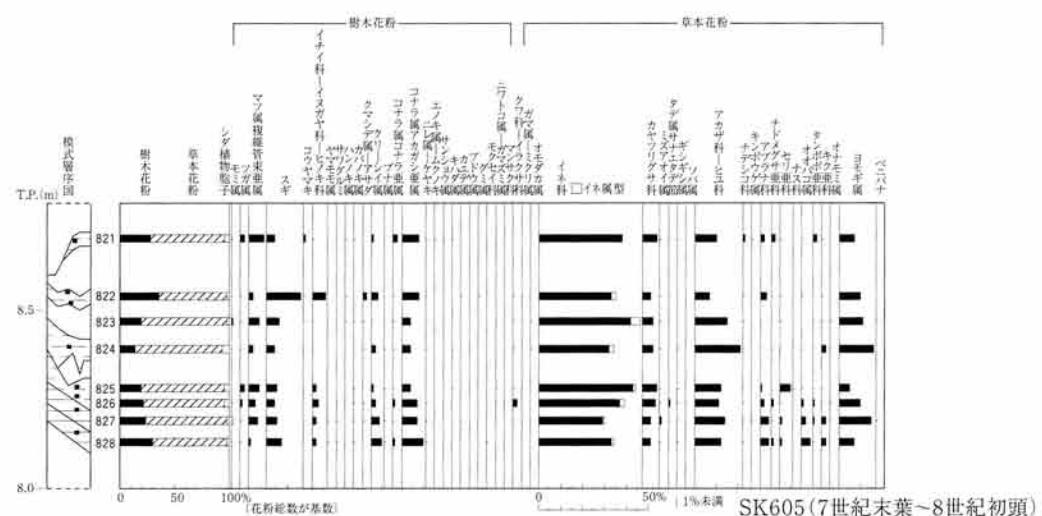
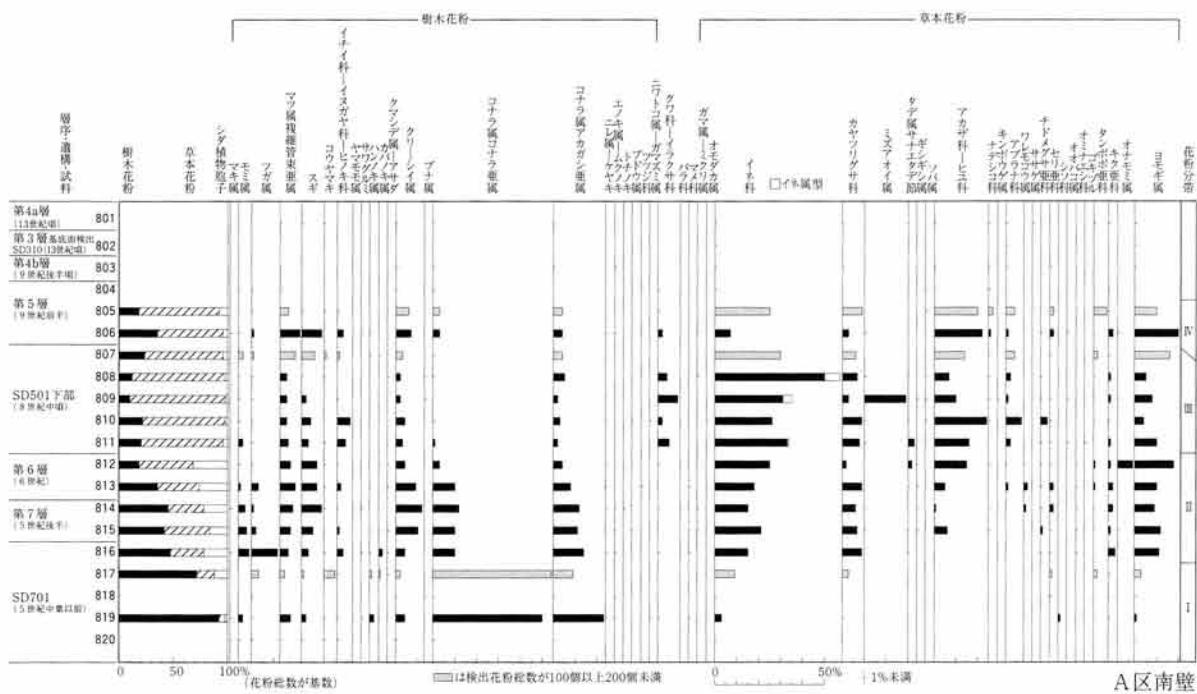


図84 花粉分析の結果(1)

アカザ科—ヒユ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科の出現率がやや高い。ほかにアブラナ科・チドメグサ亞科・セリ亞科・タンポポ亞科・キク亞科・オナモミ属などが伴われる。樹木花粉は低率で、マツ属複維管束亞属・スギ・コナラ属アカガシ亞属・クリーシイ属がおもに出現する。上位に向って、イネ科は弱い減少傾向を示し、マツ属複維管束亞属・スギ・カヤツリグサ科・アカザ科—ヒユ科・ヨモギ属は上位でやや多くなる。

e. SE507(8世紀末葉～9世紀初頭)

草本花粉の占める割合が高く、イネ科が優占し、ヨモギ属、アカザ科—ヒユ科、カヤツリグサ科、ミズアオイ属の出現率がやや高い。樹木花粉は低率で、マツ属複維管束亞属、スギ、コナラ属アカガシ亞属がおもに出現する。最上部ではクワ科—イラクサ科が優占する。

f. 第9・10層・SD1001

847では花粉が検出されず三条溝胞子が少数検出された。848ではブナ属・コナラ属コナラ亞属・コナラ属アカガシ亞属が各1出現した。849ではコナラ属コナラ亞属が3出現したのみである。850からは花粉や胞子は検出されなかった。

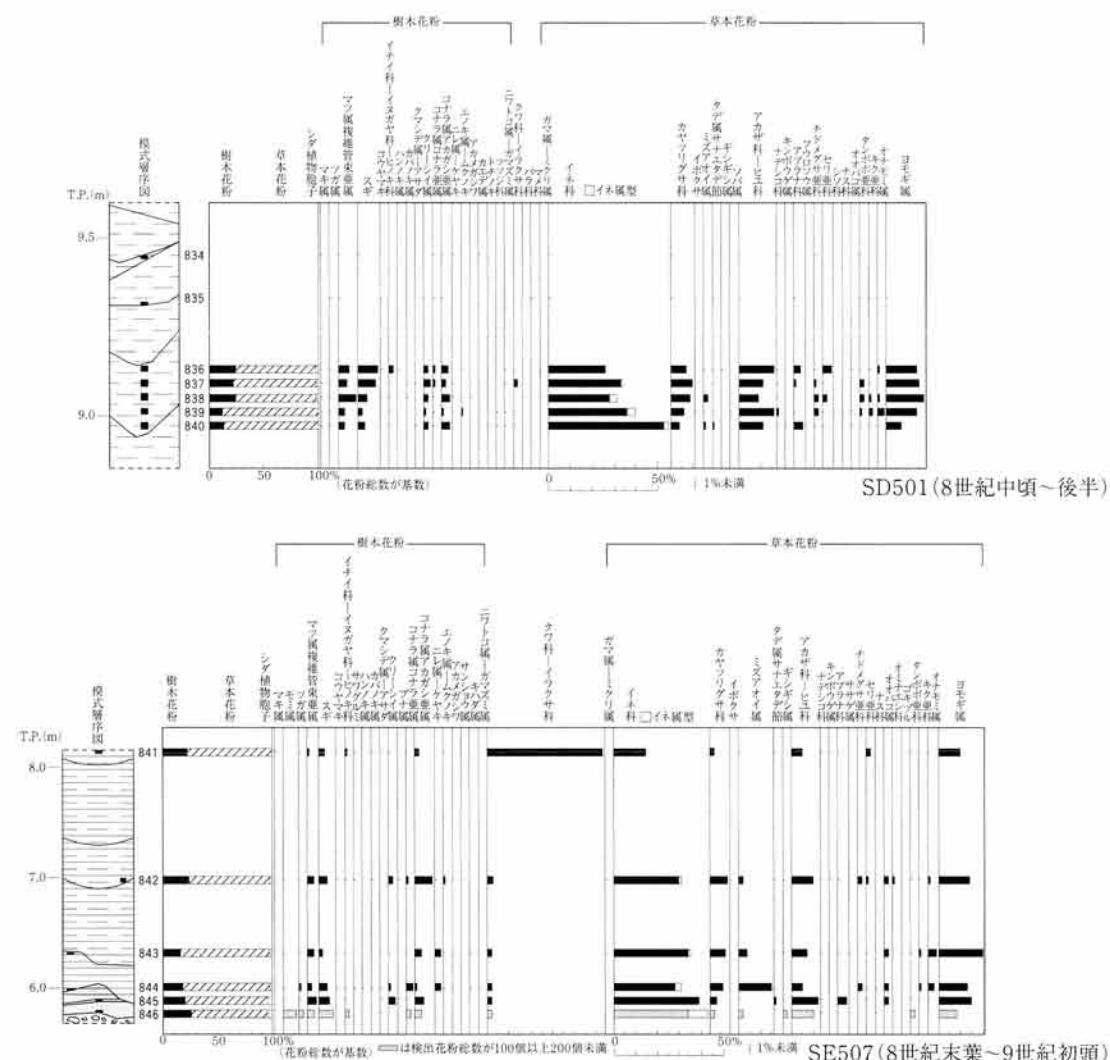


図85 花粉分析の結果(2)

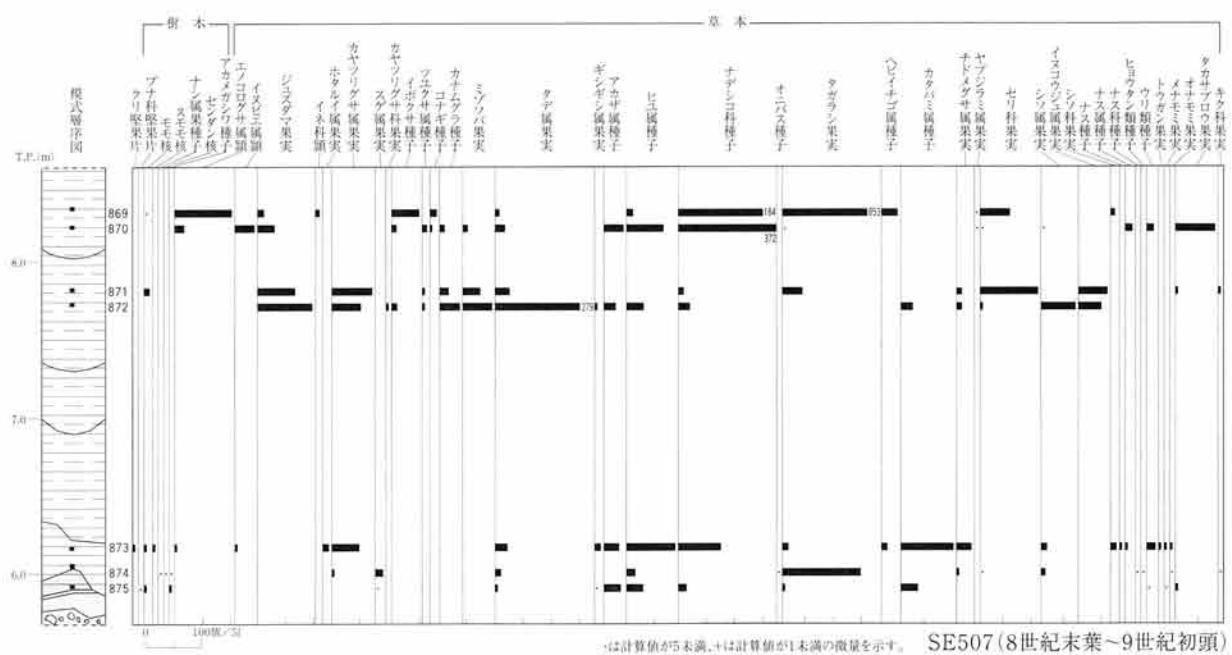
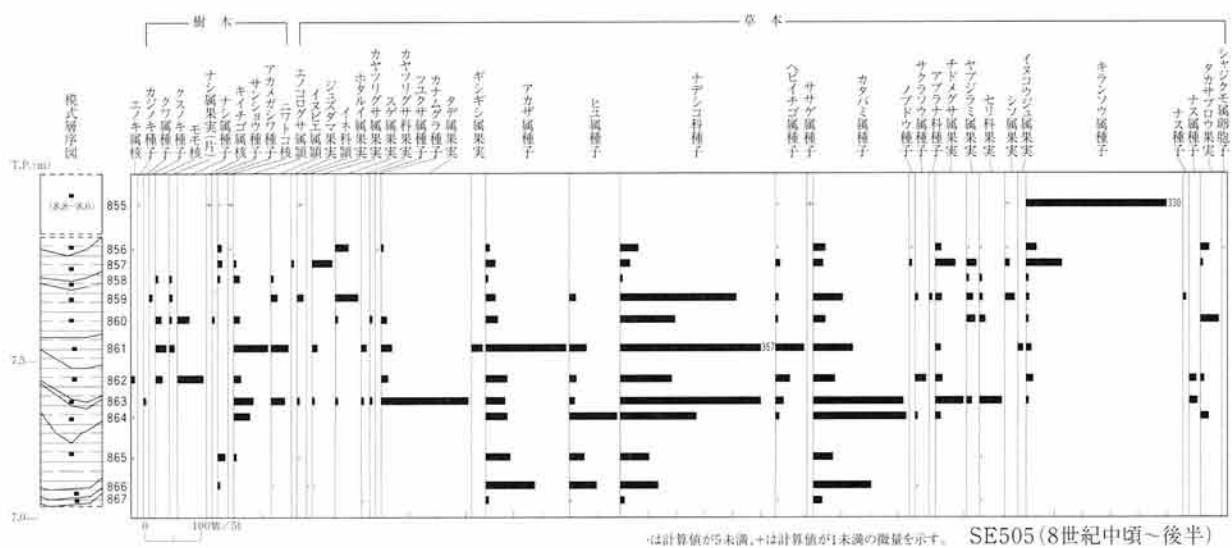
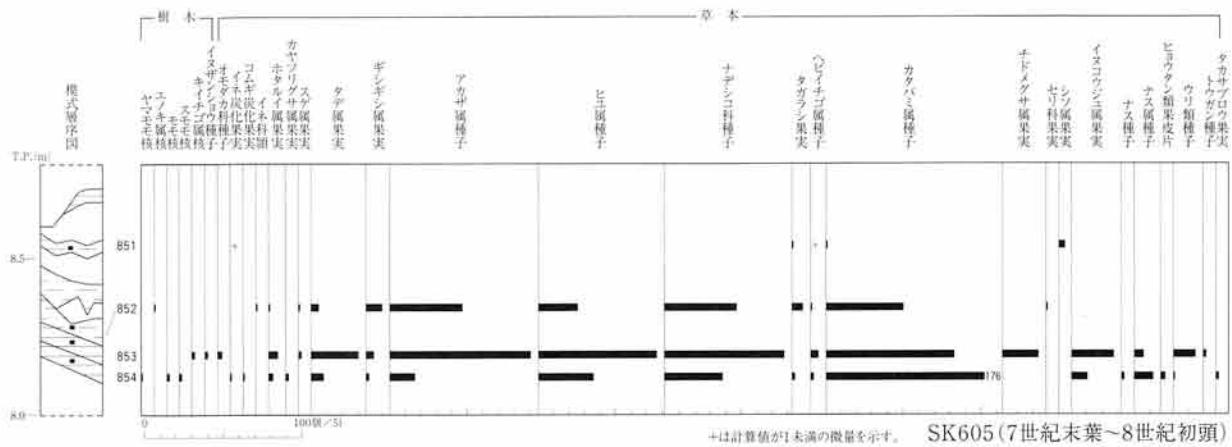


図86 種実同定の結果(1)

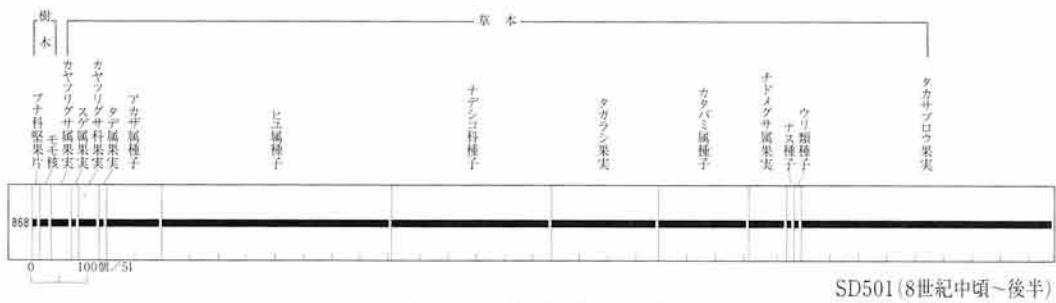


図87 種実同定の結果(2)

4) 種実同定(図86・87、図版60)

i) 方法

水洗された試料を実体顕微鏡で観察しつつ、同定と計数を行った。結果は堆積物5リットルをウォーターフローテーション法で処理して得られる浮遊物中に含まれる数量に算定し、種実ダイアグラムに示した。

ii) 出現傾向と変遷

a. SK605

カタバミ属・アカザ属・ヒユ属・ナデシコ科・タデ属・イヌコウジュ属が多い。栽培植物としてはイネ(炭化)・コムギ(炭化)・ナス・ヒヨウタン類・ウリ類・トウガン・モモ・スモモが検出され、ヤマモモ・キイチゴ属の食用になるものが検出される。

b. SE505

ナデシコ科・カタバミ属・タデ属・アカザ属が多く、上部(856ないし857)ではアカメガシワ・カヤツリグサ属・キランソウ属が微増し、最上部(855)では、キランソウ属がきわめて多くなる。栽培植物として、イネ(炭化)・ササゲ属・ナス・モモ・ナシ属(果実片・種子)が検出されている。

c. SD501(北壁)

タカサブロウ・ヒユ属・ナデシコ科・タガラシ・カタバミ属が多い。

d. SE507

タガラシ・ナデシコ科・タデ属・セリ科・カタバミ属が多く検出され、上部ではタガラシ・ナデシコ科・エノコログサ属・イボクサ・タカサブロウが増加する。

iii) 主要栽培植物の記載

スモモ *Prunus salicina* Lindley 核 バラ科

淡褐色で橢円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には不明瞭で微細な凸凹がある。断面は扁平である。日本原産であるが、栽培される果樹である。

モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科

黄褐色～黒褐色で橢円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。中国原産の果樹であり、北部九州では縄文時代晩期末、ほかは弥生時代以降の遺跡から普通に出土する。

ナシ属 *Pyrus* 果実 バラ科

黒褐色で球形を呈し、一端が突出している。表面は粗い。日本原産で栽培される果樹である。

イネ *Oryza sativa* L. 果実(炭化) イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。

ササゲ属 *Vigna* 種子(炭化) マメ科

黒色で楕円形を呈する。へそは縦に細長い。ササゲ属にはリョクトウ・アズキ・ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状の研究では識別は困難である。

ナス *Solanum melongera* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへソがある。表面には網目模様がある。

ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は「ハ」字状にくぼむ。

ヒヨウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子 ウリ科

淡褐色で楕円形を呈する。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈する。表面には縦に2本の低い稜が走る。ヒヨウタン・フクベ・カンピヨウが含まれ、このうちフクベ・カンピヨウは食用になる。

5) 寄生虫卵分析(図88、図版59)

i) 方法

次の順に処理を施し分析を行った。①サンプルを採量する。②脱イオン水を加え攪拌する。③篩別により大きな砂粒や木片などを除去し、沈澱法を施す。④25% フッ化水素酸を加え30分静置。(2、3度混和)⑤水洗後サンプルを2分する。⑥片方にアセトトリシス処理を施す。⑦両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。⑧検鏡・計数を行う。

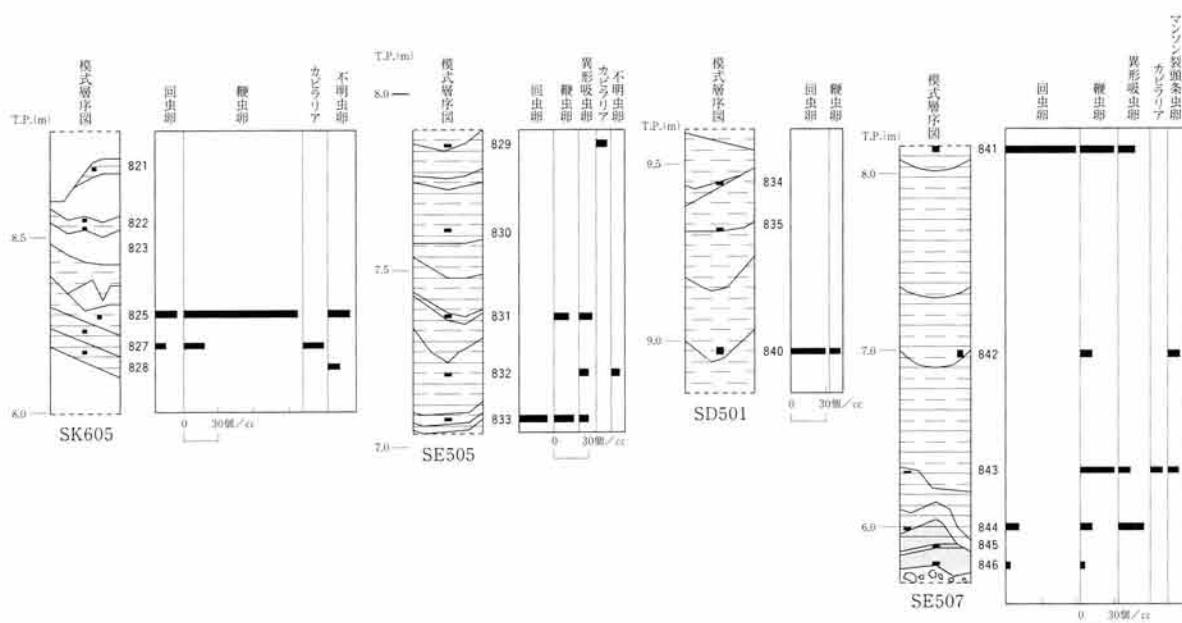


図88 寄生虫卵分析結果

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1,500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てていう操作を3回繰り返して行った。結果は試料(堆積物)1ccあたりの出現密度を寄生虫卵ダイアグラムとして示した。

ii) 結果(図88)

a. SK605

下部より回虫卵・鞭虫卵・カピラリア卵が100個前後以下の低密度で検出された。

b. SE505

下部より回虫卵・鞭虫卵・異形吸虫卵が50個以下の低密度で検出された。

c. SD501(北壁)

下部から回虫卵・鞭虫卵が50個以下の低密度で検出された。

d. SE507

回虫卵・鞭虫卵・異形吸虫卵・カピラリア卵・マンソン裂頭条虫卵が100個以下の低密度で検出された。

6) 考察

i) 植生と環境の変遷

植生および環境の復元は各時期が連続する南壁における花粉分帶の変遷に、各遺構の花粉群集と種実群集の特徴および寄生虫卵分析結果を加え推定する。

a. 5世紀後半以前(I帶、SD701)

コナラ亜属が優勢で、周囲はコナラ亜属の森林が分布し、周辺にはコナラ亜属を主とする森林が分布していたと推定される。草本は少なく森林状態であったとみなされる。コナラ亜属は暖温帯に生育するコナラやクヌギやナラガシワなどが考えられる。森の宮遺跡[大阪市文化財協会1996b]では、6,000年前以降の縄文時代にアカガシ亜属を要素とする照葉樹林が分布し、縄文時代晚期から古墳時代以降にかけて、やや減少するもののアカガシ亜属を要素とする照葉樹林が分布している。宰相山遺跡(未報告)では、縄文時代からコナラ亜属が多く、アカガシ亜属ともに出現する。この状況から上町台地上にはコナラ亜属が比較的多く分布し乾燥した環境であったと推定される。森の宮遺跡のようなやや低位置にはアカガシ亜属を要素とする照葉樹林が分布していたとみなされる。

b. 5世紀後半以前～6世紀(II帶、SD701上部・第7・6層)

コナラ亜属の森林が急激に減少し、イネ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科・アカザ科-ヒユ科の草本が多くなる。イネ科やヨモギ属・カヤツリグサ科は人里植物や耕地雑草を含むものの多用な環境に生育する種類も多い。アカザ科-ヒユ科は明らかな耕地雑草ないし人里植物であり、周囲に排水のよいやや乾燥した集落環境が分布したとみなされる。コナラ亜属林の急減は人為干渉による以外は妥当な理由がなく、この時期の初頭に細工谷周辺が大きく開発されたと推定される。周辺地域に残存する森林はアカガシ亜属・コナラ亜属・クリーシイ属・スギ・マツ属複維管束亜属・ツガ属・モミ属を主要素とする。

c. 7世紀末葉～8世紀中頃(Ⅲ带、SK605・SD501下部)

人里植物および耕地雑草を多く含むイネ科とアザ科-ヒユ科の草本がより増加する。前時期よりさらに人為環境が拡大する。コナラ亜属の林はほぼ消滅し、アカガシ亜属を主とする森林も減少する。この状況からみて、上町台地上の森林が消滅した可能性が示唆される。前時期とはほぼ1世紀の隔たりがあり、この変化は7世紀末葉より以前の7世紀代の時期である。SK605の種実群集は、アカガシ属・ヒユ属・ナデシコ科・カタバミ属が多く、いずれもやや乾燥した人里や耕地の環境に生育する草本であり、花粉分析と同じ植生と環境が示唆される。SD501下部ではクワ科-イラクサ科の花粉がやや高率に出現する。クワ科-イラクサ科にはヤマグワなどの樹木やイラクサなどの草本が含まれ、路傍・水路際・林縁に生育する種類が多い。SD501の周囲に放棄地が多くなり、イラクサなどが繁茂したと考えられる。イネ属型花粉とソバ属の出現から、周囲あるいは上流域で水田と畑の耕地が営まれた可能性がある。また、ミズアオイ属花粉の一時的な急増がみられ、局地的な生育が示唆される。SD501内に抽水植物であるミズアオイ属が群落を形成して繁茂していたと考えられる。

d. 8世紀中頃～後半(SE505・SD501)

SE505の周囲には、イネ科とアカガシ属-ヒユ科をおもに、ヨモギ属・カヤツリグサ科の人里植物ないし耕地雑草が繁茂していたと推定される。花粉においては中部(832)でイネ科とアカガシ属-ヒユ科が減少し、ほかの要素がやや増加するが、種実群集ではほぼ変化なく、人里植物ないし耕地雑草であるアカガシ属・ヒユ属・ナデシコ科・カタバミ属の分布が示唆される。上部に向って、花粉ではイネ科・アカガシ属-ヒユ科が微増し、種実ではアカメガシワ・キランソウ属が増加する。キランソウ属は種により多様な環境に生育するが、一般的にみられるキランソウは路傍に生育する人里植物である。アカメガシワは明らかな二次林要素であり、周囲にこれらの樹木と草本の繁茂する放棄地が増加したと考えられる。地域的な森林要素として、コナラ属アカガシ亜属・マツ属複維管束亜属・スギが分布する。

SD501の植物遺体群集からは、イネ科をおもに、アカガシ属-ヒユ科(種実ではアカガシ属・ヒユ属)・ヨモギ属・カヤツリグサ科・ナデシコ科・アブラナ科・タガラシ・チドメグサ亜科・セリ亜科・タンポポ亜科・キク亜科(種実からタカサブロウ)・オナモミ属などの草本が分布していたと推定される。これらはいずれも人里植物ないし耕地雑草である。イネ属型がやや低率に出現し、ソバ属も出現しているため、周囲か上流域に水田や畑の耕地が分布していた可能性がある。樹木では、マツ属複維管束亜属・スギ・コナラ属アカガシ亜属・クリーシイ属がおもな要素として分布する。上位に向ってスギなどの樹木とカヤツリグサ科・アカガシ属-ヒユ科・ヨモギ属の草本が増加し、イネ科は減少傾向を示す。なお、上位は花粉があまり含まれておらず、堆積速度が速かったか、水流による淘汰によって分別作用を受け堆積されなかったなどが考えられる。

SE505とSD501の大きな傾向として、上位に向ってイネ科が減少し、スギをおもにマツ属複維管束亜属・コナラ属アカガシ亜属の樹木要素が増加することが認められる。周辺地域で樹木の生育域が拡大したことが示唆され、放棄され利用されない地域が増加した可能性が示唆される。

e. 9世紀前半(Ⅳ带、第5層下部・SE507)

イネ科がやや減少し、ヨモギ属・アカガシ属-ヒユ科の草本とマツ属複維管束亜属・スギ・クリーシ

イ属の樹木が増加し、クワ科－イラクサ科も局的に増加する。種実からは、耕地雑草がより多くなり、二次林性のアカメガシワも分布し、周辺では集落域(人里)の環境が減少し、農耕地と放棄地がやや拡大し、放棄地では遷移が進み樹木がやや増加したと考えられる。

f. 9世紀前半～13世紀頃(第5層上部・4b・4a層)

花粉がほとんど出現しない。花粉が分解される乾湿を繰返すか、乾燥した堆積環境が示唆される。耕地ならば、乾湿を繰返す乾田や乾燥した畑の環境が想定される。

ii) 7世紀末葉から奈良時代における注目すべき植物相

7世紀末葉から奈良時代の花粉群集は、イネ科をおもに、ヨモギ属・カヤツリグサ科の草本花粉が優占するのが特徴である。優占する分類群はいずれも人里植物ないし耕地雑草であるか、それらを多く含む分類群である。種実群集ではアカザ属・ヒユ属・ナデシコ科・カタバミ属が主要素であり、同様に人里植物ないし耕地雑草ばかりである。これらの草本は陽当たりがよく排水のよい乾燥した人里や耕地の環境に生育するため、本遺跡が排水のよい乾燥した環境であったとみなされる。カヤツリグサ科・ミズアオイ属・ギシギシ属などの水湿地草本も出現し、溝内に生育していたと推定される。藤原京[金原正明・金原正子1992・1995b]や平城京[金原・金原1995a]の溝の花粉群集は、イネ科をおもにヨモギ属・アカザ科－ヒユ科が主要素であり、排水のよい類似した植生と環境が推定される。アカザ科－ヒユ科は耕地雑草、特に畑作雑草であるが、これら都城の分析例からみて、排水のよい集落域に一般的に生育するとみなすことができる。ほかに細工谷遺跡の花粉組成はほかの都城遺跡と比較するとやや樹木花粉の占める割合が少なく、樹木の分布が少なかったとみなされ、特徴といえる。以上、7世紀末葉から奈良時代の細工谷遺跡の植物遺体群集の大きな特徴は、人里植物および耕地雑草が多いことであり、人為環境が広がっていたことが示唆される。

細工谷遺跡の植物遺体群集のもう一つの特徴は、栽培植物が含まれることである。モモ・スモモ・ナシ属の果樹・イネ・コムギ・ソバ属・ササゲ属・ナス・ヒヨウタン類・ウリ類・トウガンの作物が含まれる。モモ・スモモ・イネ・コムギ・ソバ属・ササゲ属・ヒヨウタン類・ウリ類は遺跡では縄文時代以降から出現するもの、弥生時代以降から出現するものがあるが、比較的普通に検出されるものである。ナシ・ナス・トウガンは出土例も少なくめずらしいといえる。ナシは藤原京・平城京・滋賀県宮町遺跡[金原・金原1994]・奈良県上之宮遺跡[金原正明・粉川昭平1989]からの出土が知られ、都城遺跡あるいは宮跡の可能性のある遺跡から出土する特徴をもつ。ナスも同様に都城遺跡から検出され、古代以降では多くなる。トウガンは宮町遺跡などで出土しているが、散発的で出現傾向は不明である。以上、細工谷遺跡から検出された栽培植物は、今まで知られている都城遺跡の栽培植物と共通点をもつ。

iii) 寄生虫卵の出現傾向について

寄生虫は種類により異なる感染経路をもつ。回虫と鞭虫は糞便とともに排泄された寄生虫卵が再び人の口に入れば感染する。食べられる野菜や野草あるいは飲み水に寄生虫卵が付着あるいは汚染されていると感染する。異形吸虫は糞便とともに排泄された寄生虫卵が溝や川に流れ込み、寄生虫の幼虫が第一中間宿主である淡水産の貝に寄生し、第二中間宿主である淡水魚に寄生し、人や哺乳類がその

淡水魚を摂食することによって感染する。回虫と鞭虫は人に固有に寄生し、異形吸虫は哺乳類に寄生する。カピラリアはおもに鳥類の寄生虫で寄生虫卵を人が補食しても孵化せずにそのまま排泄される。マンソン裂頭条虫はイヌやネコなどの肉食獣の寄生虫で、人に寄生しても成虫にならずマンソン孤虫になる。

今回出現した寄生虫卵の種類は以上の生活史をもつ5種である。溝や井戸における寄生虫卵の検出は、平城京の道路側溝[金原・金原1995a]などで知られるが、堆積物1cc中に100個前後以内の低密度である。現状ではこれらとの比較以外に目安はなく、都城遺跡などの人口の集中する集落環境における汚染の範囲と考えられる。細工谷遺跡においてはSK605・SE505・SD501(北壁)から100個前後以内の低密度の寄生虫卵が検出され、これらの遺構の期間である7世紀末葉から奈良時代にかけて、周囲あるいは上流域に比較的人が多く生活していたとみなされる。SE507では、試料が連続しないところもあるが、下層から上層まで寄生虫卵が低密度に出現し、遺構の時期である8世紀末葉から9世紀初頭においても継続して比較的多くの人が生活していたと推定される。カピラリア卵とマンソン裂頭条虫卵は、鳥類やイヌなどの肉食を行う哺乳類の存在を示す。

7)まとめ

細工谷遺跡において花粉分析・種実同定・寄生虫卵分析を行った結果、周辺の上町台地北半部の古墳時代から平安時代にかけての植生および環境の変遷が明らかになった。開発が古墳時代中期後半以前と難波京期に段階的に行われ、奈良時代後半以降9世紀前半にかけて衰退していく様相が示唆され、この地域における貴重なデータが提示された。その結果、以下の4時期の植生と環境の変遷が明らかになった。

5世紀中葉以前

周囲はコナラ亜属の森林が分布し、周辺にはアカガシ亜属を主とする森林が分布する。生態上からコナラ亜属は暖温帯に分布し、台地上の乾燥地に生育するクヌギ・コナラ・ナラガシワが考えられる。アカガシ亜属は台地上ではなく、沖積層の発達するより低いところに分布していたとみなされる。草本は少なく、5世紀後半以前の上町台地北半部は森林状態であった。

5世紀中葉以前～6世紀

コナラ亜属の森林が急激に減少し、イネ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科・アカザ科・ヒユ科の草本が多くなり、周囲には排水のよいやや乾燥した集落環境が急増した。細工谷遺跡周辺の上町台地北半部が5世紀後半以前の時期に急激に開発されると推定される。

7世紀末葉～8世紀中頃

コナラ亜属の森林はほぼ消滅し、イネ科・アカザ科・ヒユ科(アカザ属・ヒユ属)・ナデシコ科・カタバミが多くなり、集落環境が広がっていたとみなされる。前時期よりもより人為度が高くなったと推定される。寄生虫卵の出現から、ある程度の人口の集中が推定される。SE505・SD501では上位に向って樹木の増加する様相が示され、遺構の時期である奈良時代中頃から後半にかけて、次の時期への変化期があるとみなされる。

9世紀前半

ヨモギ属・アカザ科-ヒユ科・キランソウ属・タガラシ・チドメグサ亜科・タカサプロウ・スゲ属ナデシコ科・エノコログサ属・イボクサの草本およびアカメガシワ・マツ属複維管束亜属・スギ・クリーシイ属の樹木が増加し、農耕地と放棄地がやや拡大し、森林がやや回復する。寄生虫卵の存在からある程度の人口の集中が推定される。

栽培植物としては、7世紀末葉～8世紀中頃以降よりモモ・スモモ・ナシの果樹・イネ・コムギ・ソバ属・ササゲ属・ナス・ヒヨウタン類・ウリ類・トウガンなどの作物が検出された。ナシを特徴とする果樹やナスが含まれ、藤原京や平城京検出の植物群と一致性を示す。ソバ属花粉が7世紀末葉～8世紀中頃以降から出現し、規模は不明だが畑作が行われていた可能性が考えられた。

第2節 井戸側材の年輪年代

奈良国立文化財研究所 光谷拓実

1) 試料と方法

この度、細工谷遺跡から発見された横板井籠組の井戸SE507には、ヒノキの板材が総数23枚使われていた。これらの中に遺存状態が良好で、しかも辺材部の残っている板材が2枚あった。今回、この2枚の板材について年輪年代法による年代測定を実施した。

2枚とも板材の端を切断し、木口面から年輪幅の計測をおこなった。年代を割り出すヒノキの暦年標準パターンには、882年分(37B.C.~845A.D.)のものを使用した。コンピュータによる年輪パターンの照合は、相関分析手法によった。

2) 結果

2点の計測年輪数は、それぞれ191層(No.1)、175層(No.2)であった。これらの年輪パターンと暦年標準パターンとの照合はいずれも成立し、1点の年輪年代が651年、ほかの1点が641年と確定した。これらの年代は原木の伐採年の上限を示している。ここで、No.1とNo.2にはそれぞれ、辺材部が1.3cm、0.8cmと残存していたので比較的伐採年に近い年代を示していることになる。普通、ヒノキの平均辺材幅は3cmほどである。ここで仮に、これらの板材には、もともと3cmの辺材部があったとすると、No.1は1.7cm削除されたことになる。No.1の計測値データの平均年輪幅は0.58mmである。削除されたであろう1.7cmの辺材部においてもこの平均年輪幅でもって推移していたとすれば、この中には約30層分の年輪が刻まれていたことになる。板材の年輪年代は651年、これにこの概算した年輪層数を加算すると、681年となる。これからみると、原木の伐採年は700年代に下がることはないものと推定できる。

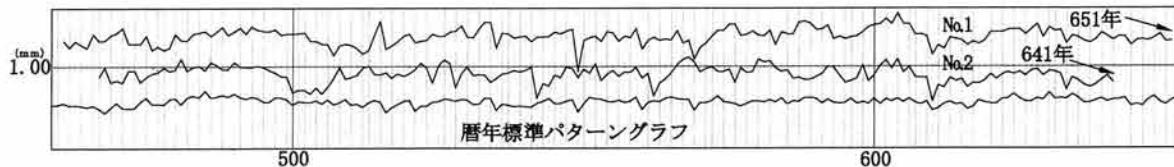


図89 年輪変動表

第3節 細工谷遺跡出土銭貨に対する科学的調査

奈良国立文化財研究所 村上 隆

(財)大阪市文化財協会 伊藤幸司

1)はじめに

96・97年度に行った細工谷遺跡の発掘調査によって、和同開珎や神功開宝など皇朝十二銭を中心 に総数55点に及ぶ古代の銭貨が出土した。大阪市域において一遺跡からこれだけの古代銭貨が出土した事例はこれまでにない。中でも重要なのは、鋳損じた和同開珎6点がついた状態の枝銭が初めて出土したことである。さらに、大阪でこれまでに出土例がない富本銭や開元通宝が含まれるなど、細工谷遺跡から出土した古代銭貨は銭種の取り合わせも特徴的であるが、鋳張りがついたものや鋳損なったものなどが含まれるなど、銭の状態にも単なる流通銭にない特殊性があるように見受けられる。

これらの銭貨にたいして、材質の違いなどを探るために科学的調査を行う機会を得たのでここにその概要を報告する。

2)調査に供した資料

今回の調査対象は古代銭貨に絞り、52点である(和同開珎44点、神功開宝2点、隆平永宝4点、万年通宝1点、富本銭1点)。遺存状態の悪いもの、銭種の不明なものなどは除いた。

また、枝銭501に関しては、材質調査のみ行った。

表10 出土銭貨の特徴

番号	銭種	状態	鋳造欠陥				加工	偏析	番号	銭種	状態	鋳造欠陥				加工	偏析
			欠損	型崩	ズレ	巣						欠損	型崩	ズレ	巣		
502	古和同	完形	○						528	和同開珎	破片					外・孔	
503	古和同	破片	○					堰	529	和同開珎	破片						
504	和同開珎	完形		○	○	孔角		○	530	和同開珎	破片			○			
505	和同開珎	完形							531	和同開珎	破片						○
506	和同開珎	完形					磨		532	和同開珎	破片						
507	和同開珎	完形				○	磨		533	和同開珎	破片						
508	和同開珎	完形							534	和同開珎	破片			○			○
509	和同開珎	完形		○	○				535	和同開珎	破片						
510	和同開珎	破片							536	和同開珎	破片						
511	和同開珎	破片	○						537	和同開珎	破片					磨	○
512	和同開珎	完形				孔	磨		538	和同開珎	破片	○	○	○			
513	和同開珎	破片			○		磨		539	和同開珎	破片	○	○			磨	○
514	和同開珎	破片					磨		540	和同開珎	破片	○				磨	○
515	和同開珎	完形	○	○	○	外・孔	堰		541	和同開珎	破片	○					
516	和同開珎	破片				外・孔	堰		542	開元通宝	破片						
517	和同開珎	破片							543	和同開珎	破片	○				磨	
518	和同開珎	破片				外・孔			544	神功開宝	破片	○		○	孔角		
519	和同開珎	破片	○			外・孔	鑿	○	545	和同開珎	完形	○	○			磨	
520	和同開珎	完形	○	○	○	孔			546	万年通宝	完形	○				磨	
521	和同開珎	完形					磨	○	547	神功開宝	完形	○	○			磨	
522	和同開珎	完形			○				548	隆平永宝	完形	○					
523	和同開珎	破片			○				549	隆平永宝	完形					磨・鑿	
524	和同開珎	破片	○		○				550	和同開珎	破片						
525	和同開珎	破片	○			裏面	磨		551	隆平永宝	完形	○				磨	
526	和同開珎	破片				裏面			552	隆平永宝	完形	○					
527	和同開珎	破片					磨		553	富本銭	完形			○			

・各項とも“○”は該当する欠陥や偏析が確認できたもの。

・[鋳張り]の“孔”・“裏面”はそれぞれの個所に、“外”は縁の外周に鋳張りがあるもの。

・[型崩] (=型くずれ) : 銀型が壊れたため生じた欠陥。

・[加工]の“堰”は堰そのものまたは堰の痕跡が、“磨”は研磨の痕跡が残っているもの。

・[ズレ] (=型ずれ) : 表裏の銀型がずれたことによる欠陥。

3) 調査方法

a. 表面観察

鋳張りや湯回り不良による欠損などの鋳造欠陥、さらには埋蔵中の腐食状態を調べるために、表面の観察を肉眼および実体顕微鏡により行った。

b. 内部観察

湯回り不良による欠損などの鋳造欠陥や鋳造時の技術的な違いを探るために、錢の内部を詳しく調べる必要がある。このため、X線ラジオグラフィーによる内部観察を行った。用いた装置は、フィリップス製高精度型X線透視システムである(註1)。撮影条件は、管電圧50~100kV、電流0.1~0.2mAである。

c. 材質分析

資料の材質を知るために、非破壊的手法を用いた蛍光X線分析を行った。用いた装置は、テクノス製エネルギー分散型微焦点蛍光X線分析装置TREX640、650である。ターゲットはモリブデン(Mo)。分析条件は、電圧45kV、電流0.3mA、照射時間100~200秒、コリメーター1mmΦ。標準試料を用いた半定量分析法による。

この装置は、X線の照射面積を小さく絞ることができるとともに、測定位置を特定できる特徴をもつ。ただし、ここで注意を要するのは、非破壊的手法を用いた蛍光X線分析では、土砂など遺物表面に取りつく二次的な付着物や、土中から吸着する金属元素などとともに腐食層も同時に測定するために、得られた分析値は遺物そのもののオリジナルな材質を示すものとは言いがたい点である。したがって、この分析データの取り扱いには十分に留意されたい。しかし、非破壊的手法によって得られたデータからでも、遺物の材質に対するさまざまな情報を得ることができることも改めて確認しておく必要がある。

4) 考察

a. 表面観察、およびX線ラジオグラフィー

観察結果の概略を表10に示す。35点にも上る資料から鋳造の際に生じたと思われる欠陥が観察された。鋳型の文字部分の崩れに起因するとみられる文字の潰れが多い。鋳造時に生じる巣は外見上わからないがX線ラジオグラフィーにより12点の資料にその存在が認められた。

また、鋳造の際に生じる金属元素が不均一に分布する現象、いわゆる偏析もX線ラジオグラフィーで観察された(写真10)。地金の主成分である銅と完全に混ざり合わない鉛は、銅よりX線の吸収率が高いため、このばあいは写真上に黒点となって確認されているものと考えられる。

b. 材質調査

分析のデータを表11に掲げる。

さて、52点の錢貨を錢種ごとに分けて考察を加えることにする。ただし、埋蔵環境下で土中の鉄成分が表面に吸着しているため、鉄の分析値が高いものは、錢貨がもつ実際の材質の情報が隠れてしまつ

ている可能性が大きいため数値の取り扱いには特に注意しなければならない。このように、個々の銭貨の絶対評価にこの分析値を単純に用いることは避けたいが、非破壊分析であることを勘案し、ある程度のまとまりで見て行くとさまざまな情報を引き出すことが可能となる。

イ)和同開珎

和同開珎は本来、銅とスズの合金、いわゆる青銅といわれているが、今回分析した44点の和同開珎の中でこれにあたるものは507ぐらいである。そこで、分析値を目安にして、細工谷遺跡出土の和同開珎の製作に用いられた合金を主成分の銅以外の副次的な成分に注目していくつかのタイプに分けることを試みた。細かく分類すればかなり複雑になるが、以下におもなタイプを挙げた。

Aタイプ：銅－スズ 合金

Bタイプ：銅－スズ－(鉛)－(ヒ素) 合金

Cタイプ：銅－スズ－鉛－(ヒ素) 合金

Dタイプ：銅－鉛－ヒ素 合金

Eタイプ：銅－ヒ素 合金

分類は一応2%程度以上含まれていることを条件にし、1%程度の含有があるばあいには()で示すことにした。

この分類に従って分析値を検討すると、細工谷遺跡から出土した和同開珎44点中、19点がDタイプに入ることになる。また、A、B、Cタイプを合わせても10点程度にしかならない。すなわち、スズをしっかり含む和同開珎が極端に少なく、鉛やヒ素を含むものが大変多いことがわかる。出土銅鏡に対して行った材質調査では、銅鏡の材質がAからDのタイプへと編年する可能性があることを指摘できた[村上隆1998]が、和同開珎のばあい、このような材質的特徴の違いがどのような要因を背景にもたらされるのか、銭文の特徴などとの相関を含めて今後の課題としたい。時代性、地域性の違いだけではなく、銭貨の材質など鋳造技術に関する管理の問題も含めて検討する必要があろう。

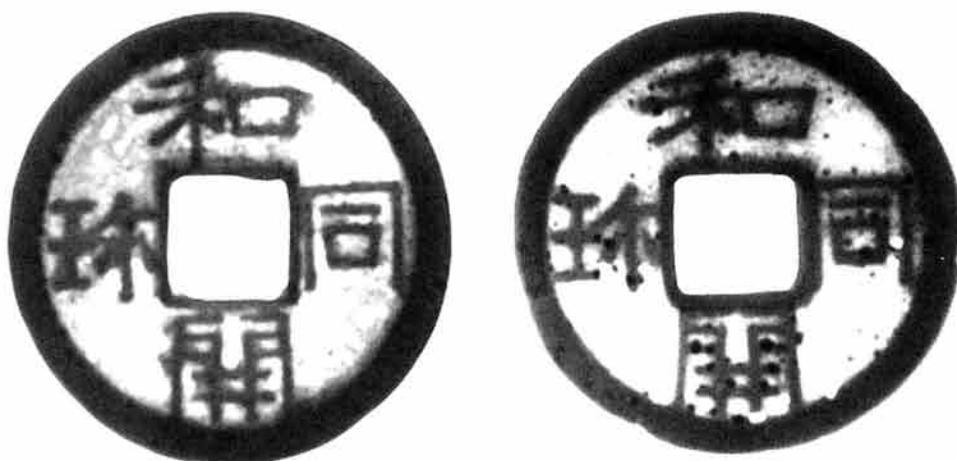


写真10 和同開珎の偏析

X線ラジオグラフィーの観察による、左(521)、右(504)

表11 錢貨の非破壊的手法による蛍光X線分析結果

(単位: wt%)

番号	錢種	Mn	Fe	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Pb	Bi	備考
544	神功開宝	0.5	18.0	59.1	20.9	0.3	0.5	0.1	0.6		
506	和同開珎		13.8	53.4	30.7	0.2	0.9	0.2	0.4	0.5	
535	和同開珎	0.5	13.5	14.6	2.9	0.9	42.8	0.5	20.4	3.8	
540	和同開珎		6.8	63.5	13.7	0.2	0.7	1.1	14.1		D
550	和同開珎		5.8	61.3	5.7	1.1	2.0	0.1	23.9		D
511	和同開珎	0.1	5.5	52.7	5.4	0.3	1.3	0.3	34.4		D
534	和同開珎	0.1	5.5	72.5	10.9	0.1	0.7	0.4	9.8		D
504	和同開珎		5.5	67.6	15.0	0.1	0.5	0.1	11.3		D
541	和同開珎		5.4	76.5	11.2	0.2	0.6	0.3	5.8		D
539	和同開珎		4.8	69.8	13.3	0.1	0.9	0.3	10.8		D
514	和同開珎	0.2	3.6	30.8	20.1	0.5	12.3	0.2	32.5		
533	和同開珎	0.2	3.5	45.7	7.0	0.3	8.5	0.2	34.7		
545	和同開珎	0.2	3.5	82.4	2.3	0.3	8.0	0.6	0.5	2.2	
521	和同開珎		3.2	76.2	14.6	0.0	0.5	0.2	5.3		D
537	和同開珎	0.1	3.0	52.1	24.2	0.2	0.5	0.2	19.7		D
508	和同開珎	0.3	3.0	78.9	3.5	0.3	11.5	0.4	1.1	1.2	
509	和同開珎	0.1	2.5	83.6	2.3	0.4	8.0	0.3	1.0	1.7	
518	和同開珎		2.3	76.2	8.4	0.2	1.0	0.2	11.7		D
536	和同開珎	0.1	2.0	70.4	1.1	0.3	0.8		25.3		
542	開元通宝	0.1	1.9	54.3		0.1	29.1	0.2	14.2		
505	和同開珎	0.1	1.8	79.6	0.8	0.2	12.0	0.3	4.3	0.8	
526	和同開珎	0.2	1.6	86.3	2.2	0.3	6.1	0.2	1.6	1.7	
543	和同開珎	0.1	1.4	62.1	4.7	0.1	0.7	0.2	30.8		D
519	和同開珎		1.4	76.7	12.5	0.4	0.5	0.2	8.3		D
538	和同開珎		1.3	84.7	9.0	0.3	0.8	0.2	3.7		
507	和同開珎	0.1	1.3	92.5	0.7	0.2	4.1	0.1	0.5	0.5	
547	神功開宝	0.1	1.0	77.5	9.5	0.2	1.3	0.3	10.0		
515	和同開珎	0.0	1.0	92.2	1.9	0.2	2.4	1.5	0.2	0.5	
525	和同開珎		0.9	75.5	16.2	0.2	0.2	0.2	6.8		D
523	和同開珎		0.9	89.9	1.4	0.4	1.4		6.0		
530	和同開珎	0.0	0.9	83.6	6.4	0.5	4.7	0.1	2.5	1.4	
510	和同開珎		0.8	90.2	1.4	0.1	0.6	0.2	6.7		
516	和同開珎		0.8	92.7	2.6	0.2	1.1	0.2	1.6	0.8	
551	隆平永宝	0.0	0.7	64.3	11.0	0.2	0.8	0.4	22.5		
553	富本錢		0.7	92.2	2.5	0.3	0.4	1.1	0.7	2.3	
549	隆平永宝	0.7	77.6	1.0	1.1	0.2			19.4		
524	和同開珎		0.6	93.3	3.7	0.2	0.8	0.3	0.2	0.8	
528	和同開珎		0.6	89.6	8.6	0.3	0.5		0.4	0.1	
520	和同開珎		0.5	67.7	2.9	0.3	1.0	0.2	27.4		D
529	和同開珎		0.5	90.4	2.9	0.5	0.5	0.9	4.4		D
517	和同開珎		0.5	93.8	1.5	0.3	0.1	0.1	3.9		
513	和同開珎		0.4	77.2	19.9	0.2	0.5	0.3	1.6		
512	和同開珎		0.4	87.9	2.7	0.2	0.9	0.1	7.9		D
532	和同開珎	0.1	0.4	76.3	9.9	0.2		0.1	13.1		D
546	万年通宝		0.4	80.4	9.3	0.3	0.1	0.1	9.4		
522	和同開珎	0.3	95.0	0.8	0.2	0.7	0.4		2.6		
502	古和同		0.2	86.6	3.4	0.2	0.3	8.6	0.1	0.6	
552	隆平永宝	0.1	78.5	3.0	0.1	0.5	0.2		17.5		
548	隆平永宝		0.1	67.5	3.1	0.3	0.3	0.2	28.4		
531	和同開珎		0.1	70.2	5.1	0.1	0.2	0.4	24.0		D
503	古和同			96.7	1.1	0.1	0.2	0.1	0.7	1.1	
527	和同開珎			67.2	15.6	0.3	1.2	0.4	14.0	1.3	D

・表は土中からのFeの吸着を勘案してFeの多いもの順に並べた。

・備考欄にDとあるものは明瞭にDタイプと認定できたものを示す。

なお、「古和同」と呼ばれる和同開珎が2点含まれるが、この2点に対する分析の結果もまた興味深い。503は銅-(ヒ素)-(ビスマス)タイプと、ほとんど純銅に近いのに対して、502は、10%程度もアンチモンを含む銅-アンチモン-ヒ素合金であることがわかる。かねてから、古いタイプの和同開珎にアンチモンを多く含むものがあることを指摘してきたが[村上隆・肥塚隆保・沢田正昭1997]、今回の調査で、古和同と呼ばれるものにも材質にかなりのばらつきがあることがわかった。

ロ) 神功開宝

イ)で試みたタイプに2点の神功開宝を当てはめれば、544はEタイプ、547は銅-鉛-ヒ素-(スズ)となるがDタイプとして問題はなかろう。

ハ) 隆平永宝

いずれもDタイプである。

ニ) 万年通宝

やはりDタイプである。

ホ) 富本銭

かねてから古代の厭勝銭ではないかといわれているが、大阪の地では初めての出土である。これまでの分析では、古いタイプの和同開珎とともにアンチモンがある程度含まれている特徴をもつことを指摘してきた[村上隆1996、村上・肥塚・沢田1997]。細工谷遺跡から出土した富本銭も1%強のアンチモンを含み、これまで発見された富本銭の特徴はみせているといえる。しかし、遺存状態があまりよくなく、銭文も不鮮明である。また、裏面の仕上げもきれいとはいえない。

ヘ) 和同枝銭

和同開珎が取付いたままの枝銭の出土はこれまでに例がない。それだけに、古代における銭貨の鋳造技術の一端が窺える資料として重要である。ただし、遺存している6枚の和同開珎はいずれも健全なものではなく、おそらくこの枝銭自体、鋳潰して再利用される運命にあったものがなんらかの理由で残ったと考える。

枝銭に対しては、図90に示した14個所の分析を行った。銅の含有は96~98%とたいへん高い値を示す。そのほかに0.5~3%程度ではあるがヒ素がめだつ。興味深いのは、場所による違いがヒ素濃度に反映されていることである。ヒ素は湯道において高い値が得られる傾向があるようである。また、湯口上面において、スズと鉛が若干高めに検出されたが、全体としてはそれぞれの銭の材質が場所によって大きく変わっているようなことはなかった。この枝銭は、先に述べたEタイプに分類できるものと考える。

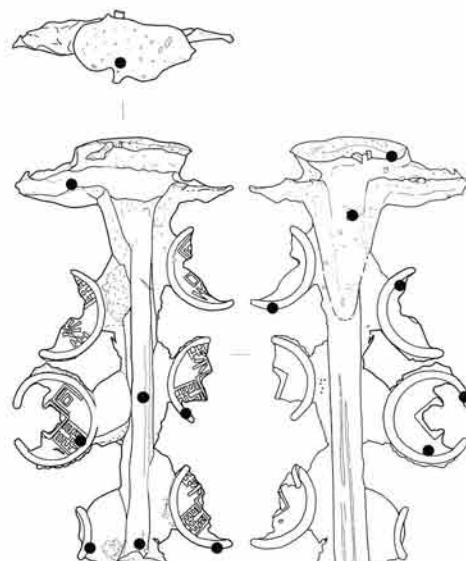


図90 枝銭の分析個所

5)まとめ

細工谷遺跡から出土した古代銭貨に対して、表面および内部の観察や材質分析など科学的な手法を用いた調査を行った。

比較的、腐食が進んでいなかったために表面観察から得られるものが多かったが、全点を同じ条件、基準で判別することは困難であった。そのような中で当初受けた印象と同様、鋳造に起因する欠陥が多いことが認められた。鋳上がりの点からみれば、細工谷遺跡出土銭貨は不良なものが多いためといえよう。

X線ラジオグラフィーから判明した偏析は非常に興味深いものである。生成要因について、銭貨の製作ということに目をむけると、外縁で1.4mmほど、地の部分にいたっては0.5mmの厚さしかないものを歩留まりよく鋳造するためには、精緻な鋳型の製作技術と併せて、鋳込みの際の湯および鋳型の温度管理が重要であることが想像できる。今回の偏析は、このような鋳造条件の中で生じたものといえるのではないか。この点については今後の課題としたい。

材質分析の結果、この遺跡から出土した銭貨の材質はバラエティーに富むが、総じて銅-鉛-ヒ素系の合金でつくられているものが多いことがわかった。今後、それぞれの銭種に対する考古学的な考察との相関をとりながら、時代的、地域的背景を明らかにしていくことが課題であろう。これまで、和同開珎の分析データを、合金のタイプ別でまとめた論考はなかった。これまでに提示されたデータを再検討するとともに、今後さらにデータを蓄積し、タイプ別分類を充実させていくことを考えたい。また、枝銭の分析をおこなったが、同じ枝に取付く銭間の組成の差は小さかった。しかし、この枝銭はほとんど銅でできており、鉛などの重い元素の含有量が少ないと起因することも考えられる。この点も今後の検討課題のひとつであろう。

なお、材質分析の一部は、奈良国立文化財研究所 肥塚隆保氏の指導のもと、松井敏也、降幡順子の両氏の御協力を得た。ここに記して謝意を表する。

註)

(1)この装置は平成9年用寄附金付お年玉付郵便葉書など寄附金による「X線透視撮影装置による埋蔵文化財保存処理業務の整理作業」で配備した。

第4節 百済王氏と「百済尼寺」

1)はじめに

第Ⅲ章で述べられているように、調査地からは、「百済尼」・「百尼」・「尼寺」などと書かれた墨書き土器が出土した。瓦の出土などから調査地の周辺に推定されてきた寺院は、これらの文字史料の出土で、「百済尼寺」ともいうべき名称を有していたことが推定されるにいたった。但し、それが正式の寺院名か、あるいは通称であったのかは明らかではない。以下、本節ではこの寺院について論じる際、「百済尼寺」と仮称することとする。

一方、SD501から出土した多様な金属製品に和同開珎の枝銭やバリ銭が含まれていたことは、遺跡の周辺で銭貨の鋳造がなされていた可能性を示すものと考え得る。第V章で触れられるように、それが法令で禁じられた私鋳銭の痕跡を示すのか、官許を経た工房であるのか、あるいは別の金属製品を生産するために集積された素材であるに過ぎないのかが問題となる。但し、調査地からは少量の鉱滓を除けば、鋳型などの鋳造作業を示す遺物は出土しておらず、工房は調査地に近接したいずれかの場所と考えざるを得ない。

以上、百済に関連した名称をもつ古代寺院としての性格と、鋳銭工房の可能性の当否という、二つの側面について、主として文献史料に依拠しながら検討したい。

2)「百済尼寺」について

「百済尼寺」が日本に渡來した百済人集団との間に密接な関連を有していたことはまちがいない。『日本書紀』には「小野臣妹子、大唐より至る。唐国、妹子臣を号けて蘇因高と曰う。即ち大唐の使人斐世清・下客十二人、妹子臣に従いて筑紫に至る。難波吉士雄成を遣して、大唐の客斐世清らを召す。唐の客の為に、更新しき館を難波の高麗館のほとりに造る。」(推古天皇16(608)年4月条)、「是歳、改めて難波の大郡及び三韓の館を修理る。」(舒明天皇2(630)年是歳条)、「難波の百済の客の館堂と民の家屋とに災けり。」(皇極天皇2(643)年3月癸亥条)など、中国あるいは朝鮮三国からの使者を迎接するための施設名が散見され、また推古天皇16年6月丙辰条に「客等(隋使斐世清等一筆者註)、難波津に泊れり。是の日に、飾船舟艘を以て客等を江口に迎えて、新しき館に安置らしむ。是に、中臣宮地連烏摩呂・大河内直糠手・船史王平を以て掌客とす。(後略)」とあり、舒明天皇4(632)年10月甲寅条に「唐国の使人高表仁等、難波津に泊れり。則ち大伴連馬養を遣して、江口に迎えしむ。船舟二艘及び鼓・吹・旗幟、皆具に整飾へり。(後略)」とあるように、実際に外交使節を迎えて華やかな儀礼が行われるなど、国家的港津としての機能を果たしたのが難波であった。難波の周辺には多くの渡來系氏族が居住するが、なかでも百済系氏族の分布は濃厚である。殊に『日本書紀』天智天皇3(664)年に「三月、百済王善光王等を以て難波に居らしむ」とあるように、7世紀後半以降、本国の滅亡に際して亡命してきた百済王族の拠点となる。『続日本紀』天平神護2(766)年6月壬子条の百済王敬福薨伝によると、舒明朝に百済義慈王の王子豊璋と善光王とが来日し入侍するが、豊璋は齊明天皇の時に

父の死に遭って帰国し、百済の復興をはかる。一方、百済滅亡後、善光王は日本に残り、先の記事のように難波に居住せしめられ、持統朝には百済王姓を賜ったという（註1）。持統朝における賜姓については、持統天皇5（691）年正月乙酉条に「（前略）封増すこと、皇子高市に二千戸、前に通せば三千戸。（中略）正広四百済王禪広に百戸、前に通せば三百戸。其の余は封増すこと、各差有り。」とあり、この段階で善光が位階を得ていることが判明するので、それが持統朝の一つのことであるかは明らかではないが、認めてよいものと思われる〔田中史生1997〕。なお、朱鳥元（686）年9月、天武天皇薨去に伴い、「僧尼、^{みねたてまつ}發哀る。是の日に、百済王良虞、^{しのびごとたてまつ}百済王善光に代りて誅る。」とあるように（『日本書紀』）、善光に代わって息子の良虞が誅を奉っている記事が見える。この段階ではいまだ位階を得るにはいたっていないものの、「百済王」が各人に付けられており、カバネ的呼称として成立しつつあることを窺わせる。百済王族の本姓は「余」であるが、これをそのまま用いることをせず、改めて百済王姓を賜与することにより、天皇の臣下としての位置づけが明確になったといえよう。これによって百済王氏が成立する。但し、臣下でありながら王姓を有するところに、元百済国王の末裔としての百済王氏の特殊な位置づけがあった〔長瀬一平1985・石上英一1987〕。

持統朝以後、百済王氏は難波地域を拠点としつつ中央貴族としての地位を固め、有力官人を輩出する。しかし天平勝宝2（750）年5月に、すでに宮内卿の地位にあった敬福が「俄かに河内守を加え」られる（『続日本紀』）。同月の『続日本紀』には「京中驟雨して水潦汎溢す。又伎人・茨田等の堤往々にして決壊す」とあり、大雨のため伎人・茨田の堤防が決壊したことが報ぜられている。百済王氏の拠点は旧大和川水系の旧猫間川や百済川が北流する地域にあたっていたため、この頃河内国交野郡付近を中心とする北河内地方に拠点を移したものと考えられている〔今井啓一1958・吉田晶1982〕。現在、旧河内国交野郡に相当する大阪府枚方市には、奈良時代後半の創建とされる百済寺跡があり、この付近が百済王氏の拠点と考えられている。

百済王氏が難波を拠点としたこととなると興味深いのは、難波に百済郡なる郡が存在したことである。百済郡は、第一、中世には「欠郡」とされ、近世には消滅する、第二、東部・西部・南部という、百済の五部五方制に由来する可能性がある郷名をもつ、第三、独自の条里呼称をもたない、第四、復元される氏族分布の大半が百済系の渡来氏族である、などの特徴をもち、その郡域は百済王氏の氏寺である百済寺と考えられる堂ヶ芝廃寺を中心とする地域であったとの指摘がある〔藤沢一夫1969・吉田晶1982〕。立郡（評）の時期については、第Ⅱ章で指摘されているように、長屋王家木簡に靈龜元（715）年とされる「百済郡南里」の木簡があることから、それ以前にさかのぼるのは確実である。先に述べた天智天皇3（664）年の善光王の難波定住、持統天皇5（691）年の百済王一族への賞賜など、いくつかの画期を想定できるが、今のところ断定するに足る史料はない。

百済寺は、このように、百済郡の位置・範囲を検討する際に重視されてきた。百済寺はいくつかの古代文献に登場する。『日本靈異記』上第14話には、齊明朝に百済からの渡来僧義覚が居住した寺として記される「難波百済寺」が見え、百済寺が齊明朝には存在していたことをうかがわせる。百済寺の存続期間については、『聖德太子伝暦』下巻末尾に、筆録者が難波百済寺の老僧が所持していた「太子行事奇蹟之書」と『暦録』を比較したことが記されていることから、百済寺が聖德太子伝暦執筆時の永万

元(1165)年までは存続していたことがすでに指摘されている[藤沢一夫1969]。これらの指摘は基本的に妥当であると考えられる。

以上、先学の指摘と重複する部分もあるが、第一、7世紀後半の難波には亡命した百済王族が集住し、彼らは王権から百済王姓を賜与された、第二、百済王氏の拠点として設定されたのが百済郡である、第三、百済郡の郡域は堂ヶ芝廃寺の存在などから、現在の大阪市天王寺区堂ヶ芝周辺を中心とする地域と推定される、の3点を確認したい。これらの点と、難波京朱雀大路に隣接するという立地条件からすれば、「百済尼寺」とは、百済王氏の氏寺に相当すると考えるのがもっとも妥当である。

次に問題となるのは、百済寺および「百済尼寺」の創建年代である。すなわち、『日本靈異記』の記事を重視するならば、齊明朝には百済寺は存在していたことになるから、創建の時期は善光王などを難波に居住せしめた天智3年以前の段階に求めざるを得ない。大きな画期といい得るのは、豊璋・善光王らが入朝した皇極2年であるが、今回の発掘調査では7世紀中葉の溝から、四天王寺創建瓦と同范である素弁蓮華文軒丸瓦が出土している。創建が7世紀中葉にまでさかのぼるとすれば、百済王の宗族が入朝する以前に、すでに寺院が建立されていた可能性が生じ、その造営主体についても慎重な検討が必要となる。瓦の同范関係から推定される両者の関係は、創建当初から密接であったと考えられるが、少なくとも、両者ともに百済国王の宗族入朝とは異なる契機で前身となる寺院が造営され、7世紀後半における百済王族の難波居住に際して、改めて氏寺として設定された可能性を考慮しておかなくてはならないであろう。

次に、その存続時期について。交野における百済寺造営にもかかわらず、難波の百済寺が平安期まで存続したことについてはすでに藤沢一夫氏の指摘がある。細工谷遺跡から出土した土器・瓦類は、9世紀前半以降、急速に量を減じる。この点からみれば、周辺に所在した「百済尼寺」もまた、平安初期まで存続し、以後衰退したことが推定できる。百済王氏の河内移貫後も、難波にも僧寺・尼寺が存続していたのである。百済王氏と難波の密接な係わりを示す事例として評価できる。

以上の検討から、百済王氏は、少なくとも7世紀後半から9世紀前半まで、難波地域に百済寺と「百済尼寺」という、2つの氏寺を維持していたことが明らかとなった。これは氏寺造営に際して、僧寺と尼寺が一対の関係で捉えられていたことを示す。『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』には丁未(587)年に訪れた百済の客が用明天皇に語った言として「我等が国は、法師寺と尼寺の間、鐘の声互いに聞え、その間に難き事なし。半月々々に日中の前に往還する処に作るなり」とあり、百済においては寺院の造営が僧寺と尼寺の一対が互いの鐘が聞こえる距離で行われ、飛鳥寺と豊浦寺の造営の際にこうした慣例が参照されたことが記されている[田村円澄1980]。近年の韓国考古学界における寺院の発掘調査成果にはめざましいものがあるが[金誠龜1998]、それによると、文献のかかる記述を裏付ける成果は得られていないようである。ただし、百済の寺院造営に関して日本側にこのような史料が存在することは、注目に値しよう。

3) 銭貨鑄造の可能性について

調査地から出土した和同開珎は、製品40数点と未成品(明確なバリ銭)4点に大別することができる。

未製品の出土は、少数ながら、鋳銭の可能性を示す資料として重視できる。これに対し、多数出土しているほかの金属製品には、未製品の可能性があるものは、巡方の1点の出土にとどまる。

先に述べたように、金属製品については、第一、異なる金属製品を製造するための素材、第二、私鋳銭、第三、官の公認の下に製造された銭貨、の三つの可能性を挙げることができる。

第一の点について、第三者を製品として製造したならば、その未製品が出土してもおかしくはないが、出土していない。また、和銅4(711)年10月の詔では、私鋳銭は斬刑に処せられ、従者は没官、家口は皆流罪という厳罰であった(『続日本紀』)。このことから考えるならば、銭の製造過程は厳重に管理されたことが予想される。したがって、第一の可能性については否定的にならざるを得ない。

第二の点について、朱雀大路に近接し、しかも後述するように王権との関係がきわめて密接な百済王氏の氏寺において私鋳銭を製造するというのは想定しがたいのではなかろうか。

律令制下における銭貨鋳造組織とその変遷については、栄原永遠男氏の詳細な研究がある[栄原永遠男1993]。それによると、和銅元(708)年2月、和同開珎鋳造の必要から、「催鋳銭司」が設置され、それと前後して河内に「鋳銭司」が設置される。その前後に近江国・大宰府・播磨国などの地方行政機関にも鋳銭事業を担当する部署が設置され、「催鋳銭司」は「鋳銭司」だけでなくそれらの部署をも監督・督促した。鋳銭事業の中心的担い手となったのは鋳銭司である。翌和銅2(709)年河内の鋳銭司は和同銅錢増産の必要から優遇措置として寮に準ずる待遇を受けるようになり、まもなく正式の寮に昇格し、平城京内に移転した。一方、天平4(732)年以前に設置された「鋳銭司」は、長戸国に置かれ、天平7(735)年に設置された鋳銭寮は、天応2(782)年に廃止されるまで「岡田」(現京都府加茂銭司遺跡)に置かれた。なお、岡田に置かれた鋳銭司の存続期間中に、「田原鋳銭(司)」(現奈良県生駒市北田原・南田原、大阪府四条畷市上田原・下田原付近)が置かれた。

以上の指摘に従うならば、鋳銭事業の中心的役割を担う「鋳銭司」あるいは「鋳銭寮」が難波に存在したことではなく、実際の鋳銭事業を担当した部署が、難波京を管轄した摂津職の下に設置されたことも史料上見えない。この点について、調査地周辺に存在した鋳銭工房が私鋳銭工房ではないとすれば、官許を経た鋳銭工房が存在したと想定するほかはない。しかもそれが正規の銭貨鋳造組織の中に入らないとすれば、立地から考えて、その工房は「百済尼寺」の造営主体である百済王氏ときわめて密接な関係の下で運営されたものと考えるのが妥当であろう。

4) 百済王氏と王権

調査地周辺に推定した鋳銭工房の性格を考える上で重視すべきなのは、「百済尼寺」の造営主体である百済王氏と王権の関係である。百済王氏が、かつて倭王権が「蕃国」として設定した国家の宗族であるという、そもそも成立の当初から、特殊な氏族であることが両者の関係を規定していることはいうまでもない。中央官人としての百済王氏について、まず、その位階から見ると、天武天皇3(674)年に薨じた善光の子昌成に対して、小紫位が追贈されている。これは天智3年冠制の小紫位であり、大宝官位令の三位に相当する。また、持統天皇5(691)年正月の増封記事では、善光は天武14年冠制の正広四であり、大宝令制の従三位に相当する。また持統7年の薨去に際しては、正広三を追贈されて

いる。三位以上は「貴」に部類される。かつての王族であることを考えれば当然ともいえるが、きわめて高位といえよう。このほか、主だった人物の確認しうる官位を見れば、善光の孫良虞が従四位下(天平9(737)年)、良虞の子南典が従三位(同)、南典の弟敬福が従三位にいたっている(天平勝宝元(749)年)。奈良時代においても、百済王氏の直系が厚遇されていることが判明する。

こうした史料のほかに、先に取上げた敬福の薨伝は興味深い。すなわち、『続日本紀』天平神護二年六月壬子条には、次のようにある。「刑部卿従三位百済王敬福薨しぬ。その先は百済國義慈王より出づ。高市岡本宮に馴宇しし天皇の御世に、義慈王、その子豊璋と禪廣王とを遣して入侍せしむ。(中略)禪廣は因りて國に帰らず。藤原朝庭、号を賜いて百済王と曰い、卒して正広三を贈る。(中略)敬福は即ちその第三子なり。放縱して拘らず、頗る酒色を好む。感神聖武皇帝、殊に寵遇を加えて、賞賜優厚なり。(中略)天平年中に仕えて従五位上陸奥守に至る。時に聖武皇帝、盧舍那の銅像を造りたまう。冶ち鋳すこと云に畢りて、鍍金足らず。而るに陸奥国より馳駆して、小田郡より出せる黄金九百両を貢る。我が國家の黄金、此より始めて出づ。聖武皇帝甚だ嘉し尚びて、従三位を授けたまう。(後略)」

ここで敬福が聖武の特別な恩寵を受け、「賞賜優厚」であった人物として登場する点に注目したい。古代においては、天皇と官人の関係を規定するルートとして、通常の位階制に基づくものほかに、天皇と特定の個人の間における恩寵に基づく関係が重要であることは、よく知られているとおりである[吉川真司1998]。いうまでもなく、天皇とこのような恩寵に基づく関係を結び得た人物はほかにも存在する。ところが百済王氏に関しては、こうした関係が敬福のみにとどまるのではなく、のちにまで及んだ点が特殊である。

桓武天皇は自身の生母高野新笠を百済王氏の出自に擬し、同氏を「朕之外戚也」(『続日本紀』延暦9(790)年2月甲午条)として厚遇した。また、天武系から天智系へという皇統の交替を易姓革命になぞらえていたといわれる桓武は、交野の地を中国的祖先祭祀儀礼である郊祀挙行の舞台として重視したが、いうまでもなく、交野は百済王氏にとっても本拠というべき土地であった。「詔して当郡(交野一筆者註)今年の田租を免じ、国郡司及行宮側近の高年并に諸司陪從せる者に物を賜うこと各差あり。又百済王の行在所に供奉せる者一両人に階を進め爵を加う。百済寺に近江播磨二国の正税各五千束を施し、正五位上百済王利善に従四位下、従五位上百済王武鏡に正五位下、従五位下百済王元徳、百済王玄鏡に並びに従五位上、従四位上百済王明信に正四位下、正六位上百済王真善に従五位下を授く。」(『続日本紀』延暦2(783)年10月庚申条)とあるように、交野への行幸の際に百済王氏が恩寵の対象となっているのは、このような理由による。

このほか、平安初期の段階で、百済王氏は、桓武天皇に対して教仁・貞香、嵯峨天皇に対して貴命・慶命、仁明天皇に対して永慶など、天皇に多くの后妃を入れている。

以上の点から、百済王氏は百済王族の末裔というだけでなく、7世紀後半から9世紀前半にいたるまで、高位の人物を輩出し、敬福のような人物を得、また后妃を入れるなどの手段を通じて、王権との間に恩寵による特殊な君臣関係を持続していた。このような例は藤原氏を除くと、きわめて異例といえよう。

天皇の恩寵に基く君臣関係が、通常の位階制に基く君臣関係の原則を飛躍しうるものであることを端的に示す事例として、藤原仲麻呂がある。仲麻呂については、「紫微内相藤原朝臣仲磨を大保に任す。勅して曰く、『(中略)今より以後、姓の中に恵美の二字を加うべし。(中略)更に功封三千戸、功田一百町を給う。永く伝世の賜として不常の勲を表す。別に銭銭・挙稻と恵美の家印を用いることを聽す。』とのたまう。」(『続日本紀』天平宝字2(758)年8月甲子条)とあるように、勅命により恵美の姓を名乗ること、銭貨の鋳造と出挙、恵美家印の使用を特に認められている。ここに銭銭権が挙げられていることに注目したい。銭銭はすでに見たように国家の特権であり、これに対する違反には、国家は厳罰をもって対処した。したがって仲麻呂に賜与された銭貨鋳造権はまれな事例ではある。しかし、同様に臣下に銭銭権を与えた事例が、「高祖即位す(中略)、武德四(621)年七月、五銖銭を廢して開元通宝を行う。(中略)、すなわち銭監を洛、并、幽、益等の州に置く。秦王、済王に各三炉を賜い銭を鋳しむ。右僕射斐寂にも一炉を賜う。」(『旧唐書』食貨志上)とあるように、唐にも存在し、仲麻呂のばあいはそれに倣った可能性が指摘されている[金子裕之1997]。同様に、百済王氏の特定の個人に対しても銭貨鋳造権が賜与されたことを想定することは、充分に可能であろう(註2)。以上の検討の結果、奈良時代のいずれかの段階で、百済王氏の特定の個人に対して銭貨の鋳造が認められ、その結果として、「百済尼寺」ないしその周辺に工房が設けられたものと解したい。

5) 小結

以上、述べてきたところをまとめると次のようになる。

細工谷遺跡は百済王氏の氏寺である「百済尼寺」ともいるべき寺院と不可分の遺跡であり、「百済尼寺」は、現在は堂ヶ芝廃寺として知られる百済寺とともに、7世紀後半に百済王氏の氏寺として設定された。以後、百済王氏の河内移貫後も確実に9世紀前半までは難波に存在した。百済寺については、『聖德太子伝暦』の記事から12世紀前半まで難波に存続したことがうかがえる。

出土した銭貨未製品は細工谷遺跡における銭貨鋳造の可能性を示す資料として評価できる。金属製品は鋳銭のための素材として集積されたものと考える。

調査地周辺における鋳銭活動を支えていたものは、百済王氏と天皇家との間に長期にわたって持続された、恩寵にもとづく特殊な君臣関係である。 (古市)

註)

(1)但し、豊樟・善光王ら百済王族の入朝の時期については、この伝のとおりではなく、皇極天皇2(643)年との有力な見解があり[西本昌弘1985]、ここではそれに従う。

(2)同様の主旨は、東野治之氏「百済郡と百済王氏」(1997年11月7日、大阪市天王寺区役所における講演)でも述べられている。

第V章 まとめ

今回の調査では、難波京域でまったく空白であった地域に「百濟尼寺」と想定される古代寺院が存在したことが明らかになっただけでなく、和同開珎の铸造に係わる枝錢・バリ錢が発見されるという、貴重な成果が得られた。前者は古代仏教史・百濟郡の実態・百濟王氏の動向・難波京における渡来系氏族のあり方などさまざまな観点から検討されなければならない問題である。また、後者は古代錢貨の生産と流通という日本古代史上の重要課題に直接関連し、この地域だけに留まらず、他地域の铸造・铸造関連遺跡との比較など、多方面からのアプローチが必要であることはいうまでもない。

こうした重大な課題を認識しつつ、今回の調査から得られた成果を整理し、今後の研究の深化に供することにしたい。

第1節 遺跡の変遷

谷地形にある調査地は当時の活動域の周辺に当り、その中心は地形の安定した調査地北側にあったものと推定される。細工谷遺跡の調査は今回が初めてであり、遺跡の規模も明らかでない段階であるが、作業仮説として遺跡の変遷について提示することにしたい。

今回の調査でまとまった遺物が出土し、遺構が築かれ始めるのは初期須恵器の登場する5世紀中葉からである。近隣のNW85-1次調査でも、同時期の遺物が出土しており、SD701やSX702から周辺に集落の存在を想定することが可能である。上町台地中央部で出土した埴輪などの遺物にもこの時期のものがある。この地域の古墳時代の具体的な様相はわかっていないが、今回実施した花粉分析によると、中期中葉頃に森林環境の後退が認められ、調査地周辺で開発が始まったものと推定される(第IV章第1節)。ただし、この上町台地上には、南東1.3kmにある御勝山古墳のように、前期末葉にさかのぼる古墳もあり、開発がどの程度の範囲まで及んだものか、今後の検討を要する。また、韓式系土器が出土している点は、この時期の開発を考える上で興味深い。6世紀代の遺物も谷の堆積層から出土している。遺構は確認されなかったが、引き続き周辺には集落が営まれたものと思われる。

7世紀初頭の遺物は谷筋からまとめて出土している。A区北東部には柱穴群があり、建物群が調査区北側に広がっていることを示唆している。7世紀中頃の谷筋の溝からは、四天王寺創建瓦と同范瓦が出土している点が注目される。包含層出土のものと合わせて計3点と数は少ないものの、小規模な堂舎程度の建物を想定することは可能であろう。7世紀末葉～8世紀初頭頃に遺跡は転機を迎える。遺物量は前代に比べ、飛躍的に増加し、多数の土器・瓦が谷筋の溝に投棄されていた。推定朱雀大路跡のすぐ東側にこの時期のSE606が築かれ、尼寺の存在を示す木簡が出土した。多数の瓦が出土しており、同時に出土した墨書き器からその寺院は、「百濟尼寺」というべき寺であった可能性が高い。寺

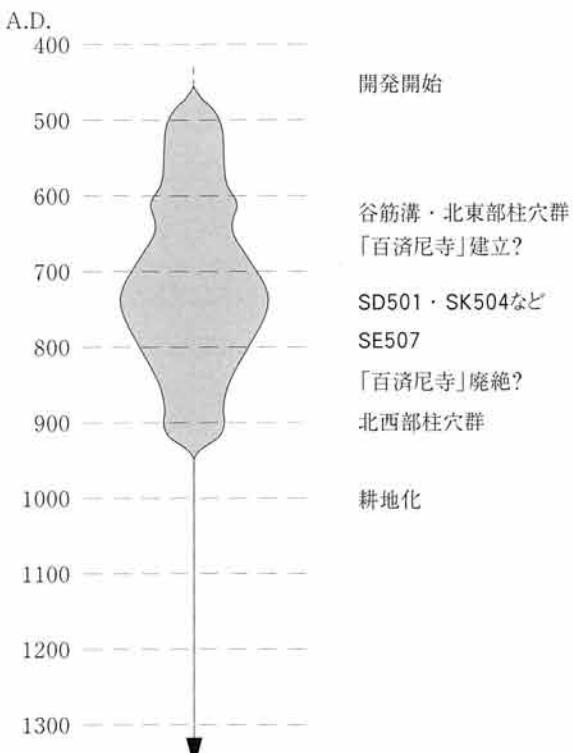


図91 遺構・遺物数から推定される細工谷遺跡の消長
耕地化

域を画する堀などの施設は発見されていないが、調査地の北側には、安定した地形が明治初期の地図から読み取れ、この地が寺の有力な候補地である。その創建時期は多数を占める白鳳後期の瓦から、飛鳥時代後半～末期である可能性が高い。転用材と推定されるSE507の井戸側の板材の伐採年代は、年輪年代測定によって、680年前後とみられ、寺の建造時期に一つの示唆を与えるだろう。

奈良時代初期(平城宮土器Ⅱ段階)を示す遺物は調査地では明確でない。これはおそらく廃棄行為が少なかったためであり、遺跡の間断を示すものではないだろう。8世紀中頃はもっと多くの遺構・遺物が現われ、遺跡の最盛期といってよい。SD501・SK504・SE505などの遺構がこの時期に集中する。8世紀末葉頃のSE507からは多数の土器が出土し、井戸鎮めの儀式が行われたと推定される。この井戸を最後に9世紀後半になるまで、調査地では顕著な遺構は確認できない。

花粉・種実分析によれば、7世紀末葉から8世紀中頃にかけては、人里植物あるいは耕地雑草が多く、集落環境が広がっていたと推定されている。また、イネ・コムギとともに検出された、ナシ・ナス・トウガルなどの栽培植物は、これまで平城京や藤原京のような都城遺跡でみられるものと共通している。溝・井戸からは寄生虫卵が低密度ではあるが検出されており、周辺にある程度の人口が集中する状況が読み取れるという。なお、SD501下部からは抽水植物であるミズアオイ属が群落を形成していたと考えられ、水が滞留した環境があったことを示している。SE505から出土した多数のカエル遺体もこうした環境に起因するものかもしれない(第Ⅲ章第10節)。

続く8世紀末葉～9世紀前半には集落環境の後退が示唆されている。樹木花粉が増加し、周辺地域で放棄地が拡大した可能性が認められる。この時期にSE505・507が放棄されて埋没し、その上を厚い包含層(第5層)が堆積する。9世紀前半を示す顕著な遺構は、調査地では確認されず、8世紀末葉～9世紀前半に遺跡は転換期を迎えたものと推定される。第5層には平安時代初期の瓦が含まれ、それに続く瓦は確認されておらず、9世紀前半のうちに先の寺院は廃絶もしくは規模を縮小した可能性がある。しかし、遺物の点からいえば、9世紀を通じて緑釉皿・火舎・淨瓶といった緑釉陶器や陶硯が多数の土器・瓦とともに出土しており、遺跡は間断なく継続していることが確認できる。

9世紀後半～10世紀前半にはA区北西部で掘立柱建物群や土壙群が築かれた。これらの遺構と先の寺院との関係は不明であるが、遺物量は前代に比べて急減しており、この間に断絶があるようと思われる。その後、13世紀頃の段々畑にみられるように、中世には傾斜地を耕作地として利用しており、引き続き近世以降も調査地周辺には田園風景が広がっていたことだろう。

(岡村)

第2節 調査の成果と課題

1)「百済尼寺」について

今回の調査では「百済尼寺」の存在が明らかになり、調査地の北側がその有力な候補地であることは先述したとおりである。第IV章第4節で詳述されているように、「百済尼寺」は百済王氏の氏寺として建立され、出土土器・瓦の検討からは、その本格的な造営の時期は7世紀後半と考えられる(第III章第8節)。

百済寺・「百済尼寺」は細工谷の谷を挟んで、河内低地を見下ろす上町台地東縁に建立された。飛鳥時代の寺院で僧寺と尼寺の一対となる確実な例は飛鳥寺と豊浦寺、法隆寺若草伽藍(斑鳩寺)と中宮寺(斑鳩尼寺)など少ない。今回の発見は有力な氏族の氏寺に僧寺と尼寺が建てられる重要な例であり、これまでに発見されている近接して立地する古代寺院の関係について再検討を促すものである(註1)。

また、「百済尼寺」は、瓦や墨書き土器から少なくとも平安時代初頭までは存在していることが明らかになった。すでに、堂ヶ芝廃寺(百済寺)については、平安時代末期まで存続していたとする指摘があったが[藤沢一夫1969]、尼寺についても奈良時代後半以降も存続していたことが確認できる。百済王氏は奈良時代後半に河内国交野郡へ移住して、河内百済寺を造営しているが、難波の両寺も併存していた。このことは、交野への移住後も、百済王氏はこの地域に権力を留めていたことを示している。

以上が「百済尼寺」に係わる今回の調査成果の要点であるが、最近、藤沢一夫氏はこの「百済尼寺」の発祥・性格について、重要な見解を述べられている[藤沢一夫1999]。

藤沢氏は「百済尼寺」の発祥として、『日本書紀』敏達天皇6年の記事、「夏五月癸酉、朔丁丑、遣大別王、與小黒吉士、宰於百済國。(割註略) 冬十一月庚午朔、百済國王、付還使大別王等、獻經論若干卷、并律師・禪師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工、六人。遂安置於難波大別王寺。」に注目する。ここで、氏は大別王の帰朝に際して、百済國王が送った「比丘尼」の滞在施設の存在を想定し、この施設が「難波大別王寺」(百済寺の前身)に対応する「百済尼寺」の前身と考えた。その所在については、嘉祐3(1227)年に書写された『太子傳古今目録抄』(『大日本佛教全書』聖徳太子伝叢書所収)の一節「一、尼寺事 善信等三人來_{アマカサキ}住此寺 故云尼寺_{云々}或尼崎」の記事をひき、この「尼寺」が「百済尼寺」をさし、「尼崎」が調査地北東側の「筆ヶ崎」にあたるものとした(図6参照)。さらに、敏達紀にみえる「比丘尼」、日本最初の留学尼僧である善信等が滞留した「百済尼寺」を日本最古の尼寺に位置づけた。また、今回の出土瓦・鳴尾を検討し、「百済尼寺」が四天王寺・法隆寺と密接に関係し、四天王寺を本寺と仰ぐ官寺的待遇を受けたものとした。

氏が「百済尼寺」の本格的な建立を四天王寺創建瓦との同范資料の時期に求められている点は、今回の調査成果の解釈と異なる点であるが、6世紀代の遺物や、7世紀初頭から遺構・遺物が見つかっていること、飛鳥期の瓦が少量出土していることの意味は、氏の述べる「百済尼寺」の前身の存在を示すものかもしれない。氏の論点は「百済尼寺」の全般に係わるだけでなく、わが国の尼寺の創立に係わるきわめて重要な指摘を含んでいる。今回の報告では十分に検討できなかったが、今後の課題としたい。

2) 和同開珎の枝銭をめぐる諸問題

SD501からは、和同開珎の枝銭・バリ銭を含む40数枚の和同開珎、帶金具・耳環・匙などの銅製品、工具である金鉗、銅板の切り屑・銅粒・鉱滓・方鉛鉱などの金属加工関連遺物が出土した。これらの遺物は溝の掘削後すぐに、短期間に集中して投棄されたものと推定される。銅板の切り屑・鉱滓・金鉗のような工具が見つかっていることから、周辺に工房が存在したことはまちがいない。しかし、鋳銭工房跡が確実な平城京左京三条四坊七坪[奈良国立文化財研究所1980b]などや銅器生産工房跡の諸事例[杉山洋1990]と比較すると、鋳造工房に典型的な遺物である坩堝・鞴羽口を欠き、鉱滓の量も非常に少ない。このことは工房は調査地から、ある程度距離をおいたところに存在したことを示しているのであろう。その候補地を考える上で、調査地の北東にある字名「金池」は示唆的である(図6)。先の左京三条四坊七坪の調査地の字名も同様に「金池」である点が注目される(註2)。

SD501から出土した銅製品のうち、製作途中あるいは失敗作であるのは、巡方606がその可能性があるのを除けば、枝銭・バリ銭・湯の回らなかつた和同開珎だけである。帶金具などの銅製品は材料として再溶解するために収集されたものと考えられる。先にあげた和同開珎の不良品も、銅素材以外に利用方法がなく、ほかの銅製品と同様に、地金として扱われた可能性が高い。実際に平城京左京三条四坊七坪では、坩堝の内面に銅滓とともに付着した和同開珎が出土しており、和同開珎も鋳造原料となった[杉山洋1990]。完成品の和同開珎も出土状況をみると限りでは、ほかの銅製品との違いはなく、銅素材とされたのかもしれない。和同開珎の初期の銭貨とされる古和同が新和同に混って2点出土していることも、このように考えれば、理解しやすいのではなかろうか。

次に、もっとも重要な問題はこの地で何が製造されたかということである。製造品の候補として、

1. 和同開珎以外の銅製品、2. 和同開珎の2つに分け、問題を整理したいと思う。

1には調査で出土した銅鎧や、寺院に用いる莊嚴具や梵鐘などの銅製品が考えられる。前者には、先の巡方があるが、裏金具の1点のみであり、その評価は決しがたい。後者は「百濟尼寺」に供給された銅製品が考えられる。このばあいには、枝銭・バリ銭は他地域から運び込まれた、ほかの銅製品と同一レベルにある銅素材となり、完成品は未検出とされる。一般的には、枝銭のように鋳銭と直接係わるものが製造地から移動することは考えがたいが、皆無とはいえないだろう。

2は枝銭・バリ銭などの不良品の存在から直接導き出される。これまでバリ銭や錢範といった和同開珎の鋳銭関連遺物が出土した遺跡は細工谷遺跡以外には5個所あり、このうち4個所が平城京内にある。その5個所とは長門鋳銭所跡[上田三平1931]・平城京東市東堀河[奈良国立文化財研究所1976b]・同左京三条四坊七坪[同研究所1980b]・平城宮内東大溝SD2700[同研究所1987]である。長門鋳銭所跡に比定されている山口県下関市長府町覺苑寺境内からは、和同開珎の錢範・鞴口・坩堝などが出土しており、『続日本紀』天平2(730)年にみえる「長門鋳銭」所であることが明らかになっている。平城京内のうち、左京三条四坊七坪からはバリ銭・錢範・鞴羽口・坩堝などが出土しており、炉と考えられる焼土ピットも検出されていることから、鋳銭工房であることは確実である。

左京三条四坊七坪では、その評価が私営工房(私鋳銭工房)と官営工房とに分かれたが、細工谷遺跡が鋳銭工房跡であったとしても、同様に2通りの解釈が可能である。

まず、私営工房説の最大の理由は、平城京同様、史料に難波の地に鋳銭施設が置かれた記事が見えないことである。『続日本紀』によれば、和同開珎の鋳銭施設である鋳銭司は河内・近江・太宰府・長門・山城に置かれた記事はあるが、難波の名はない。また、鋳銭活動は鋳銭司の厳密な監督下に置かれた一方で、度々の私鋳銭の禁令にみるよう、當時横行していたようすがうかがえる。

細工谷遺跡出土の和同開珎はバリ銭や鋳造欠陥が多く、流通銭と考えがたいものが半数を占めるが、考古学的に私鋳銭を特定するのはすこぶる困難である。肉眼観察で巧拙を指摘できても、これが個体差であるのか、官営・私営工房の差であるのか、現在の我々は明確な基準を持ち合わせていない。今回実施した蛍光X線分析によると、4つのタイプが存在することが指摘されている(第IV章第3節)。この結果をどのように判断すべきであるのか、ほかの事例との比較が十分でない現段階では定見がない。今回の結果をほかの事例と比較することで、1つの活路が見い出せるかもしれないが、そのためには、既に述べられているように、標準化された分析データを蓄積していくことが必要であろう。

次に、官営あるいは官許の工房とする説については、和同開珎の鋳銭が官営の鋳銭機関以外で許されたのは、記録による限り、藤原仲麻呂(恵美押勝)の1例のみが知られている。同様に今回の事例においても「百済尼寺」の造営にあたった百済王氏と天皇家との「恩寵による特殊な君臣関係」によって官許を得たとする考えがある(第IV章第4節)。難波京の朱雀大路に近接した場所で、私鋳銭が製造されていたとは一般的には考えがたく、鋳銭工房の存在が確定すれば、有力な説であろうと考える。

また、藤沢氏は細工谷での鋳銭活動を想定され、文献に登場しない「難波鋳銭司」の仮名を与えていた[藤沢1999]。先述した「金池」が、本来「金鋳池」であった可能性も指摘する。

以上、枝銭の出土をめぐる問題点を整理したが、細工谷の地で銭貨が鋳造された可能性は高いといえるものの、工房とそれに付随する設備である炉や坩堝・羽口などの道具類が発見されておらず、調査地の北側に想定される寺院と枝銭に象徴される工房の関係も明らかでない現段階では、先述したいずれの解釈も可能であり、決しがたい。

近年、古代銭貨の生産・流通を考える上で重要な発見が相次いでいる。奈良県明日香村飛鳥池遺跡では、谷に堆積した飛鳥時代後半の廃棄物から多数の鋳造関連遺物とともに、33枚の富本銭が発見された。富本銭はバリ銭が多く、多数の鋳造関連遺物も共伴していることから、この地で生産されたものと考えられる[松村恵司1999]。遺跡の時期や、寺院に近接し、谷地という立地に営まれた金属製品の生産遺跡である点で細工谷遺跡に類似する[花谷浩1994、奈良国立文化財研究所1998]。また、平城京左京六条一坊十六坪調査地(奈良市柏木町)では、神功開宝のバリ銭、錢范が出土しており、鋳銭工房跡と考えられている[山前智敬1999]。

枝銭の出土をどのように評価すべきかは、当時の銭貨鋳造の実態をどのように捉えるかという問題であり、先の諸事例との比較研究、周辺の調査の進展に委ねられていると言わざる得ない。

(岡村)

註)

(1)上原真人氏(京都大学)のご教示による。

(2)岩本次郎氏(甲子園短期大学)のご教示による。

引 用・参 考 文 献

- 網伸也1992、「後期難波宮と古代寺院」:『古代』第93号、pp.101-127
- 池邊彌1981、『倭名類聚抄郡郷里驛名考證』 吉川弘文館
- 石上英一1987、「古代東アジア地域と日本」:『日本の社会史』1 岩波書店、pp.55-96
- 石田茂作1936、「堂ヶ芝廃寺」:『飛鳥時代寺院址の研究』 財団法人 聖德太子奉讃会、pp.543-549
- 井尻正二1949、「古生物学論」(同1982、『井尻正二選集』第1巻 大月書店、pp.3-320)
- 伊藤純1991、「西成郡美努郷の一隅」:大阪市文化財協会編『葦火』30号、pp.2-3
- 1998、「百済郡の記憶—近世の百済郡史料」:大阪市教育委員会事務局社会教育部文化財保護課編『大阪の歴史と文化財』創刊号、pp.42-45
- 今井啓一1958、「摂津國百済郡考」(上下):『続日本紀研究』58号、pp.23-51、59号、pp.12-25
- 今泉吉典1960、「原色日本哺乳類図鑑」 保育社
- 植木久1986、「難波宮および難波京内出土の墨書き土器」:大阪市文化財協会編『葦火』4号、p.8
- 1991、「大和への玄関—難波津—」:『新版古代の日本』第6巻 近畿II、pp.17-38
- 上田三平1931、「長門鋳銭所址」:『史蹟調査報告』6、pp.77-79
- 上田宏範1988、「大阪市域の古墳」:『新修大阪市史』第1巻、pp.351-424
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1987、「筆ヶ崎マンション建設工事に伴う難波京朱雀大路跡(NW85-1次)発掘調査略報」:『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.50-56
- 1990、「観音寺本堂の建て替えに伴う堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS88-1次)略報」:『昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.117-126
- 大阪市文化財協会1985、「殖産住宅(株)による集合住宅建設に伴う難波京朱雀大路跡発掘調査(NW85-37次)略報」
- 1987、「西村薬品産業(株)による建設工事に伴う堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS87-3次)略報」
- 1989、「近畿財務局桃谷住宅新築工事に伴う堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS89-1次)略報」
- 1991、「上町台地の遺跡」
- 1992、「難波宮址の研究」第九
- 1995、「難波宮址の研究」第十、pp.100-124、175-184
- 1996a、「森の宮遺跡」II
- 1996b、「四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告」I
- 大脇潔1998、「鵠尾」日本の美術391、至文堂
- 大脇正一1930、「四天王寺発見の瓦について」:『東洋美術』7、pp.27-46
- 岡村勝行・古市晃1997、「細工谷遺跡で見つかった和同開珎の枝銭」:大阪市文化財協会編『葦火』68号、pp.2-3
- 柏原市教育委員会1989、「高井田遺跡III」、p.159
- 金子裕之1997、「平城京の精神生活」 角川書店、pp.108-109
- 金原正明1993、「花粉分析法による古環境復原」:『新版古代の日本』第10巻 角川書店、pp.248-262
- 金原正明・金原正子1992、「花粉分析および寄生虫」:『藤原京跡の便所遺構—藤原京七条一坊—』 奈良国立文化財研究所、pp.12-16
- 1994、「宮町遺跡第13次調査における微遺体および大型植物遺体の検討」:『平成5年度 遺跡発掘事前総合調査にかかる紫香楽宮関連遺跡発掘調査報告書』(信楽町文化財報告書第8集) 滋賀県信楽町

教育委員会、pp.43-56

1995a、「二条大路・東二坊々間路側溝およびSD5100・5300における花粉分析と寄生虫卵分析」：『平城京左京二坊・三条二坊発掘調査報告書－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』 奈良国立文化財研究所、pp.553-564

1995b、「藤原宮外濠における寄生虫卵・植物遺体分析」：『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25 奈良国立文化財研究所、pp.30-34

金原正明・粉川昭平1989、「上之宮遺跡第5次調査出土植物遺体の検討」：『奈良県桜井市阿部丘陵遺跡群 桜井南部特定土地区画整理事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書』 桜井市教育委員会、pp.159-182

金原正明・松井章・金原正子1994、「便所堆積物から探る古代人の食生活」：『助成研究報告(平成4年度)』 (財)味の素食の文化センター、pp.35-48

金誠龜1998、「発掘された百済の寺院址と出土遺物」：森浩一・上田正昭編『繼体大王と渡来人』 大巧社、pp.131-161
京都市埋蔵文化財研究所1996、『木村捷三郎収集瓦図録』、p.203

久保和士1996a、「動物遺体の調査結果」：大阪市文化財協会編『森の宮遺跡』II、pp.134-174

1996b、「桑津弥生人の食を探る」：大阪市文化財協会編『葦火』65号、pp.6-7

1997、「考古資料からみた水産食料と漁業」：『大阪府漁業史』 大阪府漁業史編さん協議会、pp.898-913

1998、「住友銅吹所跡出土の動物遺体」：大阪市文化財協会編『住友銅吹所跡発掘調査報告』、pp.339-377

黒崎直1976、「平城宮の井戸」：『月刊文化財』151号、pp.25-35

黒田慶一1991、「難波京朱雀大路の軒丸瓦」：大阪市文化財協会編『葦火』33号、p.8

粉川昭平1969、「藤原宮出土植物種子について」：『藤原宮跡 昭和43年度調査概要』 奈良県教育委員会、pp.16-20

国立歴史民俗博物館1997、『お金の玉手箱－銭貨の列島2000年史』、pp.16-17

古代の土器研究会1992、『古代の土器1 都城の土器集成』

1993、『古代の土器2 都城の土器集成II』

小林行雄1962、「東大寺銅鏡」：『古代の技術』 塙書房、pp.259-271

栄原永遠男1993、『日本古代銭貨流通史の研究』 塙書房

佐藤興治1974、「2 遺物」：『平城宮発掘調査報告VI－平城京左京一条三坊の調査』(奈良国立文化財研究所学報第23冊)、pp.154-161

佐原真1968、「近畿地方」：『弥生土器集成』本編2 東京堂出版、pp.53-72

島倉巳三郎1973、『日本植物の花粉形態』(大阪市立自然科学博物館収蔵資料目録第5集)

菅谷文則1991、「松浦武四郎資料にみる四天王寺付近出土の『無文銀錢』」：『大阪の歴史』32号 大阪市史編纂所、pp.71-77

杉山洋1990、「奈良時代の金属器生産－銅器生産遺跡と通してみた考古学的素描－」：『仏教藝術』190、pp.47-72

鈴木公雄1988、『考古学入門』 東京大学出版会

関根真隆1974、「奈良朝服飾の研究」 吉川弘文館、pp.218-253

積山洋1998、「難波京の方格地割をさぐる」：『郵政考古』24号、pp.19-38

千石正一他編1996、『日本動物大百科第5巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類』 平凡社

竹内理三・山田英雄・平野邦雄編1966、『日本古代人名辞典』5、p.1388

田辺昭三1981、「須恵器大成」 角川書店

田中史生1997、「日本古代国家の民族支配と渡来人」 校倉書房

田村円澄1980、「古代朝鮮仏教と日本仏教」 吉川弘文館、p.43

趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』

書』VIII、pp.41-44

帝室博物館1937、『天平地宝』 三秀舎、p.55

長瀬一平1985、「白村江敗戦後における『百濟王権』について」:『千葉史学』6、pp.13-35

中村純1974、「イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として」:『第四紀研究』13(4)、pp.187-198

1977、「稲作とイネ花粉」:『考古学と自然科学』第10号、pp.21-30

1980、『日本産花粉の標徴 I』(大阪自然史博物館収蔵目録第13集)

中村博司1975、「大阪市内出土の埴輪鳥・家について」:『大阪城天守閣紀要』第3号 大阪城天守閣、pp.2-7

奈良県教育委員会1995、「出土木簡釈文(抄)」:『平城京左京二坊・三条二坊発掘調査報告書—長屋王邸・藤原麻呂邸の調査—』、p. 4

奈良国立博物館1970、『飛鳥白鳳の古瓦』 東京美術、p.272、p.276

奈良国立文化財研究所1974、『平城宮発掘調査報告VI—平城京左京一条三坊の調査』(奈良国立文化財研究所学報第23冊)

1976a、『平城宮発掘調査報告VII』(奈良国立文化財研究所学報第26冊)

1976b、『平城京左京八条三坊発掘調査概報 東市周辺東北地域の調査』

1980a、『日本古代の鳴尾』飛鳥資料館図録第7冊

1980b、『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』

1985、『木器集成図録 近畿古代篇』(奈良国立文化財研究所史料第27冊)

1987、『昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

1990、『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書』(奈良国立文化財研究所学報第46冊)

1991、『平城宮発掘調査報告』XIII、p.266

1998、『飛鳥池遺跡 飛鳥藤原第93次調査現地説明会資料』

西中川駿・松元光春1991、「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」:『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、pp.164-188

西本昌弘1985、「豊璋と翫岐」:『ヒストリア』107、pp.1-18

野尻家宏・長谷川善和1979、「附. 日本産蛙類の骨学的研究」:『伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書』 伊江村教育委員会、pp.275-311

1985、「宮古島産蛙化石」:『ピンザアブ洞穴発掘調査報告』 沖縄県教育委員会、pp.151-159

橋本義則1992、「右京一条二坊の調査(第64次)」:『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』22 奈良国立文化財研究所

花谷浩1994、「飛鳥の銅工房」:『月刊文化財』374号、pp.16-22

原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真1962、「船橋遺跡の遺物の研究(II) 平安学園考古学クラブ

東野治之1988、「律令制下の難波」:『新修大阪市史』第1巻、pp.749-777

菱田哲郎1988、「鳴尾の生産と地域色—東播系と西播系の鳴尾—」:『古代文化』第40巻6号 古代学協会、pp.25-26

藤沢一夫1941、「摂河泉出土古瓦の研究—編年式の様式分類の一試企—」:『仏教考古学論叢』第3輯、pp.237-307

1965、「四天王寺出土の古代屋瓦」:『仏教藝術』56 每日新聞社、pp.111-118

1969、「摂津国百濟寺考」:『鄭貴文編』日本のなかの朝鮮文化』2 日本のなかの朝鮮文化社、pp.55-58

1995、「百濟国都泗沘城と日本摂津国百濟郡—道教的世界の形成と継承—」:『激動の古代東アジア』 帝塚山考古学研究所、pp.140-161

1999、「難波銭司及百濟尼寺跡考～細工谷遺跡の観察から～」:大阪市教育委員会事務局社会教育部文化財保護課編『大阪の歴史と文化財』第2号、pp.43-52

古市晃・岡村勝行1997、「「百濟尼寺」の発見」:大阪市文化財協会編『葦火』69号、pp.2-3

- 古田修久1998、「和同開珎の分類」：『季刊 方泉處』第21号 (株)ハドソン 東洋鑄造貨幣研究所、pp.44-51
- 文化財保護委員会1967、「四天王寺」、pp.212-223
- 法隆寺昭和資材帳編集委員会1992、「法隆寺の至宝 瓦」昭和資材帳15 小学館、p.139
- 北隆館編集部編1981、「学生版日本動物図鑑」 北隆館
- 前田昇1988、「上町台地と大阪低地」：『新修大阪市史』第1巻、p.9
- 前田洋子1983、「大阪上町台地検出の屋瓦資料—飛鳥・奈良時代前期(白鳳)の屋瓦とそれらを検出する遺跡」：『摂河泉文化資料』31号 摂河泉文庫、pp.1-22
- 益田一他編1984、「日本産魚類大図鑑」 東海大学出版会
- 松井正文他1989、「日本カエル図鑑」 文一総合出版
- 松尾信裕1990、「『難波京』内出土の瓦—興國高校の調査—」：大阪市文化財協会編『葦火』26号、pp.1-3
- 松村恵司1990、「富本銭について」：『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書』(奈良国立文化財研究所学報第46冊)、pp.186-188
- 1994、「銅銭と銅鋳の時代—平城京の銅鋳工房をめぐって—」：『月刊文化財』374号、pp.23-26
- 1998、「無文銀銭と和同銀銭—飛鳥藤原地域出土銀銭を中心に—」：『出土銭貨』第9号 出土銭貨研究会、pp.17-28
- 1999、「飛鳥池遺跡出土の富本銭」：『考古学ジャーナル』442号 ニュー・サイエンス社
- 南秀雄1992、「難波宮下層遺跡の土器と編年」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp.320-339
- 宮本佐知子・佐藤隆1996、「四天王寺とその周辺出土の古代瓦」：大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』I、pp.93-119
- 村上隆1996、「飛鳥藤原地域で出土した銅、青銅、金銅製品」：奈良国立文化財研究所編『奈良国立文化財研究所年報』、pp.30-31
- 1998、「群馬県出土の銅製容器資料の材質について」：財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『下東西・清水上遺跡』
- 村上隆・肥塚隆保・沢田正昭1997、「古代銅製品におけるアンチモンについて」：『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』、pp.32-33
- 村田治郎1966、「四天王寺創立史の諸問題」：『聖徳太子研究』第2号 聖徳太子研究会、pp.73-128
- 八幡市教育委員会1985、「平野山瓦窯跡発掘調査概報」
- 1992、「楠葉平野山瓦窯(第2次)発掘調査概報」
- 山川均1996、「『富本銭』について」：『出土銭貨』第5号 出土銭貨研究会、pp.111-113
- 山前智敬1999、「平城京左京六条一坊十六坪の調査の概要」：『平成10年度 奈良県内市町村発掘調査報告会資料』
- 奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- 大和川・今池遺跡調査会1981、「大和川・今池遺跡III」
- 山本忠尚1998、「鬼瓦」日本の美術391号 至文堂
- 吉川真司1998、「律令官僚制の研究」 埼書房、pp.27-52
- 吉田晶1982、「古代の難波」 教育社
- H. Nokariya, 1984, Comparative osteology of Japanese frogs and toads for paleontological studies (III): *Rana*. *Bulletin of natural science museum. series C*, 10(2), pp.56-79. Tokyo.
- M. A. Levine, 1982, The use of crown height measurements and eruption-wear sequences to age horse teeth. Ageing and sexing animal bones from archaeological sites. *BAR British Series 109*, pp.223-250.

あとがき

細工谷遺跡の調査成果は我々の予想をはるかに越えたものであった。

和同開珎の枝銭、工房を連想させる金属製品、日本最古の錢貨になりつつある富本銭、木簡・墨書土器の文字資料、古代寺院の存在を示す数々の瓦など、難波京のありし日を生き生きと伝える資料の発見に、興奮を覚えたことも少なくなかった。上町台地上に立地する難波京の遺構は近年の開発によって削平をこうむることが多く、これまでなかなか我々の前にその姿をあらわしてくれず、隔靴搔痒の感があった。この点、調査地は谷地形という立地条件が幸いした事例である。言葉は適切でないが、今回の出土品はいわば中心からこぼれ落ちた資料であり、活動の中心域のようすは想像するにあまりある。遺跡の歴史的な位置づけについてはもどかしさが残る点もあるが、本書の刊行が関連諸研究の一助となれば幸いである。

なお、本書で用いた土器・石製品以外の遺物のトレースは、コンピューターの画面上で行った。また、遺構図の多くは写真測量によって得られたデータをもとに作成したものである。博物館などの将来の活用を想定し、あえてデジタル化に挑んだ。新しい技術を用いて、古きを再生することを目指した一つの試みである。これまでの図とやや調子が異なる点もあるが、忌憚なきご批判を願う次第である。

最後に、調査にご協力いただいた大阪市建設局をはじめ、調査・整理作業に参加されたすべての方にお礼を申し上げる。多数の方々の協力と努力で本書が成ったことを明記しておきたい。

(八木久栄)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- S SD501 20, 30, 33, 41, 42, 45,
49, 51, 59, 61, 80, 84,
87, 97, 103, 108, 111,
112, 117, 119, 122, 123,
127, 129, 130, 132, 141,
148, 150
- SE507 20, 41, 70, 73, 77, 80,
87, 96, 122, 125, 127,
129, 130, 132, 134, 148
- あ アカガシ亞属 123, 125, 129, 130, 132
飛鳥 I 40
飛鳥 II 32, 40
飛鳥 III 40
飛鳥 IV 33, 40
飛鳥 V 33, 34, 36, 37, 40, 87
尼寺 38, 143, 147, 149
「尼寺」(墨書) 2, 3, 67, 73, 80, 87,
141, 149
アンチモン 139
- い 斎串 12, 64, 77
井戸 2~4, 11, 12, 15, 20, 29,
36, 37, 41, 69, 70, 72,
73, 89, 113, 114, 116,
119, 132, 134, 148
井戸鎮め 70, 77, 87, 96, 148
糸巻き 41, 45, 64
イネ 35, 123, 125, 127~133,
148
- う ウシ 70, 113, 114, 117, 118
ウマ 70, 113, 114, 117, 118
- え 枝錢 1, 3~5, 14, 20, 41, 43,
49, 51, 80, 112, 135,
139~141, 147, 150, 151
- お 帯金具 3, 41, 45, 55, 57, 80,
82, 150
- か 開元通宝 45, 49, 51, 135, 146
カエル 70, 113~116, 118~120,
148
鉸具 45, 55, 57
- 鉢帶 57
金鉗 41, 45, 59, 80, 150
花粉 8, 20, 21, 28, 119, 121
～123, 125, 129~133,
147, 148
韓式系土器 21, 27, 28, 147
- き 寄生虫卵 121, 122, 128, 129, 131
～133, 148
切り屑 41, 57, 80, 150
均整唐草文軒平瓦 102
金属加工関連遺物 41~43, 45, 51, 150
- く 「百濟尼」(墨書) 1~3, 77, 80, 87, 141
「百濟尼寺」(墨書) 3, 4, 13, 20, 38, 41, 80,
87, 89, 110, 141, 143,
144, 146, 147, 149~151
- け 螢光X線分析 57, 59, 136, 151
圈脚円面硯 49, 81, 82
建築部材 64
- こ 鉱滓 41, 45, 57, 59, 80, 141,
150
黒色土器 12, 16, 82, 85
コナラ亞属 123, 125, 129, 130, 132
コムギ 35, 127, 131, 133, 148
古和同 43, 45, 51, 139, 150
- さ 細弁蓮華文軒丸瓦 98
匙 41, 45, 57, 67, 150
さはり 57

- し 「四月八日」(墨書) 89
 耳環 41, 57, 150
 私鑄銭 141, 144, 150, 151
 重郭文軒平瓦 102
 重圓文軒丸瓦 12, 98
 重弁蓮華文軒丸瓦 97, 108
 種実 35, 113, 119, 121, 122, 127, 129~132, 148
 巡方 45, 55, 57, 80, 84, 144, 150
 净瓶 82, 148
 初期須恵器 21, 22, 25, 147
 神功開宝 70, 72, 78, 81, 82, 135, 139, 151
 森林開拓 8
 せ 製塙土器 21, 29, 36, 67, 111, 112
 そ 僧寺 143, 149
 「僧寺」(墨書) 34, 87
 素弁蓮華文軒丸瓦 12, 30, 40, 97, 143
 た 鉈尾 55, 57, 84
 単弁蓮華文軒丸瓦 97, 108
 ち 鑄銭 144, 146, 147, 150, 151
 鑄銭工房 80, 141, 144, 150, 151
 鑄銭司 144, 151
 て 鉄製品 41, 45, 51, 59, 67
 鉄鎌 70, 78
 と 銅鋸 55, 150
 銅塊 42, 57, 59
 トウガン 35, 127, 131, 133, 148
 銅製品 3, 4, 41, 42, 45, 47, 51, 57, 80, 150
 銅粒 41, 51, 57, 59, 80, 150
 銅鏡 47, 57, 69, 137
 土錐 30, 34, 36, 118
 な ナス 35, 127, 128, 131, 133, 148
 に 忍冬唐草文軒平瓦 99, 108, 109
- ね 年輪年代 73, 134, 148
 は 墳輪 8, 78, 147
 バリ銭 33, 45, 51, 80, 141, 143, 147, 150, 151
 「盤」(墨書) 87, 89
 ひ 「百尼」(墨書) 3, 73, 77, 80, 87, 141
 「百尼寺」(墨書) 87
 鉢 41, 55, 57, 59, 84
 ヒヨウタン 35, 37, 38, 127, 128, 131, 133
 ふ 複弁蓮華文軒丸瓦 97, 108
 富本銭 14, 32, 33, 40, 135, 139, 151
 へ 平城宮土器Ⅱ 148
 平城宮土器Ⅲ 41, 49, 69, 70, 73
 平城宮土器Ⅵ 72, 73, 77, 81
 ほ 方鉛鉢 41, 57, 59, 150
 墨書 2, 3, 12, 13, 20, 29, 34, 41, 47, 67, 70, 73, 76, 77, 80, 81, 87, 89, 110, 141, 147, 149
 ま 曲物 32, 33, 37, 38, 64, 72, 73, 77
 丸鞆 45, 55, 57
 万年通宝 82, 135, 139
 む 無文銀銭 14
 無文軒平瓦 98, 108
 も 木簡 3, 4, 13, 37, 38, 41, 45, 61, 63, 89, 142, 147
 や 屋根材 4, 41
 り 隆平永宝 16, 81, 82, 135, 139
 緑釉陶器 16, 81, 82, 84, 148
 れ 蓮華文軒丸瓦 12, 98
 わ 和同開珎 1, 3~5, 14, 20, 33, 41, 43, 45, 49, 51, 80~82, 112, 135, 137, 139~141, 143, 144, 147, 150, 151

〈地名・遺跡名など〉

- あ 飛鳥池遺跡 33, 40, 151
- う 打越窯 106, 110
(兵庫県姫路市)
- か 金池 14, 150, 151
- き 敬福 141, 142, 145
- く 楠葉平野山瓦窯 108
(大阪府枚方市・京都府八幡市)
- 百済 13, 38, 108, 141, 142,
143, 145, 149
- 百済寺 145
(河内国)
- 百済寺 8, 13, 14, 87, 110, 142,
(摂津国・難波) 143, 146, 149
- 百済王氏 13, 141~147, 149, 151
- 百済郡 13, 38, 142, 143, 146,
147
- こ 後期難波宮 13, 98, 102, 103, 108,
110
- さ 細工 14
- 細工谷 1, 5, 7, 8, 14, 108~110,
112, 121, 129, 131, 132,
134, 135, 137, 139, 140,
143, 146, 147, 149, 150,
151
- 寒風窯 106, 110
(岡山県邑久郡牛窓町)
- し 四天王寺 8, 11~14, 30, 97, 106,
108, 110, 120, 143, 147,
149
- 持統 142, 144
- 聖武 12, 13, 145
- 真法院遺跡 14
(大阪市)
- す 推古 12, 89, 141
- 朱雀大路 1, 3, 4, 7, 11, 12, 143,
144, 147, 151
- せ 摂津国分寺 8, 14
- 前期難波宮 11, 12
- 禪広(善光) 13, 141~146
- 善信 149
- て 天武 11, 14, 33, 142, 144,
145
- と 堂ヶ芝廃寺 8, 13, 97, 98, 108~110,
142, 143, 146, 149
- な 長門鋳銭所跡 150
(山口県下関市)
- 難波京 11, 12, 14, 73, 118, 120,
121, 132, 144, 147, 151
- 難波百済寺 8, 13, 110, 142, 143
- 難波大道 11
- 難波宮 5, 8, 11, 12, 14, 98,
102, 110, 118
- ふ 藤沢一夫 4, 13, 14, 97, 98, 110,
142, 143, 149, 151
- 藤原仲麻呂 146, 151
- 筆ヶ崎 149
- へ 平城京右京八条一坊
十三・十四坪 33
- 平城京左京三条四坊
七坪 112, 150
- 平城京左京六条一坊
十六坪 151
- ほ 豊璋 141, 143, 145, 146
- 法隆寺 12, 80, 108, 149

**Archaeological Reports
of the
Saikudani Site in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of Excavations
Prior to the Construction of
the Namba-Katae Road through Tennoji Ward
in 1996 and 1997



March 1999

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features in this text:

SA: Palisade or Fence

SD: Ditch

SE: Well

SK: Pit

SP: Posthole

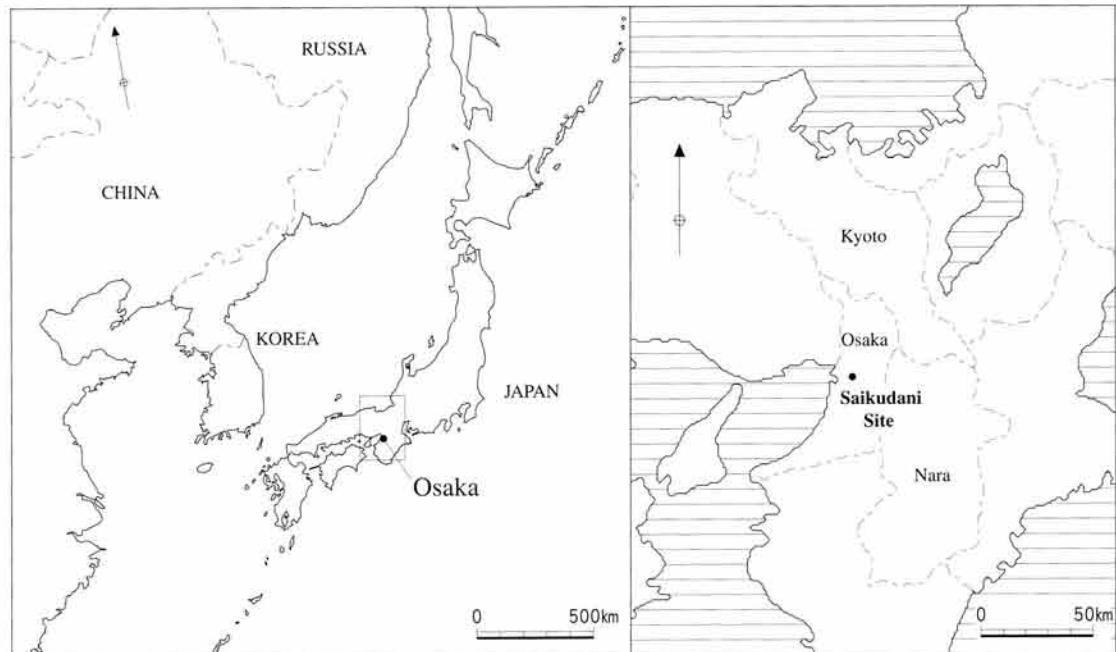
SX: Unidentified

Feature no.'s

Period name

Dates

201-300	Early Modern	A.D. 1603-1868
301-400	Medieval	A.D. 1185-1603
401-500	Heian	A.D. 794-1185
501-600	Nara	A.D. 710-794
601-700	Asuka	A.D. 593-710
701-800	Kofun	A.D. ca., 300-593



CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Acknowledgements

Chapter I Background and progress of the investigation	1
1 Background of the investigation	1
2 Progress of the investigation	3
1) First investigation	3
2) Second investigation	4
3 Public release of the investigation results	5
Chapter II Geographical setting and historical background of the site	7
1 Geographical setting of the site	7
2 Historical background of the site	8
Chapter III Research results	15
1 Stratigraphy and outline of the features	15
1) Stratigraphy	15
2) Outline of the features	20
2 Kofun Period features and remains	21
1) SD701	21
2) SX702	22
3) Other features and remains	22
4) Stratum 7 remains	22
5) Stratum 6 remains	25
6) Kofun Period stone artefacts	28
7) Conclusion	28
3 Asuka Period features and remains	29
1) SD601, 602 and 603	29
2) SD604	33
3) SK605	35
4) SE606	36
5) Post holes in the northeastern section	38
6) Other features	39
7) Conclusion	40
4 Nara Period features and remains	41
1) SD501 and 502	41
2) SK504	67
3) SE505	69
4) SE507 and SK506	70
5) SX508	77
6) Other features and remains	79
7) Conclusion	80
5 Ancient remains from Stratum 3, 4 and 5	81
1) Pottery and other earthenware artefacts	81
2) Coins and other metal artefacts	82
3) Conclusion	84
6 Features and remains from the Heian Period and later	85
1) Heian Period features and remains	85
2) Medieval Period features	85
3) Conclusion	86

7	Pottery vessels bearing ink and inscribed inscriptions	87
8	Tiles	97
1)	Round eaves-tiles	97
3)	Round and flat roof-tiles	102
5)	Floor-tiles	108
2)	Flat eaves-tiles	98
4)	Other roof-tiles	106
6)	Conclusion	108
9	Salt production vessels	111
10	Faunal remains	113
1)	Sampling methodology and identification of the remains	113
2)	Provenance of the remains	113
3)	Description of the faunal remains	114
4)	Utilisation of faunal resources	117
5)	Presumed palaeo-environment reconstructed from the frog remains	118
Chapter IV Analysis and consideration of excavation results		121
1	Reconstruction of the palaeo-environment at the Saikudani site	121
1)	Introduction	121
3)	Pollen Analysis	122
5)	Parasite eggs analysis	128
7)	Conclusion	132
2)	Sampling, stratigraphy and features	121
4)	Seed identification	127
6)	Considerations	129
2	Dendrochronological study of SE507 well boards	134
1)	Sampling and methodology	134
2)	Results	134
3	Scientific research of the coins recovered at the Saikudani site	135
1)	Introduction	135
3)	Research methods	136
5)	Conclusion	140
2)	Sample selection	135
4)	Considerations	136
4	The Kudara-ou-shi and 'Kudara Nunnery'	141
1)	Introduction	141
2)	Concerning 'Kudara Nunnery'	141
3)	Possibility of coin production	143
4)	The Kudara-ou-shi and royalties	144
5)	Conclusions	146
Chapter V Report conclusion		147
1	Changes in the site	147
2	Assessment of the site	149
1)	Concerning 'Kudara Nunnery'	149
2)	Issues concerning the Wado-kaichin coins with sprue	150
Bibliography		152
Postscript and Index		

English Contents and Summary

Reference card

Frontispiece

The so-called Wado-kaichin branch

List of colour plates

1. Investigation area (from East)
2. Pottery used for the well pacification ritual from SE507
3. Nara Period metal artefacts and associated remains from SD501, SE507 and others

List of plates

1. Aerial view of Sector A
2. Features from earlier than the Kofun Period
Upper: SD1001 and 701 (from South)
Middle: SD701 cross section (from South)
Lower: SD701 (from North)
3. Kofun Period features
Upper: Sue-ware on Stratum 7 *in situ*
Middle: SX702 (from South)
Lower: Same as above
4. Asuka Period features (1)
Upper: SD601, 602 and 603 (from North)
Middle: Remains *in situ* from SD601 (from Southwest)
Lower: SK605 (from Southwest)
5. Asuka Period features (2)
Upper: Post holes in Northeast of Sector A (from East)
Lower: SP609, 635, 636 and 640
6. Nara Period features (1)
Upper: SD501 and other features (from South)
Lower: Same as above (from North)
7. Nara Period features (2)
Upper: Wado-kaichin connected by sprue *in situ* from SD501 (from South)
Middle: Tongs *in situ* from SD501 (from East)
Lower: Wooden tablet 709 *in situ* from SD501 (from South)
8. Nara Period features (3)
Upper: Wooden remains *in situ* from SD501 (from Northeast)
Middle: Wooden roof section, beam and carrier *in situ* from SD501 (from West)
Lower: Same as above (from South)
9. Nara Period features (4)
Upper: Cross section of SD501 south wall (from Northwest)
Middle: Cross section of SD501 (from South)
Lower: Cross section of SD502 (from East)
10. Nara Period features (5)
Upper: Discovery of SK504 (from Southeast)
Middle: Remains *in situ* from SK504 (from Southeast)
11. Nara Period features (6)
Upper: SE505 *in situ* (from West)
Middle: Same as above (from West)
Lower: Same as above (from East)
12. Nara Period features (7)
Upper: Discovery of SE507 (from North)
Lower: Structure of SE507 (from North)
13. Nara Period features (8)
Upper: Structure of SE507 (from Northwest)
Lower: Internal structure of SE507 (from North)
14. Heian Period features
Upper: Natural features on Stratum 5 (from Southeast)
Middle: Ornamental roof-tiles and others *in situ* from Stratum 5 (from Southeast)
Lower: Pit cluster in Northwest of Sector A (from South)
15. Medieval Period features
Upper: Discovery of agricultural features on Stratum 3 (from Southwest)
Middle: SD307-10, associated with terraced fields
Lower: SK305 *in situ* (from Southeast)
16. Sector B features (1)
Upper: Overview (from East)
Middle: Western section (from East)
Lower: Modern water reservoir (from Southeast)
17. Sector B features (2)
Upper: SE606, fill section of well pit (from Southeast)
Middle: SE606 (from Southeast)
Lower: Section of SE606 (from Southeast)
18. Sector C features (1)
Upper: Overview (from West)
Middle: Same as above (from North)
Lower: West wall section (from Northeast)
19. Sector C features (2)

- Upper: Section of modern pits for clay
 Middle: SD510 *in situ* (from Northeast)
 Lower: Section of SD510 (from Southwest)
20. Kofun Period pottery from SX702
 21. Kofun Period pottery from SK704, Stratum 7 and 6
 22. Kofun Period pottery, Yayoi Period stone arrowhead and other stone artefacts from stratum 7-5
 23. Pottery from SD601
 24. Asuka Period pottery from SD602 and 604
 25. Asuka Period pottery and net sinkers from SK605 and SE606
 26. Nara Period pottery from SD501
 27. Same as above
 28. Same as above
 29. Same as above
 30. Same as above
 31. Nara Period pottery from SK504
 32. Same as above
 33. Final Nara to Initial Heian Period pottery from SE507 (1)
 34. Same as above (2)
 35. Same as above (3)
 36. Same as above (4)
 37. Nara and Heian Period ink preparation vessel and glazed ware from Stratum 5, 4b and 3
 38. Asuka to Heian Period remains from SD503, SK504, SX508 and Stratum 4b
 39. Ink inscriptions from SD603, 501, SK504, SE507 and Stratum 5
 40. Same as above from SD603, 604, 501, SE507 and Stratum 5
 41. Same as above from SD603, 501, 502, 503, SE507 and Stratum 5
 42. Round eaves-tiles 5 and 4
 43. Round and flat eaves-tiles
 44. Round and flat roof-tiles
 45. Ornamental roof-tiles
 46. Wooden tablets from SE606 and SD501
 47. Same as above from SD501
 48. Asuka and Nara Period wooden artefacts from SD603, SE606, SD501, 502, SK506 and SE507
 49. Same as above from SD603, SD502 and SE507
 50. Same as above from SD501
 51. Wado-kaichin connected by sprue from SD501
 52. Wado-kaichin from SD501, SD502, Stratum 5 and 4b
 53. Wado-kaichin and other coins from SD603?, SD501, SE507, Stratum 5 and 4b
 54. Belt fittings from SD501 and Stratum 4b
 55. Metal tools and others from SD501, SE507, and Stratum 3
 56. Same as above from SD501 and Stratum 4b
 57. Scrap metal and others from SD501
 58. Faunal remains from SE505
 59. Pollen and parasite eggs
 60. Seeds

List of figures

- Fig. 1 Site location
 Fig. 2 Location of trial pits and excavation sectors
 Fig. 3 Press cuttings
 Fig. 4 Location of the site
 Fig. 5 Adjacent ancient sites
 Fig. 6 Old place names
 Fig. 7 Site stratigraphy
 Fig. 8 Section of Sector A south wall
 Fig. 9 Section of north wall and valley
 Fig. 10 Main ancient features of Sector A
 Fig. 11 Yayoi Period stone arrowhead
 Fig. 12 Kofun Period and earlier features plan
 Fig. 13 SX702 plan
 Fig. 14 Pottery from SX702 (1)
 Fig. 15 Same as above (2)
 Fig. 16 Pottery from SK704 and other features
 Fig. 17 Pottery from Stratum 7
 Fig. 18 Pottery from Stratum 6
 Fig. 19 Kofun Period stone artefacts
 Fig. 20 Transition of Asuka Period features
 Fig. 21 Pottery and a net sinker from SD601, 602 and 603
 Fig. 22 Wooden artefacts and coin from SD601 and 603
 Fig. 23 Pottery, a net sinker and octopus traps from SD604
 Fig. 24 SK605 plan
 Fig. 25 Pottery, a net sinker and an octopus trap from SK605
 Fig. 26 SE606 plan
 Fig. 27 Pottery from SE606
 Fig. 28 Wooden artefacts from SE606
 Fig. 29 Wooden writing tablet from SE606
 Fig. 30 Post holes in the north-eastern section of Sector A
 Fig. 31 Pottery from post-holes
 Fig. 32 Plan of Sector A Nara Period features
 Fig. 33 Cross section of the Asuka to Nara Period ditches
 Fig. 34 Distribution of artefacts from SD501
 Fig. 35 Pottery from SD501 (1)
 Fig. 36 Same as above (2)

- Fig. 37 Wado-kaichin branch from SD501
 Fig. 38 Rubbings of Wado-kaichin branch
 Fig. 39 Rubbings of coins from SD501
 Fig. 40 Same as above from SD501 and 502
 Fig. 41 Belt fittings from SD501
 Fig. 42 Bronze and other artefacts from SD501
 Fig. 43 Iron artefacts from SD501
 Fig. 44 Wooden writing tablet from SD501 (1)
 Fig. 45 Same as above (2)
 Fig. 46 Wooden carrier, roof section and beam from SD501
 Fig. 47 Wooden string winders from SD501
 Fig. 48 Wooden artefacts from SD501 and 502
 Fig. 49 SK504 plan
 Fig. 50 Pottery from SK504
 Fig. 51 SE505 plan
 Fig. 52 Pottery from SE505
 Fig. 53 SE507 plan
 Fig. 54 SE507 well structure B
 Fig. 55 Pottery from SE507 (1)
 Fig. 56 Same as above (2)
 Fig. 57 Combs, ritual tablets and rods from SE507 and SK506
 Fig. 58 Iron arrowhead and coin from SE507
 Fig. 59 SX508 plan
 Fig. 60 Pottery from SX508
 Fig. 61 Pottery and other features from SX508
 Fig. 62 Plan of Stratum 5 natural features
 Fig. 63 Remains from Stratum 5, 4b and 3
 Fig. 64 Metal artefacts from stratum 5, 4b and 3
 Fig. 65 Plan of Stratum 4b features
 Fig. 66 SK401 plan
 Fig. 67 Medieval features discovered under the base
 of Stratum 3
 Fig. 68 Classification of pottery bearing inked inscriptions by date and letters
 Fig. 69 Pottery bearing inked inscriptions from Final Asuka Period features
 Fig. 70 Pottery bearing inked inscriptions from SD501
 Fig. 71 Same as above from SD501 and 502
 Fig. 72 Same as above from SE507 (1)
 Fig. 73 Pottery bearing inscribed and inked inscriptions from SE507
 Fig. 74 Pottery bearing inked inscriptions from SE507 (2)
 Fig. 75 Pottery bearing inked inscriptions from Nara Period features and Stratum 5
 Fig. 76 Round eaves-tile
 Fig. 77 Flat eaves-tile
 Fig. 78 Round and flat roof-tiles
 Fig. 79 Flat roof-tiles and other roof-tiles
 Fig. 80 Ornamental roof-tiles
 Fig. 81 Floor-tiles
 Fig. 82 Tile chronology
 Fig. 83 Salt production vessels
 Fig. 84 Results of pollen analysis (1)
 Fig. 85 Same as above (2)
 Fig. 86 Results of seed analysis (1)
 Fig. 87 Same as above (2)
 Fig. 88 Results of parasite eggs analysis
 Fig. 89 Results of dendrochronological analysis
 Fig. 90 Analysis spot of the Wado-kaichin branch
 Fig. 91 Fluctuating intensity of site use reconstructed from the number of remains

List of tables

- Tab. 1 List of public exhibition
 Tab. 2 Chronological table related to the Saikudani remains
 Tab. 3 List of metal artefacts and associated metal production material from SD501
 Tab. 4 Coin list
 Tab. 5 Table of the measurements of metal belt fittings from SD501
 Tab. 6 List of pottery bearing inscribed and inked inscriptions
 Tab. 7 Eaves-tile measuring table
 Tab. 8 List of the number of salt production vessel
 Tab. 9 List of frog bones
 Tab. 10 Coin characteristics
 Tab. 11 Results of the fluorescent X-ray analysis of coins

List of photographs

- Photo. 1 Excavation overview
 Photo. 2 Open day
 Photo. 3 Additional investigation areas of Sector A
 Photo. 4 Sector A south wall
 Photo. 5 SK704 *in situ*
 Photo. 6 SK608 *in situ*
 Photo. 7 Remains from SD501 *in situ*
 Photo. 8 Wooden artefacts from SK506 *in situ*
 Photo. 9 SK401 *in situ*
 Photo. 10 X-ray photograph of Wado-kaichin indicating lead maldistribution

ENGLISH SUMMARY

The discovery of the site

The Saikudani site is located in the Saikudani district of Tennoji Ward, central Osaka City (Fig. 1). The site was discovered during a trial excavation prior to road construction in May 1996. The initial investigation was conducted between mid-October 1996 and March 1997, covering an area of 916 square metres. A secondary excavation was undertaken from May to September 1997 and covered 1,181 square metres. The excavation area was divided into Sectors A, B and C; Sector A containing the largest amount of ancient features (Figs. 7 and 10).

Historical and environmental settings

The Saikudani (lit. saiku: craft work, dani: valley) site is situated on the eastern slope of the Uemachi Terrace due west of the Kawachi Plain, which stretches from the site to the Ikoma Mountains (Figs. 1 and 6). Small-scale excavations were conducted in several locations around the site and revealed features and remains of the Kofun, Asuka and Nara Periods. Important archaeological and historical features contemporary with the Saikudani remains surround the site (Fig. 5). To the immediate west lies Suzaku-Ooji, the main street of the Naniwa Capital (645-67 and 744-5), the Naniwa Palace itself is only 1.8 km to the north. Also Shitenno-ji Temple (early 7th century to the present) is 1 km to the southwest and the Dogashiba Temple (late 7th-12th century?) is only 400 m to the southeast. As excavations continued, the remains of a small stream channel leading to a more substantial valley were uncovered from the centre of the site. This valley is believed to be the original Saikudani, from which this district derives its name. The stream had been obscured by a 3-4 m accumulation of earth and sand (Figs. 7-9). Features indicative of rice paddies fields were discovered in stratum 2 dating to the Early-modern (1603-1868) Period. Also, ditches associated with terraced fields utilizing the slope were uncovered (Fig. 67 and Pl. 15) in stratum 3 dating to the Medieval Period (1185-1603).

Roof-tiles and pottery vessels were found after the excavation progressed into Heian Period stratum 4b (late 9th century). Numerous archaeological and geological features, including a drainage ditch, wells and refuse pits were found dating to the Asuka (593-710) and Nara (710-784) Periods (Fig. 10 and Pl. 1). The remains of a Mid-Nara Period drainage ditch SD501 were discovered traversing the centre of Sector A. The ditch was dug to flow from the north of the site into ancient Saikudani and is over 30 m in length, varying in width between 1.0 and 3.0 m and in depth between 0.6 and 1.0m (Figs. 32 and 34). From this ditch several mis-formed Wado-kaichin (one of the oldest coins in Japan, first cast in 708) still connected by the sprue was recovered (so-called 'Wado-kaichin Edazeni', lit. Edazeni: branch coins, Frontispiece, Fig. 37, Pls. 7 and 51).

This is the first discovery of such coins in the whole of Japan. In addition to these coins, 40 other individual Wado-kaichin, 3 buckles, 17 belt ornaments, 3 wooden writing tablets, an earring, a spoon and almost one hundred 25-litre containers of roof-tile and pottery fragments were recovered from the ditch (Figs. 35-48, Tab. 3, Pls. 7-9, 26-30 and 39-57). Also, pieces of scrap copper sheeting, an iron axe head and blacksmith tongs were recovered (Figs. 42 and 43, Pls. 55-57). The appearance of the tools and scrap metal may indicate the existence of a metal workshop in the vicinity of the site.

The discovery of the unknown 'Kudara Nunnery'

A final Nara Period well SE507 was discovered in the south of Sector A (Fig. 53, Pls.12 and 13). The well was constructed of thick, 1.2 m long boards and was approximately 3 metres deep. In total, 23 intact pottery vessels were recovered from where they had been thrown at the bottom of the well (Figs. 55 and 56, Colour Pl. 2, Pls. 33-36). It is believed that they were used as part of a well pacification ceremony. Of these vessels, many had inscriptions written in Indian ink. '百濟尼 Kudara Nun', '百尼 Hyaku Nun' (believed to be an abbreviation of 'Kudara Nunnery'). '百 Hyaku' is the first character of '百濟 Kudara') and '尼寺 Nunnery' was found written on these vessels. The Chinese characters '百濟' are read as 'Kudara' in Japan, but as 'Pekche' in Korea. The Japanese reading can be dated to the Heian Period at least. A wooden tablet recovered from an Asuka Period well SE606 located in Sector B contained the name of one nun's father (Fig. 29 and Pl. 46). Such tablets were used to identify an possessor's social position and enabled it enter a nunnery. The large number of roof tiles located at the site had suggested the existence of a temple (Figs. 76-81, Pls. 42-45). From the written evidence recovered from this area, the collection of features could arguably be referred to as the Kudara Nunnery. A study of the roof tiles and pottery associated with the features suggests that the Nunnery was established in the latter half of the Asuka Period. The number of artefacts decreases rapidly after the latter half of the 9th Century and it has been presumed that it was abandoned or downsized about that time (Fig. 91).

The study of ancient documents has long suggested that the nearby Dogashiba Temple was originally the Naniwa Kudara Temple. The discovery of the remains at the Saikudani site appears to support this theory. It is becoming apparent that the two structures, Kudara Temple and the Kudara Nunnery were built together in this area. It is possible that the nobility and other refugees from Kudara settled this area after it was invaded and conquered in AD 663. The Kudara Nunnery and Kudara Temple are thought to be the family temple of the Kudara-ou-shi (lit. Kudara King Clan). Based on studies of the ancient geographical features of the district, it is highly probable that the Nunnery and metal workshop were situated to the north of the investigation area. From the investigation of the Saikudani remains, the arrangement of the four main Nara Period structures of this district, the Kudara Nunnery, Kudara Temple, Shitenno-ji Temple and the presumed Settsu Kokubun-ji Temple, could be restored.

The mystery of the Saikudani remains

The investigation of the Saikudani remains has lead to two major discoveries, the Wado-kaichin with sprue and the presumed 'Kudara Nunnery'. Several interpretations of the Saikudani remains have been proposed to interpret how these two might relate. One interpretation is that there was a mint to the north of the investigation area. Though this facility and the Nunnery may have been independent, it is possible that the Kudara-ou-shi had been granted the authority to produce coins due to the influence and prestige they possessed at that time (Chapter IV-4), the other items may have been taken to the site as scrap metal. A point against this idea is that the production of coins was strictly supervised by a special government office and that there is no record of a mint at the Naniwa Capital. Another possibility is that the coins were minted illegally. The Shoku-Nihongi (second earliest Chronicles of Japan, compiled AD 797) details laws forbidding the production of imitation coins, suggesting that such a practice was in vogue. In this case, however, it is unlikely given the site is located at the very centre of the Capital. Another interpretation suggests that the coins may merely

have been one of several types of scrap metal used to create temple goods, bells for example. The production and use of Wado-kaichin ceased after AD 760. If the coins had been thrown into the ditch after that year, this interpretation would gain more support.

Whatever the most accurate interpretation may be, the Kudara-ou-shi was likely aware and deeply involved with the process.

With only the preliminary stages of the investigation completed the above hypothesis and others are all possible. Further excavation of Saikudani, especially in the area immediately north of the previous investigation area, will enable us to clarify the role and structure of the Nunnery and Workshop. Even at this point, however, the investigation of Saikudani has yielded important results with exciting possibilities. The unknown Kudara Nunnery has been rediscovered, the activities of the Kudara-ou-shi have been clarified, and further insights into the layout of the Naniwa Capital have been gained. In addition, important information on the origins of the ancient Japanese monetary system has been found.

報 告 書 抄 錄

ふりがな	さいくだにいせきはつくつちょうさほうこく1							
書名	細工谷遺跡発掘調査報告I							
副書名	都市計画道路難波片江線建設工事に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	岡村勝行・八木久栄・久保和士・高橋工・伊藤幸司・古市晃・小野友記子・金原正子 村上隆・光谷拓実・Robert Condon							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-6833							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さいくだに 細工谷遺跡	おおさかしんのうじく 大阪市天王寺区 さいくだに 細工谷1丁目	27109	—	34° 39' 30"	135° 31' 30"	SD96-1次 19961018~19970331 SD97-1次 19970516~19970930	2,097m ²	都市計画道路 難波片江線建 設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		
細工谷遺跡	弥生時代	なし	石鏃・弥生土器					
	集落	古墳時代	水溜・溝・土壙			勾玉・紡錘車・土師器・須恵器		
	寺院	飛鳥時代	溝・井戸・土壙・柱穴			富本錢・木簡・瓦・墨書土器		
	寺院	奈良時代	溝・井戸・土壙・柱穴			和同開珎の枝錢・和同開珎・万年通宝・ 神功開宝・帶金具・木簡・斎串・瓦・墨書土器		
	寺院	平安時代	土壙・建物			隆平永宝・瓦・墨書土器・黒色土器		
	田畠	鎌倉時代	溝			瓦器		

原色図版



東から

原色図版二 井戸鎮めに用いられた土器



奈良時代末葉～平安時代初頭SE507出土



奈良時代SD501・SE507ほか出土

図 版





SD1001・701
(南から)



SD701埋土断面
(南から)



SD701(北から)

第7層上面検出の甕
(南から)



SX702(南から)



同上(南から)





SD601・602・603
(北から)

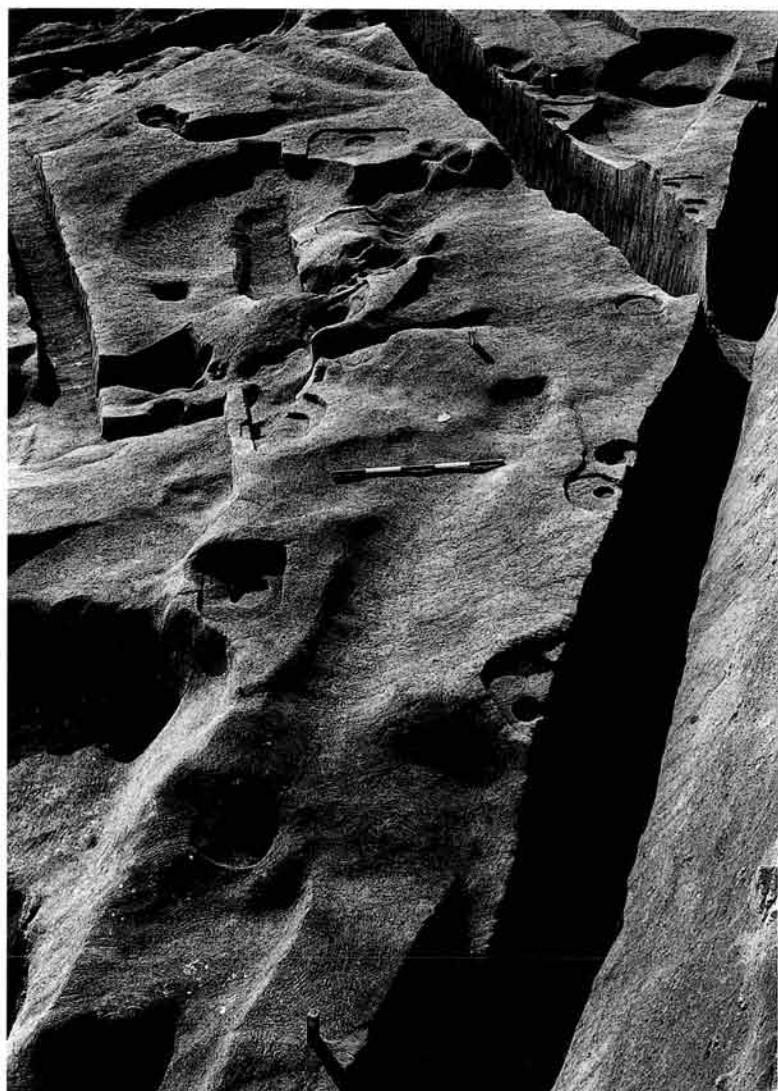


SD601遺物出土状況
(南西から)



SK605埋土断面
(南西から)

A区北東部柱穴群(東から)



左上: SP609(西から)、右上: SP635(南から)、左下: SP636(南から)、右下: SP640(北から)

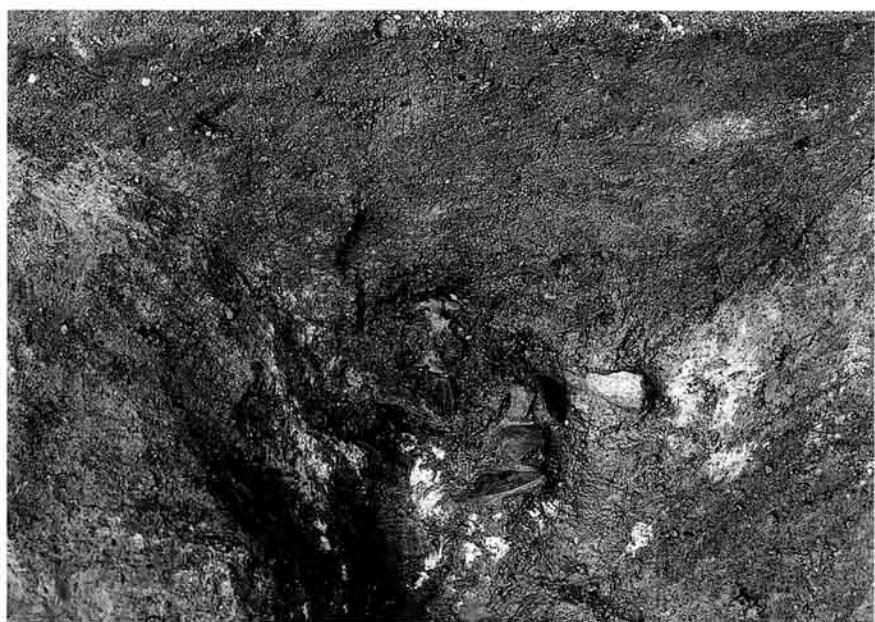


SD501ほか(南から)



同上(北から)

SD501枝銭出土状況
(南から)



SD501金鉗出土状況
(東から)



SD501木簡出土状況
(南から)





SD501木製遺物出土状況
(北東から)



SD501木製品出土状況
(西から)



同上
(南から)

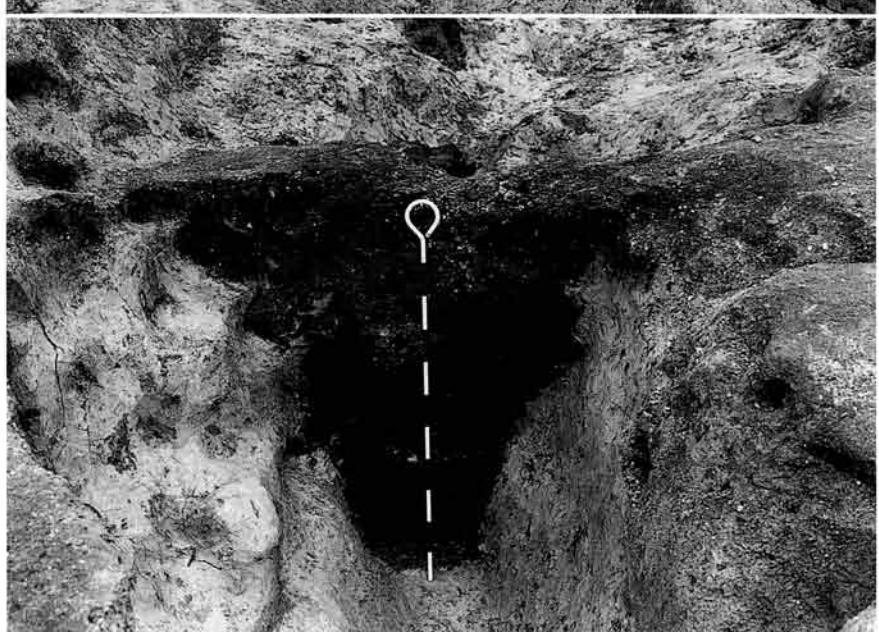
A区南壁断面(北西から)



SD501埋土断面
(南から)



SD502埋土断面
(東から)

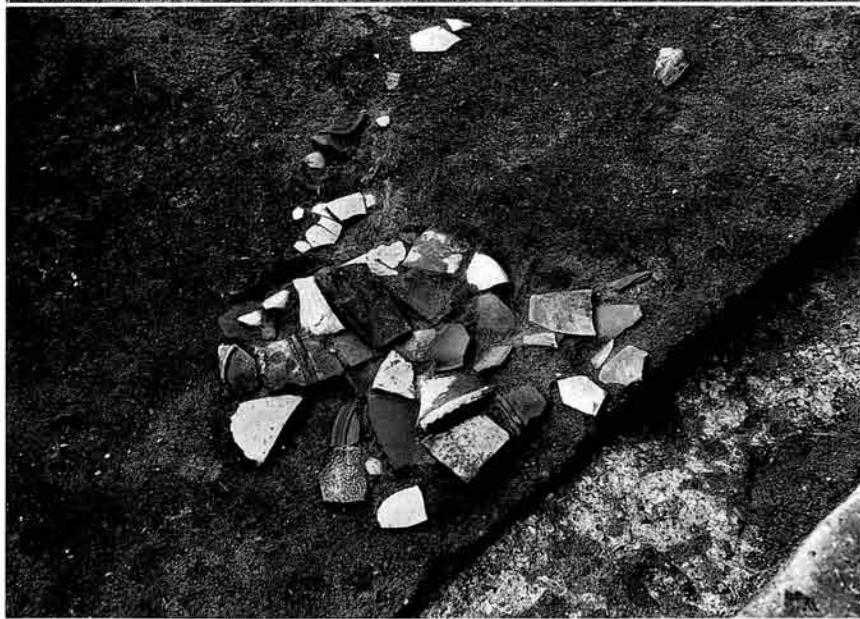




SK504検出状況
(南東から)



SK504遺物出土状況
(南東から)



SX508検出状況
(南東から)

SE505検出状況
(西から)



同上(西から)



同上細部(東から)





SE507検出状況(北から)



SE507井戸側(北から)

SE507井戸側(北西から)



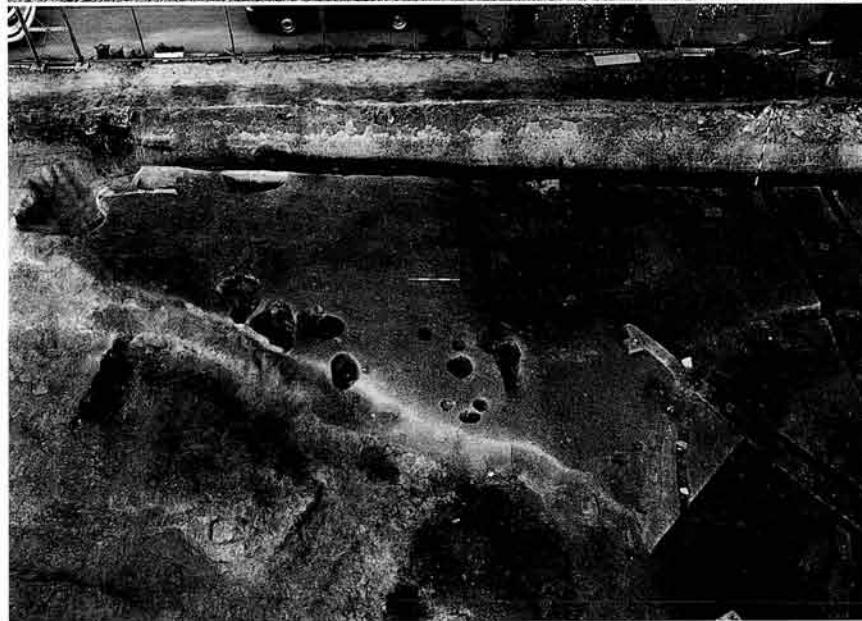
SE507内部(北から)



第4b層下面検出状況
(南東から)



第5層遺物出土状況
(南東から)



A区北西部土壙群
(南から)

第3層基底面検出状況
(南東から)



耕作溝SD307~310
(南西から)



SK305検出状況
(南東から)



全景(東から)



西部(東から)



近代溜池(南東から)



SE606裏込め
(南東から)



SE606掘形
(南東から)



SE606埋土
(南東から)





全景(西から)



同上(北から)



西壁断面(北東から)

図版一九 C区の遺構（二）

近代土取り穴断面
(南東から)



SD510(北東から)



SD510埋土断面
(南西から)





2



3



4

SX702出土土器



15



13



22



16



20



37

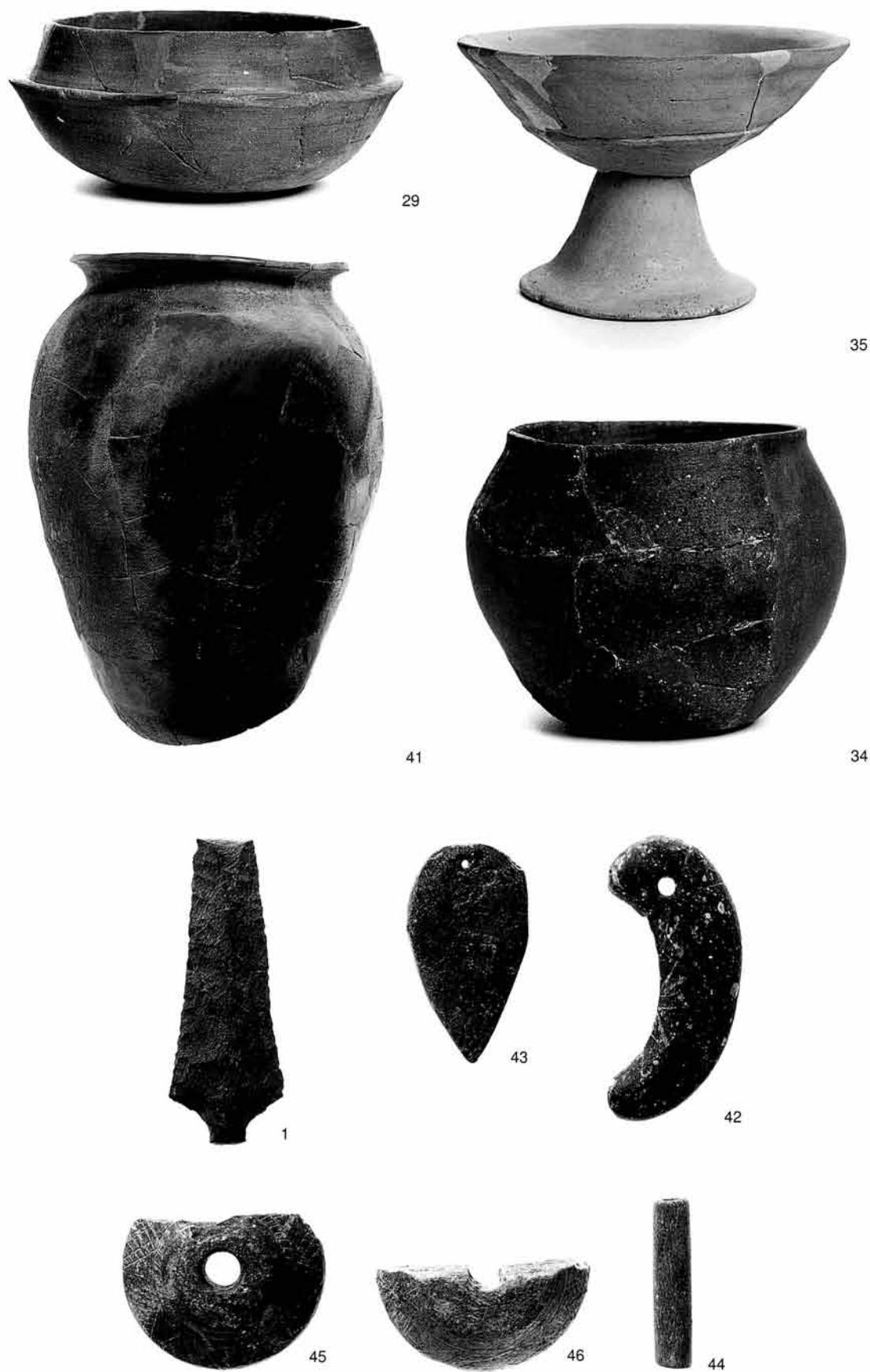


5



23

SK704(5)、第7層(13・15・16・20・22・23)、第6層(37)



第7層(1)、第6層(29・34・35・41)、第5層(42~46)

図版二三 飛鳥時代遺構出土の土器



50

58



51

59



52



53

54



60



57

SD601出土土器



73



94



70



72



85



63



85



67



92

SD602(63・67・70・72・73)、SD604(85・86・92・94)

図版二五
飛鳥時代の土器・土製品



103



105



103



105



111



110



106



107



114

SK605(103・105~107・110・111)、SE606(114)



SD501出土土器集合

図版二七 奈良時代の土器 (一)



117



120



117



120



119



118



119



121



122

SD501出土土器(1)



123



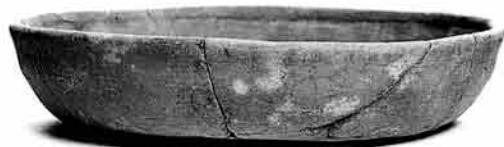
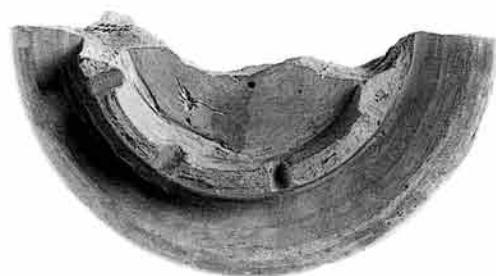
124



167



125



126



129



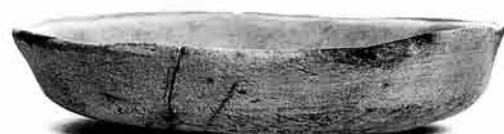
136



132



140



133

図版二九 奈良時代の土器（四）



143



149



144



150



145



151



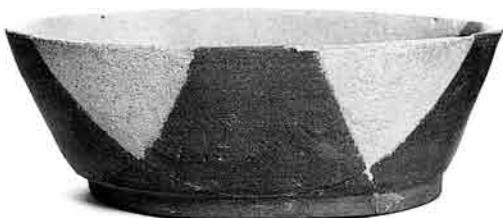
146



152



147



154



148



155



170



166



158



160



165



162



169



172



174



177



181



178



182



179



184



180



185



186



187



186



187



202



200



191



201



192



196



193



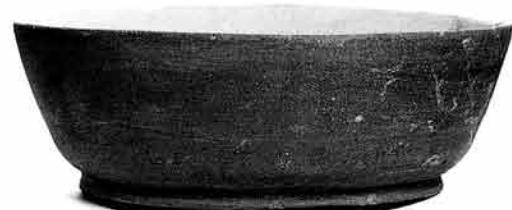
197



194



198



195



199

図版三三 奈良時代末葉～平安時代初頭の土器（一）



209



215



209



215



210



212



210



212

SE507出土土器(1)

図版三四 奈良時代末葉～平安時代初頭の土器（二）



214



213



214



217



220



223



219



216



219



216

図版三五 奈良時代末葉～平安時代初頭の土器（三）



SE507出土土器(3)

図版三六 奈良時代末葉～平安時代初頭の土器（四）



227



234



226



225



236

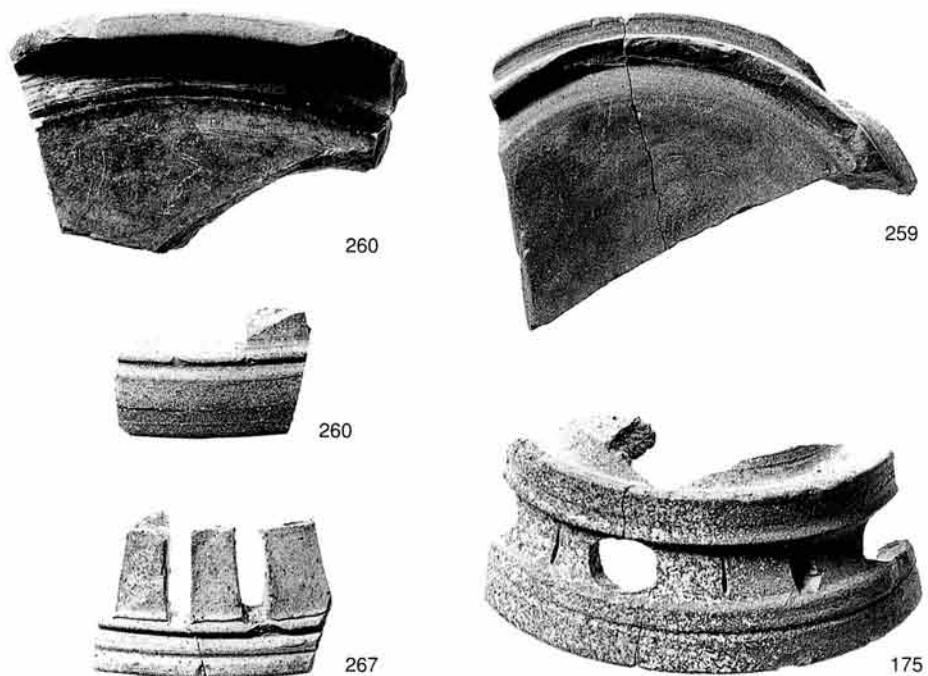


235

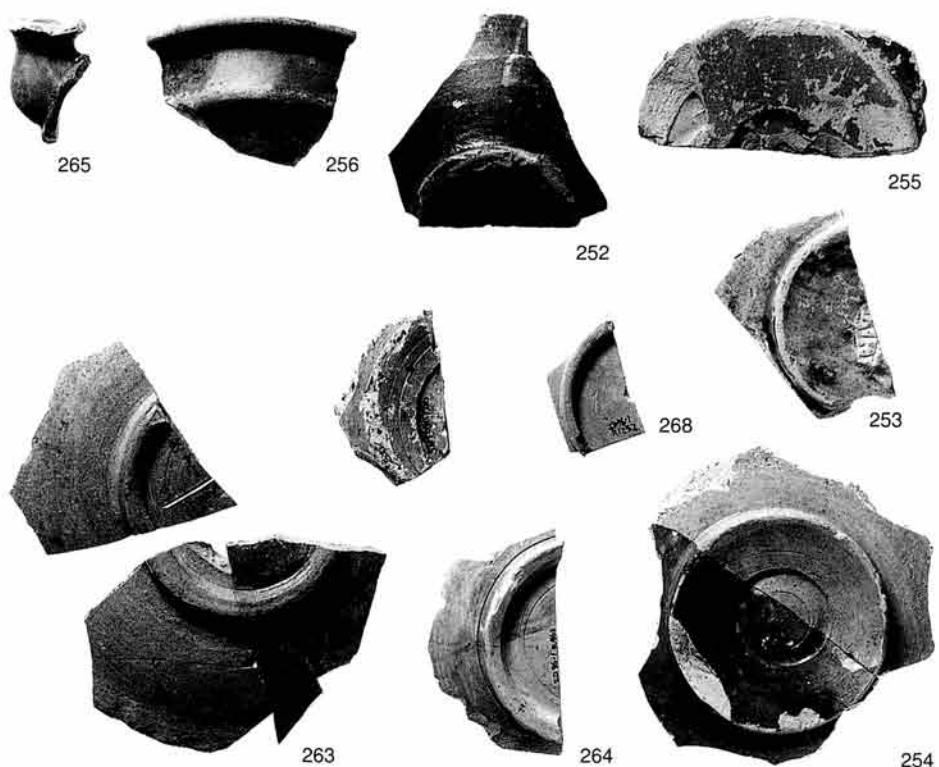


237

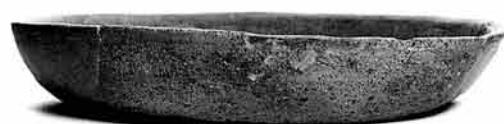
図版三七 奈良・平安時代の陶硯・施釉陶器



陶硯 (SD501:175、第5層:259・260、第4b層:267)



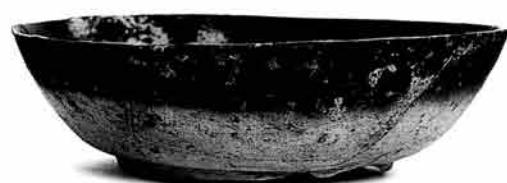
施釉陶器 (第5層:2 2~256、第4b層:263~265、第3層:268)



261



333



262



247



266



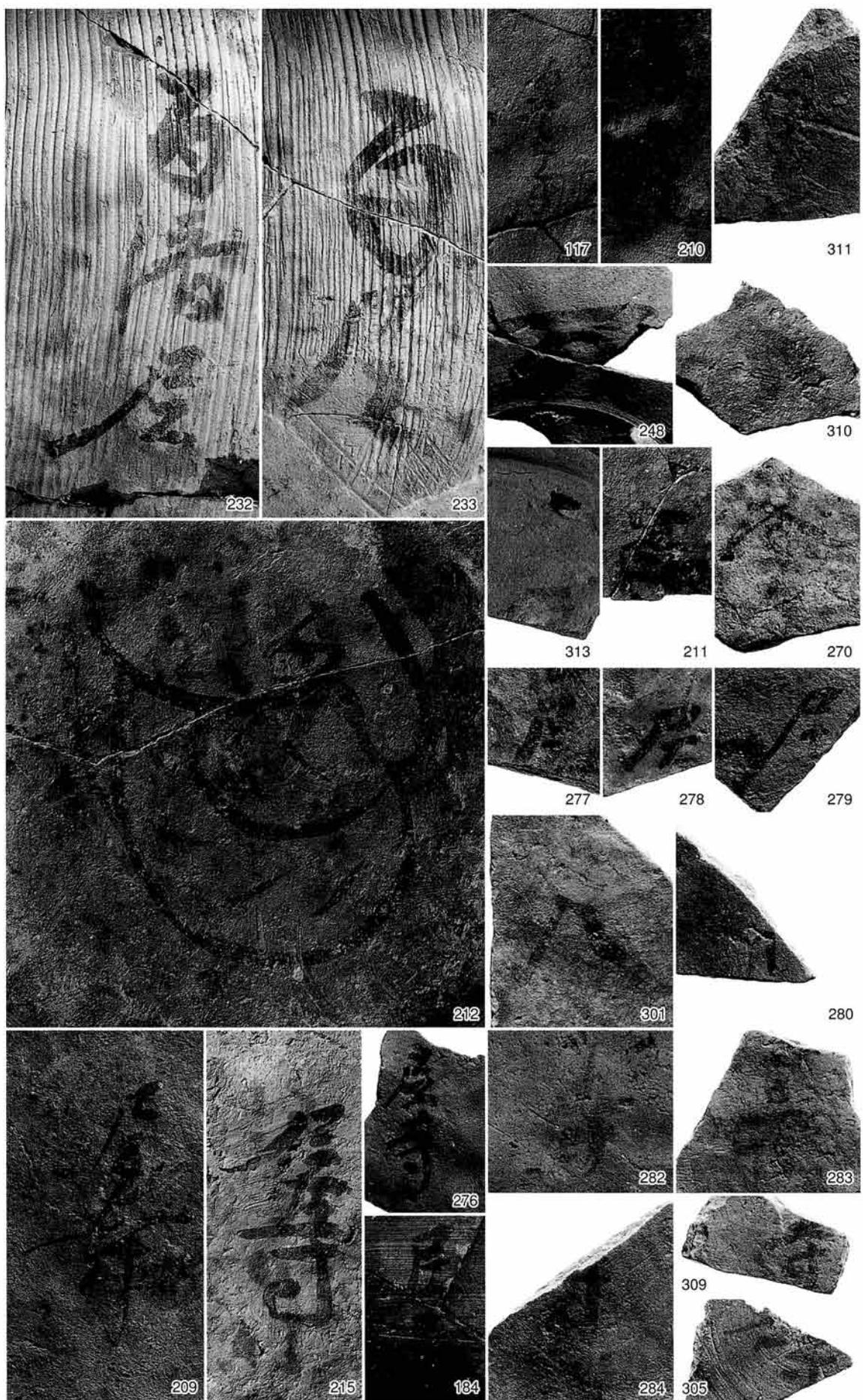
243



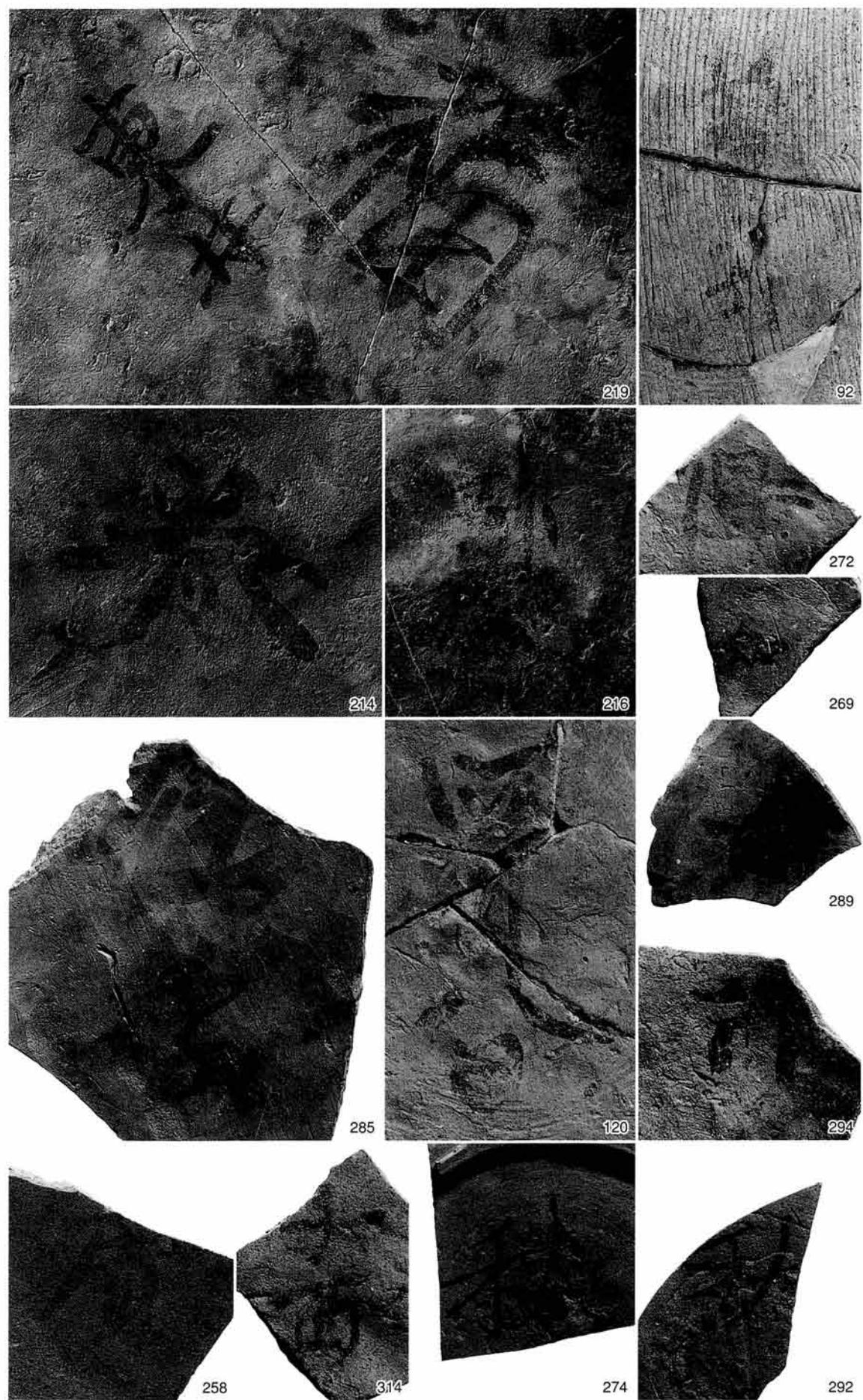
244

SD503(247)、SK504(333)、SX508(243・244)、第4b層(261・262・266)

図版三九 墓書土器（一）

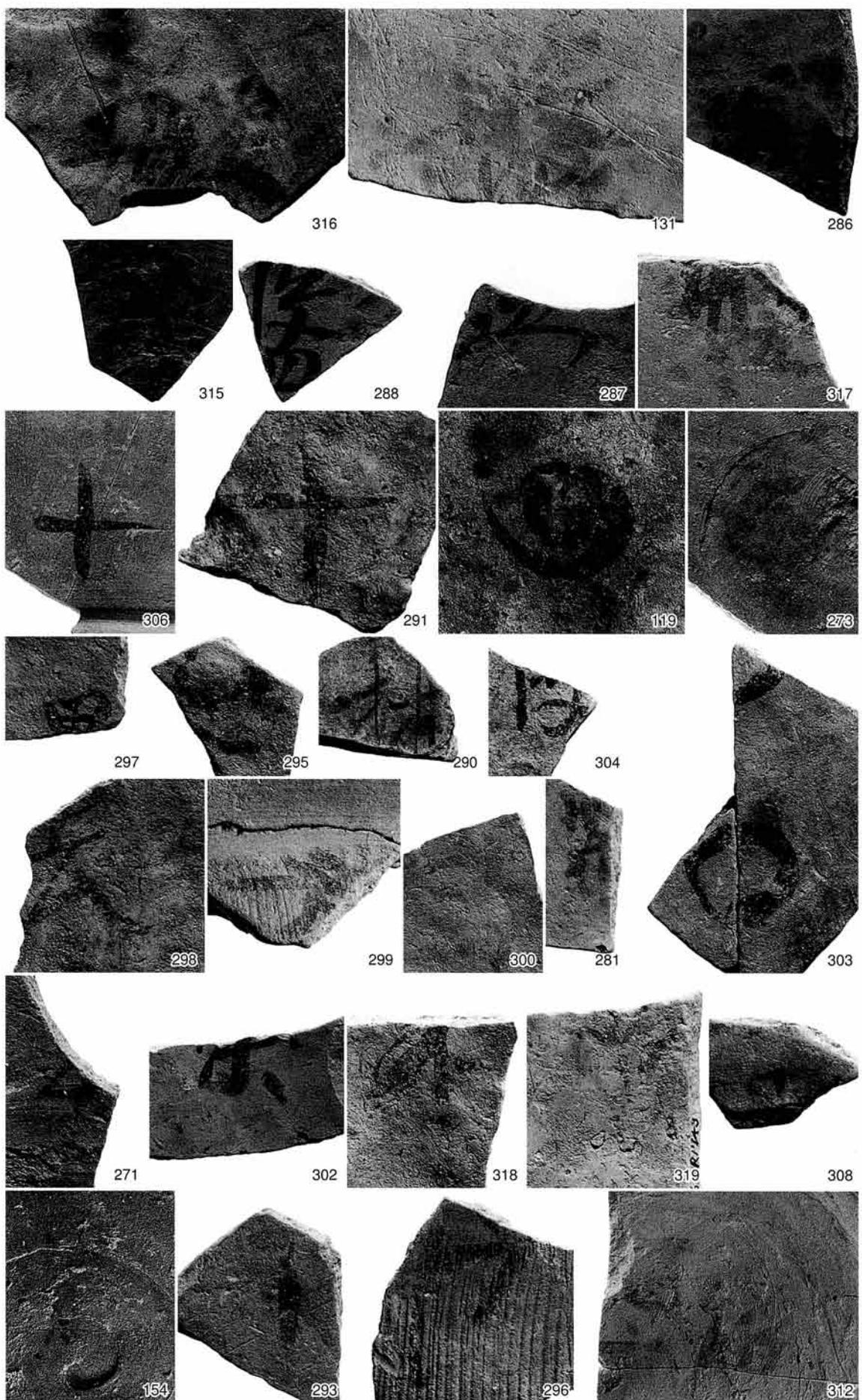


SD603(270)、SD501(117・276~280・282~284・301)、SK504(184)、SE505(309)、
SE507(209~212・215・232・233・305)、第5層(248・310・311・313)



SD603(272)、SD604(92・269)、SD501(120・274・285・289・292・294)、SE507(214・216・219)、第5層(258・314)

図版四
一 墓書土器
(三)



SD603(271)、SD501(119・131・154・273・281・286～288・290・291・293・295～300・302)、
SD502(303・304)、SD503(308)、SE507(306)、第5層(312・315～319)



401 (I A)



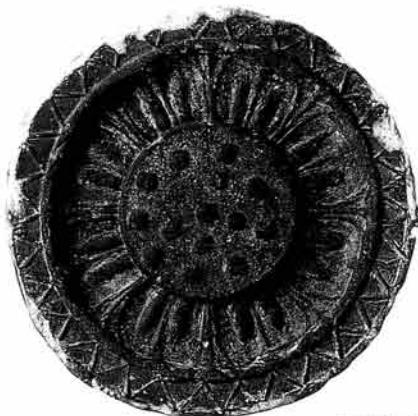
402 (II A)



403 (III A1)



404 (III A2)



405 (IV Aa)



406 (IV Ab)



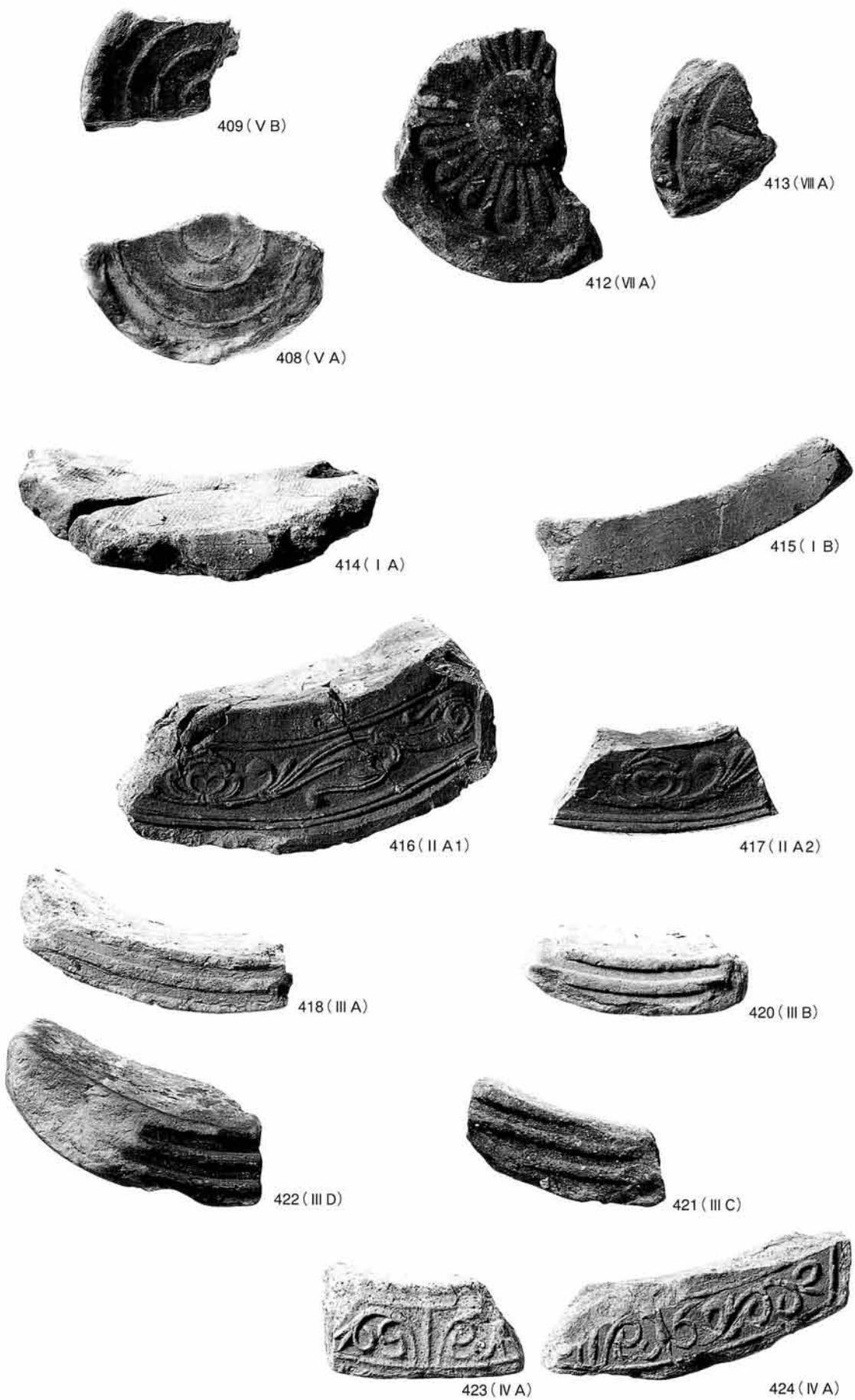
410 (VI Aa)



411 (VI Ab)

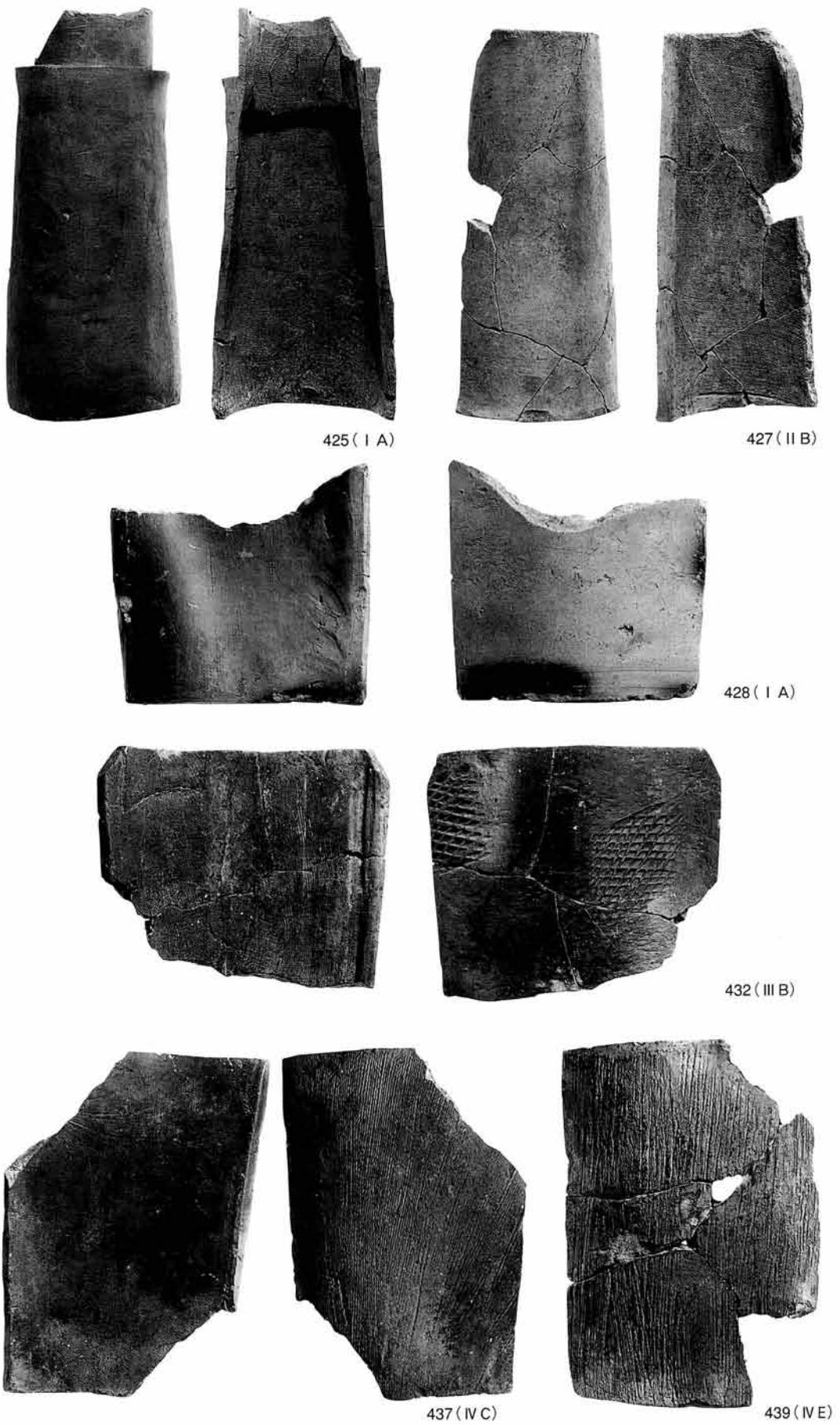
SD501(411)、SE507(405)、第5層(401・406・410)、第4層(402～404)

図版四三
軒丸瓦・軒平瓦



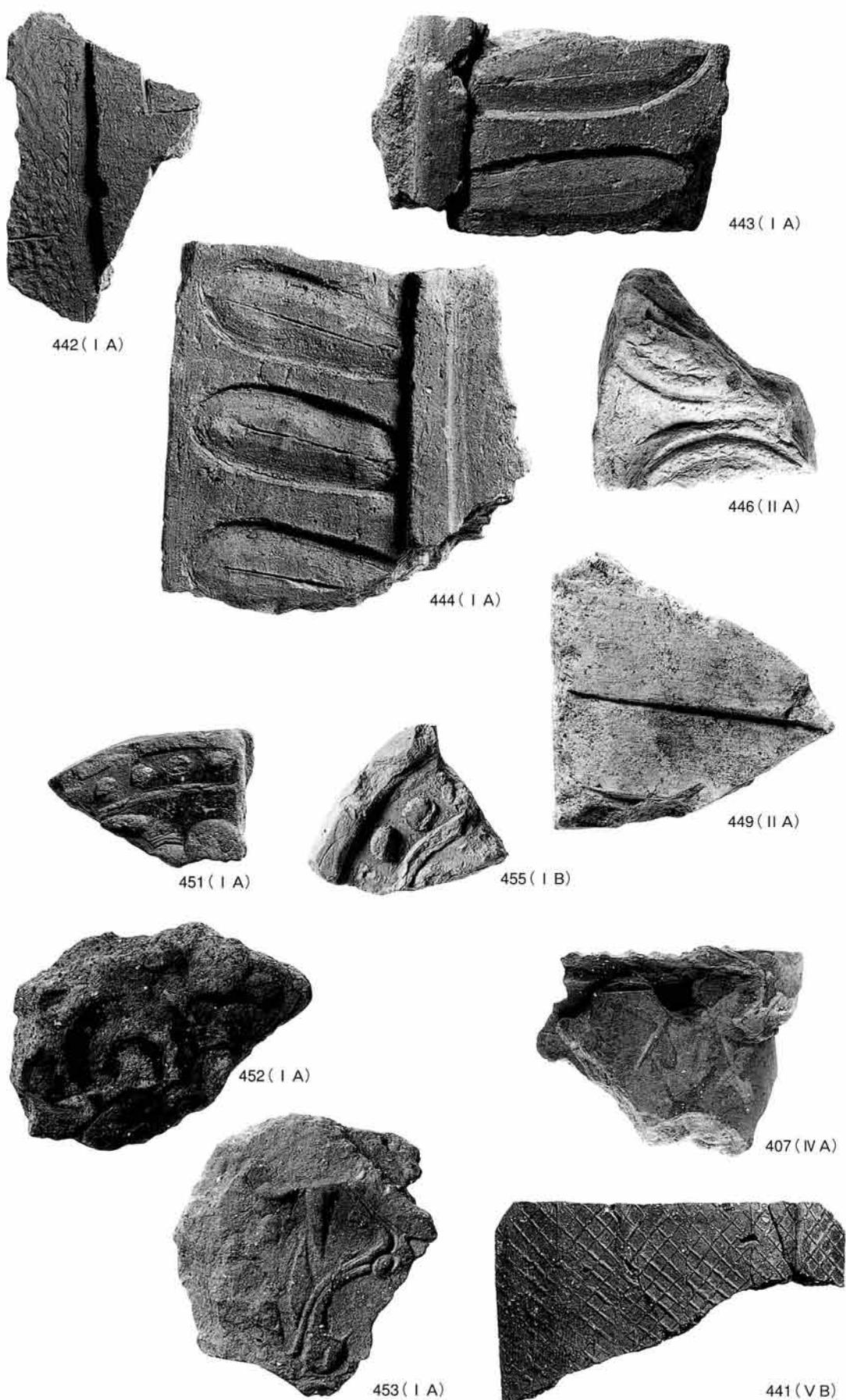
SD501(416・417)、SE507(409・422)、第5層(408・412~415・418・420・423・424)、第4層(421)

図版四四
丸瓦・平瓦



SD501(425・427・428)、SE505(437)、第5層(432・439)

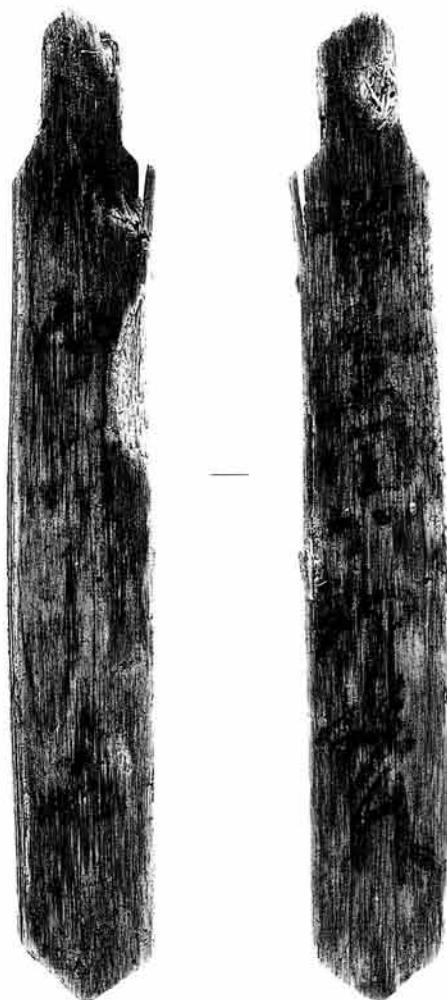
圖版四五
鴟尾・鬼瓦・製作技法



SD501(441・442)、第5層(407・443・444・451・453・455)、第4層(446・449・452)



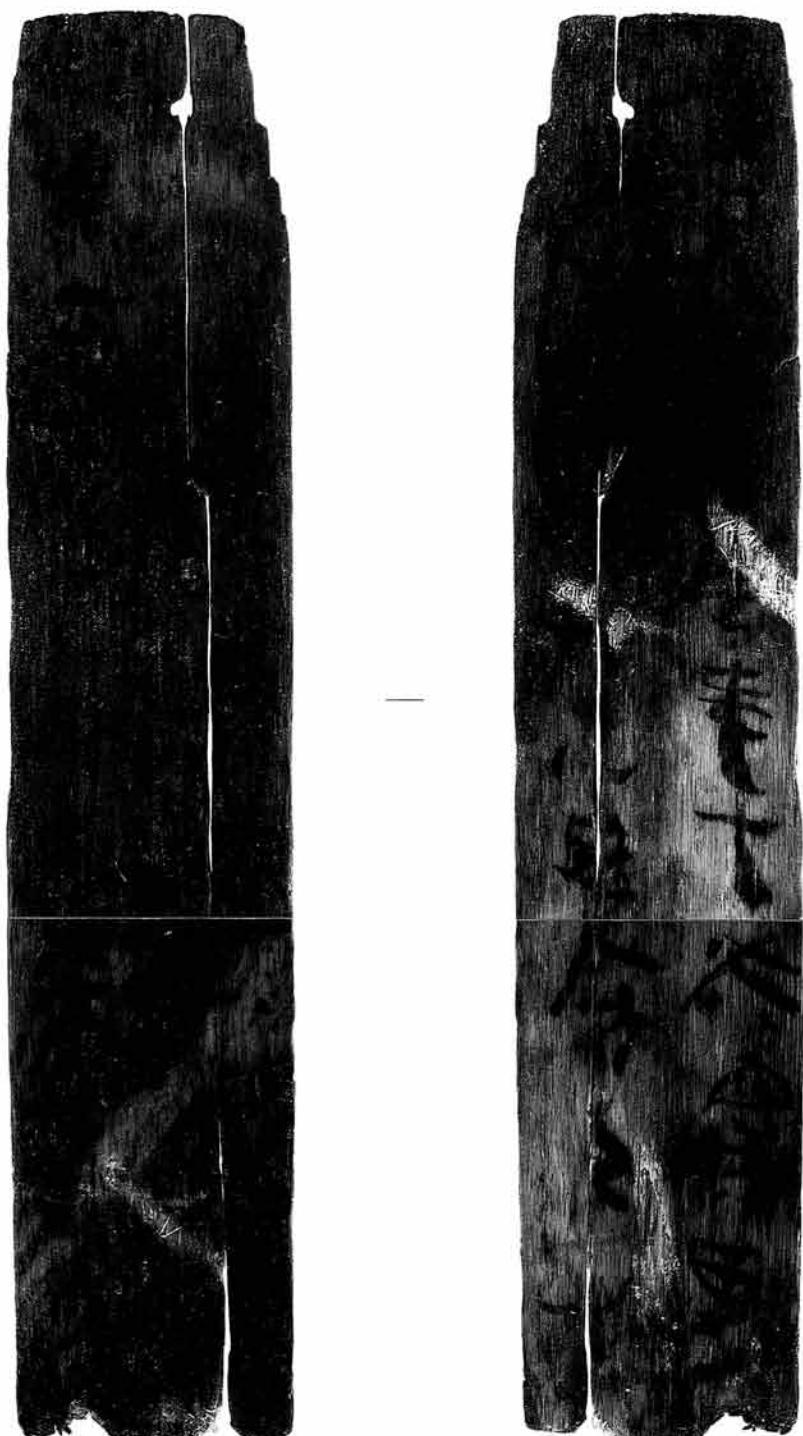
706

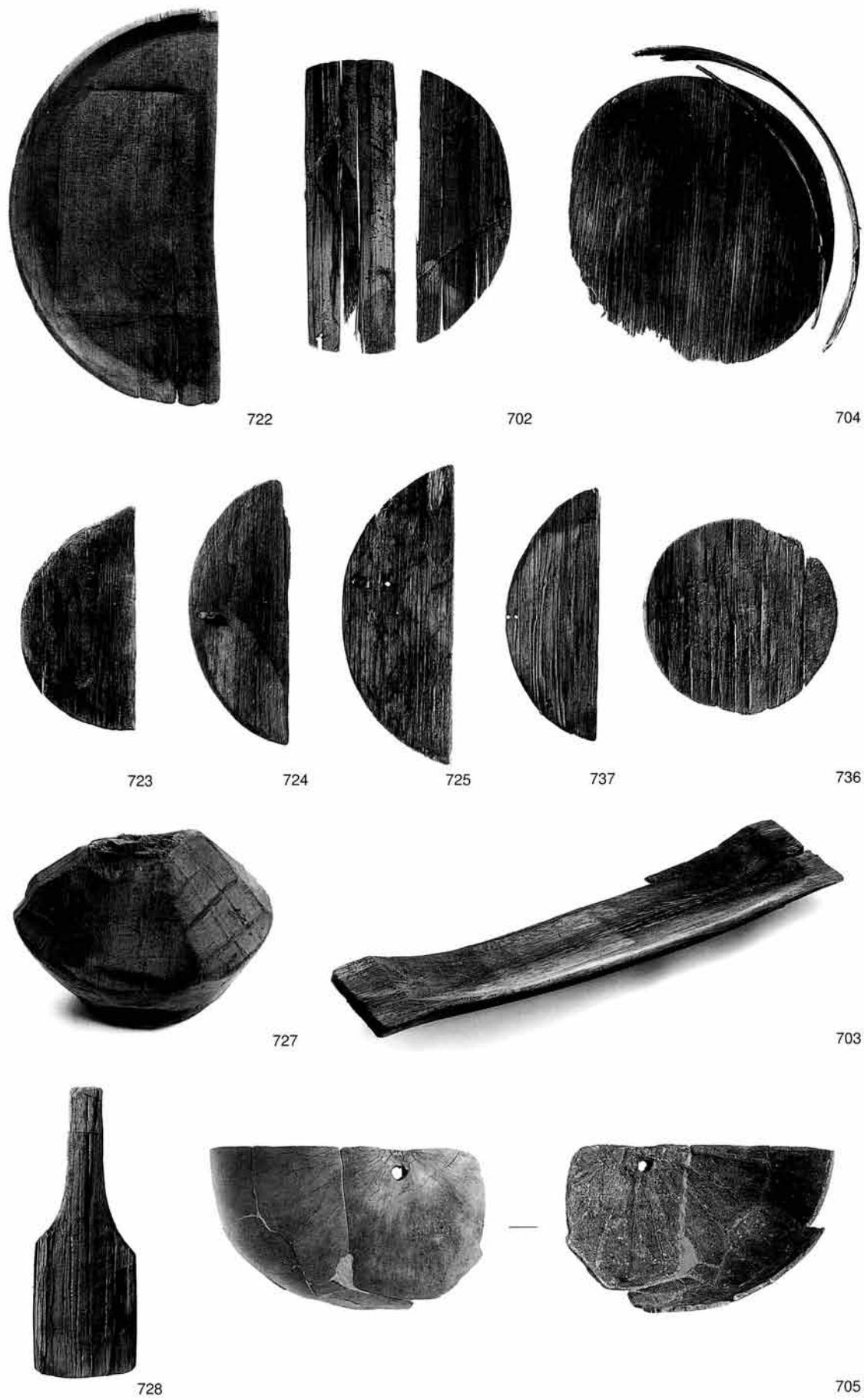


708

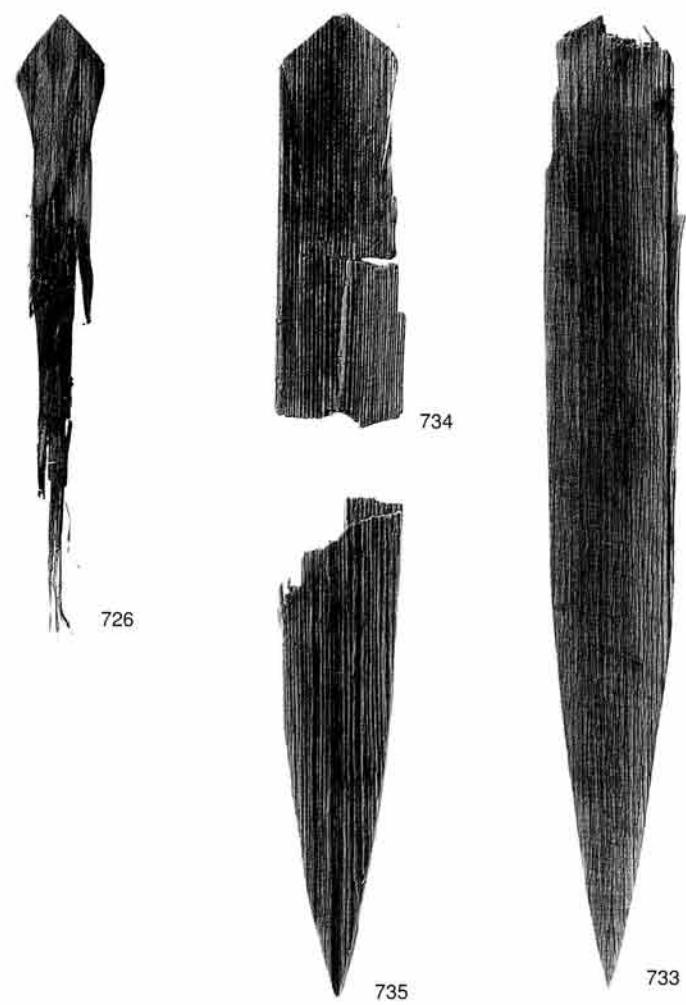


707

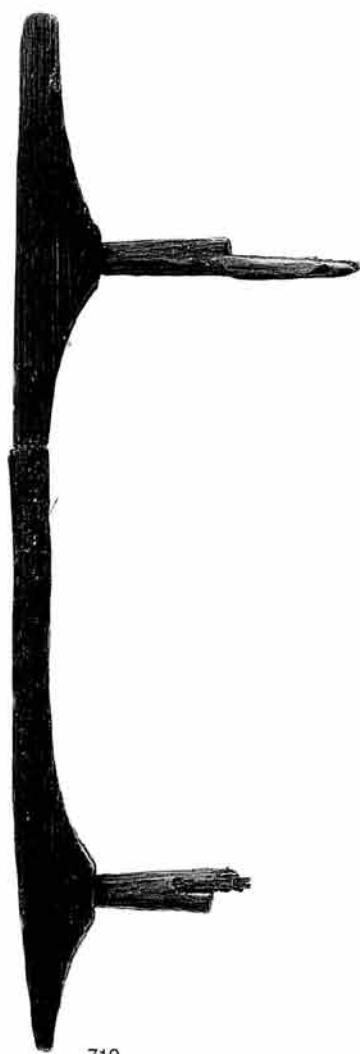




SD603(702・703)、SE606(704・705)、SD501(722・723・727・728)、SD502(724・725)、
SK506(737)、SE507(736)



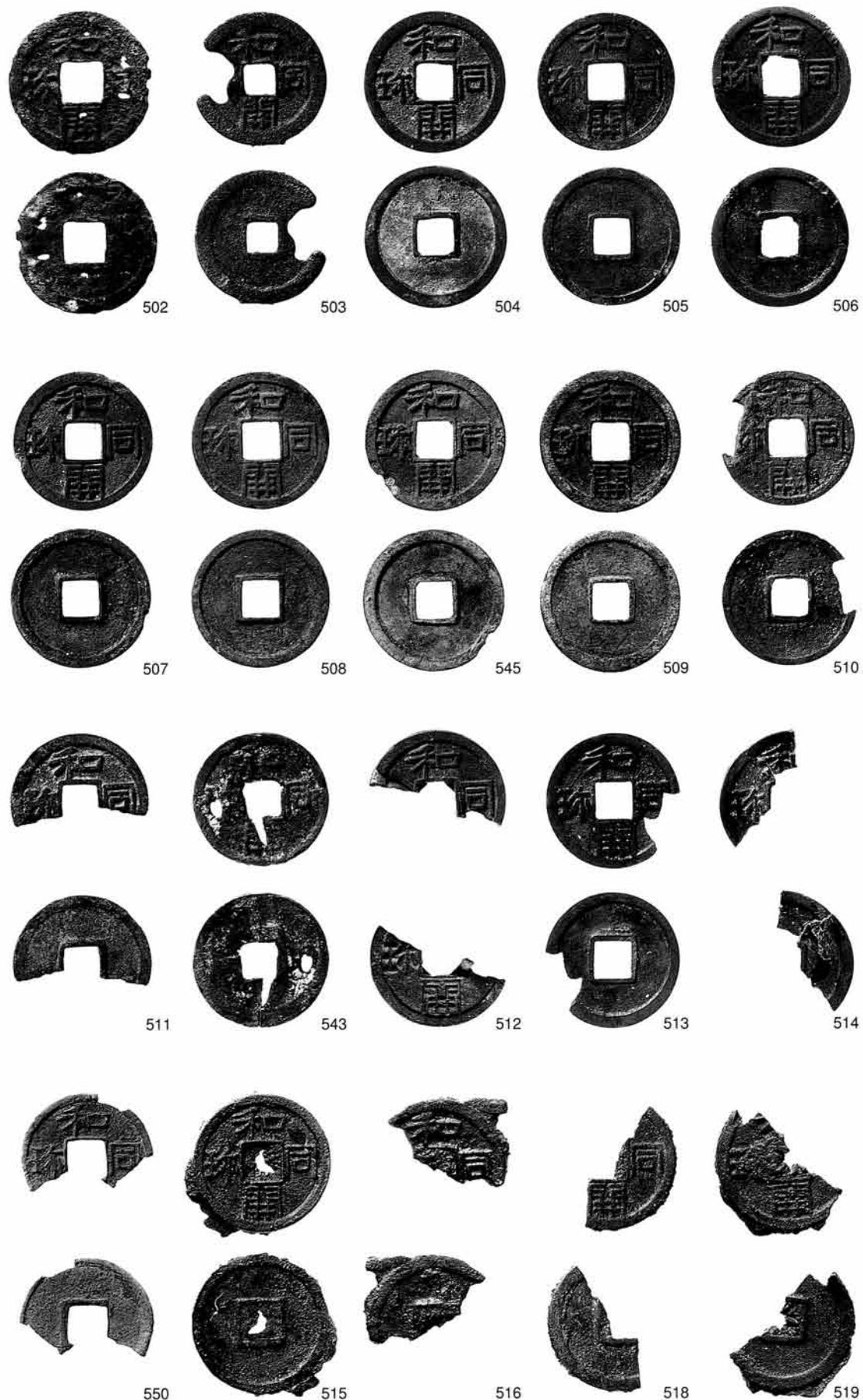
図版五〇 飛鳥・奈良時代の木製品（三）



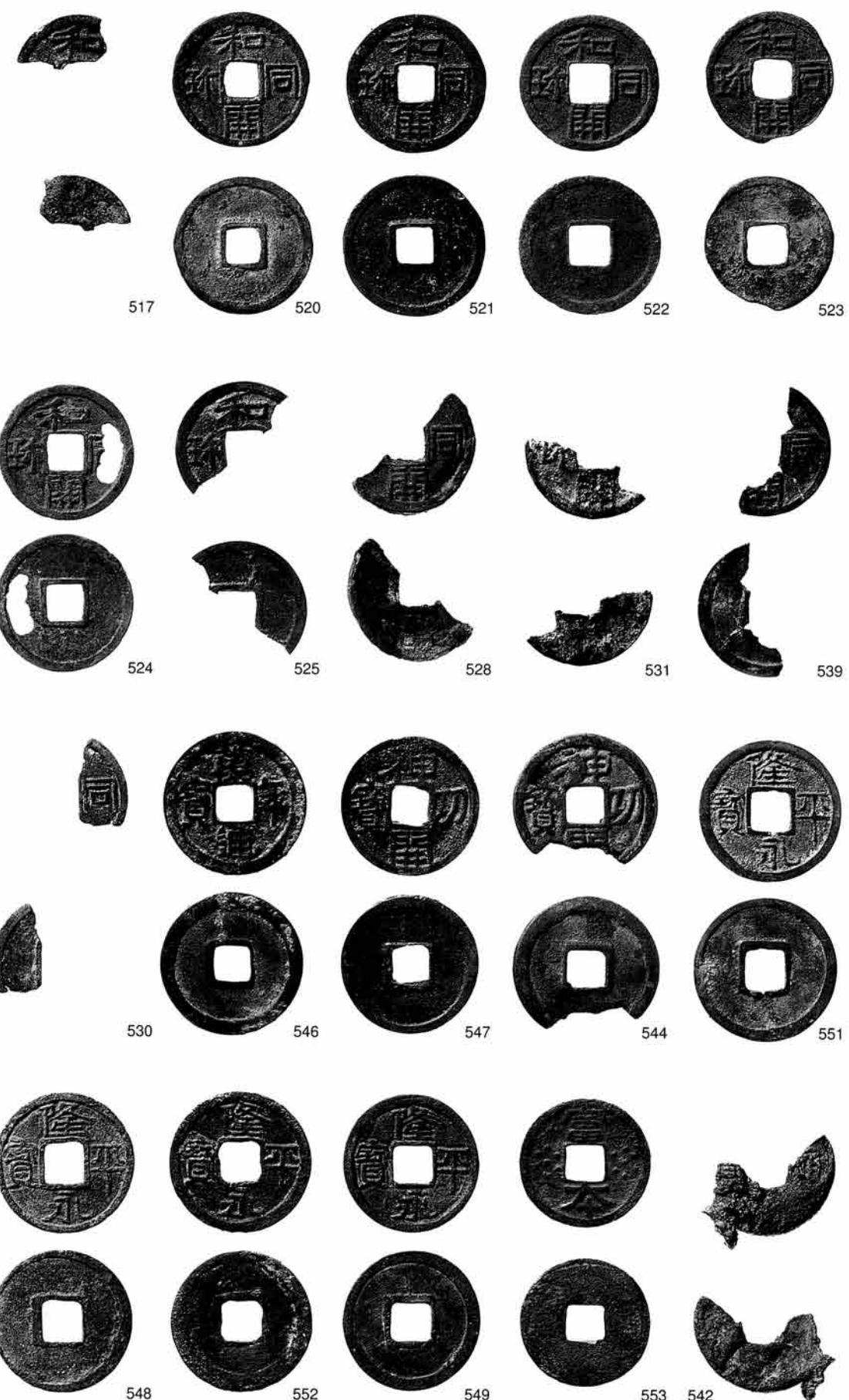
721

SD501出土

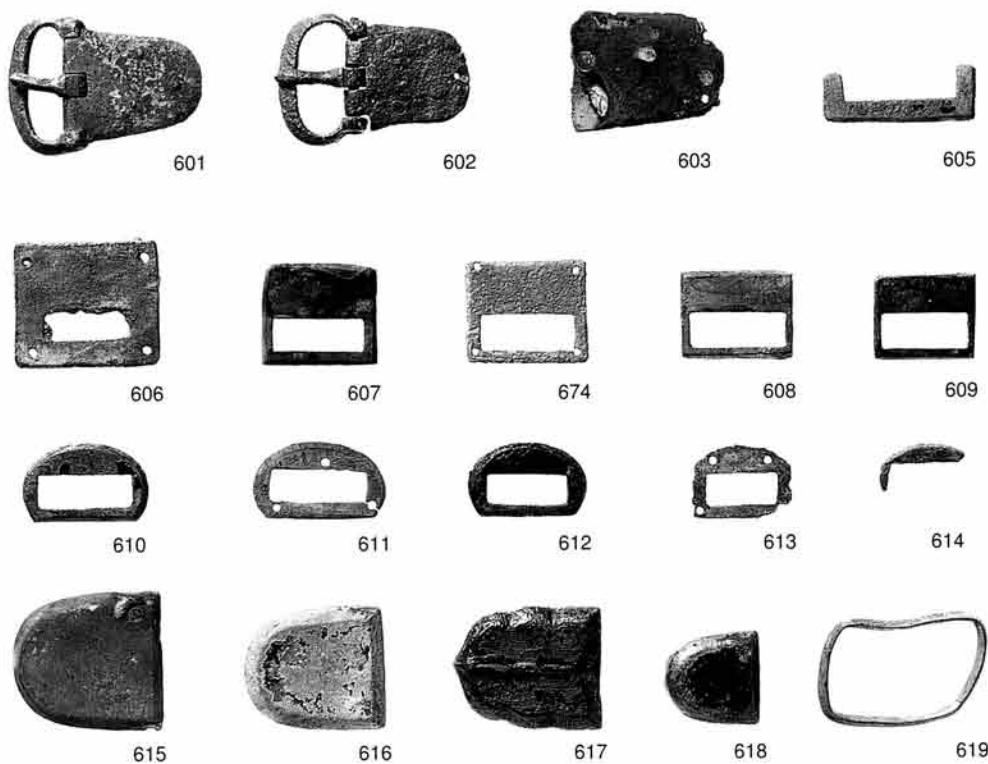




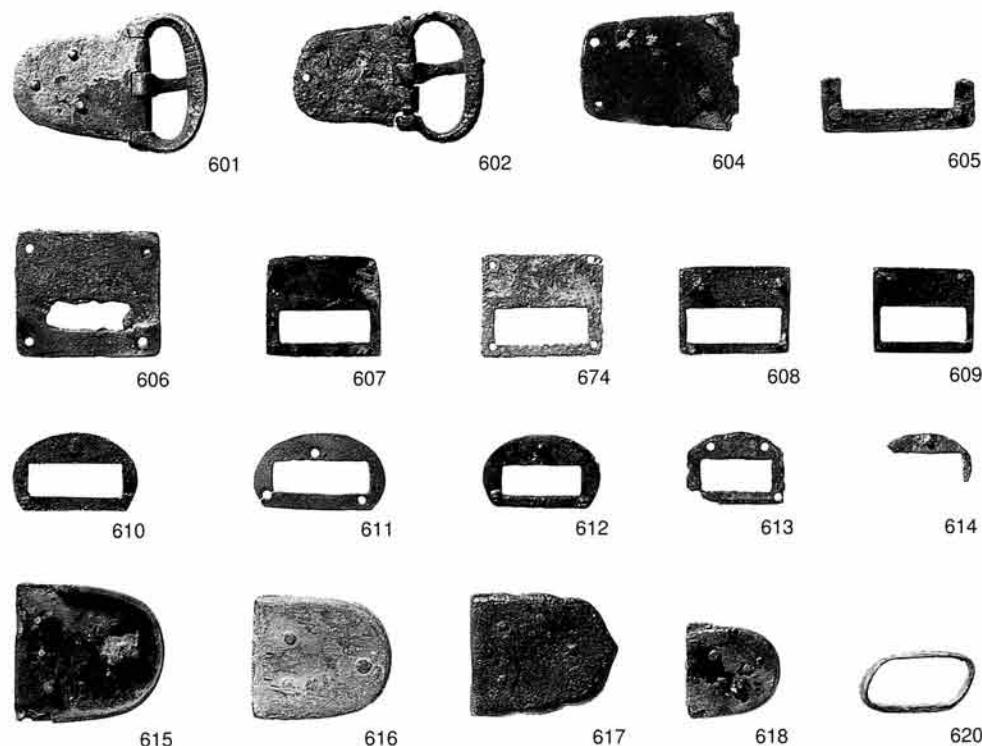
SD501(502~516·518·519)、SD502(543)、第5層(545)、第4b層(550)



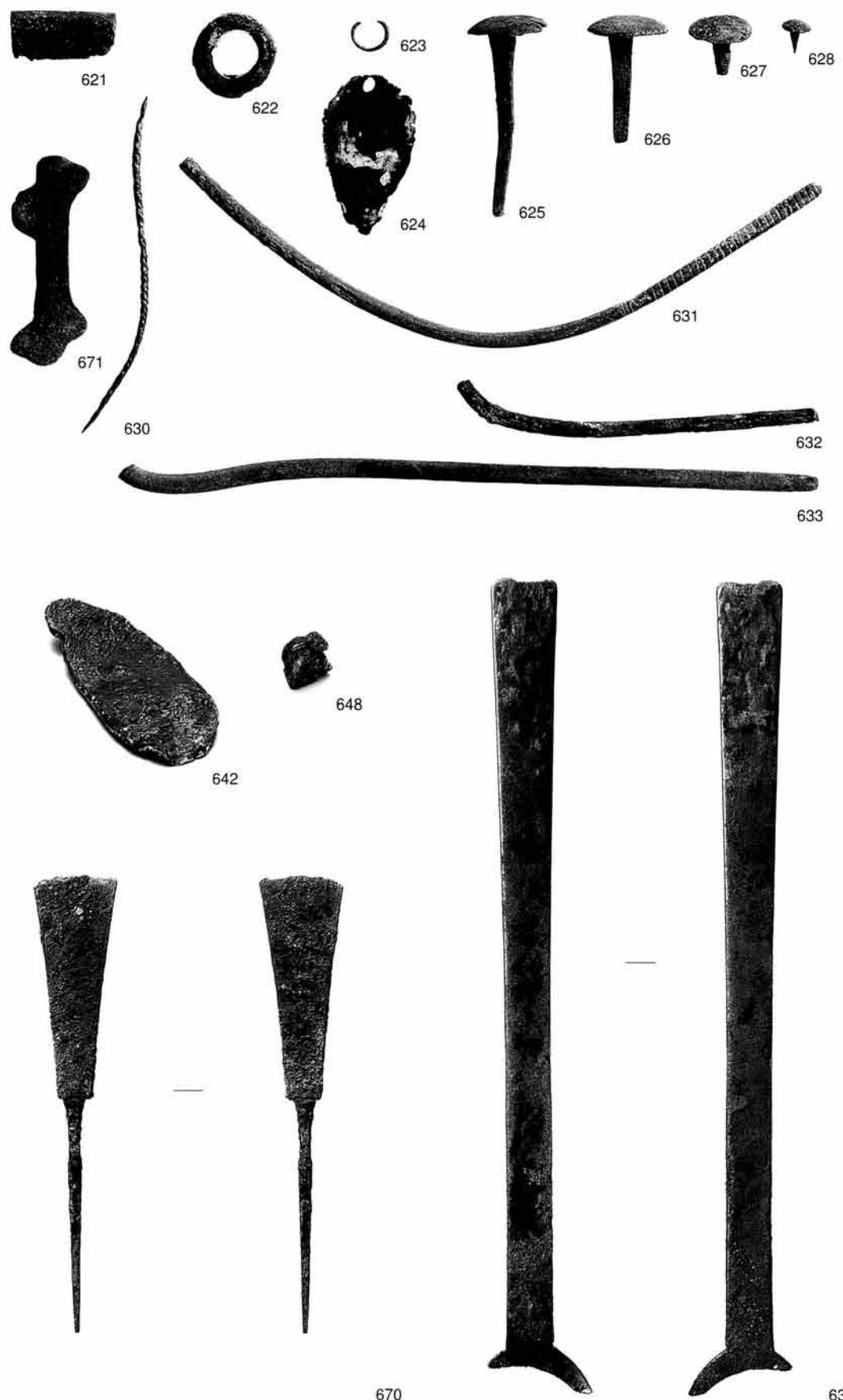
SD603 ? (553) · SD501(517 · 520~525 · 528 · 530 · 531 · 539 · 542)、SE507(544)、
第5層(546~549)、第4b層(551 · 552)



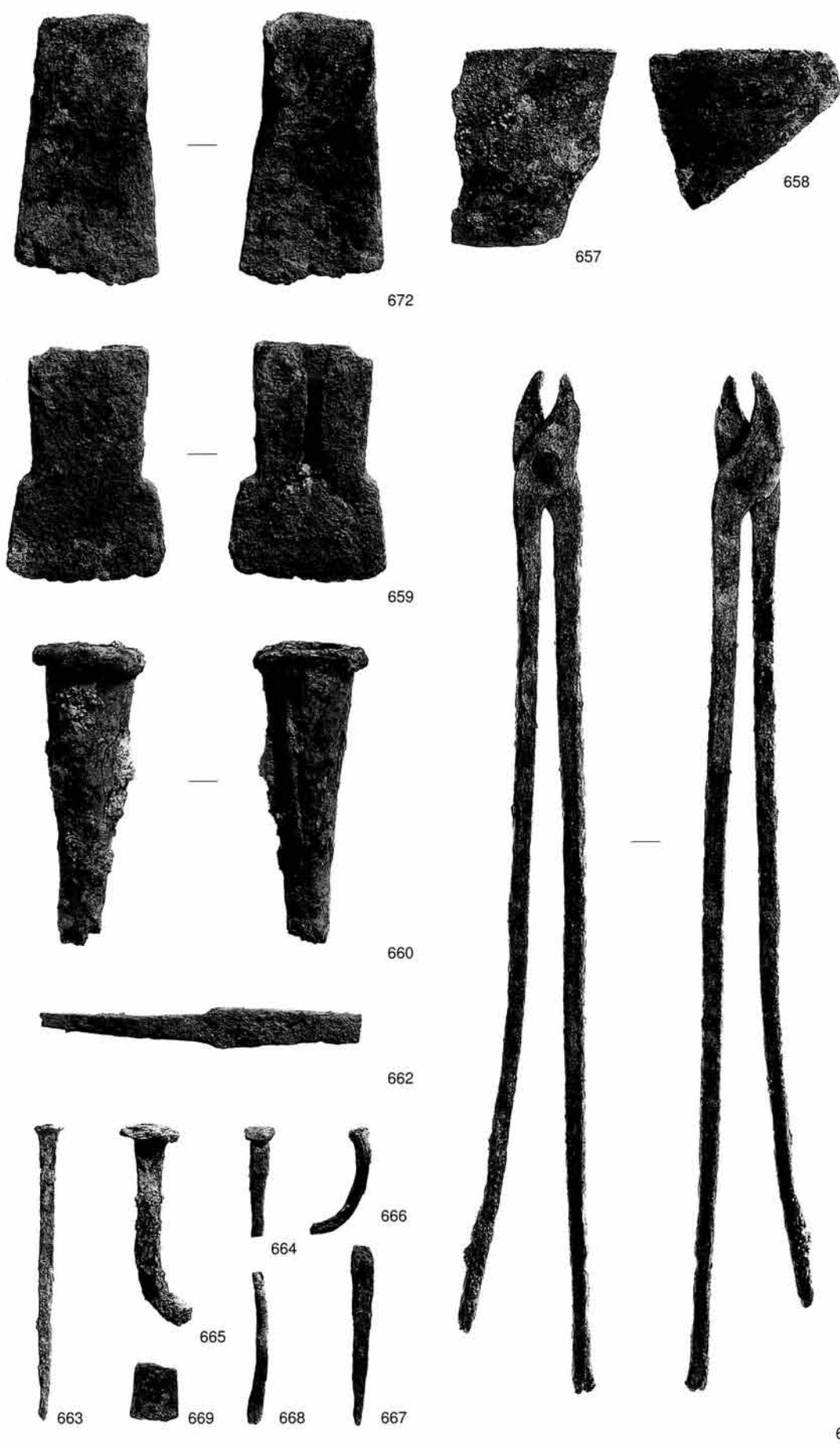
SD501(601~603・605~619)、第4b層(674)



SD501(601~602・604~618・620)、第4b層(674)

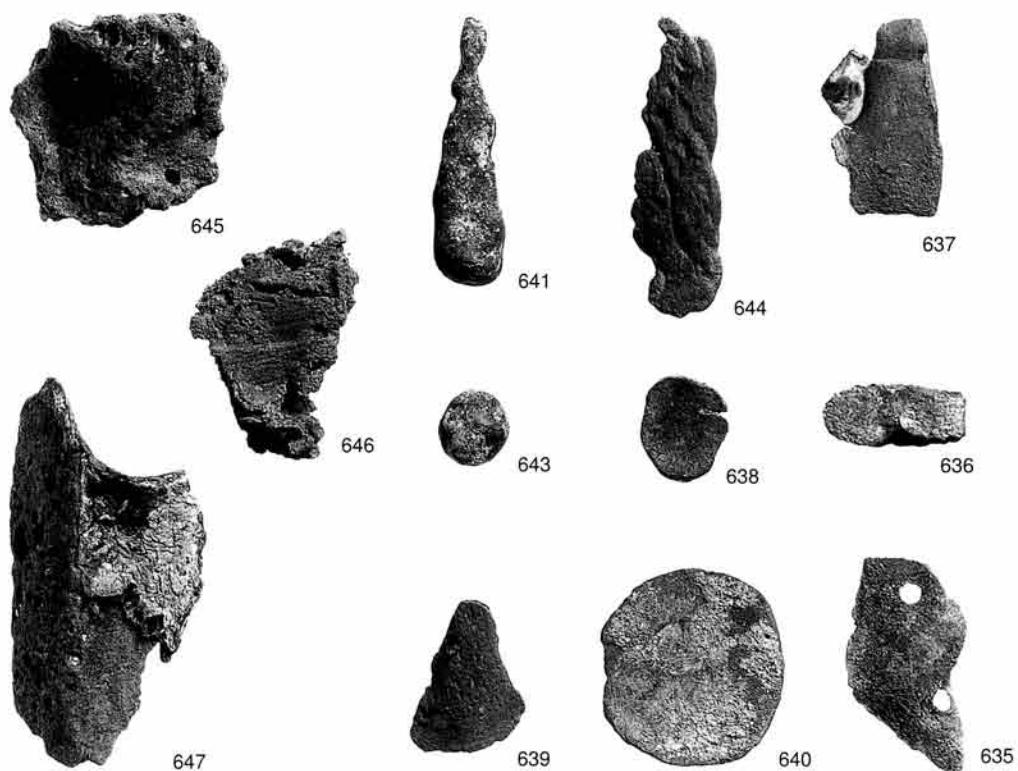


SD501(621:銅鏡、622:耳環、623:円環、624:歩搖、625~628:銅鏡、630:針金状銅製品、631:箸、632・633:棒状銅製品、634:匙、642:鉛板、648:方鉛鉿)、SE507(670:鉄鎌)、第3層(671:鋳棹)

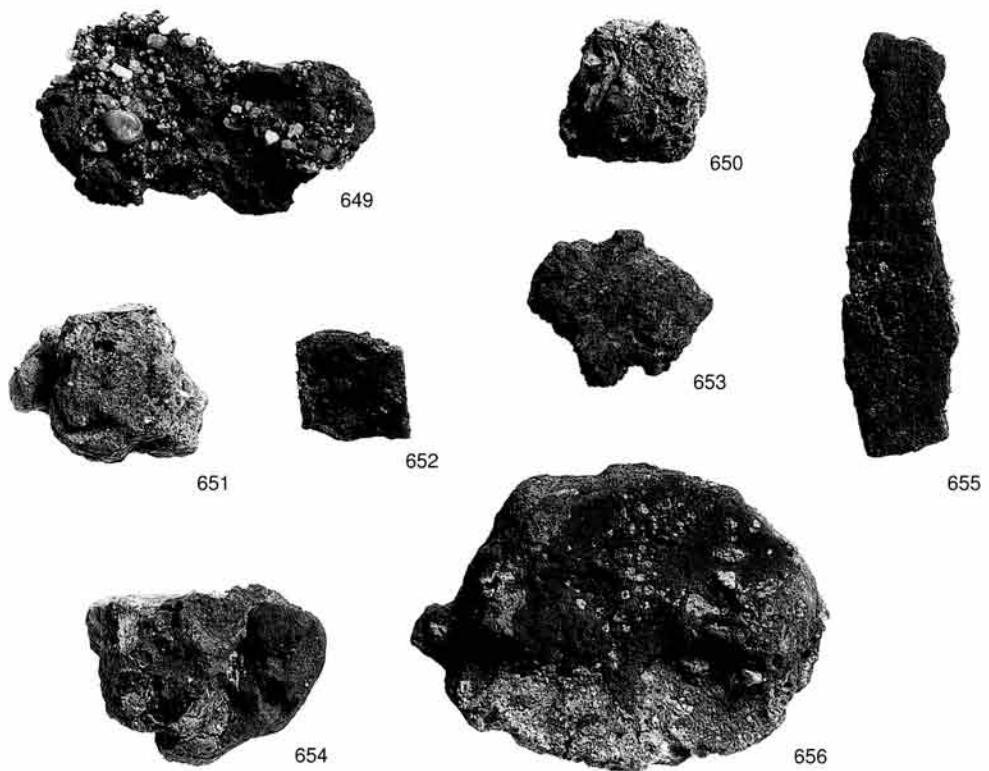


SD501(657・658:鍋、659:斧、660:工具?、661:金鉗、662:刀子、663~666:釘、667・668:タガネ形製品、669:クサビ形製品)、第4b層(672:斧)

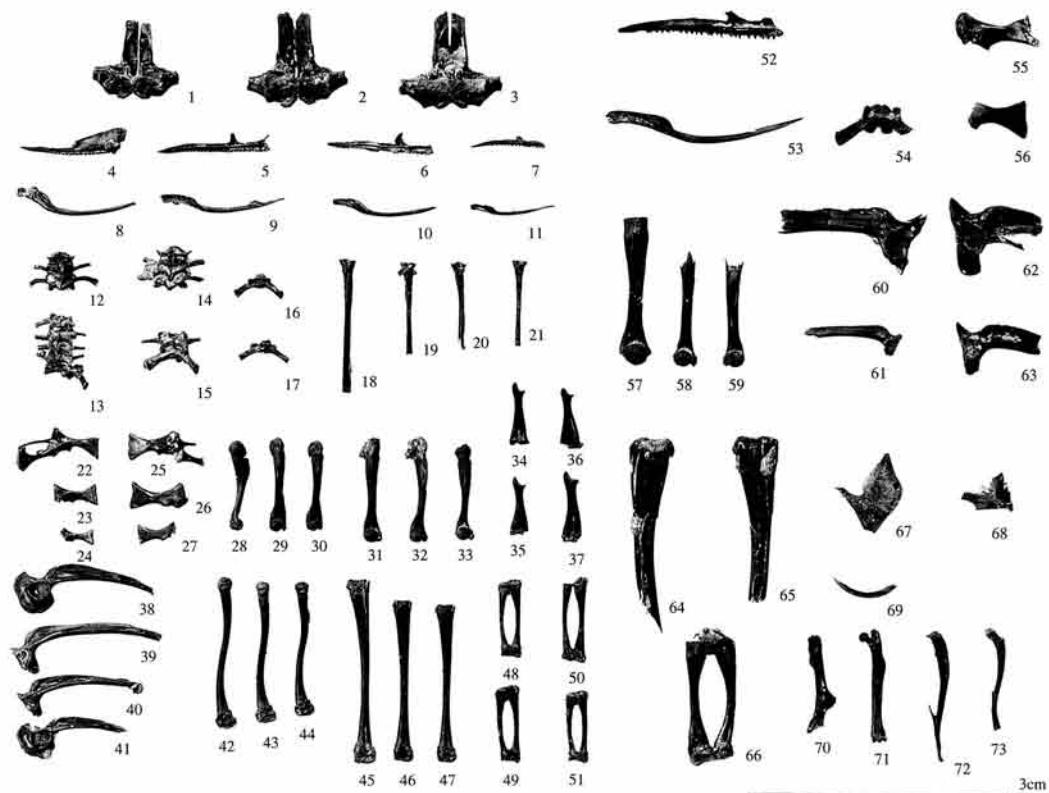
図版五七 金属加工関連遺物



SD501(635~640・644:銅板、641・643:銅粒、645~647:銅塊)

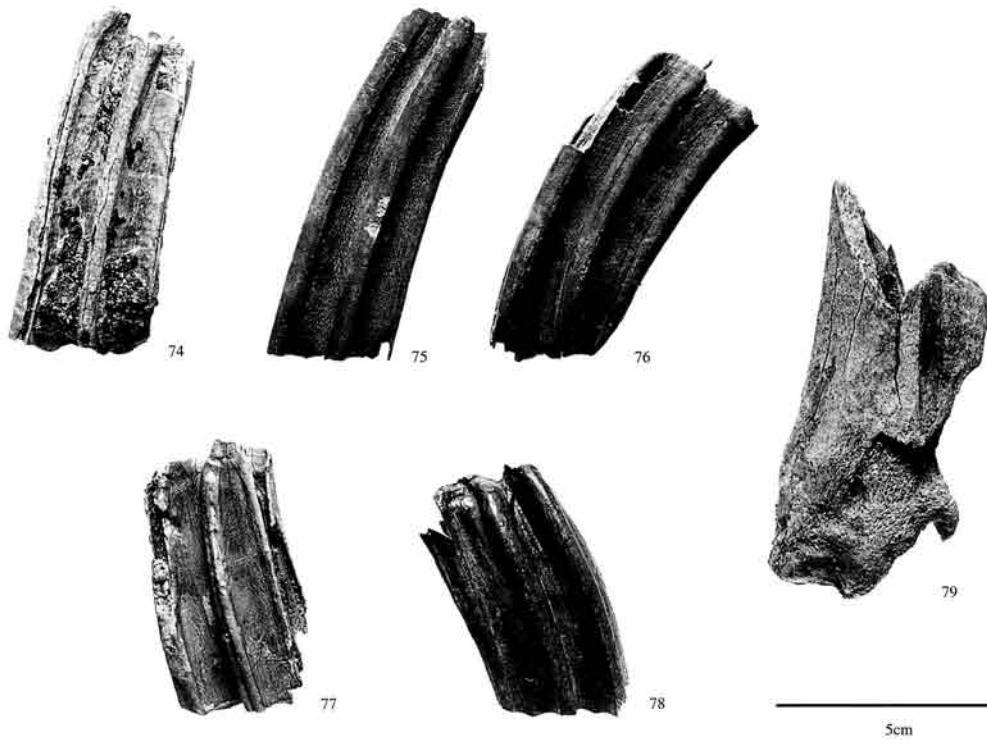


SD501出土鉱滓ほか



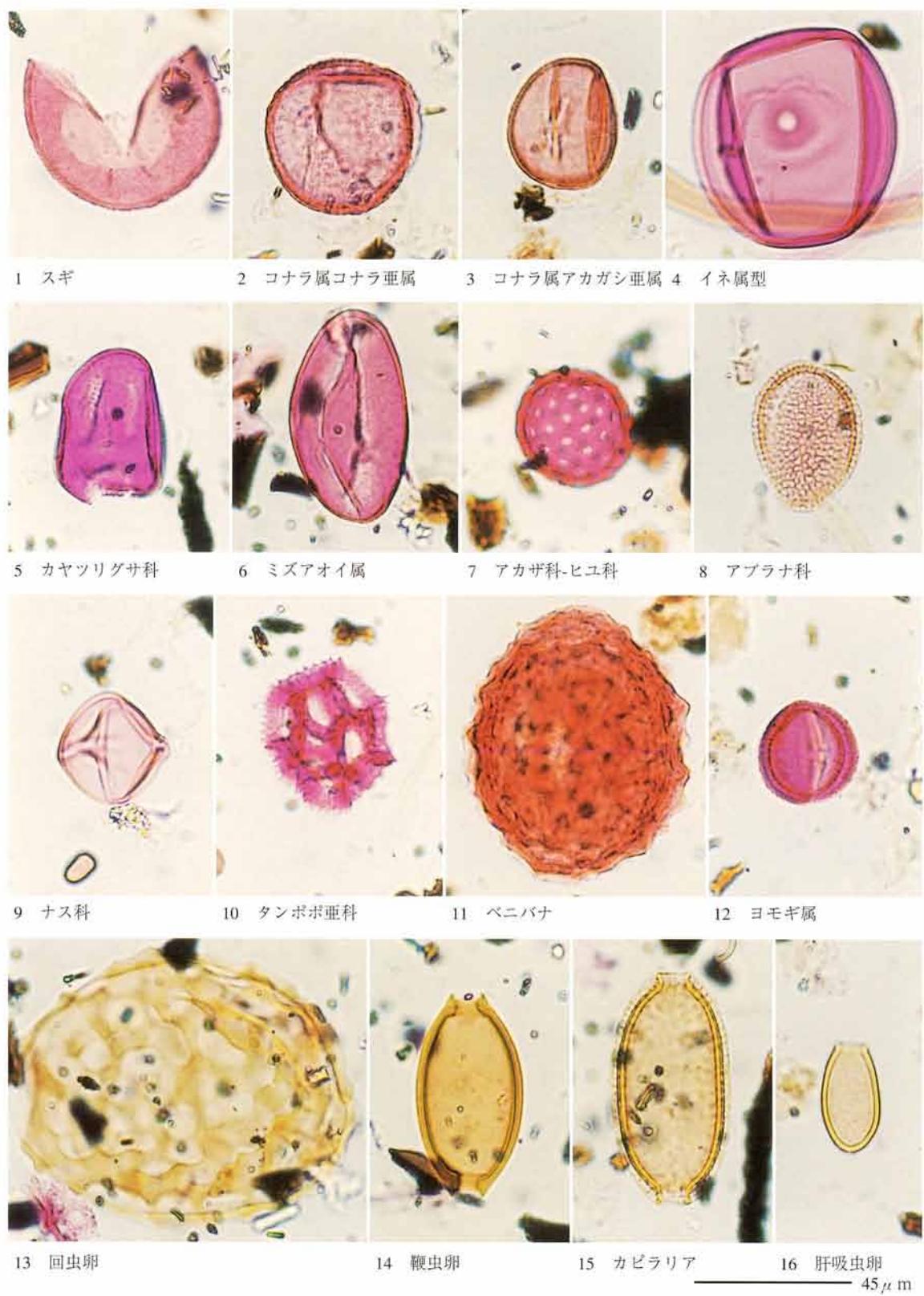
SE505出土動物遺体

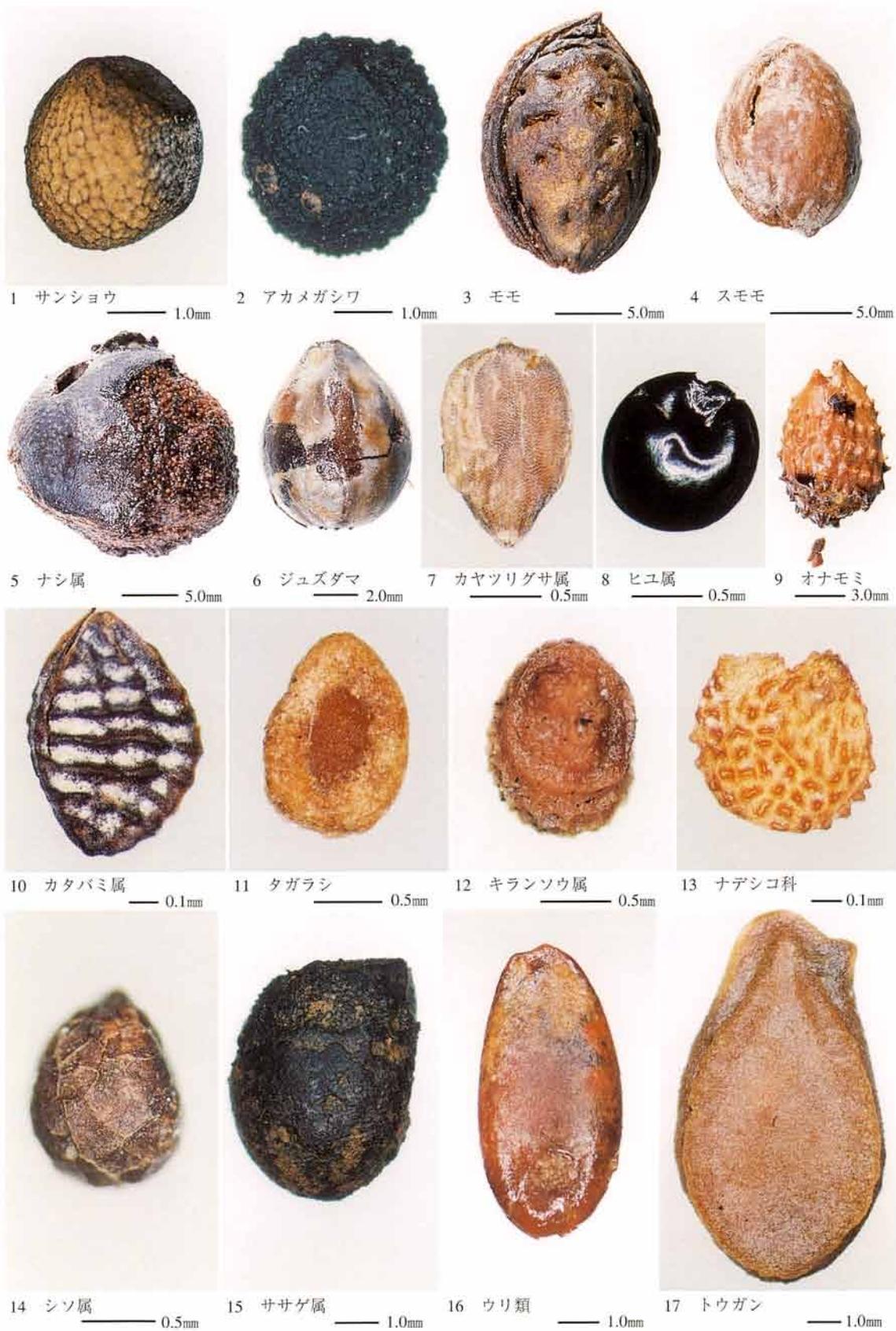
ツチガエル(1~7・14~17・22~27・28~33・38~41・61)、ヤマアカガエル(52・54・57~60・62・63)ヤマアカガエル?(55・56)、マイワシ(67・68)、ネズミ亜科(69~73)、アカガエル属(ほか)
 1~3:頭蓋骨、4~7・52:左上頸骨、8~11・53:右下頸骨、12・13:環椎、14~17・54:仙椎、18~21:尾椎、22~27・55:右肩甲骨、28~30:右上腕骨♂、31~33・57・58:右上腕骨♀、34~37:右橈尺骨、38~41・62・63:右寛骨、42~44:右大腿骨、45~47・65:右脛腓骨、48~51:右跗骨、56:左肩甲骨、59:左上腕骨♀、60・61:左寛骨、64:左脛腓骨、66:左跗骨、67:左下鰓蓋骨、68:左角骨、69:左切歯、70:左寛骨、71:右大腿骨、72・73:左脛骨



ウマ(74~78)、ウシ(79)

74・75:左上頸第2後臼歯、76:同第3後臼歯、77:同第2前臼歯、78:右上頸第3後臼歯、79:右中手骨





大阪市天王寺区 細工谷遺跡発掘調査報告 I

ISBN 4-900687-33-2

1999年3月31日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南 2-6-8

**Archaeological Reports
of the
Saikudani Site in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of Excavations
Prior to the Construction of
the Namba-Katae Road through Tennoji Ward
in 1996 and 1997



March 1999

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Reports
of the
Saikudani Site in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of Excavations
Prior to the Construction of
the Namba-Katae Road through Tennoji Ward
in 1996 and 1997



March 1999

Osaka City Cultural Properties Association

細工谷遺跡発掘調査報告 I 正誤表

頁	位置	誤	正
103	15行目	428・429はSD501から出土した。	428はSD501、429はSD602から出土した。
132	29行目	開発されと	開発されたと

